

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12

平成7年度発掘調査報告  
(第2分冊)

平成8年3月

鎌倉市教育委員会

# 総 目 次

(第1分冊)

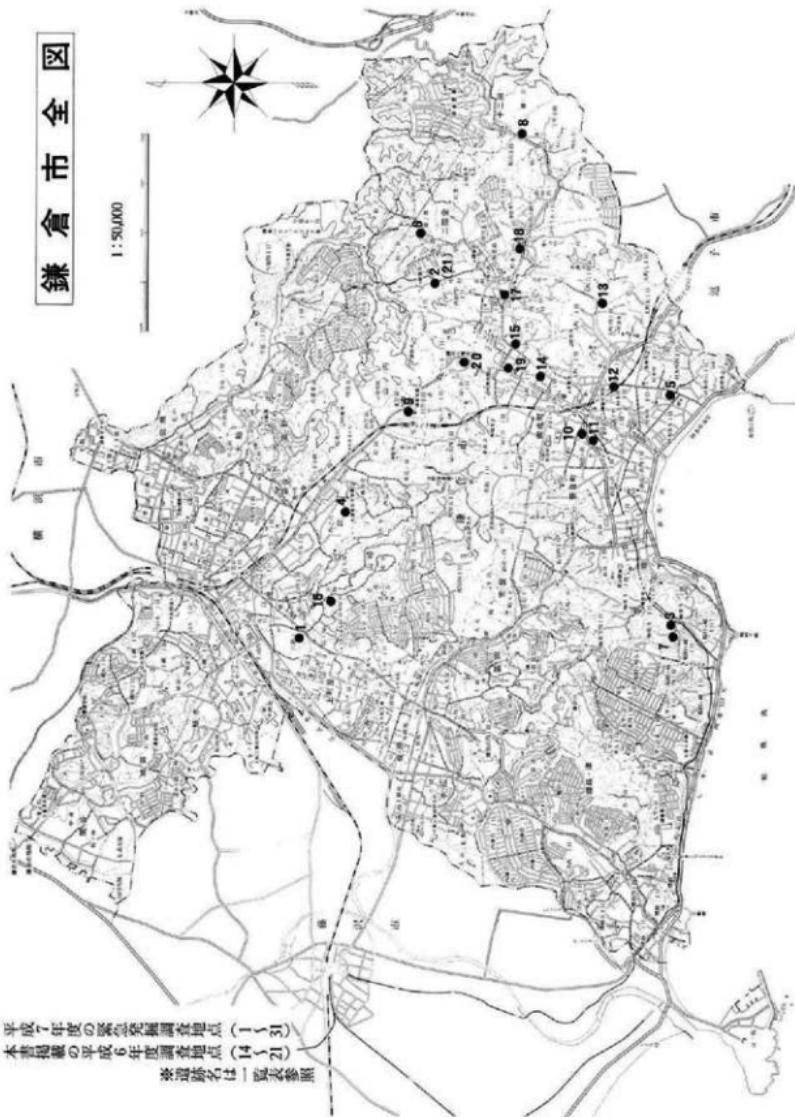
序文 .....	II
例言 .....	III
平成7年度の概観 .....	VI
1. 大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) 雪ノ下字天神前562番29地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	4
第二章 調査の経過 .....	4
第三章 遺構と遺物 .....	4
第1節 検出した遺構 .....	4
第2節 検出した遺物 .....	8
2. 北条高時邸跡 (No.281) 小町三丁目426番3地点	
第一章 調査地点の位置と歴史的環境 .....	24
第二章 調査の概要 .....	28
第三章 調査結果 .....	30
第1節 各遺構面の概要と層序 .....	30
第2節 検出遺構と出土遺物 .....	32
第四章 まとめ .....	83
附編 北条高時邸跡の花粉分析 .....	90
3. 宇津宮辻子幕府跡 (No.239) 小町二丁目389番1地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	127
第二章 調査の経緯 .....	130
第1節 調査の経過と概要 .....	130
第2節 層序 .....	135
第三章 検出遺構と出土遺物 .....	136
第1節 中世の遺構と遺物 .....	136
第2節 小町大路確認トレンチの遺構と遺物 .....	198
第3節 中世以前の遺構と遺物 .....	202
第四章 まとめ .....	208
第1節 中世 .....	208
第2節 中世以前 .....	216
附編 宇津宮辻子幕府跡の花粉分析 .....	256

## (第2分冊)

4. 浄妙寺旧境内遺跡 (No.408) 浄明寺三丁目6番3外地点	
第一章 地理的・歴史的環境	5
第二章 調査方法と堆積土層	5
第三章 検出遺構	7
第四章 まとめ	8
5. 覚園寺旧境内遺跡 (No.435) 二階堂字平子412番外地点	
第一章 調査地点周辺の環境	16
第二章 調査の概要	19
第三章 検出された遺構と出土した遺物	22
第四章 調査のまとめ	34
6. 鶴岡八幡宮旧境内遺跡 (No.56) 雪ノ下二丁目75番16地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	53
第二章 調査の概要	54
第三章 検出された遺構	57
第四章 出土遺物	63
第五章 まとめ	68
7. 倉久保遺跡 (No.226) 山崎字清水塚1550番1外地点	
第一章 遺跡の立地と歴史的環境	85
第二章 調査の経過	87
第三章 基本層序	87
第四章 検出した遺構	87
第五章 出土遺物	94
第六章 まとめ	104
8. 北条小町邸跡 (泰時・時頼邸) (No.282) 雪ノ下一丁目377番7地点	
第一章 調査地点概観	125
第二章 調査の概略	125
第三章 検出遺構と出土遺物	136
第1節 概要	136
第2節 各節	139
第3節 人名木簡について	254
第四章 花粉分析	261
第五章 まとめと考察	271
第1節 遺構	271
第2節 遺物	275
特論 御所と北条氏邸	282

# 鎌倉市全図

1:50,000



じょうみょうじきゅうけいだい  
淨妙寺旧境内遺跡 (No. 408)

淨明寺三丁目6番3外地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市浄明寺三丁目6番3外に所在する  
淨妙寺旧境内遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は自己用住宅に係る車庫造成に先立って実  
施された。調査面積は18m<sup>2</sup>。
3. 調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が  
1994年12月9日から13日まで行った。
4. 本報の編集・執筆・図版作成・写真撮影を大河  
内勉、資料整理を渡辺美佐子が担当した。
5. 調査体制は以下の通り。  
主任調査員 大河内勉  
調査補助員 渡辺美佐子  
作業員 富岡眞之・菅野五郎・岸名富雄・鈴木  
英次（鎌倉市シルバー人材センター）
6. 本報作成に際して、下記の方より御教示を賜っ  
た。  
菊川英政（鎌倉考古学研究所）  
永井正憲（鎌倉市教育委員会）  
原 廣志（鎌倉考古学研究所）  
馬渕和雄（鎌倉市教育委員会）
7. 出土遺物等の調査資料は、鎌倉市教育委員会が  
保管している。

## 本文目次

第一章 地理的・歴史的環境 .....	5
第二章 調査方法と堆積土層 .....	5
第三章 検出遺構 .....	6
第四章 出土遺物 .....	7
第五章 まとめ .....	8

## 挿図目次

図1 調査地点の位置 .....	4
図2 調査区全測図及び土層堆積図 .....	6
図3 出土遺物 .....	7

## 図版目次

図版1 1. 調査地点 .....	9
2. 調査区（南から） .....	9
図版2 1. 調査区（北から） .....	10
2. だめおしトレンチ .....	10
図版3 1. 遺物出土状態 .....	11
2. 出土遺物 .....	11

図1 調査地点の位置(1/2,500)



## 第一章 地理的・歴史的環境

本遺跡は鎌倉市街の東方、滑川中流域の右岸に位置する。南側と北側には支谷を擁する低丘陵が形成されており、その谷間を滑川が蛇行し西流している。調査地点は旧六浦路とされる県道金沢鎌倉線に面していて、道路の南に滑川が並走する。広瀬橋付近に位置し、標高は約14.5m。

本調査地点付近に存在する史跡としては、調査地点前を通る六浦路や杉本寺（調査地点の北西約150m）・報国寺（同じく南約200m）・淨妙寺（同じく東北約300m）などがあり、ほかには延福寺・大休寺・公方屋敷などの旧跡も存在する。六浦路は鎌倉から朝比奈通しを越えて六浦（東京湾に面する港湾）を結ぶ中世期における幹線道路で、「吾妻鏡」には北条泰時によって仁治元年（1240）に道路の敷設が決められ、翌年に着工されたことがみえる。杉本寺は鎌倉時代以前より存在していた古刹で、行基の開山と伝えられる。天台宗。觀音靈場板東三十三か所の第一番札所としても有名。境内と付近のやぐら群の発掘調査が行われている。また、背後の丘陵には杉本城という中世城郭が存在する。報国寺は建武元年（1334）開創と伝える。寺地は宅間ヶ谷にある。臨済宗。境内などの発掘調査が行われている。淨妙寺はもともと極楽寺と称し、足利義兼が文治4年（1188）に開創したと伝えられるが（開山は退耕行勇）、13世紀中頃に禅宗に改宗し、寺名も淨妙寺に改められた。中興開基は足利尊氏の父貞氏。鎌倉五山の第五位に列せられる。現在では丘陵を背にした谷戸内のみを寺域としているが、往時にはその前面の平地部分も擁した広い範囲を占め、諸堂宇や多くの塔頭などによって伽藍が形成されていた。調査地点は旧境内地の前面の一帯に相当するとされるが、街道に面した土地であり本来の寺地とは性格が異なっていた可能性もある。

本調査地点の周辺でも多くの発掘調査が実施されている（図1に一部を示した）。図1の地点1（杉本寺周辺遺跡群〔二階堂912番1外地点〕）では、中世の有力御家人の屋敷跡と思われる造構群や弥生時代の遺物などが発見されている<sup>(1)</sup>。弥生時代は未調査のため詳細は不明。弥生時代（主に中期後半）の集落は、さらに約600m程西方の滑川右岸周辺（大倉幕府の南側辺り）に形成されているようである。地点2・3は淨妙寺旧境内遺跡に含まれる。地点2〔淨明寺向小路90番1地点〕では13世紀前半～15世紀前半に属する、両側に側溝を伴う道路状遺構などが検出されている<sup>(2)</sup>。地点3〔淨明寺字稻荷小路129番2地点〕は旧境内東側の塔頭群があった地点と推定され、14世紀後半～15世紀の掘立柱建物跡・井戸・土壤・溝・柱穴などが検出された<sup>(3)</sup>。地点4は関東公方足利氏の屋敷と伝える公方屋敷跡にあたるが〔淨明寺三丁目143番地2地点〕、調査では13世紀前葉から15世紀前葉にかけて3期にわたる変遷が捉えられるとともに、多くの造構（道路・側溝・建物・井戸・かわらけ溜りなど）・遺物が発見された<sup>(4)</sup>。地点5（淨明寺稻荷小路遺跡）は六浦路沿いに位置し、鎌倉時代末～南北朝期に属する道路状造構及び屋敷跡などが検出された<sup>(5)</sup>。

## 第二章 調査方法と堆積土層

本調査に先立って実施された試掘調査の成果を受けて、発掘調査を94年12月9日（金）～13日（火）に行った（実働4日）。初日に表土層以下まで人力で掘り下げる、二日目に粘質土を同様に掘り下げる地山を検出し、三日目に地山上面の調査及びセクション図の作成等を行い、最終日に平面図作成・写真撮影・だめおしトレチの調査を実施して、発掘を終了した。調査は個人住宅新築での車庫新設に伴い、県道

に面した約18m<sup>2</sup>の範囲が対象であったが、コンクリート製の浄化槽や立ち木及び石垣の裏側部分を避けて調査区を設定したため、当初の予定より狭い範囲にとどまった。なお、調査地点は道路面より約1.7m前後高くなっている。

堆積土は上から、表土（北側で約10cm、南側で約60cm）、茶褐色土（北側のみ堆積、地業土か、中世以降）、粘質土（北側は茶褐色、南側は灰白色・暗褐色）と続き、以下は地山で赤褐色（灰褐色）粘質土、灰褐色粘質土（一部赤褐色、純粹でしり良い）となる。最下層の灰褐色粘質土はだめおしトレチで確認した。

### 第三章 検出遺構

明確な遺構は認められなかった。いくつか検出されたピットは浅い（深さ3~8cm程）。北側は地山が落ち込んでいる。トレチを設けて地山層をだめおして60cmほど掘り下げたが、遺構・遺物は発見されなかった。南端は現代の石垣の裏込め？やガスの配管で壊されている。

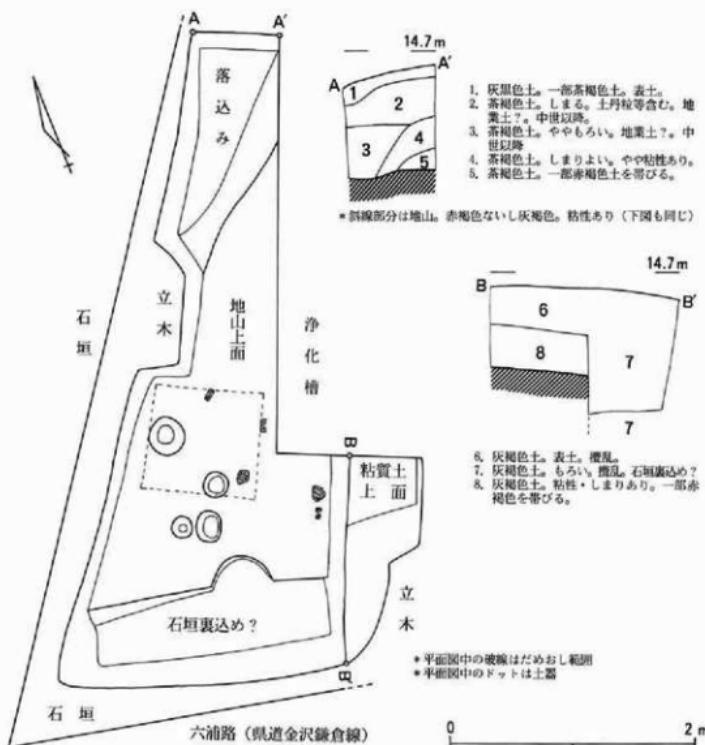


図2 調査区全測図及び土層堆積図(1/40)

## 第四章 出土遺物

遺物は各層位から出土したが、量は非常に少ない。年代的には弥生時代と中世頃の2時期に分けられる。地山上面で出土した弥生時代中期後半の土器以外は、層位的な関係ははっきりしない。

1~7は弥生式土器。1~3は深鉢形あるいは菱形で、同一個体の可能性もある。同様の破片は他に約10片みられる。中期後半（宮ノ台期）と思われる。地山上面などから出土した。1は復元口径36cm。口縁部は外反し、口唇部外面に刻みが付けられる。内・外面（口端部も）ともハケ目調整される。2・3は胴部で、外面はハケ目調整、内面はなでが行われる。

4は台付甕の脚部か。復元脚部径13cm。

5・6は甕。同一個体であろう。後期前半（久ヶ原期）と思われる。復元口径は16cm。口縁部は外反し、口唇部に相互の刻みが付けられる。

7は鉢か。後期前半と思われる。口縁部は内湾する。外面と口端部には縄文が施され（口端部は不明瞭）、外面は縄文帯の下に沈線が1条巡る。内外面とも赤彩されている。

8は平瓦。凸面は無文。凹面側縁はヘラ削りされる。中世。

9・10はかわらけ。9は口縁部、10は底部の小片。ともに中世後半か。

11は常滑。甕の口縁部（縁帯の内側部分）と思われる。中世。

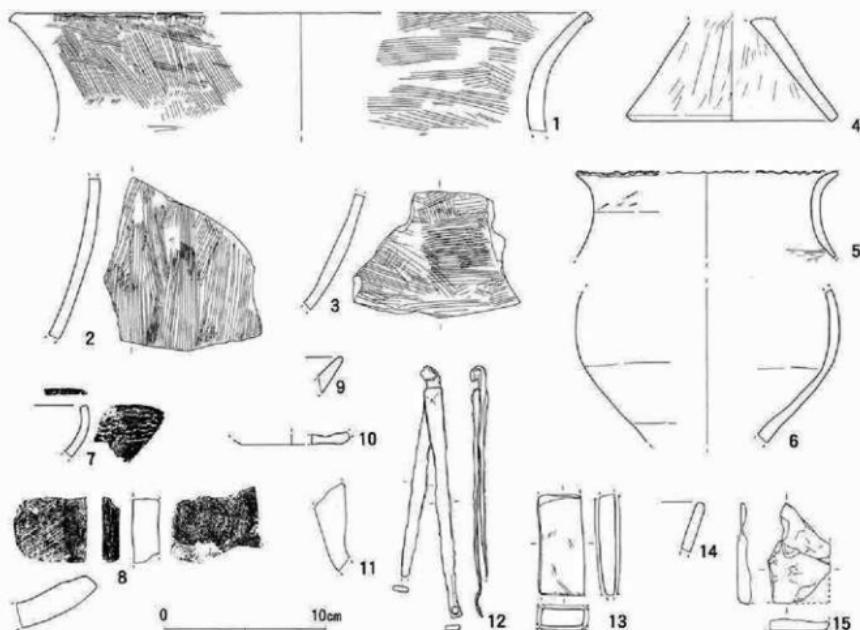


図3 出土遺物 (1/3)

12は鉄製品。上部で2本の棒状の薄板が紙で止められ、開閉できるようになっている。頭部は折り返される。下端には孔があり別の部品が取り付けられていたが、脱落している。用途・年代不明。

13は砥石。表・裏面と両側面が使われている。砥面はあまり平坦ではない。年代不明。

14・15は別個体であるが、ともに角型の瓦器質の製品。14は口縁部、15は底部。中世後期以降。

## 第五章　まとめ

本調査は対象面積が非常に狭く、遺構も明確なものは発見されなかつたが、出土遺物を中心にいくつか気付いた点を挙げて、若干のまとめとしたい。

弥生時代では中期後半（宮ノ台期）と後期前半（久ヶ原期）の土器が発見され、鎌倉滑川流域では現段階で最も上流での出土地点にならう。また滑川流域（大倉周辺）では中期後半が多い傾向にあったのに対し、本調査では後期の土器もみられたことは興味深い。

中世は鎌倉としては遺物も僅少で、堆積土層中に混入するような状態で出土した。よって本地点の中世期の具体的な様相はほとんど不明といわざるを得ず、淨妙寺との関係についてもよく分からぬ。

- (1) 清水菜穂「杉本寺周辺遺跡群調査」『第1回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 1991年10月 鎌倉考古学研究所  
弥生時代の状況については、調査担当者の馬渕和雄氏のご教示による。
- (2) 田代郁夫・原 広志「淨妙寺旧境内遺跡－鎌倉市淨明寺向小路80番1地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7  
1991年3月 鎌倉市教育委員会
- (3) 大三輪龍彦・原 広志・福田 誠「淨妙寺旧境内遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』I 1985年3月 鎌倉市教育委員会
- (4) 原 広志他「公方屋敷跡－淨明寺三丁目143番地2地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10 1994年3月 鎌倉市教育委員会
- (5) 河野真知郎「鎌倉の武家屋形と都市住居－中世鎌倉市街地の居住様態－」『仏教芸術』164 1986年1月 毎日新聞社



1. 調査地点

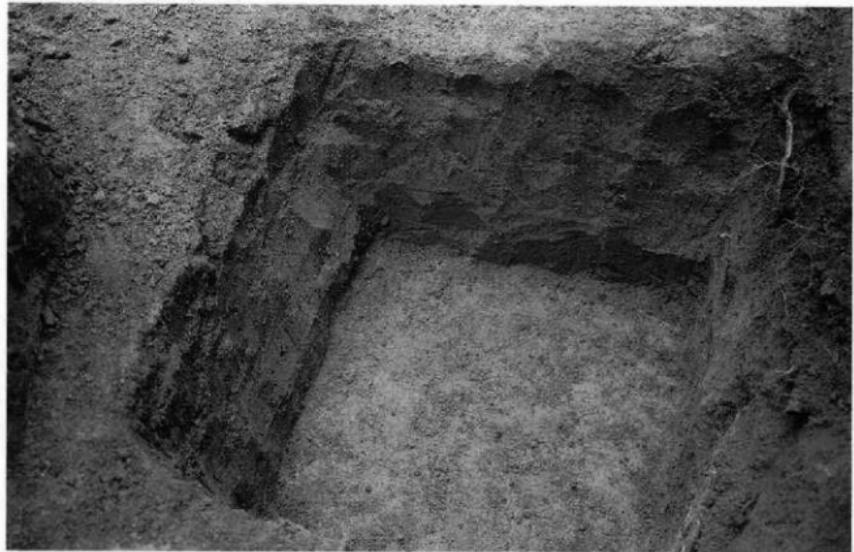


2. 調査区（南から）

図版2



1. 腐葉区 (北から)



2. だめおしトレーンチ



1. 遺物出土状態



2. 出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	12							
編集者名	大河内 勉							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コード		北緯 市町村 遺跡番号	東緯 *** ***	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		204	408					
じょうみょうじきゅう けいだいいせき 淨妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市淨明 寺三丁目				1994.12.16～ 1994.12.20	18	自己用住宅に 係る車庫造成	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
淨妙寺旧境内 遺跡	社寺跡	弥生時代		弥生式土器、かわら け等 テンバコ1箱				
		中世						

覚園寺旧境内遺跡 (No.435)

鎌倉市二階堂 412 番外地点

## 例　　言

1. 本報は、覚園寺旧境内遺跡（№435）内、鎌倉市二階堂字平子412番地1外地点に関する発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成7年3月22日から4月10日迄、調査面積は約25m<sup>2</sup>である。
3. 本報の執筆・編集は沙見一夫が行った。  
遺物の実測・トレス、及び挿図・図版の作成には杉山智恵子、渡辺美佐子の協力を得た。また、写真は沙見が撮影した。
4. 調査体制  
調査員 沙見一夫  
調査補助員 杉山智恵子・渡辺美佐子  
作業員 ⑩鎌倉市シルバー人材センター  
　　菅野輝男・福本寿夫・増田保・河原龍雄・高井富三・奥山利平・出川清次・長島三男
5. 出土品等発掘調査に係わる資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査及び本報告書作成に当たり、下記の機関・方々に御教示御協力を賜った。記して感謝申上げる次第である。（順不同・敬称略）  
藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）  
福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）  
⑩鎌倉市シルバー人材センター  
鎌倉市教育委員会 鎌倉考古学研究所  
東国歴史考古学研究所

## 本文目次

第一章 調査地点周辺の環境 .....	16
第二章 調査の概要 .....	19
I. 調査経緯と経過 .....	19
II. 調査の方法 .....	19
III. 堆積土層 .....	19
第三章 検出された遺構と出土した遺物 .....	22
I. 1面 .....	22
II. 2面 .....	24
III. 3面 .....	28
IV. 最終面 .....	32
第四章 調査のまとめ .....	34
検出遺構一覧表 .....	36
出土遺物法量・観察表 .....	37

## 挿図目次

図1 周辺地図 .....	17
図2 4級基準点位置関係図 .....	19
図3 調査区全体図セクション2方向 .....	20
図4 1面全測図 .....	22
図5 1面遺構内出土遺物 .....	22
図6 1面構築土中出土遺物 .....	23
図7 2面全測図 .....	24
図8 2面遺構内出土遺物 .....	25
図9 2面構築土中出土遺物 .....	26
図10 3面全測図 .....	28
図11 3面遺構内出土遺物 .....	28
図12 3面炭層内出土遺物 .....	29
図13 3面構築土中出土遺物 .....	31
図14 最終面全測図 .....	32
図15 採集遺物 .....	33

## 図版目次

図版1 土壌1/2面全景 .....	40
図版2 堆積土層/土壤2 .....	41
図版3 3面全景及び横層 .....	42
図版4 岩盤検出状況 .....	43
図版5 出土遺物 .....	44
図版6 出土遺物 .....	45
図版7 出土遺物 .....	46

# 第一章 調査地点周辺の環境

覚園寺旧境内遺跡は、鎌倉旧市街域の北西鷲峰山の麓、南南東に開口する谷戸一帯が呼称されている。鷲峰山は、その山腹に県の指定史跡である170余穴に及ぶ百八やぐら群を内包する。通称覚園寺ヶ谷と呼ばれるこの谷戸は南北に細長く、東西両側の山肌は開発の進んだ現在でも陥しく切立っている。寺は現標高40m程の谷戸の最奥に位置し、北側の尾根向うは、国指定史跡の永福寺跡範囲内に当り、中世以後政治的・宗教的にも興味深い地域である。

覚園寺は、開山は知海心菴、開基北条貞時、鷲峰山真言院覚園寺と号する。元四宗兼学であったが、本山泉涌寺が古義真言宗を標榜したのに伴い、明治初年に古義真言宗となつた。開山置文に拠れば、嘉元四年（1306年）には仏殿・法堂・祖師堂・土地堂・僧堂・庫院・山門・両廊等の建造物の存在が認められる。その前身は、建保六年（1218年）北条義時建立の大倉薬師堂とされ、元寇を退けることを願い、永仁四年（1296年）に改めて覚園寺としたとされる。大倉薬師堂以来北条氏の庇護下に置かれた寺であることは容易に想像が付く。北条政権衰退後も覚園寺は時の為政者との関係は深く、建武の中興では後醍醐天皇の勅願所となり、中興後には足利氏の祈願所となっている。特に足利尊氏はこの寺に力を入れていたようで、建武四年（1337年）の火災後、文和三年（1354年）仏殿復興の際にはこれを援助し、梁牌銘には尊氏が自署したものが現存している。応永年間には足利氏満の援助によりますます復興し、後には小田原北条氏からも寄進を受けている。

一方で幾度かの災害にも見舞われ、伽藍内の建物もその都度復興・建立されているようだ。初期の伽藍は火災により焼失し、建武四年（1337年）・文和三年（1354年）には火災に遭っている。後者の折りには仏殿は無事だったとされている。その仏殿も元禄十六年（1703年）の大地震で倒壊し、宝永年間に地蔵堂・享保年間に山門が建立されたものの、文政十三年（1830年）の火災により寺は衰退の一途を辿る。天保・弘化年間には一時整理・再建が為されたが明治二年の火災、大正十二年の関東大震災を経て現在に至っている。現在では寺所有の仏像彫刻の多さと、歴代住持の墓所に往時の勢いを想像できるよう。

仏像彫刻には、重要文化財に指定されている本尊の木造薬師如来座像及び両脇侍の木造日光・月光菩薩像、もと理知光寺の本尊と伝える十二神将立像、別名黒地蔵の名で親しまれる木造地蔵菩薩立像等々、又信者の寄進した小仏像が余に多い為別堂がありそこの本尊として木造地蔵菩薩座像がある。

歴代住持の墓所は現境内最奥にあり、二方を山、二方を土居で囲まれている。その中央には、高さ4m近い開東式の宝篋印塔が2基並び、開山知海心菴和尚と二世大燈源智和尚の墓塔とされている。後者の基礎には『正慶元年（1332年）壬申、一（以下略）』の銘がある。昭和四十一年の解体修理の際には、塔下より開山藏骨器黄釉草葉文壺（古瀬戸窯）等が検出され、両塔に追加して重要文化財に指定されている。

現在国指定史跡となっている境内地には、元禄十六年の大地震後に古材を使って再建した薬師堂を始め、地蔵堂・愛染堂・祖師堂・庫裡等が立並ぶ。前期重要文化財の他にも、鎌倉十井の一棟「立つの井」がある。

表記遺跡内での考古学的発掘調査は思いの外多くはない。境内地での調査としては、まず前述した昭和四十一年に行われた宝篋印塔解体修理がある。その後昭和五十四年には、県指定重要文化財旧内海家住宅の移築予定地の試掘調査が、又、その結果を受けて昭和五十四年から同五十五年にかけて防災施

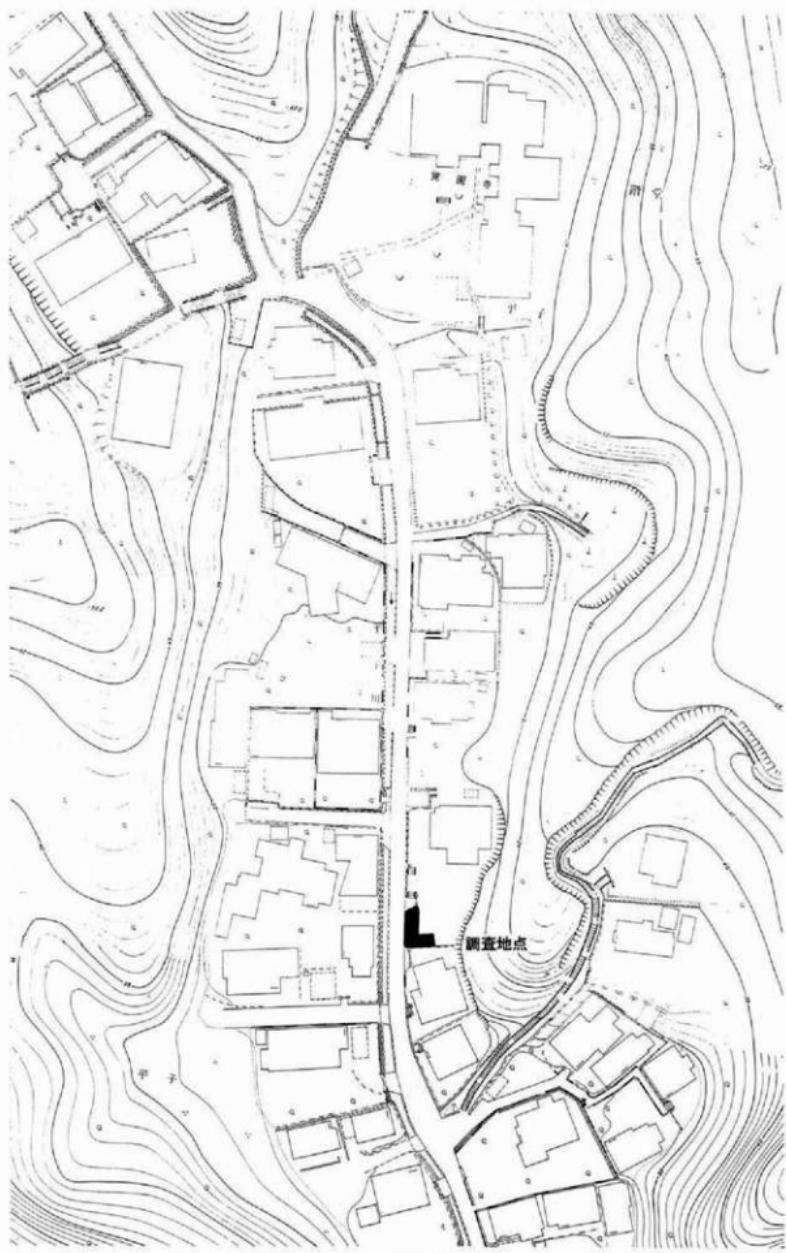


図1 周辺地図

設設置箇所に関して発掘調査が行われている。境内地内が国指定史跡である為、20数ヶ所のトレンチ調査といういわば点的な調査ではあったが、僧堂址や薬師堂周辺に於いて新知見が得られ従来の推定論を後押しする結果が得られている。出土遺物からは、この寺が最も隆盛したと観られる十四世紀段階の資料には乏しいものの、廃棄状態とはいえ専が出土する等、旧寺觀を考える上で断片的ではあるがいくつかの資料が得られている。

現境内地外の調査としては谷戸内の山裾に於いて、やぐらが數ヶ所調査されているにすぎない。いずれのやぐらもすでに開口しており、中には防空壕や近代に於いて民家の物置に利用されていたものもあったと聞く。今回の調査地点は覺園寺まで直線距離にして120m程の右手一般民家の駐車場部分である。敷地東側には山裾が迫り、西側は狭い車道を挟んで小河川が流れ、いくらも行かないところに西側からの山裾がおりている。車道部分での現標高は27.3m程である。

#### 参考文献

- 『鎌倉市史』社寺編  
『鎌倉事典』白井永二編  
『覚園寺境内遺跡発掘調査報告書』覚園寺境内遺跡発掘調査会編 宗教法人覚園寺発行 1982年3月

## 第二章 調査の概要

### I. 調査経緯と経過

調査は平成7年1月に、自己用住宅建設に伴う工事の事前相談があり、試掘調査の結果地下には中世期の遺構が遺存している為、車庫区域の工事深度を対象として発掘調査を実施することとした。重機による近現代礫乱層及び堆積土を除去の後、3月22日より調査を開始した。調査地点付近の道路が狭い為、付近住民への配慮及び安全を考慮し、調査の進行に伴う残土は同敷地内にて処理する事となった。途中数日降雨に見舞われたが、規定の深度まで人力により掘り下げ・記録の保存を行い、4月15日までに機材等を撤収、関係各方面にその旨を伝え調査終了とした。

### II. 調査の方法

調査区の範囲・形状に合わせ、調査区の南端に任意の点Aを定め磁北よりN-13°-Wの方向に南北基本軸A-A'を設定した。また、点Aより北に1Mの所から東西軸を設定した。この軸線から2M方眼を組み、南北方向にアルファベットを、東西方向に算用数字を付し、各方眼の呼称には北東交点を使用した。また、鎌倉市4級基準点No.142とNo.143を結んだ軸線との位置関係は図2に示した。また、レベル原点は大塔宮前の3級基準点No.53204を調査区内に移動し、以下の文章中ではレベルは全て海拔高で示している。

### III. 堆積土層

前章で述べたように付近では平面的な調査は為されておらず岩盤状にどのような土層が堆積しているかは把握されていない。概観しても、調査前の調査区の現況海拔高度は28.2mを測るが目前を通る車道面は27.3mに過ぎず、付近に迫る岩盤の崩落土、或は近現代の造成に伴う客土が厚く堆積していることは容易に想像がつくところである。図3に堆積土層を、以下に各土層説明を示した。

1. 近現代の宅地造成に伴う客土。碎石・スレート・ヨク壁工事に伴う山砂等を含む。
2. 茶褐色粘質土。食物遺存体様のものを含み最下層には鉄分質の堆積が散見される。

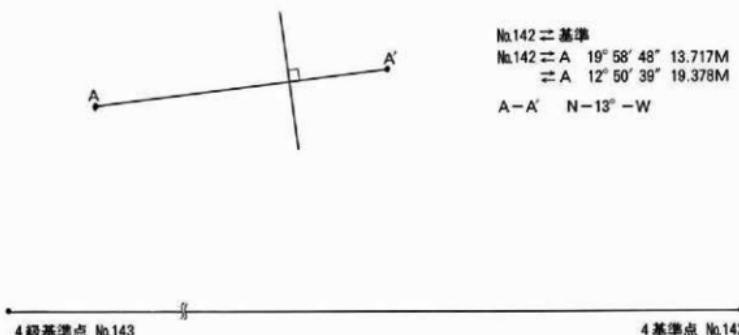


図2 4級基準点位置関係図

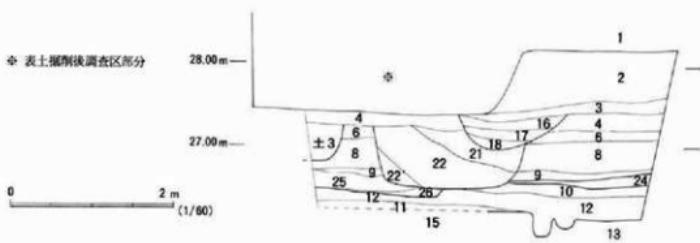
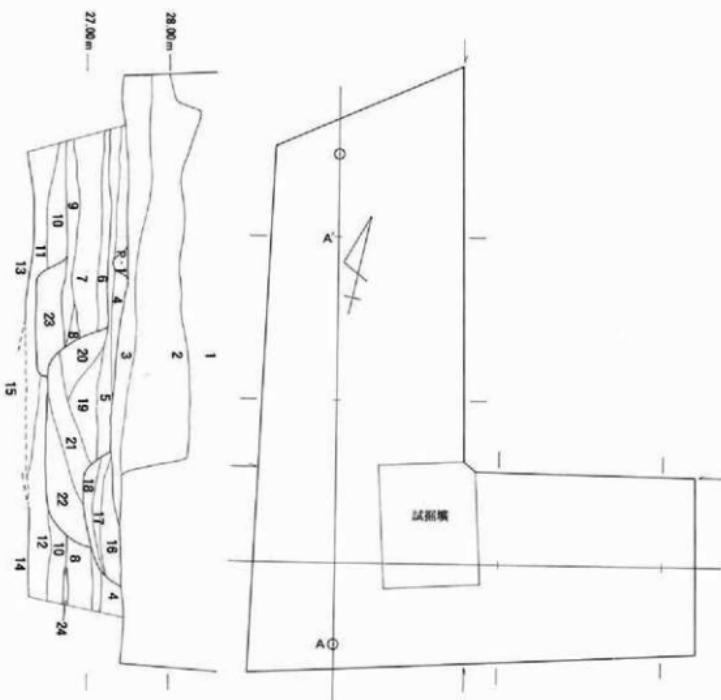


図3 調査区全体図セクション2方向

3. 灰茶褐色砂質土+黒色土層。明治・大正期の国産陶磁器片を僅かに含み、締りがよい。
4. 茶褐色粘質土。土丹粒を多量に含む。3層に削平される。
5. 暗茶褐色粘質土。小土丹・カーボン粒・土器粒等を含む。
6. 暗黄褐色土丹粒子層+暗褐色粗砂層。
7. 土丹層。人頭大～拳大の土丹を密に含む。
8. 大型土丹層。不均一大型土丹を粗に含む。東から西へ流入したように観察される。
9. 暗褐色弱粘質土層。土丹粒土器粒カーボンをまばらに含むやや締りの良い層。
10. 黒褐色粘質土層。全体に土丹粒を含み、鉄分を混交する締りの良い層。
11. 黑褐色粘質土層。カーボン粒・拳大の土丹を少量混入する。
12. 暗褐色粘質土層+土丹粒混じり黄褐色砂質土層。全体に締りは悪く、水気を帯びる。
13. 自然地形岩盤。凝灰岩質シルト岩。
14. 破砕土丹+褐色粘土。人為的な整地・地菜層。
15. (水気を帯びる褐色土)。土丹粒を含む。
16. 灰褐色土。土丹粒・カーボン粒を少量含む。
17. 炭化物層。粘性を帯びる炭化物と褐色粘質土が互層を為す。
18. 小土丹層+暗黄褐色砂質土。
19. 貝粒子・土丹を含む褐色土。
20. 暗褐色弱粘質土。層中に若干の腐食食物遺存体が観察される。
21. 締りのない茶褐色土。土丹粒を多量に含む。
22. 大型土丹+暗黒色粘土。土器粒・炭化物を含む。
- 22' 22寄りの大型土丹がまばら。
23. 小土丹+粗砂+褐色粘質土。底面付近等に小土丹が密に混入する。
24. 砂礫を含む炭層。やや粘性を帯び部分的に土壤化している。
25. 暗褐色粘質土。小土丹・炭化物・土器粒を含む。
26. 鉄分質を多量に含む褐色粘土。

### 第三章 検出された遺構と出土した遺物

前章で述べたように、調査地点付近は近世遺構の所作と思われる造成等による盛土が厚く堆積している。調査に際しては先行して行われた試掘調査の結果を参考に、重機により図3の3層まで除去した後に、手掘にて土丹粒を含んだ茶褐色粘質土を検出しこれを1面とした。調査開始面である1面から、調査対象深度付近で部分的に検出した岩盤を最終面として、中世の遺構面を計4面として捉えた。

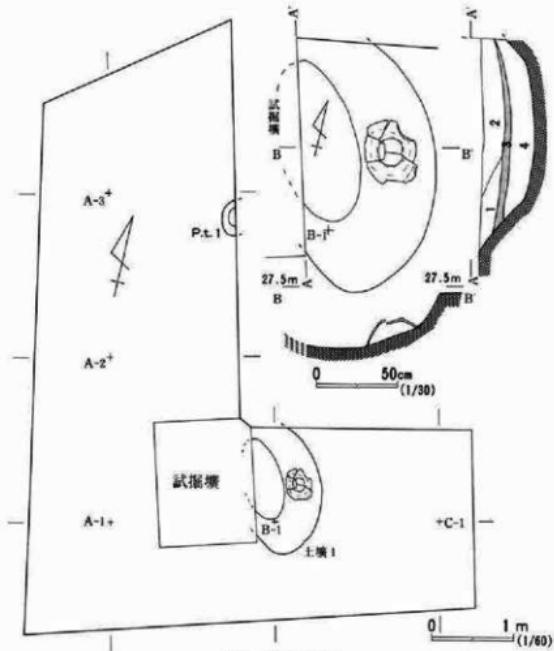


図4 1面全測図

検出状況からの判断では、常滑の壺底部が廃棄された後に土丹が投込まれ、炭化物の堆積を挟んで人为的に埋め戻されている。炭化物層直下の土丹上面及び常滑の壺器表には、火熱を受けた痕跡は認められ

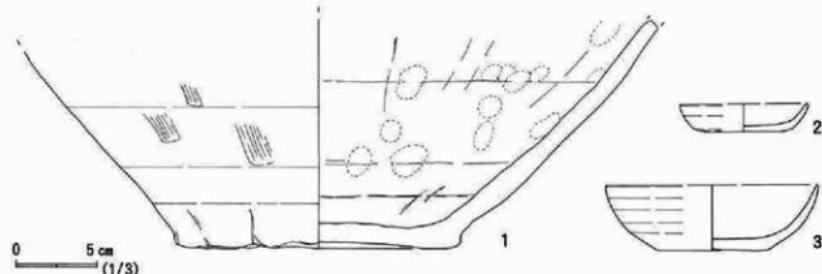


図5 1面遺構内出土遺物

以下、調査順に従って、検出された遺構と出土した遺物について説明を加える。尚、遺構は各調査面に拘らずに通し番号を付し、遺物は調査の際に出土した遺構・層位に基づき同様に通し番号で提示している。各遺物番号は写真図版の番号と一致する。出土層位については、前章図3を参照されたい。また、報文末には検出遺構一覧表・出土遺物法量表を付した。

#### I. 1面の遺構と遺物

直上の近世耕作土による削平が著しく、構築時の平坦面・レベルは殆ど遺存していないが、概ね標高27.3mを測る。検出された遺構は、土壌1基と東壁際の柱穴1口のみである。図4に1面の全体図と土壌1を示した。

土壌1は、上面を削平され試掘堀により西半分が失われている。

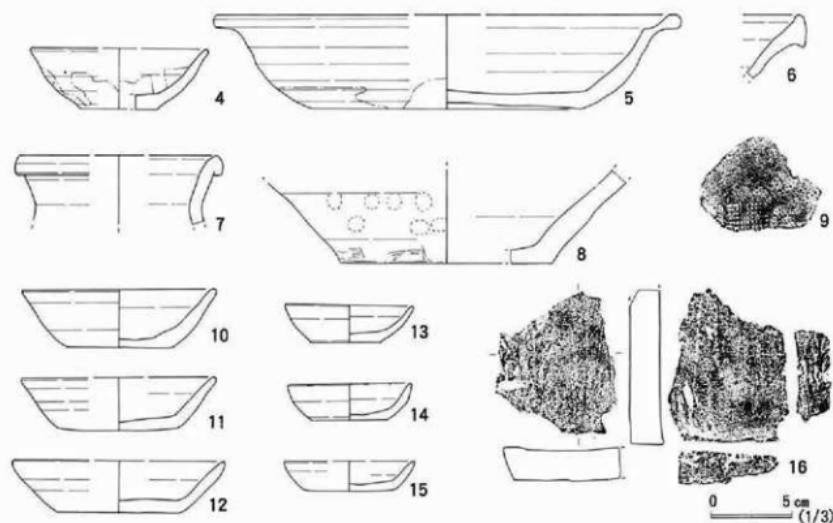


図6 1面構築土中出土遺物

ないので、土壤内で何かを燃やしたとは考えにくい。

図5は土壤1の出土遺物である。

1・2はかわらけ。器表は灰橙色を呈し、焼成は比較的良好。いずれも、土壤覆土内炭化物層中から出土しているが、火熱を受けた痕跡・煤や炭化物の付着も認められない。土壤埋没時に混入した物であろうか。3は底面付近で出土した常滑の壺底部。同一個体と思われる胴部破片が数個、1面構築土中から出土しているが接合はしなかった。

本造構内からは炭化には至らなかったが、図4土層図中1層よりかわらけ片・瀬戸窯製品の破片が出土している。

東壁際の柱穴は、掘込み上面を削平されたものか浅く柱痕等も確認できなかった。遺物は出土していない。

図6は、1面構築土中（図3の4・5層）、2面検出上面まで掘りさげ時の出土遺物である。

4は瀬戸窯の小鉢若しくは深めの縁軸小皿。口縁部から体部下半にかけて内外面とも鉄釉が厚くかかり、外面は一部底部まで流れている。5は瀬戸灰釉折縁鉢。遺存する口縁部がやや歪んでいる為復元口径には不安がある。

6は魚住窯捏鉢の口縁部片。口唇部外面は黒色処理されている。

7～9は常滑窯の諸製品。7は壺の口縁部、8は捏鉢底部片で内面はかなり使い込まれている。9は壺の胴部片押印の拓影。

10～15は糸切り底のかわらけ。10～12は粉質の器表で淡橙色を呈し、焼成は比較的良好。13～15の小皿は灰橙色乃至肌色を呈し、焼成は良好。14は灯明皿に利用され、15は体部下半から底部全体にかけて煤が付着する。

16は女瓦片。叩き目はナデ消され、部分的に火熱を受けている。

## II. 2面の遺構と遺物

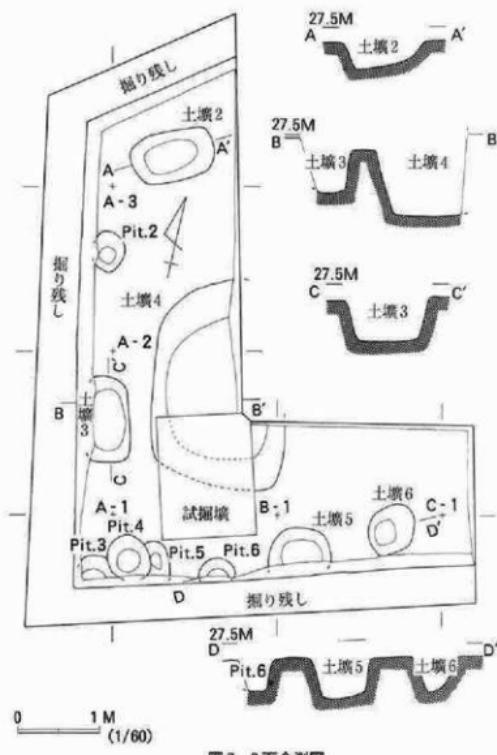


図7 2面全測図

図8は、2面検出各遺構内出土遺物。

17・18は土壤2の出土遺物。

17は手づくね整形のかわらけ。器表は淡茶色を呈し焼成は良好。

18は砥石。凝灰岩質砂泥岩製で針掻き状の削痕が遺る。この石質で砥石としての用途を為すのかどうか疑問ではある。他に常滑窯窯の胴部片、瓦片が出土している極小片の為測図・提示していない。

20～24は土壤3の出土遺物。

19は白磁。いわゆる口兀皿の口縁部片。釉は透明感のない白濁色で外面はやや厚めにかかる。

20・21は常滑窯捏鉢の口縁部片。22は瓦片。桶巻き痕を留めるが、叩き目はナデ消されている。

23はかわらけ小皿。底部は糸切り、器表は灰橙色を呈し焼成は良好。

24は砥石で、天草産の中砥。破損面が丸みを帯びて磨耗している為、欠損後も徹底的に使い込まれたとの印象を受ける。他に瀬戸窯製品・火鉢片等が出土しているが小片の為測図し得ない。

1面構築土（図3の4・5層）を除去後に現れる破碎土丹による地業層上面を2面とした。

調査区内に於いては概ね27.3m程で、調査区西側前を通じて現車道面とはほぼ同レベルである。破碎土丹による地業はさほど強固とは言えないものの、調査区内で検出された範囲では水平・平坦である。

土壤・柱穴を含め計10基の遺構を検出した。調査区が狭小なこともあり、検出された各遺構は一定の方向性を示しているか否かは把握できず、又、機能を類推させるような土壤や、建物を想定出来得る柱穴の配置は認められなかった。強いて言えば土壤2の長軸方向と土壤5・6の並びが、後述する3面の溝状の遺構と方向がほぼ一致するぐらいで、規模の大きい土壤4の長軸は異なる向きになる。

遺構覆土の相違から2面に於ける新旧が考えられるかもしれない。いずれにしても当該年代でのある敷地内の中枢部分ではないだろう。

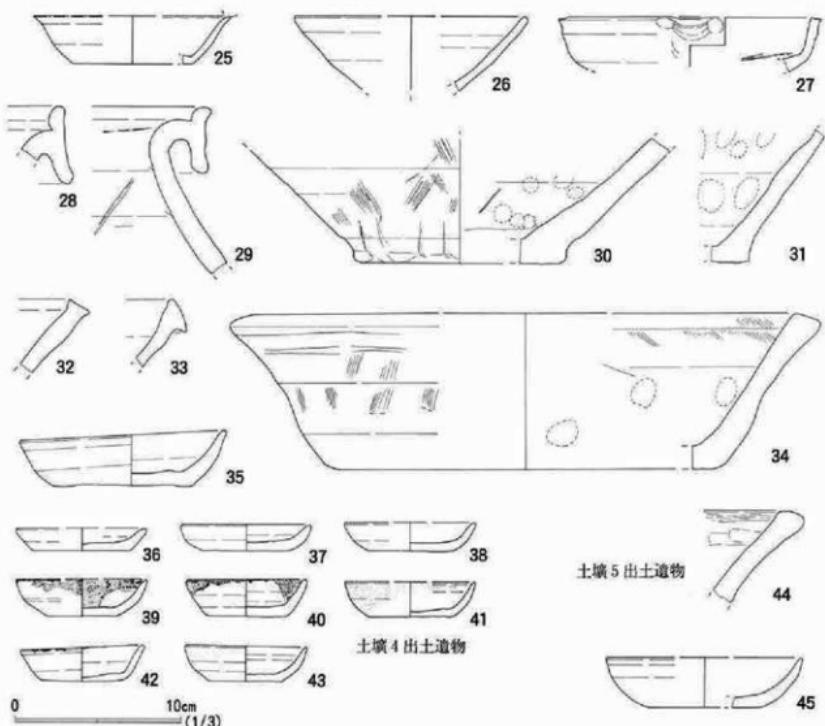
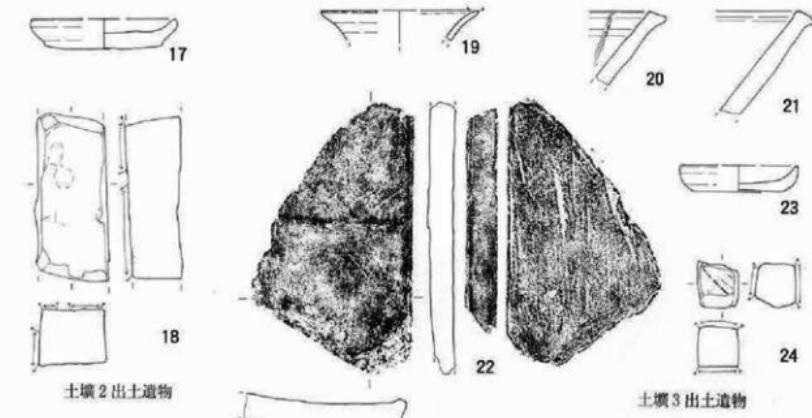


図8 2面造構内出土遺物

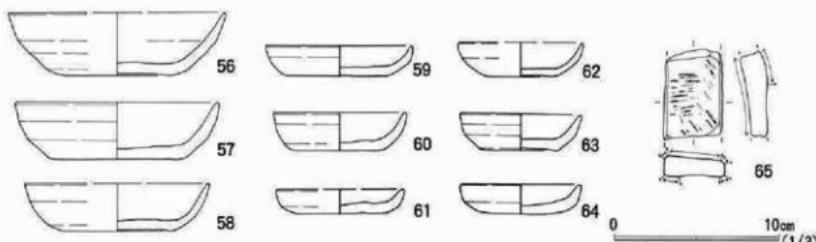
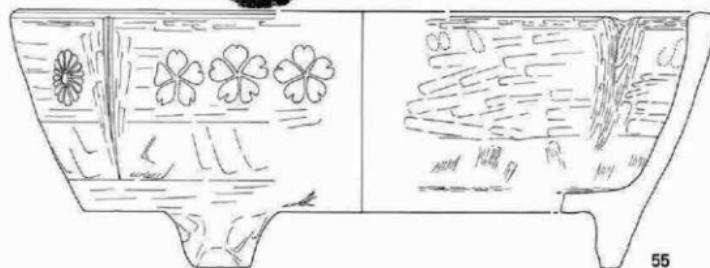
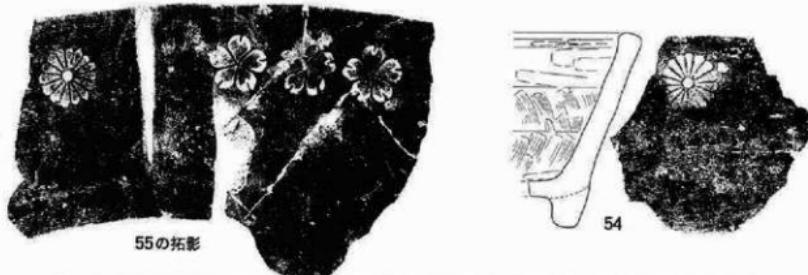
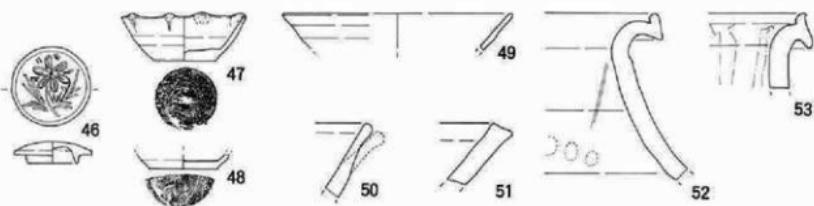


図9 2面構築土中出土遺物

29は甕の口縁部。30は甕の底部。31は捏鉢の口縁部。32は捏鉢の底部。33は魚住窯捏鉢の口縁部。34は火鉢。土器質の浅鉢型。35～43はかわらけ。全て糸切り底で、器表は概ね灰橙色乃至肌色を呈し、焼成は良好。小皿の内、39～43は灯明皿。土壤4からは他にも青磁小破片、瀬戸灰釉折り縁鉢体部片、常滑窯甕の胴部片が数点、等々出土しているが測図・図化し得ない。又、試掘の際の出土遺物との接合も認められなかった。

44・45は土壤5の出土遺物。

44は火鉢。瓦質輪花型の口縁部片か？ 内外面共に黒色処理された後に、丁寧に磨かれている。スタンプは認められない。45はかわらけ。器表は肌色を呈し焼成は良好。他に、かわらけの小片と常滑窯の捏鉢片が出土しているが小片の為測図・図化し得ない。

2面の他の遺構からも、かわらけ片・常滑窯内産陶器等遺物は数点ずつ出土しているものの、体部・胴部片や極小破片の為測図・図化し得なかった。

図9は、2面構築土（図3の6層）及び3面上を覆う土丹層中（図3の7層）の出土遺物である。土丹層中の出土遺物に関しては、整理の際にも他の層位の出土遺物とは全く接合関係は認められなかつた。又、遺物の破損断面が若干磨耗しているものもあり、3面廃棄時の土丹による造成に伴つて他所から混入したものと思われる。

46は青白磁の蓋物完形品。花文様の陽刻を貼付けている。釉は極薄い水色で上面全体に薄く施されている。

47・48は瀬戸窯の入れ子。いずれも胎土・器表は乳白色であり堅緻ではない。底部は糸切り。47は口縁部が輪花型に作られており、口唇部には薄灰緑色自然落灰がかかる。輪花の内1弁には内外共に煤様のものが付着している。48は底部片。

49は美濃系の山茶碗口縁部片。胎土・器表共に灰乳白色を呈し精良で堅緻。小片の復元のため口径にはやや不安がある。

50は南部系山茶碗窯捏鉢口縁部片。器表はやや荒れている。

51～53は常滑窯の製品。51は捏鉢の口縁部。52・53は甕の口縁部。縁部器表がやや磨耗している。52は図3の6層・8層内の計3小破片が接合している。

54・55は瓦質輪花型火鉢。54は16弁菊花が陰刻されている。外面が非熱を受けたものか、器表が剥離し危うくなっている。55は図3の7層・8層内の計5破片が接合している。胎土はややもろく器表は脚部分と内外底面が灰黒色部下半から上は灰橙色乃至は薄赤橙色を呈する。胴上部のスタンプは、遺存する1弁には大型の桜花が3連で陰刻され、隣の弁には15弁菊花が陰刻されている。鎌倉市内でも桜花のスタンプは少数例ではあるもの出土しているが、同一個体に異種のスタンプを施した例を筆者は知らない。

56～64はかわらけ。全て糸切り底。破損断面の磨耗が観られるものが多い。56～58は大型品。橙色乃至は灰橙色を呈し焼成はいずれも良好。58は中型品かもしれない。60～64は小型品。概ね橙色乃至は灰橙色を呈し、焼成はいずれも良好。60は灯明皿、62・64は全体に歪んでいる。

65は砥石。鳴滝産の仕上げ砥。図上右側面には成型時の加工痕を留める。表面は平滑な使用後に横方向の使用痕が観られ、裏面は平滑な使用後に石層から剥離している。

### III. 3面の遺構と遺物

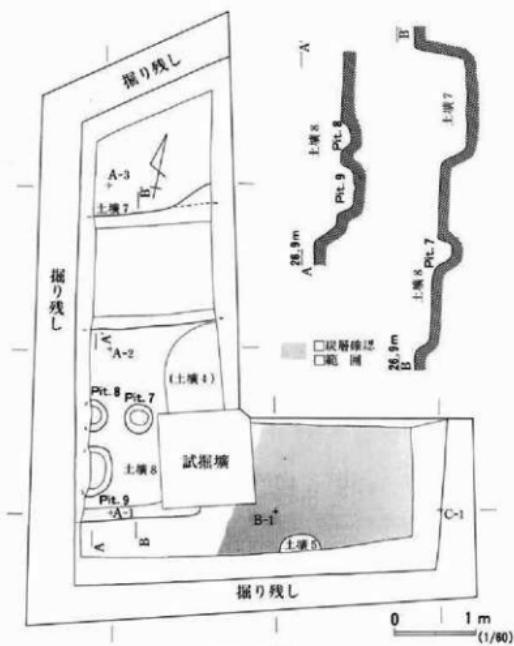


図10 3面全測図

しているような状況は観察されなかったものの、堀込みは、確認高はほぼ垂直、土壤8はほらかの構造を伴う堀込みであろう。

調査区の東側で3面の構成土とほぼ同レベルで検出された炭層は、厚いところで15cm程堆積し層中に砂礫や小土丹を含むが、内包する土丹や遺物片あるいは炭層直下の土層は火熱を受けた痕跡は認められ、



土壤7出土遺物

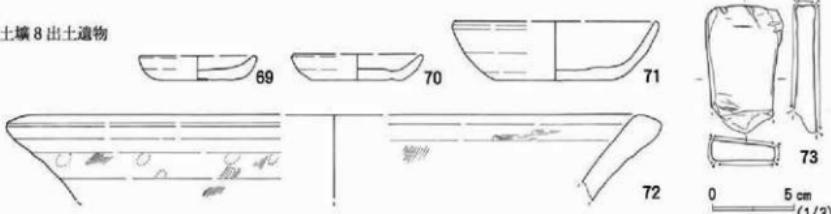


図11 3面遺構内出土遺物

大規模な造成とも思われる土丹層を除去し、標高27.3m前後に現れる黒褐色の整地層を3面とした。北側土層断面の観察からは、その上層（図3の10層）も生活面と捉えることもできようが、顯著な遺構プランが検出されなかつた為、このレベルまで掘り下げた。従つてここで報告する3面とは、厳密に言えば生活面2時期を検出している可能性もある。

検出した遺構は土壤2基と、面とほぼ同レベルに拡がる炭層である。

土壤7は、東西方向に長軸を持つと思われる溝状の土壤で、若干西に傾斜する。検出時には、遺構壁際及び底面に3~5cm大の土丹粒が多く検出されている。

土壤8は、試掘壙・土壤4・土壤7に切られ範囲が定かではないが、試掘壙壁面の土層観察から図のように判断した。柱穴7・8は本遺構底面にて確認されたものである。特に底面が硬化している。

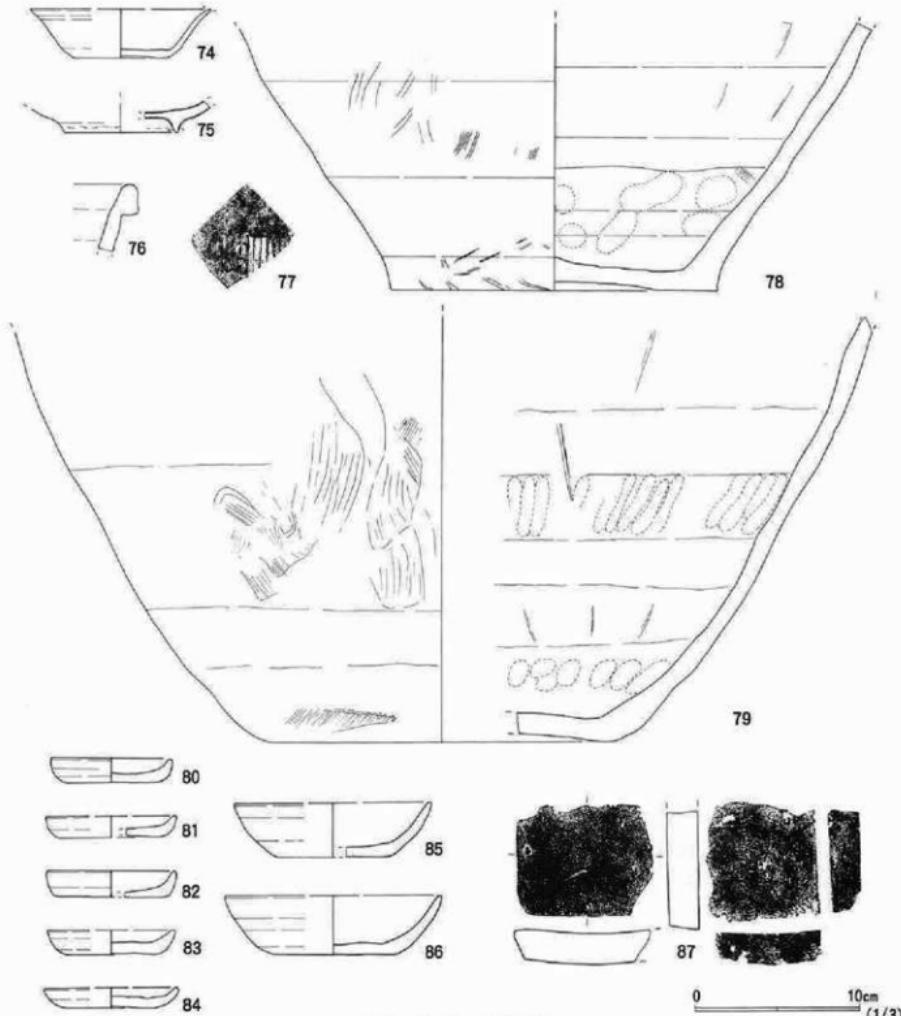


圖12 3面炭層內出土遺物

0 10cm  
(1/3)

範囲は不明瞭で、特に遺構或は3面の堆み状の場所に、堆積或は意識を持って廃棄されたとは思われない。又、層中には多くの遺物を内包し、下層部には腐食した木器類も混入していた。北側土層断面の観察からは、自然地形に従い東から西に向って流れ込んできたようにも見える。狭小な範囲で検測は避けねばならないが、調査区外の東側で大幅な土砂の移動があり、それに伴って入り込んだと思われる。

図11は、3面遺構内出土遺物。

66～68のかわらけ小皿は、土壤7出土遺物。全て糸切りで、器表は淡橙色乃至肌色を呈し、焼成は良好。土壤7下層からは常滑窯妻胴部片、瀬戸窯瓶子胴部小片等が出土しており、そのいくつかは僅かながらも水磨している様相が観察される。

69～73は土壤8の出土遺物。

69～71のかわらけ。全て糸切りで、器表は淡橙色乃至肌色を呈し、焼成は良好。71は、内面に煤が付着する。

72は土器質浅鉢型火鉢。復元口径にはやや不安がある。

73は磁石。天草産の中砥。上端面小口は、製品成型時の加工痕が遺存しているものと思われる。この小口面と破損断面以外の4面全て使用している。土壤8からは、他に小破片ではあるが山茶碗窯系の捏鉢胴部片数点、鐵滓等が出土しておりいわば生活臭のする出土状況といえよう。

図12は、3面精査中に調査区東側部分で確認した炭層（図3の24層）中の出土遺物である。この層中から出土した遺物は、図示し得なかったものも含めて、2次的な火熱痕は顕著には認められない。従って、炭層の堆積する付近でなくかを燃やした訳ではなく、周囲の焼け跡整理を生活面上の堆みに投込んだ際に混入した遺物と思われる。

74は白磁口兀皿。釉は白濁色で、外底面まで施される。75は青磁の鉢底部片。釉は淡緑色。

76～79は常滑様の諸製品。76は壺の口縁部か。小片の上口唇部に歪みがある為傾きにはやや不安がある。77は胴部片押印拓影。78・79は3面構築土直下で出土した常滑窯の底部。据えられているようにも観察されるが、顕著な据え方様の堀込みは確認されなかった。又、遺物内面にも使用機能を類推し得るような付着等は確認されていない。

80～86のかわらけ。全て糸切りで、器表が概ね淡橙色乃至肌色を呈し、焼成は良好。86は暗肌色を呈し胎土がやや粗い。

87は女瓦。整形後にナデ消しているため叩き目ははっきりとしない。

図13は3面構築土中（図3の11・12層）の出土遺物。確認された岩盤面付近で掘削深度に達した為、確認され得なかった遺構の覆土内の遺物を含んでいる可能性がある。

88は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片。

89～91は常滑窯の甕口縁部。

92～103のかわらけ。全て糸切り底。概ね淡橙色乃至は肌色を呈し焼成は良好。92～98は小皿。内96は灯明皿。99～103は中～大型品。

104は女瓦。整形時に斜格子の叩きを施した後にナデ消している。

105は用途不明石製品。遺存する2端面は、原石加工後に磨き整形されている。表面は同様に磨き整形成されており、数条の針掻き状の削痕を留める。裏面は板状剥離の為原形を留めていない。針掻き状の削痕から砥石とも考えられるが、石材・大きさ等から判断すると観等他の石製品の未製品と考えるのが妥当と思われる。

106・107は砥石。共に鳴滝産の仕上げ砥。107は上端小口及び側端面に製品成型時の加工痕跡を留める。

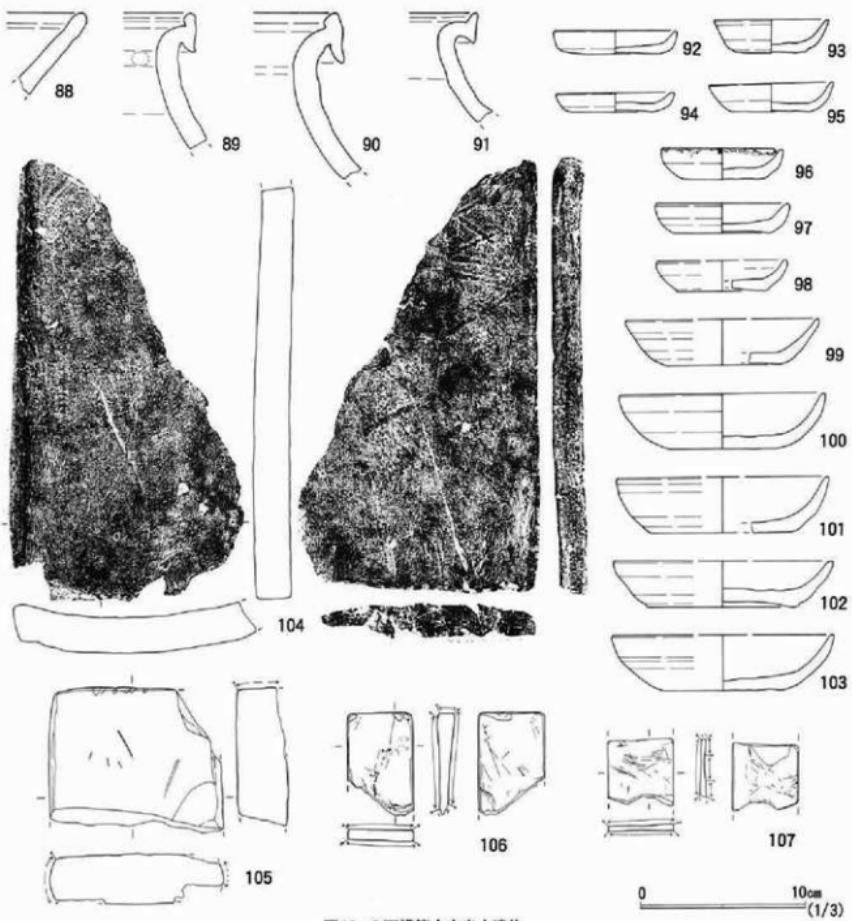


図13 3面構築土中出土遺物

#### IV. 最終面の遺構

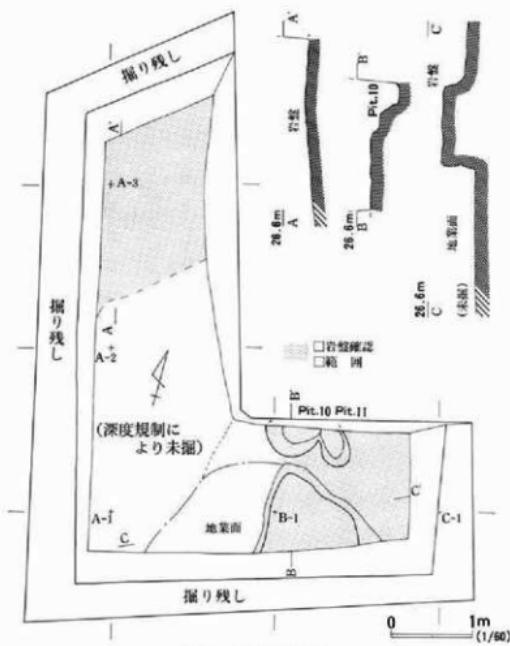


図14 最終面全測図

ら掘り込まれた遺構の可能性もある。

前項に述べたようにこの最終面に至るまでの出土遺物は、著しい湧水の為層位で掘り分けるのは困難で有り、3面構築土中出土遺物として採り上げた。岩盤から掘り込まれた柱穴から、常滑窯の胴部小片が出土しているが、測図提示するには至らなかった。

図15は、試掘場の再掘上げ時或は表土削除時に出土し、帰属する層位・遺構が不明瞭になってしまった遺物である。このような出土遺物の内、整理時に遺構内或は調査時層位内出土遺物と接合したものは、各遺構層位内に帰属させた。

108・109は瀬戸窯の製品。108は灰釉平碗の口縁部片。小片の為傾きにはやや不安がある。109は平底未広碗。図8-26と接合はしないが同一個体と思われる。

110・111は常滑窯の製品。110は甕の口縁部。111は磨製品。甕の胴部片の割れ口が著しく磨耗している。獸皮の皮なめしや描粉木の代用品としての使用等諸説がある。

112・113はかわらけ。明橙色を呈し、粉質の胎土。

図14は図3の12層を掘下げ削除深さまで調査した際の全測図である。調査区北側と西側で岩盤を検出した。

調査区西側で検出された岩盤は、人為的に開削が行われている。30cm程切削され、方形台上の高まりを呈する岩盤の最高値は26.5mを測る。その下場付近の調査区際では、柱穴を2穴検出した。柱穴内覆土は12層に小土丹塊を混交した上で、柱痕は認められなかった。この柱穴と岩盤を切り落したところより東側では、破碎土丹と褐色粘土を混交した強固な地業面が検出された。地業面は西に向って緩やかに下る様相を観せ、全体の範囲は調査深度以下になる為確認できなかった。

北側は岩盤というよりは、岩盤上に堆積する崩落土層と思われるが、或は人為的な土丹地業の可能性もある。南に向って緩やかに傾斜し、遺構プラン等は確認できなかった。試掘場の南・東付近は、この事業面から

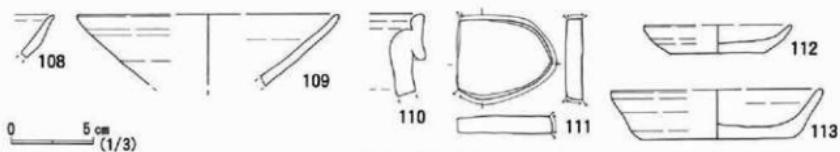


図15 採集遺物

## 第四章 調査のまとめ

覚園寺に係わる発掘調査は、これまでに谷戸内のやぐらが数列為されているが、平面的な調査としては境内域に於けるトレンチ調査を除いては行われていない。これは一つには、付近が近世に盛土をした上で宅地化している為、掘削深度が中世遺構面に達し得ないことにも起因している。そうした中で、本次調査は限られた範囲とはいえ、平面的な調査を実施する機会に恵まれた。以下極めて断片的にならざる得ないが、若干のまとめを試みたい。

### 1. 検出遺構について

調査では掘削深度に達した岩盤面を含めて、合計4枚の生活面を確認した。しづれも遺構の密度は希薄であり、付近の状況を解明するに十分とは言い難い。最下層で確認された岩盤面から層序を元に変遷を追う。岩盤は海拔26.5mで確認された。原地形に手を加え方形台上の高まりを削りだし、柱穴を穿ち岩盤面と同レベルから斜面を平坦化するよう強固な版築が為されており、既に付近の敷地の拡張が行われていることが想像される。調査区外西側3m程の所には現在は小河川が流れている。後述する上層の生活面の調査でも、各遺構群はまだ西側に拡がるとの予想に難くはない。一方で調査区内では溝の護岸施設様の遺構や道路状かと思われるような一定範囲の硬化面は検出されていない。覚園寺の旧参道の道筋を考えるときに原小河川の流路を掘むことは肝要であろう。

岩盤面の生活面の後には、調査の上では1枚として扱ってしまったが、斜面を平坦化するような生活面が構築される。土壤8は、恐らくは古い方の生活面に伴う遺構と思われる。若干の堀込みと柱穴を伴い、建物になるかとも考えられる。遺物は火鉢・捏鉢の生活雑器や磁石・スラグ等が出土しており、本次調査では唯一と言つていいほど生活臭の感じられる遺構である。この出土状況を考え併せ、現在鎌倉市内で検出されている建物形態の中では、板壁獨立柱建物と呼ばれるものが最も近いと思われるが、この程度の確認範囲では断定するには至らない。土壤8は、炭層が堆積した頃にはその機能を失い土壤7に破壊されている。

土壤7は杭等の施設は抜取られたものか検出されなかったが、検出時の堆積土の様相から溝様の機能が考えられる。或は排水・流水を目的とした木組を伴うものではなく、市内の検出例から敷地境や区画を示唆する素掘の土壤状の溝からしない。本次調査で検出された各面の遺構は、ある敷地内の中枢部分ではなくどちらかというと範囲内の端の一部分と考えられる。周囲の地形や同敷地内で検出されたやぐらの方向等を考えると、後者の方が可能性は強いと思われる。土壤7の埋没時期との前後関係は不明であるが、炭層はこの生活面が廃棄されるのと同時期又はあまり時間差をおかずして堆積したものであろう。この場所で何かを燃やしたわけではなく、他所で行われた焼跡整理を斜面に沿って処理した際に堆積したものであろう。やや気になるのは常滑窯の塵2点である。検出状況からこの炭層とほぼ同時期であるのは間違いくなく、正位で2個並んでいるのは偶発的とは思われない部分もある。時間的な制約と筆者の力不足により、細かい検討を加えないままに採り上げてしまったが、1面で検出された土壤1内で伏位で検出された常滑窯の塵底部と併せ、今後注意を払う必要のある事例といえよう。

2面はこれら炭層を含めた3面の遺構群を、大量の土丹塊で人為的に埋め尽くし、自然地形に伴う斜面堆積を平坦化するように構築されている。第3章で述べたようにこの土丹層中には多くの遺物を内包し、調査区外未調査部分には中世当該期の遺構が遺存することが想像されよう。検出された遺構は

まとまりに欠けるが、調査区南端で検出された土壤柱穴列の方向が概ねこの面の軸を示していると思われる。土壤4はこの面でも新しい時期の造構であろうが、埋没する際にはごみ捨て穴的に利用されたようだ。

1面は2面廃棄後に若干の整地を行った上に構築されている。上面を削平されているものの遺存する限りでは比較的丁寧な版築地業と観察される。ここでも他所から移動された土丹と炭層による人為的な埋め戻しに伴って常滑窯の甕が検出されている。各時期ともに、生活面の更新後とに客土を用いて整地を行い、その際には自然地形に伴う斜面堆積の平坦化を図っている。中世鎌倉では、客土の搬入に伴う儀礼行為が行われている事例も数例有り、今後の付近での調査事例を待ち、改めて検討を加えたいところである。

## 2. 出土遺物と年代観について

調査面と範囲の割には比較的多くの遺物が出土している。これは、前述したように付近で度重なる造成と地業が繰返されたのに伴い、移動する土に混入して遺物も動いていることに他ならない。逆に言えばそれだけ年代観が曖昧にならざるを得ないと言うことであろうか。ここでは混乱を避ける為もありおよその年代観を示すこととする。

1面の、土壤1の出土遺物からは判断に難渋するが、1面構築土中出土のかわらけや瀬戸窯製品の年代が参考になろう。出土している瀬戸窯の製品は、提示しなかったものを含めて後期に入るものがあり、これとかわらけの年代を併せて考えると、15世紀代以後と考えられる。

2面・3面は構成する土丹層中出土遺物を併せると、かわらけの他、瀬戸窯製品、瓦質輪花火鉢等概ね14世紀代の出土傾向といえるであろう。図2-1と図3-2は混入品であろう。これを各層のかわらけの年代から、2面を14世紀代中～後半、3面を14世紀代前半と考えたい。

以上大まかな年代を示したが、本調査地点で特徴的なことは釘を含めた金属製品が殆ど出土していないことである。釘は土壤8の覆土中から、3本ほど出土しているに過ぎず銷が進行していく測図・提示するには至らなかった。又、銅錢も試掘時の出土遺物と割れ残りを含めて、5枚個体に過ぎない。寺院跡を思わせるような遺物の出土状況もあまり認められず、今後の付近の調査の際には注目しておくべき事であろう。

検出遺構一覧表

探査図No.	面	遺構名	規模 NS×EW (cm)	深さ (cm)	覆土	備考
4	1面	土壤1	(154) × (83)	38	(図1中土壤1個別図参照)	試掘壁に切られる
7	2面	土壤2	62 × 102	32	土丹混じり暗褐色粘土	
		土壤3	104 × (44)	53	土丹、炭混じり暗褐色粘土	
		土壤4	254 × 143	83	(図3中土層図参照)	試掘壁に切られる
		土壤5	(42) × 78	52	暗茶褐色粘質土	
		土壤6	54 × 59	41	暗茶褐色粘質土	
10	3面	土壤7	138 × (144)	62	(図3中上層図参照)	東から西へ若干傾斜
		土壤8	(229) × (143)	21	砂質土・土丹混じり暗褐色土	土壤7に切られる
		炭層	(150) × (230)	厚10~15	層中に砂礫、小土丹を含む	3面と同レベルで検出
4	1面	Pit. 1	42 × (16)	22	褐色粘質土	
7	2面	Pit. 2	51 × (33)	29	暗褐色土	
		Pit. 3	(28) × (34)	12	炭混じり黒褐色土	Pit. 4に切られる
		Pit. 4	(49) × 50	23	土丹混じり暗褐色粘質土	
		Pit. 5	(42) × (22)	8	炭混じり黒褐色土	Pit. 4に切られる
		Pit. 6	(23) × 45	36	暗褐色土	
10	3面	Pit. 7	46 × 35	16	炭多量混じり暗褐色粘土	土壤8底面に伴うPit.
		Pit. 8	39 × (20)	12	炭多量混じり暗褐色粘土	土壤8底面に伴うPit.
		Pit. 9	59 × (27)	19	炭多量混じり暗褐色粘土	土壤8底面に伴うPit.
14	最終面	Pit. 10	(37) × (66)	23	炭・縛混じり黒色粘土	岩盤より掘り込み
		Pit. 11	(49) × 36	26	炭・縛混じり黒色粘土	岩盤より掘り込み

遺物法量表(1)

擇図No.	遺物No.	產地・製品名	器種・(用途)	法量(cm)	備考
5	1	常滑	壺	底径17.4 (遺存高14.0)	
	2	かわらけ	(小)	口径(7.8) 底径(4.7) 器高1.7	
	3	かわらけ	(大)	口径(13.1) 底径(6.9) 器高4.0	
6	4	瀬戸	碗	口径10.9 底径(4.8) 器高3.7	
	5	瀬戸	折縁鉢	口径(28.5) 底径(16.6) 器高5.7	
	6	魚住	捏鉢	- - -	
	7	常滑	壺	口径12.1	
	8	常滑	捏鉢	底径(13.0) (遺存高6.7)	
	9	常滑	壺	- - -	押印・格子
	10	かわらけ	(大)	口径(11.9) 底径6.4 器高3.6~3.4	歪む
	11	かわらけ	(大)	口径(11.9) 底径(7.4) 器高3.3	
	12	かわらけ	(大)	口径13.0 底径7.4 器高3.2	
	13	かわらけ	(小)	口径7.8 底径4.4 器高2.4~2.2	歪む
	14	かわらけ	(小)	口径7.6 底径4.6 器高2.2	灯明皿
	15	かわらけ	(小)	口径(8.0) 底径5.5 器高1.8	
	16	瓦	女瓦	(9.5) × (7.3) × 2.1	
8	17	かわらけ	手づくね	口径(8.9) 底径(7.2) 器高1.8	
	18	石製品	砥石	長さ(9.6) 幅4.4 厚さ3.4	凝灰岩質砂泥岩
	19	白磁	口元皿	口径(9.5)	
	20	常滑	捏鉢	- - -	
	21	常滑	捏鉢	- - -	
	22	瓦	女瓦	(16.7) × (10.0) × 1.7	
	23	かわらけ	(小)	口径(7.2) 底径(5.5) 器高1.6	
	24	石製品	砥石	長さ2.5 幅2.9 厚さ2.9	天草産中砥
	25	白磁	口元皿	口径(12.0) 底径(7.3) 器高2.9	
	26	瀬戸	平碗	口径(14.2)	図15-109と同一か?
	27	瀬戸	卸皿	口径(16.0)	
	28	常滑	壺	- - -	
	29	常滑	壺	- - -	
	30	常滑	壺	底径12.9 (遺存高7.6)	
	31	常滑	捏鉢	- - -	
	32	常滑	捏鉢	- - -	
	33	魚住	捏鉢	- - -	

遺物法量表 (2)

揮図№	遺物№	産地・製品名	器種・(用途)	法量 (cm)	備考
8	34	火鉢	(浅鉢型)	口径(36.1) 底径(22.9) 器高9.5	
	35	かわらけ	(大)	口径12.6 底径8.6 器高3.4~2.8	重む
	36	かわらけ	(小)	口径8.0 底径(6.1) 器高1.4	
	37	かわらけ	(小)	口径8.0 底径5.0 器高1.6	
	38	かわらけ	(小)	口径(8.1) 底径(5.2) 器高1.7	
	39	かわらけ	(小)	口径(8.0) 底径4.5 器高2.3	灯明皿
	40	かわらけ	(小)	口径7.4 底径4.7 器高2.3	灯明皿
	41	かわらけ	(小)	口径(8.0) 底径(5.4) 器高2.2	灯明皿
	42	かわらけ	(小)	口径7.5 底径4.9 器高2.2~1.9	灯明皿・重む
	43	かわらけ	(小)	口径7.4 底径4.5 器高2.2~2.0	灯明皿・重む
	44	火鉢	(輪花型?)	- - -	
	45	かわらけ	(大)	口径(12.0) 底径(7.1) 器高3.1	
9	46	青白磁	蓋	外径4.7 内径3.1 器高1.3	花文陽刻貼付け
	47	瀬戸	入子	口径(7.5) 底径(3.8) 器高2.9(2.7)	輪花型
	48	瀬戸	入子	底径4.1 (遺存器高0.9)	
	49	美濃系	山茶碗	口径14.0	
	50	山茶碗窯系	捏鉢	- - -	南部系か?
	51	常滑	捏鉢	- - -	
	52	常滑	甌	- - -	
	53	常滑	甌	- - -	
	54	火鉢	輪花型	器高11.8	16弁菊花陰刻
	55	火鉢	輪花型	口径(43.0) 底径(31.4) 器高15.6	桜花・15弁菊花陰刻
	56	かわらけ	(大)	口径(13.1) 底径6.4 器高3.8	
	57	かわらけ	(大)	口径12.4 底径8.4 器高3.5	
	58	かわらけ	(大)	口径(11.1) 底径(7.6) 器高3.4	
	59	かわらけ	(小)	口径8.9 底径6.2 器高1.8	
	60	かわらけ	(小)	口径8.1 底径5.3 器高2.3	
	61	かわらけ	(小)	口径(7.9) 底径5.4 器高1.5	
	62	かわらけ	(小)	口径(7.6) 底径(4.4) 器高1.6	
	63	かわらけ	(小)	口径7.4 底径4.8 器高2.2	
	64	かわらけ	(小)	口径7.4 底径4.8 器高1.8	
	65	石製品	砥石	長さ(5.3) 幅3.6 厚さ1.4	鳴滝産仕上げ砥
11	66	かわらけ	(小)	口径8.2 底径4.7 器高2.1	
	67	かわらけ	(小)	口径7.5 底径4.7 器高1.6	
	68	かわらけ	(小)	口径7.3 底径4.5 器高1.5	
	69	かわらけ	(小)	口径(7.2) 底径(4.2) 器高1.5	
	70	かわらけ	(小)	口径(8.0) 底径(5.6) 器高1.6	
	71	かわらけ	(大)	口径(12.6) 底径(7.0) 器高3.6	内面煤付着
	72	火鉢	浅鉢型	口径(40.0)	
	73	石製品	砥石	長さ(7.8) 幅4.7 厚さ1.3	天草産中砥

遺物法量表(3)

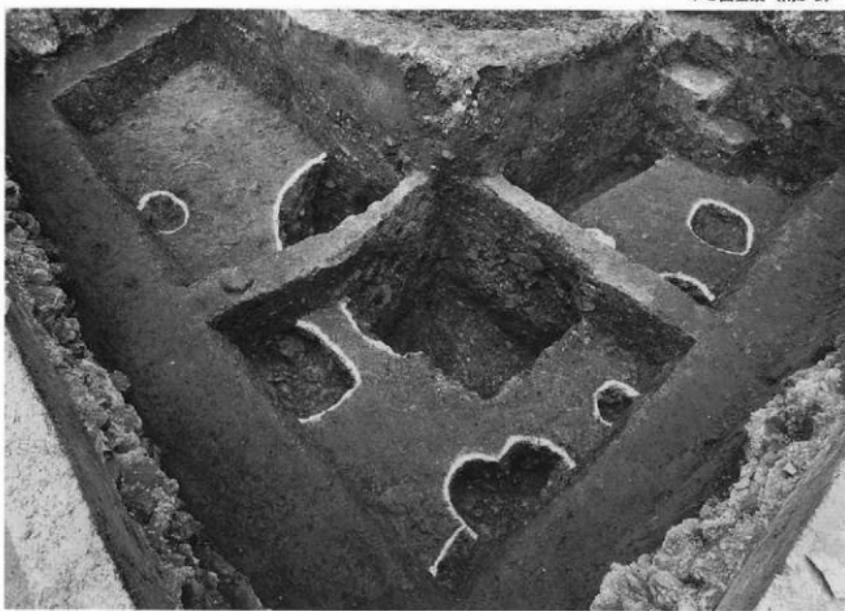
攝図No	遺物No	産地・製品名	器種・(用途)	法 量 (cm)	備 考
12	74	白 磁	口兀皿	口径(11.0) 底径(5.9) 器高3.0	
	75	青 磁	鉢	底径(6.9) (遺存器高1.8)	
	76	常 滑	壺	— — —	
	77	常 滑	甕	— — —	押印・格子
	78	常 滑	甕	底径20.1 (遺存器高16.3)	
	79	常 滑	甕	底径22.8 (遺存器高25.8)	
	80	かわらけ	(小)	口径7.4 底径5.7 器高1.5	
	81	かわらけ	(小)	口径(8.0) 底径(6.6) 器高1.3	
	82	かわらけ	(小)	口径7.9 底径7.0 器高1.3	
	83	かわらけ	(小)	口径(7.8) 底径(5.5) 器高1.5	
	84	かわらけ	(小)	口径(8.2) 底径(6.0) 器高1.3	
	85	かわらけ	(大)	口径(12.0) 底径(7.4) 器高3.3	
	86	かわらけ	(大)	口径(13.2) 底径8.0 器高3.6	
	87	瓦	女 瓦	(6.7) × (8.2) × 1.9	
13	88	山茶碗蒸系	捏 鉢	— — —	
	89	常 滑	甕	— — —	
	90	常 滑	甕	— — —	
	91	常 滑	甕	— — —	
	92	かわらけ	(小)	口径7.5 底径6.6 器高1.4	
	93	かわらけ	(小)	口径7.0 底径4.4 器高1.9	
	94	かわらけ	(小)	口径7.2 底径5.2 器高1.4	
	95	かわらけ	(小)	口径7.6 底径5.1 器高1.7	
	96	かわらけ	(小)	口径7.4 底径5.1 器高1.9	灯明皿
	97	かわらけ	(小)	口径8.2 底径6.0 器高1.8	
	98	かわらけ	(小)	口径(8.0) 底径(5.7) 器高1.9	
	99	かわらけ	(大)	口径(11.8) 底径(7.3) 器高2.8	
	100	かわらけ	(大)	口径(13.0) 底径(8.7) 器高3.4	
	101	かわらけ	(大)	口径(12.5) 底径(6.8) 器高3.4	
	102	かわらけ	(大)	口径(13.4) 底径(9.1) 器高2.8	
	103	かわらけ	(大)	口径(13.1) 底径7.8 器高3.4	
	104	瓦	女 瓦	(14.8) × (26.7) × 2.3	斜格子叩き→ナデ消し
	105	石製品	(不明)	(8.4) × 10.5 × 3.1	端面加工痕在り
	106	石製品	砥 石	長さ(4.2) 幅4.0 厚さ0.4	鳴滌座仕上げ砥
	107	石製品	砥 石	長さ(6.2) 幅4.0 厚さ1.1	鳴滌座仕上げ砥
15	108	瀬 戸	天目碗	— — —	
	109	瀬 戸	平 碗	口径(16.0)	図8-26と同一か?
	110	常 滑	甕	— — —	
	111	常 滑	すり常滑	長さ4.8 幅5.8 厚さ1.1	
	112	かわらけ	(小)	口径(9.0) 底径(5.8) 器高(1.7)	
	113	かわらけ	(大)	口径(13.0) 底径(9.1) 器高(3.0)	

図版1



▲ 1面土壙 1 常滑壙出土状況（東から）

▼ 2面全景（南から）

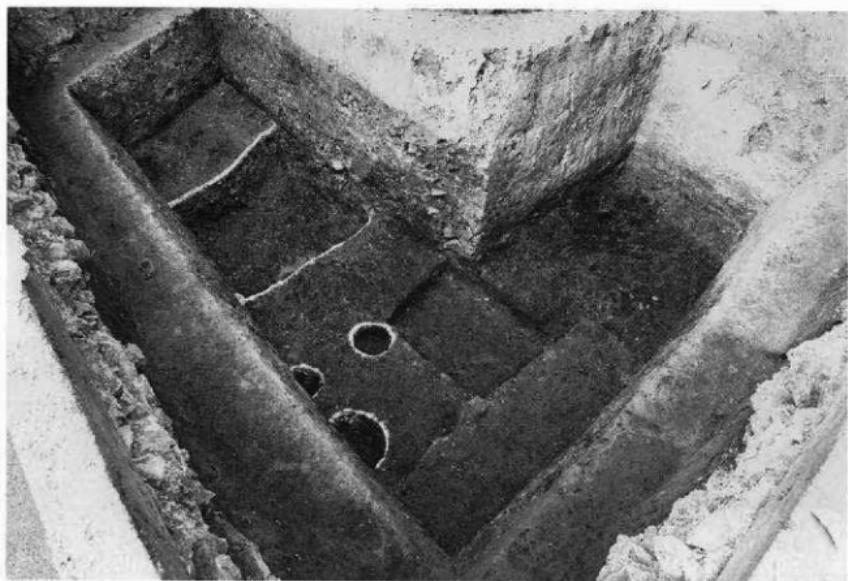




▼ 土壌2（北西から）



图版3



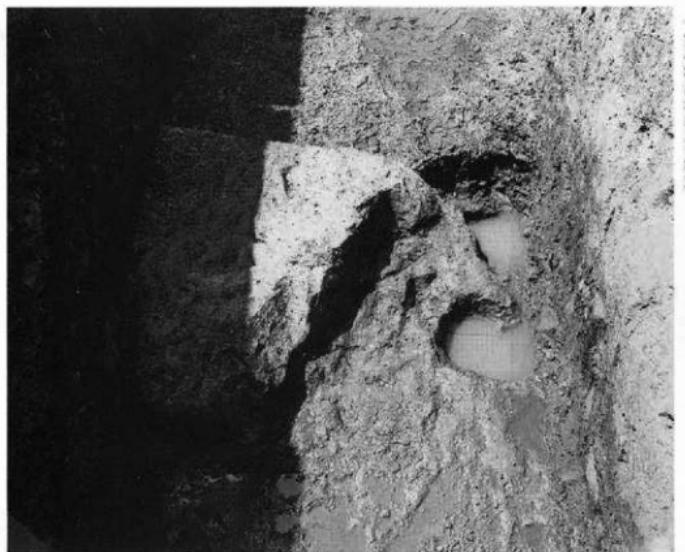
▲ 3面全景

► 3面底層／常滑壁出土狀況





▲ 調査区北側検出岩盤



▲ 西側検出岩盤及び柱穴

圖版5

拍輪器



瀬戸窯諸製品





常滑窯諸製品

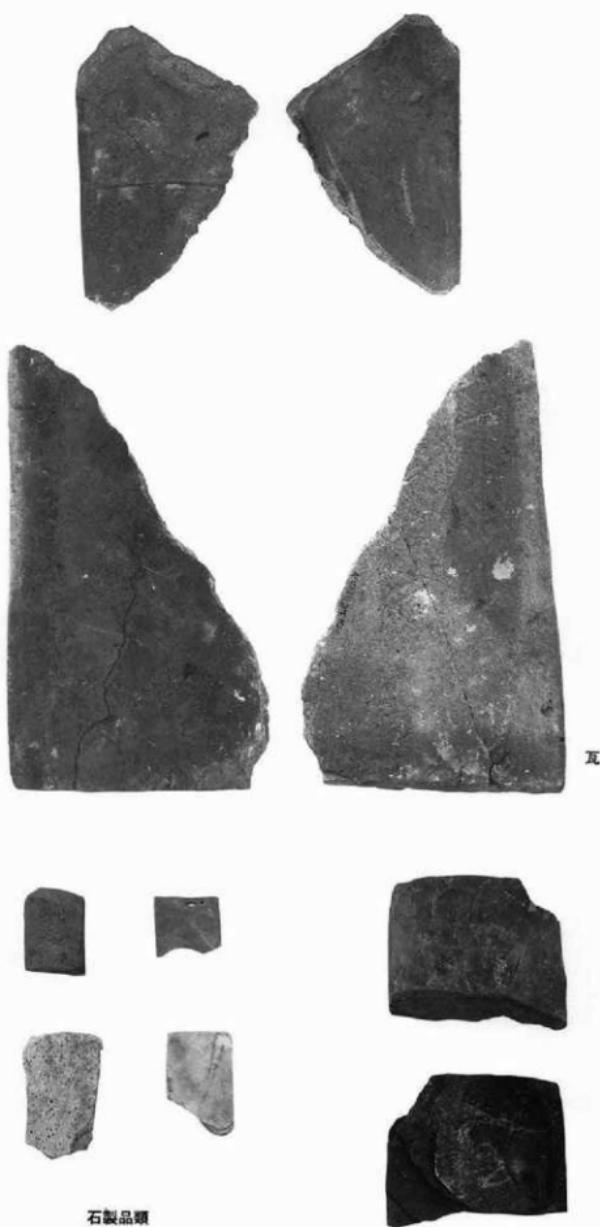


魚住窯捏鉢

山茶碗窯系捏鉢



火鉢



石製品類

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	12							
編集者名	大河内勉							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード		北緯 °°°	東経 °°°	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
かくおんじきゅうけい だいいせき 覚園寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市二階 堂412番外	市町村	遺跡番号			19950322～ 19950410	25	駐車場造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
覚園寺旧境内 遺跡	寺院址	中世 14C初～15C	土壙 炭柱 層穴	8基 11口	舶載陶磁器 国内産陶磁器			

鶴岡八幡宮旧境内遺跡（No. 56）

雪ノ下二丁目 75 番 16 地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市雪ノ下二丁目75番16地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は1995年2月9日～3月11日まで、調査面積は約35m<sup>2</sup>である。
4. 本報の執筆・編集は菊川が行い、遺物実測・図版作成には丹 行正の協力を得た。
5. 本報に使用した写真は、遺構を石丸が、遺物を菊川が撮影した。
6. 調査体制は以下の通りである。

主任調査員	菊川英政（鎌倉考古学研究所）
調査員	石丸運人
調査補助員	山本直孝・野本賢二・丹 行正
調査協力者	福田 誠・菊川 泉
協力機関名	（社）鎌倉市シルバー人材センター
7. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	53
第二章 調査の概要 .....	54
1. 調査の経過 .....	54
2. グリッド設定 .....	55
3. 堆積土層と生活面 .....	55
第三章 検出された遺構 .....	57
1. 0面検出遺構 .....	57
2. 1A・1B面検出遺構 .....	57
3. 1A・1B面下の遺構 .....	62
4. 2面検出遺構 .....	62
第四章 出土遺物 .....	63
1. 包含層出土遺物 .....	63
2. 遺構内出土遺物 .....	65
第五章まとめ .....	68
1. 遺跡の年代 .....	68
2. 隣接地点との対比 .....	68
3. 問題点の整理 .....	69

## 挿図目次

図1 遺跡範囲と調査地点 .....	52	図11 0面出土遺物 .....	63
図2 十二院の配置 .....	53	図12 1A面出土遺物 .....	63
図3 調査区設定図 .....	54	図13 1B面出土遺物 .....	64
図4 グリッド軸設定図 .....	55	図14 1A面下出土遺物 .....	64
図5 調査区土層堆積図 .....	56	図15 2面出土遺物 .....	65
図6 0面検出遺構全体図 .....	58	図16 2面下出土遺物 .....	65
図7 1A・1B面検出遺構全体図 .....	59	図17 I・II区遺構内出土遺物 .....	66
図8 1A・1B面下検出遺構全体図 .....	60	図18 生活面对比図 .....	69
図9 2面検出遺構全体図 .....	61	図19 検出遺構対比図 .....	70
図10 泥岩列・溝1 .....	62		

## 図版目次

図版1 調査地点近景・I区1B面全景他 .....	71	図版5 II区泥岩列・溝1,2・根切り底の状態 .....	75
図版2 I区2面全景・根切り底の状態 .....	72	図版6 I・II区壁面上土層堆積状態・地鉄遺構 .....	76
図版3 II区0面～2面の全景 .....	73	図版7 出土遺物1 .....	77
図版4 II区土壤1,4,8他 .....	74	図版8 出土遺物2 .....	78

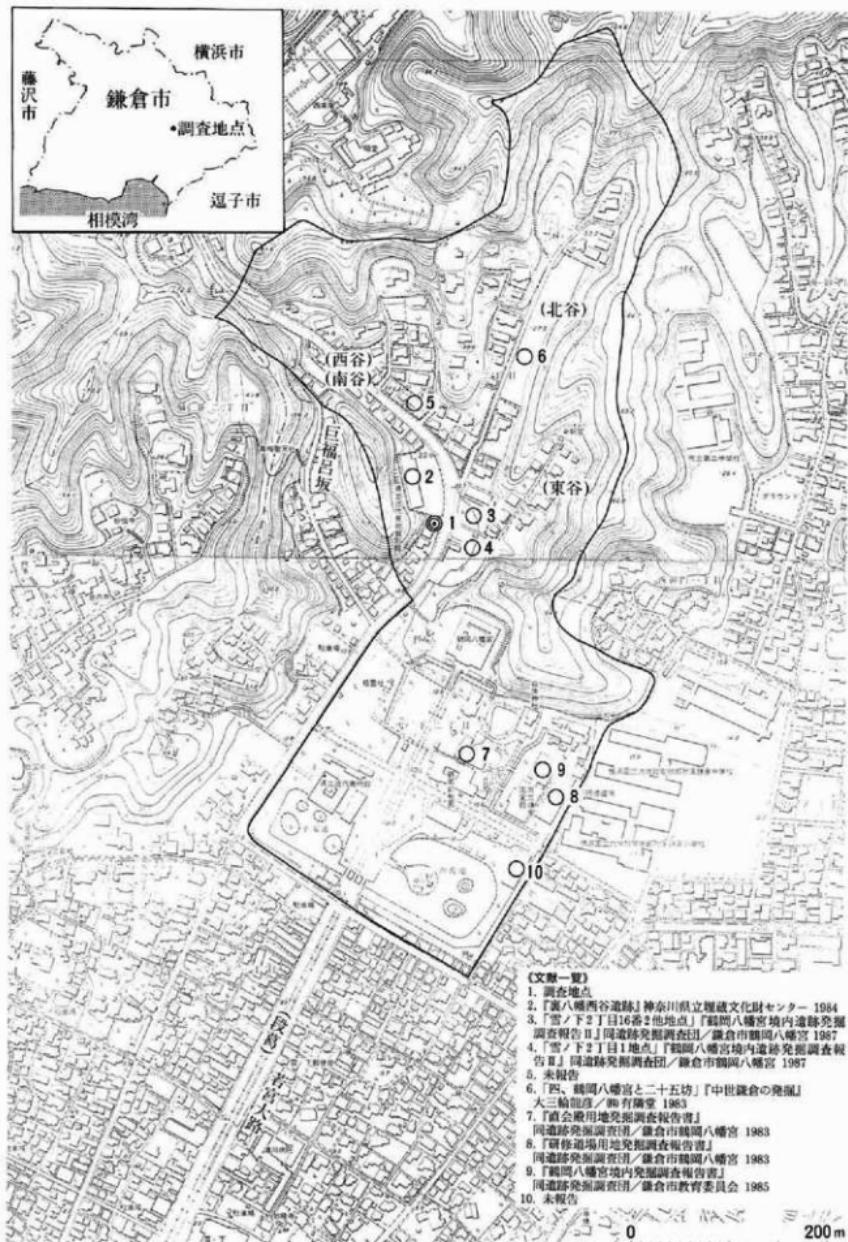


図1 遺跡範囲と調査地点 (1/5000)

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

鶴岡八幡宮境内遺跡は、大臣山南麓にある鶴岡八幡宮の現境内地とかつて供僧坊が存在した北西側の4支谷（東谷・西谷・南谷・北谷）を含む範囲（図1）を指している。この内、西谷（南谷）を除くほとんどの部分が「歴史的風土保存区域」に指定され、更に段葛と元八幡宮（由比若宮）を加えた範囲が「史跡鶴岡八幡宮境内」として指定を受けている。

さて、今回調査された地点は西谷あるいは南谷と呼ばれる支谷入口にあり、盛時には二十五を数えた供僧坊の一画にあたる可能性は強い。いわゆる“二十五坊”は4つの支谷に所在する鶴岡八幡宮供僧坊の総称であり、治承四年（1180）に鶴岡八幡宮が現在地に遷座して以来、明治元年（1868）の神仏分離令によって還俗させられるまで続いた遺跡である。

二十五坊については『鎌倉市史・社寺編』に詳しい。それによれば、治承四年に阿闍梨定兼が最初の供僧職に補任された後、供僧の数は漸次増員されて建久年間（1190～1198）には二十五坊が成立したと考えられている。坊地はかなり頻繁に移転するが、嘉元（1303～1305）頃までの根本坊地として東谷には別当坊の他に仏乘坊・千南坊・密乘坊・智覺坊・円乘坊の5坊、北谷には座心坊・智真坊・寂靜坊・宝藏坊・蓮華坊・悉覺坊・南藏坊・安樂坊・永嚴坊・華光坊・實圓坊の11坊、南谷（鎌倉末か南北朝以後に西谷と改称された）には慈月坊・靜虛坊・頓覺坊（坊名不明）・南禪坊の5坊が比定され、西石橋前（上宮から西側へ降りる石段の前面辺り）には善松坊・林東坊・文惠坊の3坊、所在不明として永乗坊・乗蓮坊の2坊が知られている。

ところで、後に西谷へ移った別当坊には八幡大菩薩を勧請した若宮御影堂があり、応永二十一年（1444）に後小松上皇の勅願寺となって八正寺と号すようになる。そして、その翌年と6年後には今までの坊号を院号に改めよとの院宣を賜り、一時の隆盛を得たようである。しかし、永享の乱（1458）後、鎌倉公方足利持氏が自刃する頃には早くも衰微し始め、その子成氏が下総古河城へと移ってからはますます衰退したという。天文元年（1532）には9ヶ院、天正十八年（1590）には7ヶ院にまで減っている。その後、文禄二年（1593）には徳川家康が5ヶ院を再興して十二院とし、これが江戸時代を通じての姿となる。「鶴岡八幡宮領井住谷々小道分間図」（鶴岡八幡宮所蔵）には、江戸末期頃の十二院家の配置が描かれており、本調査地点は丁度最勝院の一部かその南側に隣接する空閑地の辺りと考えられる。（図2は分間図の十二院部分を拡大・書写した）

## 《参考文献》

- 『鎌倉市史・社寺編』 吉川弘文館 1972  
『鎌倉の古絵図Ⅲ』 鎌倉国宝館図録第17集 鎌倉市教育委員会／鎌倉国宝館 1995

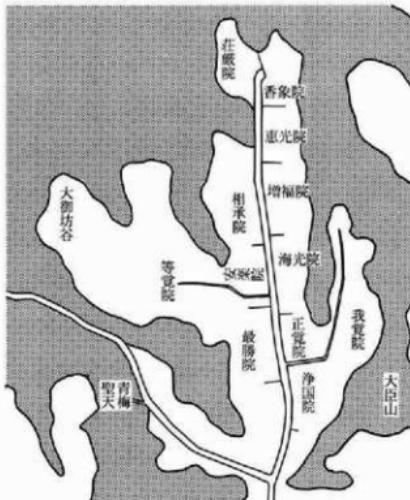


図2 十二院の配置

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経過

発掘調査は1995年2月9日に開始された。既に車庫造成部分（I区）は重機によって切り崩され、造構面のほとんどが消失した状態であった。そのため予定していた試掘調査を中止し、すぐに本調査を実施して残存する構造の検出に努めた。I区の調査は2月20日に終了している。その後、隣接する階段造

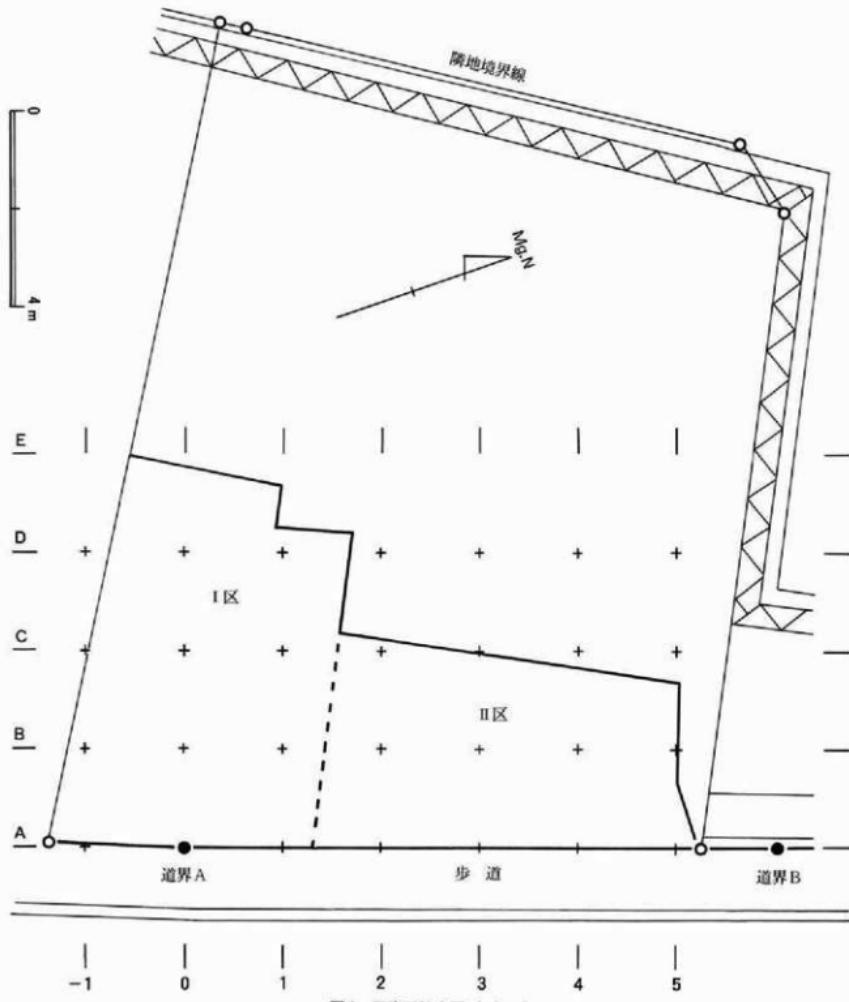


図3 調査区設定図 (1/100)

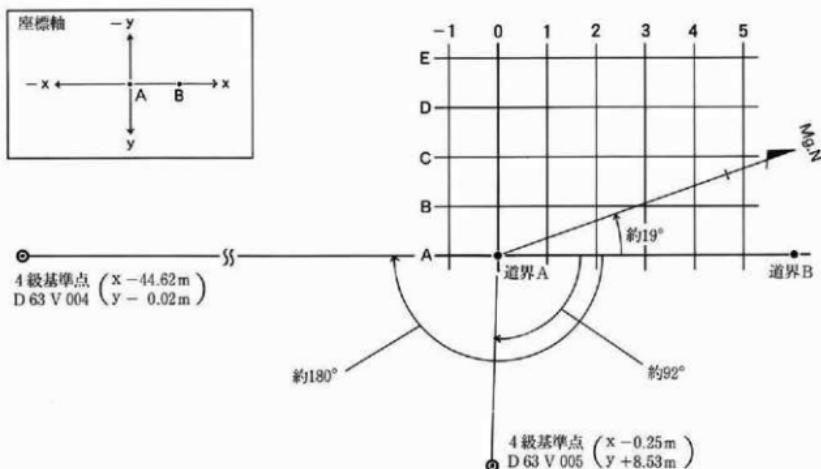


図4 グリッド軸設定図(1/200)

成部分(II区)の調査が行われた。2月27日に開始し、3月11日を以てすべての調査を終了している。因みにI区・II区を通じた実働日数は21日間である。

## 2. グリッド設定

調査ではI区歩道端にある道路境界鉄(道界A)を基点として測量方眼(グリッド)を設定した。方眼の間隔は2m、東西軸にアルファベット、南北軸に算用数字を付し、その交点はA0, B1, C2……のように表記した。なお、鎌倉市が設置した4級基準点との位置関係は図4に示した通りであるが、座標値で計測したために正確な角度は記していない。

ところで、4級基準点D63 V 004の国土座標値は(X-75014.666 Y-24927.353)、同じく4級基準点D63 V 005の国土座標値は(X-74973.948 Y-24907.787)である。これらの数値から本調査地点で使用した測量基準点(道界A)の国土座標値や北緯・東経を導き出すべきであるが、筆者はその計算式を知らないため単に数値のみを記しておく。

## 3. 堆積土層と生活面

堆積土層の観察は調査区壁面で行った。I区では調査終了後に西壁の一部が崩れて岩盤面が露出したことから、急速その部分の柱状図も作成している。なお、建築深度はI区前面の歩道から約60cm下(標高17.4m)であり、それ以下の調査はしていない。

図5の0~1層は近・現代の整地層。2層以下が近世~中世後期の整地層である。生活面は1層直下を0面とし、その約30cm下の泥岩列検出面を1A面とした。ともにI区では消失しており、壁面の土層区分だけでは明確な対応関係を掴めなかった。1B面と2面は良好な生活面である。粗く破碎した泥岩地業上面に、泥岩を漬した灰黄白色の細粒質土を貼って整地しているため容易に識別できる。両面とも炭層が薄く堆積していたが、I区東半部の1B面は重機によって搅乱されている。3面はI区北壁際の排水溝下底で確認された。標高17.2~17.3mにあり、建築深度以下のため未調査である。削平岩盤面はI区西壁にかかって検出され、東側は垂直に切り落とされている。岩盤上面の標高は18~18.1mを測り、1B面とほぼ同一レベルにある。大部分が調査区外にあるため詳しい調査はしていない。

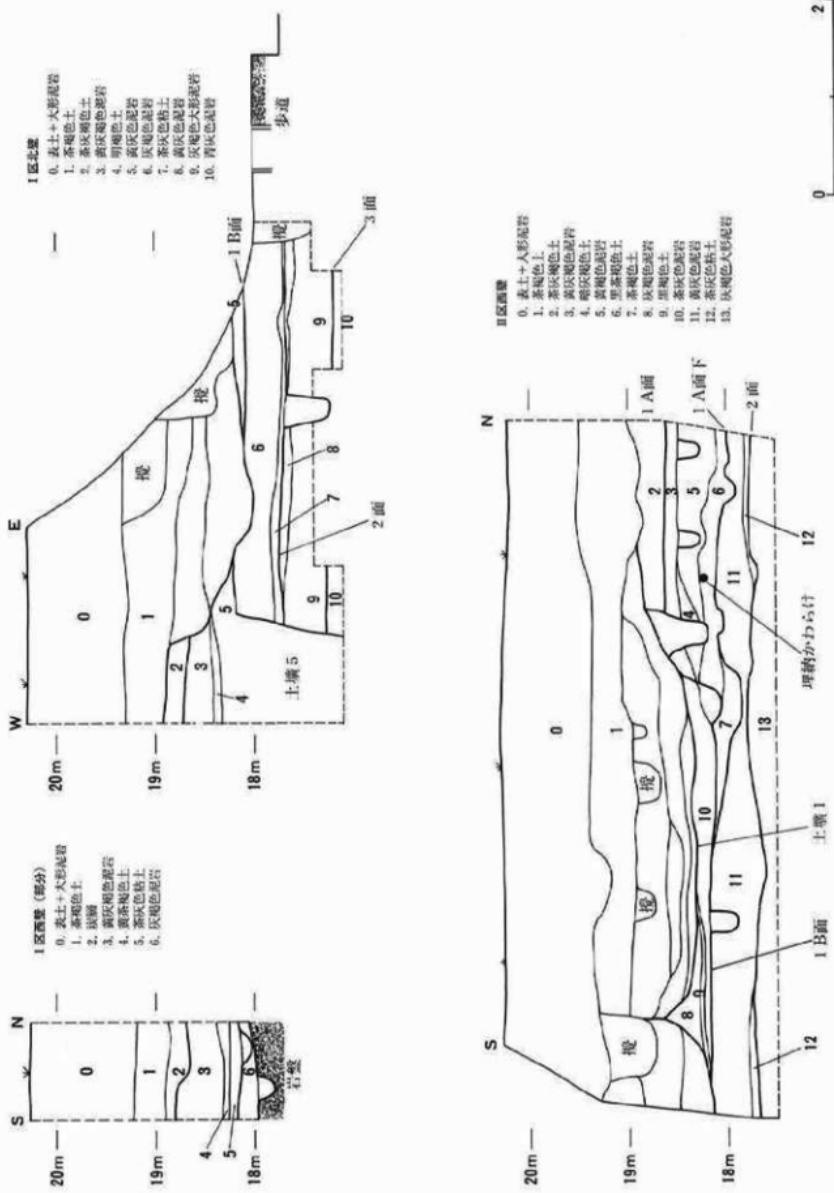


图5 藤金区土层堆积图 (1/50)

### 第三章 検出された遺構

#### 1. 0面検出遺構

0面はII区北端部で検出され、その上面レベルは標高18.9~19mを測る。調査区東側を近・現代の井戸と擁壁で壊されて生活面の広がりを知ることはできないが、覆土の異なる2基の大形土壙と柱穴が検出されている。(図6)

**土壙1**・**II区**中央に掘り込まれた大形の土壙である。西壁際でわずかに底部角隅の立ち上がりを確認できることから、南北4m程の方形に近い形状と推定される。緩やかに立ち上がる壁面と概ね平坦な底面を持ち、確認面からの深さは50~65cmを測る。覆土は暗灰色を基調とした粘質土層を主体とし、最下位の灰色粘土層中からは残瓦の小片1点が出土している。

**土壙2**・**II区**南端にあり、**土壙1**を切る。**I区**北壁土層図と検出された壁面の一部を総合して考えれば、東西約3.5m、深さ約80cmの方形に近い形状と思われる。覆土は小さく破碎した泥岩塊で占められ、崩落土(攪乱)と間違えるほど脆く弱い。出土遺物なし。

**柱穴**・**II区**北壁近くで1穴だけ検出された。20cm×30cmの方形平面を呈し、確認面から約40cmの深さを測る。覆土は0面上に堆積する1層(茶褐色土)と同質であり、出土遺物はない。

#### 2. 1A・1B面検出遺構

1A面はII区北端部の標高18.6mで検出された。泥岩列で区画した壠壇状造成面の可能性があり、II区南半分では約40cm程の落差を以て1B面に接続していた。1B面は灰黄色の細粒質土を貼った明瞭な整地面で、II区溝1以南からI区にかけて広がり、上面には薄い炭層の堆積が確認された。(1A・1Bの呼称は、レベル差を有するが同時期の生活面であることに由来する。)(図7)

**泥岩列**・**II区**のほぼ中央で検出され、主軸方位はN-33°Wを測る。30cm×50cm程の方形に破碎した泥岩塊を一列一段に並べて1A面南端の区画としている。北側(1A面)の標高は18.6m、南側(1B面)の標高は18.15~18.2mであり、約40cmの段差(図10)を有する。なお、調査区北壁にも同様の泥岩列が一部露出しており、造成面は調査区外北方へ壠壇状に展開している可能性も考えられる。

**溝1**・**II区**泥岩列下端に沿う排水溝である。幅約40cm、深さ約10cmの浅い溝で、北側壁の立ち上がりはあまり明瞭ではない。出土遺物なし。

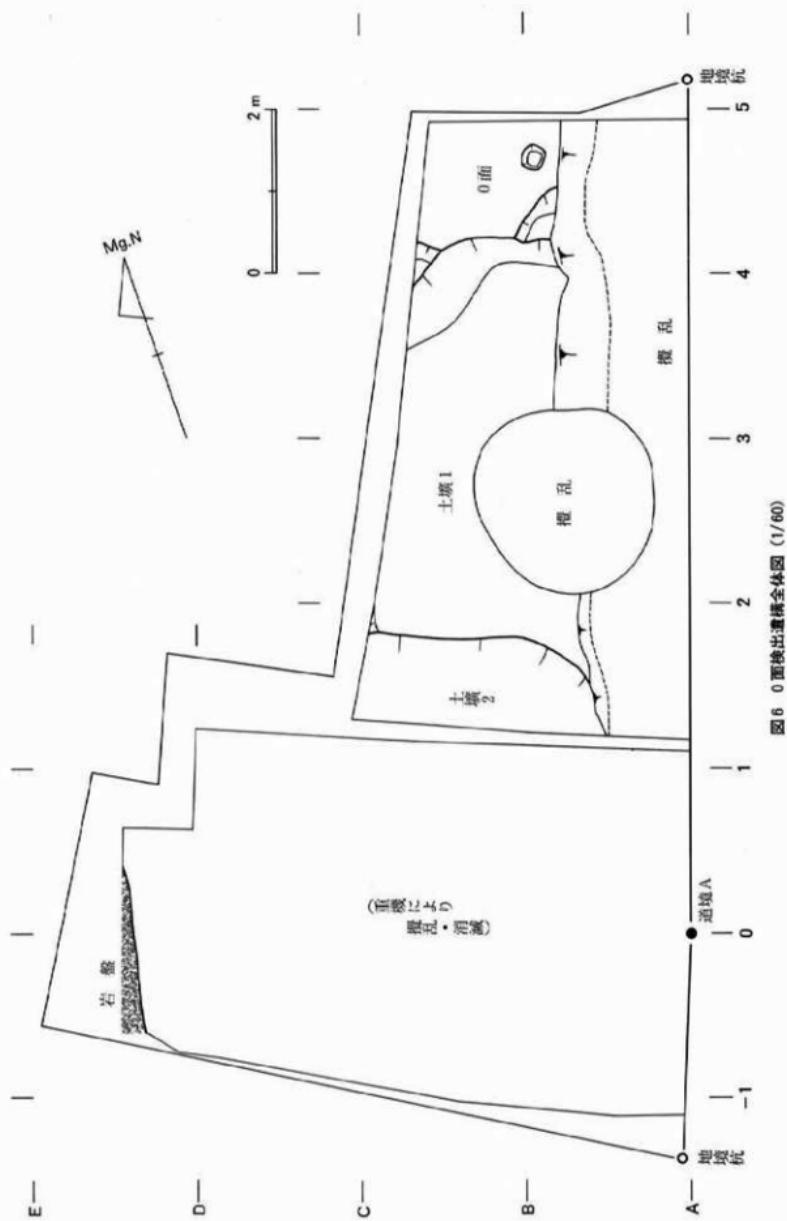
**土壙3**・**II区**1A面で確認された。直径約60cmの浅い皿形を呈していたが、調査中にかなり掘り過ぎて40cmの深さに達している。覆土は1層と似た茶褐色砂質土で、瀬戸灰釉平茶碗片が出土した。

**土壙4**・**II区**1B面側で確認された。直径約90cm、深さ約20cmの皿形を呈し、覆土は土壙3とよく似ていた。出土遺物なし。

**土壙5**・**I区**で検出された一辺80~90cmの不正方形を呈する土壙である。炭混じりの茶褐色土を覆土とし、深さ約15cmを測る。底面の状態や壁の立ち上がりに不明瞭な部分があり、意図的に掘られた土壙というよりも、単なる凹地か地業層の一部を掘り抜いたものと思われる。覆土下層から直径約6mmのガラス製小玉1点が出土した。

**土壙6**・**I区**北西角、排水溝を設定した際に確認された。一辺80cm以上の方形を呈し、深さ90cm以上を測る。建築深度以下にあるため下底面を検出していないが、確認できた形状からは井戸である可能性が高い。覆土上位は泥岩塊が多く、出土遺物は僅かである。

**土壙7**・**II区**1B面測図段階では完掘できず、破線で範囲を示してある。調査区内では瓢形に似た平



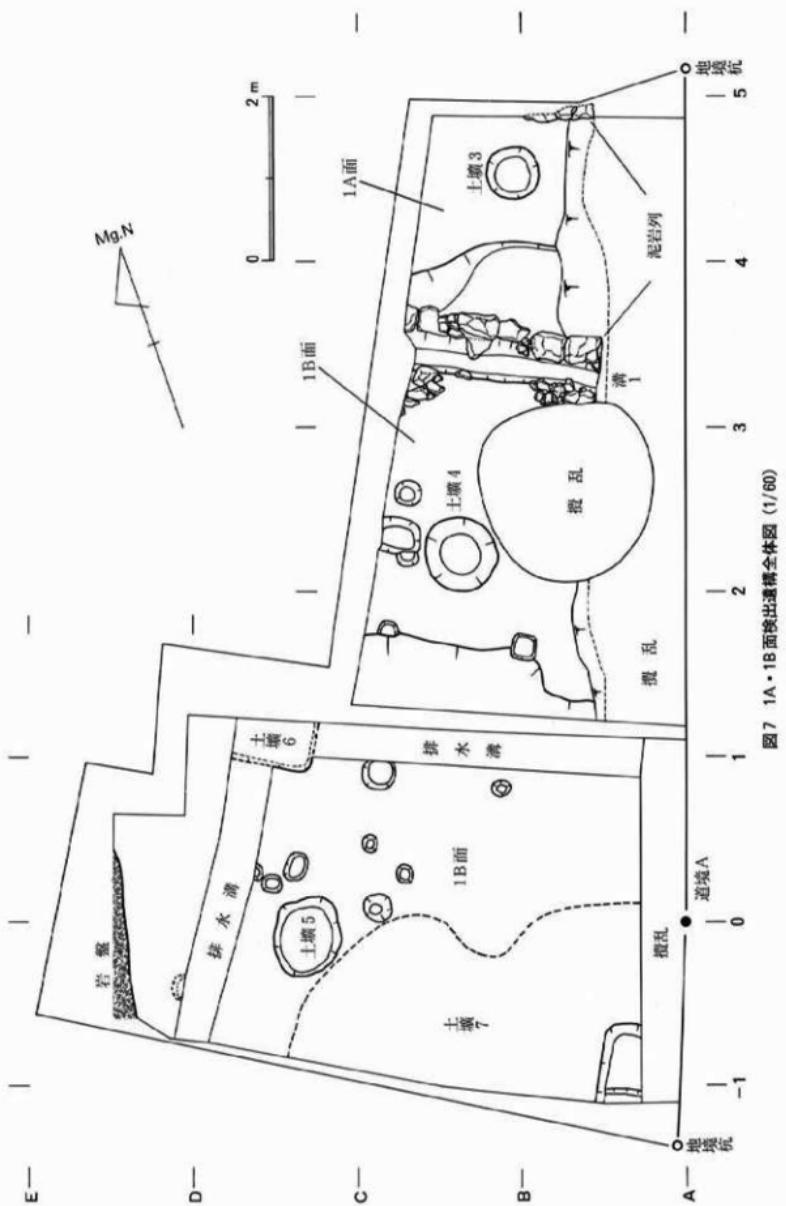
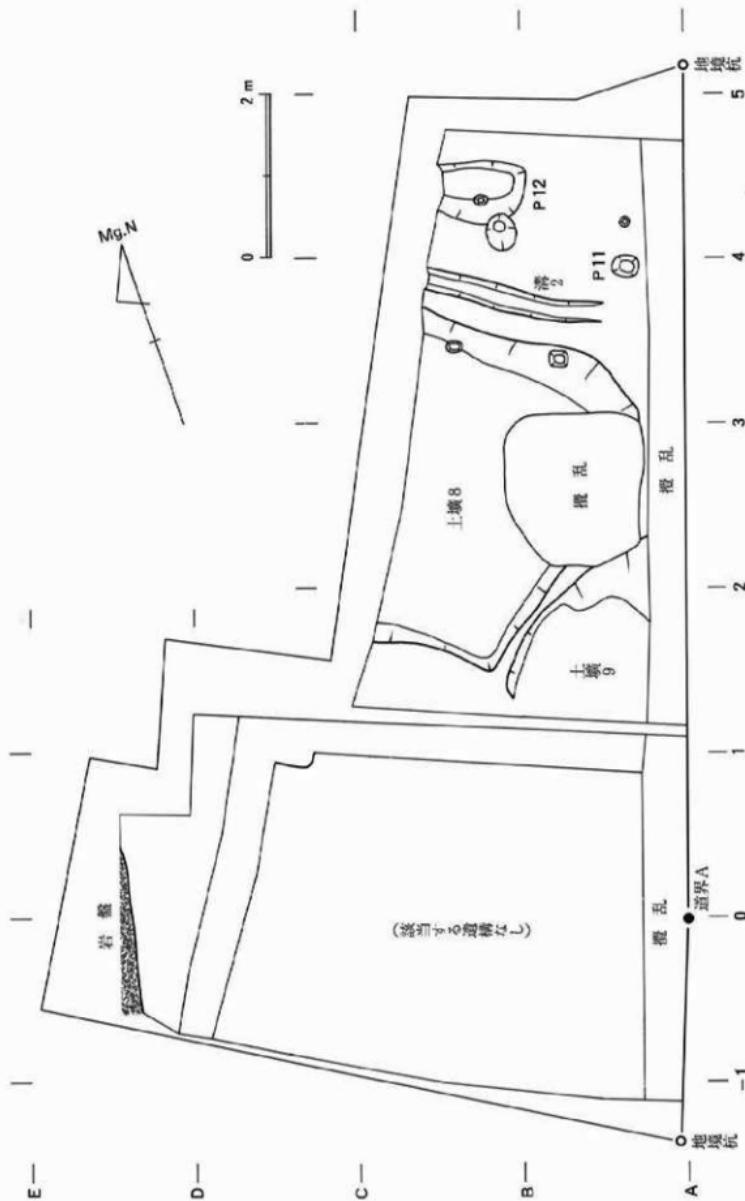


图 7 1A·1B 面瘫出诊概全体图 (1/60)

图6 1A+1B面下挖出遗物全图 (1/60)



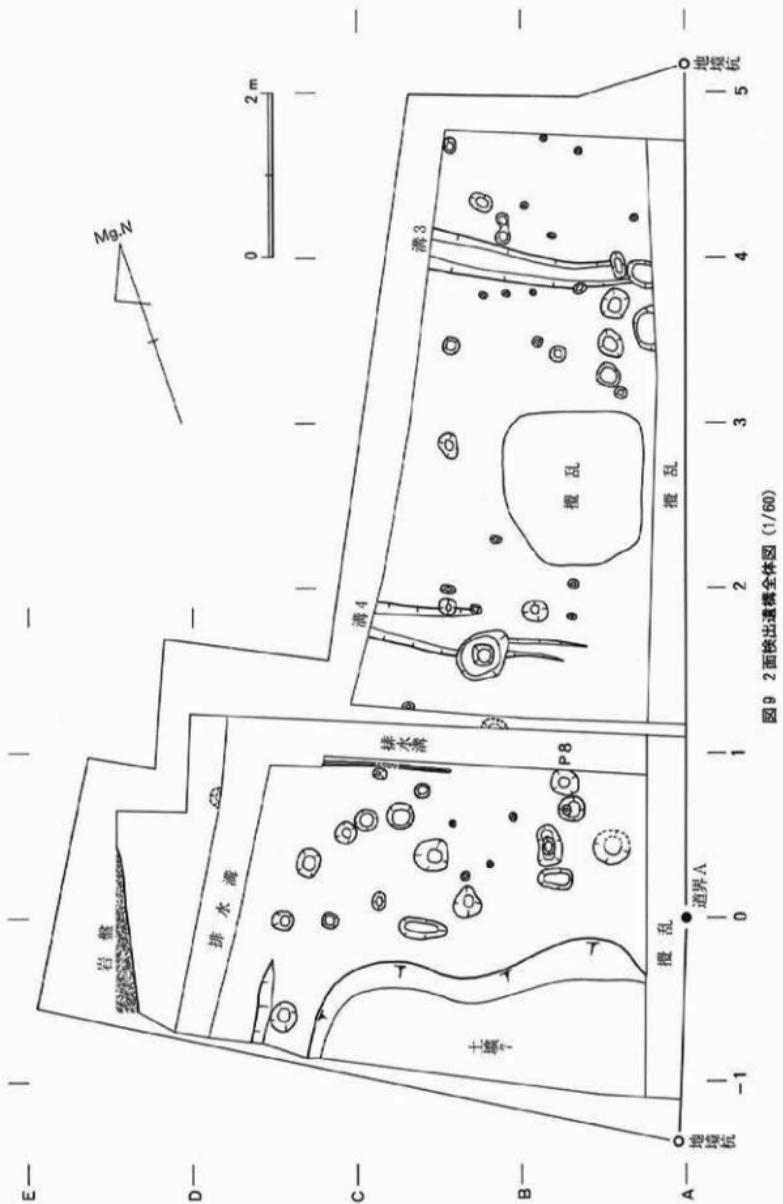


図9 2面換出透構全体図 (1/60)

面形を呈し、壁から底面にかけては南方へ緩く傾斜していた。最深部は確認面から約45cmの深さを測る。土壤ではなく、段差に伴う緩斜面とも考えられるが判別は困難である。覆土は大略2層に区分でき、上層は破碎泥岩、下層は灰色粘土層が7~8cmの厚さで堆積していた。なお、灰色粘土層上面には薄い炭層が堆積し、かわらけ皿の破片が多く出土した。

柱穴・・・数口を検出できたが、並びの判るものはない。杭穴らしき小穴についても同様である。

削平岩盤・・・I区西壁が崩された際に検出できた。岩盤面の標高は18~18.1mを測り、東側は垂直に切り落とされていた。上面で柱穴1口を確認できたが、東側岩盤下底面は未検出である。また、排水溝までの岩盤前面部分は、重機で破壊されたため調査していない。

### 3. 1A・1B面下の遺構

II区北半部では、1A面の調査終了後一気に1B面レベルまで掘り下げたため、その中に存在したであろう生活面を飛ばしてしまう結果となった。II区西壁土層図(図5)で見る限り、1A面の下約10cmに遺構面が確認でき、排土中には礫石と思われる河原石1個が混入していた。

地鎮遺構・・・II区北半部の西壁にかかり、合わせ口状にした2枚のかわらけ皿が出土した。壁面の土層観察結果では、1A面下の遺構面(図5・8)から約12cm程浮いた位置にあり、地表土中に小穴(径約20cm、深さ約15cm)を掘って埋め込まれたものと判る。かわらけ皿の器形からみて、1A・1B面より先行する形態であるが、何に対する地鎮であるかは明確にできなかった。なお、かわらけ皿内部には何もなく、隙間から入り込んだ泥土が僅かに堆積していただけである。

溝2・・・II区で検出された浅い溝で、幅約25cm、深さ約12cmを測る。1B面とほぼ同レベルで確認できたが、時期的には1B面より先行する遺構である。出土遺物なし。

土壤8・・・II区中央部で検出された方形ないし長方形の大形土壤で、確認できた一辺は3m、底面までの深さは約25cmを測る。平坦な底面と緩やかな壁をもち、覆土は破碎泥岩で占められている。覆土上面には灰黄白色土が貼られ、1B面整地段階で埋められたことが判る。出土遺物なし。

土壤9・・・深さ約25cm。全体規模は不明である。壁面から底部にかけての形状や覆土の状態は、土壤8と全く同じである。

柱穴・・・II区北半部で数口検出できたが、並びの判るものはない。ピット11・12からは測図可能な遺物が出土している。

### 4. 2面検出遺構

2面は標高17.7mで検出された良好な生活面である。その造成方法は1B面と同様で、破碎泥岩地表の上面に、泥岩を漬した細粒質土を貼って整地している点に特徴がある。なお、2面上にも薄い炭層の堆積が確認された。(図9)

溝3・・・II区北半部で検出された浅い溝で、幅30~50cm、深さ約5cmを測る。溝2に対して40~50cm北側へ寄った位置にある。出土遺物なし。

溝4・・・II区南半部で検出され、溝3と平行する浅い溝である。幅は一定せず、深さ約3cmを測る。出土遺物なし。

土壤7・・・1B面で確認できた遺構である。前節を参照されたい。

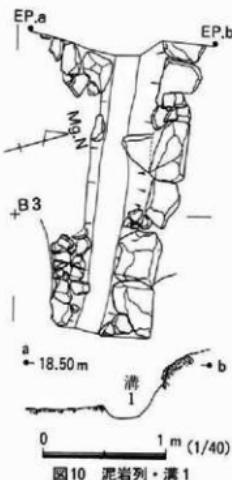


図10 泥岩列・溝1

柱穴・・・杭穴らしき小穴や暖昧な穴を含め、かなりの数が検出された。残念ながら規則的な配列を示すものではなく、建物を復元するには至っていない。

板塀痕・・・I区北側排水溝に沿って約1.6m分が検出された。幅約5cm、深さ約4cmの細い溝状を呈し、内部には灰色粘土がつまっていた。板材の痕跡はないが、南側に接して杭穴が確認されている。

## 第四章 出土遺物

出土した遺物の総量は、テンバコ（内法：33×54cm、深さ15cm）にして4箱分となった。そのほとんどが地業層中に混入していた遺物であり、構造覆土や生活面直上の遺物はごく僅かである。

測図した遺物は完形品と1/4以上を残す破片を基準としたが、小片であっても年代的指標となるもの、搬入された器種の豊富さを示すものは極力図示するように努めた。また、異層間で接合した資料については最下位の層に帰属させ、現地での遺物取りあげ方法に従って、I区とII区の遺物を区別して図示した。

### 1. 包含層出土遺物

#### 0面出土遺物（II区）／図11

1は染め付け磁器碗。体部外面には菊花のコンニャク印判を押捺する。奥須の発色は淡い青藍色を呈している。肥前産。

2は染め付け磁器德利。腰部外面には連子格子文を描く。高台型付き部分は露胎であるが、流下した釉のため溶着・剥離した箇所も見られる。肥前産。

3は瀬戸美濃産の鉄釉小皿。体部外面と外底面を回転ヘラケズリで調整し、黄茶褐色の鉄釉を内面から口縁部外面に流し掛けている。目痕あり。

4は泉州堺産の摺り鉢。体部外面を横位のヘラケズリで調整し、内面には8条1単位の櫛目を施している。

5は土器質の鉢。火入れあるいは火消し壺の類であろう。胎土中に黒色・赤褐色の砂粒を多く含み、焼成は軟質。器表が荒れて調整痕は遺存しない。産地不明。

6は寛永通宝。背文なし。字体が細く、全体に小振りで薄いつくりである。元禄十年（1679）初鋤の新寛永か。

#### 1A面出土遺物（II区）／図12

7～9はかわらけ小皿。9はほぼ完形、他は約1/2を残す個体である。

10は青磁碗。残存部分に文様はない。素地は暗灰色、釉は透明感をもっている。

11は瓦器質の鉢釜。鉢下面にヘラミガキ痕

を残すが、内面はナデ調整と思われる。胎土中に微砂粒を多く含み、焼成は軟質。器表は内外面とも黒く焼されている。産地不明。

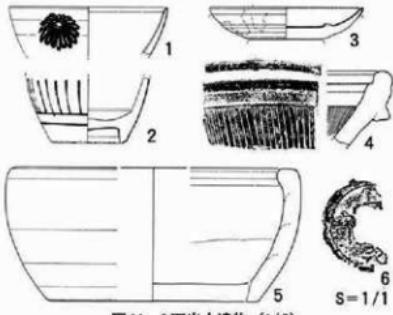


図11 0面出土遺物 (1/3)

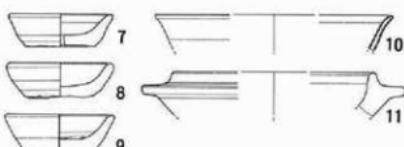


図12 1A面出土遺物 (1/3)

### 1B面出土遺物（I区）／図13

I区では1B面近くまで重機で掘削されたため、包含層自体の残りが悪く、出土遺物もきわめて少ない状態であった。

12～14はかわらけ皿。いずれも約1/2まで接合できた個体である。12は体部下半に丸みをもち、口縁部が外反する。概してこのタイプの皿は赤橙色を呈し、焼成の良好なものが多い。13・14は体部が直線的に開くものである。ともに胎土中に粗い砂粒を多く含み、焼成は軟質である。14については口径・底径とも大形となるが、器体に垂みは見られない。

### 1A面下出土遺物（II区）／図14

II区北端部で検出された泥岩列および段状造成部分を、1B面と同じレベルまで掘り下げた際に出土した遺物である。（地鎮遺構の遺物については後述する。）

15～19はかわらけ皿。19は形態的に1A・1B面のかわらけ皿に近い。小片であることからみて、混入したものであろう。

20は白磁皿。型成形、全面施釉。内面には陽刻の草花文を配す。

21は瀬戸灰釉折り縁鉢。釉は薄くハケ塗りするが、口唇部と内面では沸化して剥落した箇所が目立っている。左側部破損面には漆様の黒色物が付着し、補修されていたことが判る。

22は南部系山茶碗窯捏ね鉢。片口部分は欠失、推定復元である。腰部は回転ヘラケズリ調整。口縁部外面と内面には降灰釉がかかり、重ね焼きの溶着痕が内面に残る。内底面の磨耗はあまり目立たない。同一個体片は1A面下のピット12からも出土し、本資料と接合した。

23は魚住窯捏ね鉢。縁帶部外面は黒色。

24は常滑窯。形態的には時期の降るもので、1A・1B面からの混入と思われる。

25は粘板岩製砥石。京都府鳴滝産。

26は景德元宝。初鑄1004年。

### 2面出土遺物（I・II区）／図15

27～35がI区、36～40がII区で出土した遺物である。

27～32はかわらけ皿。27は内折れ型の小皿で、底部回転糸切りである。28・29は灯明皿として使用されている。

33は乾元重宝。初鑄758年。当十銭、背文なし、表裏面とも錯范（范ズレ）。

34は青磁籠連弁文碗。蓮弁は細く、單弁である。

35は南部系山茶碗窯捏ね鉢。腰部回転ヘラケズリ。高台部の破損・剥離が目立つ。内底面は磨耗して

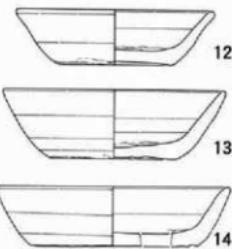


図13 1B面出土遺物 (1/3)

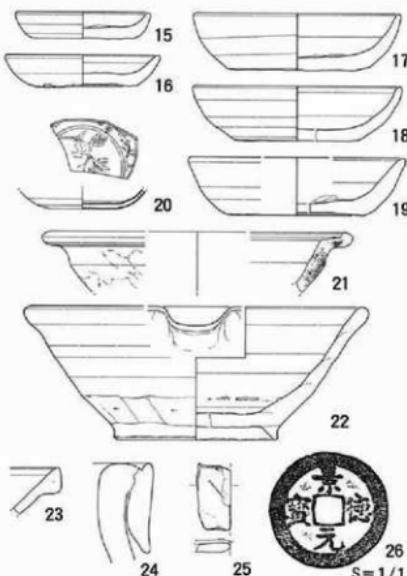


図14 1A面下出土遺物 (1/3)

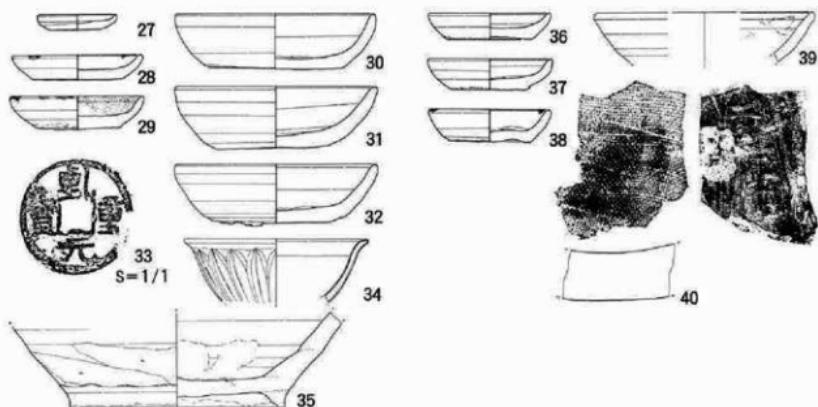


図15 2面出土遺物 (1/3)

いる。

36～38はかわらけ皿。38は灯明皿として使用されている。

39は瀬戸製品。御し皿か。灰釉は内外面に見られるが、内面は薄くハケ塗りされている。

40は平瓦。凹面に布目、凸面にヘラナデ調整痕を残す。胎土は灰色緻密で、白色微砂粒を多く含んでいる。

#### 2面下出土遺物 (I区) / 図16

建築深度(根切り底)まで掘り下げる際に出土した遺物であるが、層位的には3面まで達していない。II区では何も出土しなかった。

41～44はかわらけ皿。すべて糸切り底である。42は比較的薄い器壁をもつが、いわゆる薄手タイプと呼ばれる一群とは異なり、胎土中に茶褐色ないし灰白色の泥岩粒を含んでいる。

45は常滑窯の底部片。

#### 2. 遺構内出土遺物

検出層位の新しい遺構の出土遺物から図示し、説明を加えることにした。各遺構の位置は全体図(図6～9)を参照されたい。

#### 土壤3出土遺物 (II区1A面) / 図17

46は瀬戸灰釉平茶碗。小片のため口径不明。外面体部下半は回転ヘラケズリ調整を行う。釉は灰緑色を呈し、内面および口縁部外面に施されるが、沸化して白渦した部分が目立つ。

#### 土壤5出土遺物 (I区1B面) / 図17

47はかわらけ皿。完形である。

48はガラス製小玉。直径6.0～6.5mm、孔径2.5～3.0mm、厚さ1.8～2.0mmを測る。白渦・剥離した状態であり、劣化が著しい。

49は瓦質手焼り。輪花鉢形を呈すもので、口縁部内面から体部外面をヘラミガキ調整、体部外面には

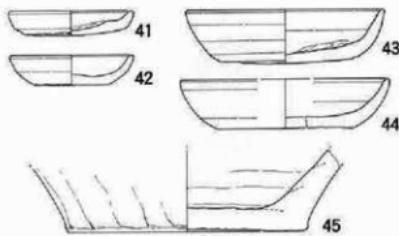


図16 2面下出土遺物 (1/3)

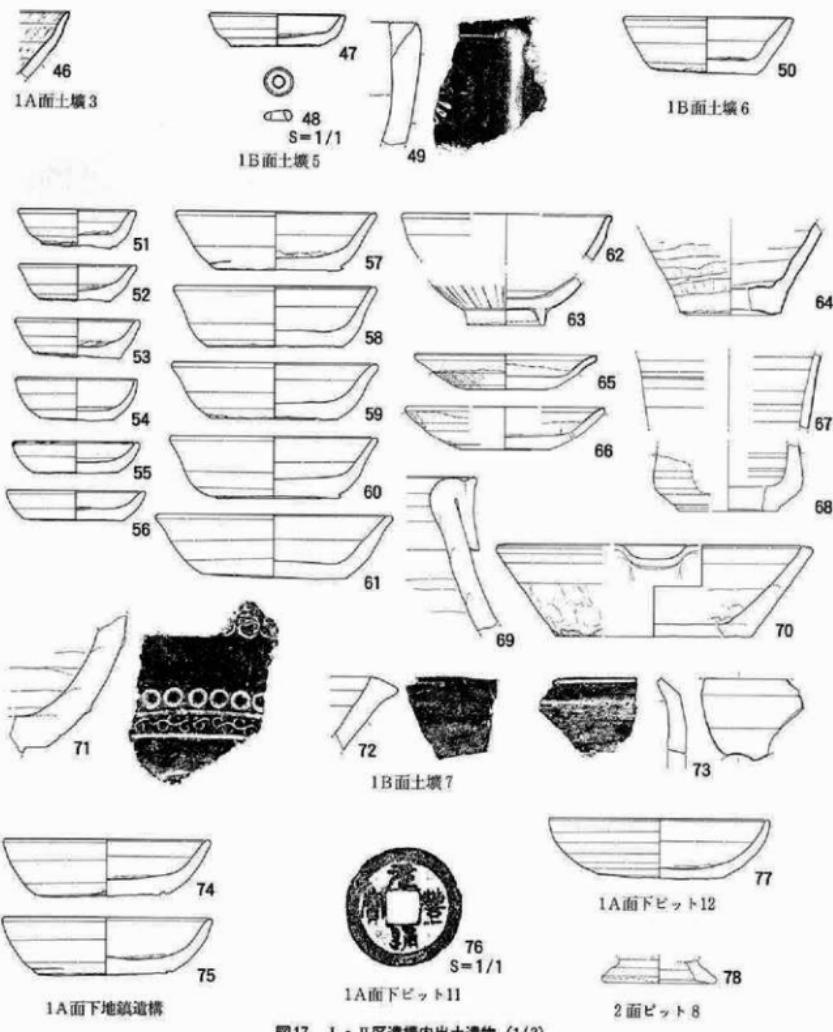


図17 I・II区遺構内出土遺物 (1/3)

菊花文を押捺している。

土壤6出土遺物 (I区1B面) / 図17

50はかわらけ皿。約1/2を残す個体である。

土壤7出土遺物 (I区1B面) / 図17

検出された遺構の中では、最も多くの遺物が出土している。

51～61はかわらけ皿。54は薄手で器高の深いタイプ。55・56は他の皿より古い様相をもつもので、55は灯明皿として使用されている。

62・63は青磁碗。62は小片、残存部に文様はない。63は鏡蓮弁文、高台疊付け部のみ露胎。釉は淡い水青色を呈している。

64は褐釉壺。体部外面はヘラケズリあるいは回転を利用した強いヘラナデ調整。釉は透明感ある茶灰色を呈し、薄く全面に掛けられている。胎土中には粗い赤褐色粒子を含むが、磁器に近い焼成である。同一個体片がII区1A面上包含層から出土したが、接合はできなかった。

65・66は瀬戸縁物小皿。口縁部内外面に灰釉を施し、外底面には回転糸切り痕を残す。65は体部外面に炭化物が付着。66は内底面が磨耗している。66については、同一個体片がI区1B面上包含層・II区0面上包含層・II区1A面上包含層からも出土したが、底部片と口縁部片とが接合できないために、器高復元値には若干の誤差を含んでいる。

67は瀬戸製品。尊式華瓶あるいは筒形容器の頸部と思われる。外面に1条の沈線を廻らせ、透明感ある黄緑色の灰釉を施している。

68は瀬戸製品。器種不明。体部下半の調整はヘラナデ後ナデか。外底面は回転糸切りと思われるが不明瞭である。黄緑色の灰釉を体部上位に施している。

69は常滑窯。口縁部の小片である。

70は常滑捏ね鉢。片口部は欠失、推定復元である。外面体部下半は無調整に近く、ヘラナデ調整を加えたかどうか判然としない。外底面は砂底、高台なし。内面の磨耗はほとんど認められない。

71は瓦質手培り。三脚付き鉢形のものであろう。体部外面に沈線を廻らせ、唐草文、珠文を連続押捺している。器表は概ね白桃色、化粧土を塗った可能性もあるが不明瞭である。胎土中に粗い躰を含み、焼成は軟質である。

72は瓦質手培り。浅鉢形。体部外面はユビオサエ後無調整。器表は暗灰色を呈する。胎土には微砂粒を含むが精製され、焼成は堅緻である。

73は瓦質の製品。器種・器形とも不明。一見して瓦と似るが、器壁の薄さと透かし孔をもつ点が異なっている。端部をヘラで面取りした後、凸面はナデ、凹面は強いヘラケズリ調整痕をそのまま残す。透かし孔は単なる円形とは思えない。器表は灰白色を呈し、胎土精良、焼成は堅緻である。

#### 地鎮遺構出土遺物（II区1A面下）／図17

74・75はかわらけ皿。同一タイプのものである。74が上（蓋）、75が下（身）の合わせ口状態で出土した。2枚のかわらけ皿の内部からは、泥土以外に何も検出されていない。

#### ピット出土遺物（II区1A面下・I区2面）／図17

76は元豐通宝。初鑄1078年。篆書。背文なし。裏面錯范（范ズレ）。ピット11出土。

77はかわらけ皿。薄手タイプの大皿である。ピット12出土。（ピット12からは、図14-22の山茶碗窯捏ね鉢片も出土している。）

78は瀬戸製品。仏華瓶の脚部と思われる。外面には灰緑色の釉が掛けられているが、沸化して白濁した箇所が目立つ。ピット8出土。

包含層および遺構覆土から出土した遺物のうち、測図化された遺物は以上である。今回は遺構・生活面ごとに器種別の破片点数を集計する統計作業を省略したが、大まかには遺物総量の約1/5程を示できたものと思う。これら遺物群の年代観については次章で述べたい。

## 第五章 まとめ

### 1. 遺跡の年代

検出された遺構面の順序にしたがって年代比定を行なうが、かわらけ皿による編年（1986、河野）では15世紀前半の様相が不明瞭なため、近年研究の進んでいる国産陶磁器の生産地編年を使用した。

0面では肥前産磁器が年代指標となる。コンニャク印判の染め付け碗（図11-1）は1690～1780年、おそらく蛸唐草文を描いたであろうラッキョウ形の徳利（図11-2）は1780～1860年に生産されたものである。堺で焼かれた摺り鉢（図11-4）は、口縁部形態の特徴から18世紀後半～19世紀、土壤1出土の棟瓦（小片・測図不能）も18世紀後半以降のものである。これらの遺物からみて、0面は18世紀後半～19世紀、つまり幕末～明治頃に廃棄された生活面と考えられる。

1A・1B面はかわらけ皿の器形に共通した特徴がみられ、同時期の生活面と考えられる。1A面土壤3出土の灰釉平茶碗（図17-46）と1B面土壤7出土の縁鉢（図17-65・66）は瀬戸窯編年（1994、井上）でいうIV期11（1390～1420年）～12（1420～1450年）に、尊式華瓶あるいは筒形容器の頸部（図17-67）は若干古くIV期10（1360～1390年）まで遡るかもしれない。常滑製品についても生産地編年（1994、中野）をあてはめれば、壺（図17-69）が9型式（1400～1450年）、捏ね鉢（図17-70）が7型式（1300～1350年）頃に位置付けられ、1A・1B面が15世紀前半で廃絶し、0面との間に大きな隔絶期間があったと推定できる。

1A面下から出土した遺物では、瀬戸折り線鉢（図14-21）がIII期9（1330～1360年）、南部系山茶碗窯捏ね鉢（図14-22）が灰釉系陶器編年（1994、藤澤）の7型式（1250年前後）に該当する。出土遺物が少なく実年代を絞り込みづらいが、上下層との関係から1A面下は14世紀中葉を前後する時期としておきたい。

2面では瀬戸折り線鉢（図15-39）がIII期7（1270～1300年）頃、ピット8出土の瀬戸仏華瓶脚部（図17-78）がIV期11（1390～1420年）～12（1420～1450年）と思われる。ピット8が1B面の掘り残しと考えれば、2面の実年代を13世紀後半に置くことができる。

3面および遺跡の上層年代については、岩盤面まで調査していないため不明である。

河野貴知郎 「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986年

大橋 康二 「肥前陶磁」考古学ライブラリー-55 ニューサイエンス社 1989年

白神 典之 「堺摺鉢考」『東洋陶磁』VOL.19, 1989-92 東洋陶磁学会 1992年

\*瀬戸・常滑・山茶碗窯の編年は、1994年12月に中世都市研究同人会が開催した第2回／中世都市研究・討論会『鎌倉における生産地年代と消費状況』発表要旨に掲載された以下の資料を使用した。

井上喜久男 「瀬戸・施釉陶器の編年」

中野 晴久 「知多半島（常滑）窯の編年について」

藤澤 良祐 「“灰釉系陶器”の編年について」

### 2. 隣接地点との対比

裏八幡西谷遺跡は本調査地点の北側に位置している。調査区どうしが最も接近した箇所では約5mを隔てているに過ぎず、両地点を区画してまったく別の遺跡とするような遺構（溝、石垣など）もみつかっていないため、一連の遺跡として考慮する必要がある。

図18には両地点の土層略図、図19には両地点の検出遺構全体図（15世紀主体）を現況地形図上に合成

して載せた。(図19の黒塗り部分は駐車場造成工事で削平された岩盤面を示す。第2区では南北に連なる3つの室状造構が輪郭として現われている。)

0面に対応する生活面は検出されていない。同時期の遺物は第2区上段造構第3削平面(図19・北端の室状造構)覆土から出土しているが、出土層位(報告書22頁)を確認すると第3削平面とは別種の造構と思われる。平面形は不明であるが、土壤状に大きく落ち込んでおり、本地点土壤1に類似する造構が存在した可能性も考えられる。

1A・1B面は第1区東側第2地業面(図18)に対応できる。1A面より約40~60cm程高位にあるが、1A面と1B面が約40cmのレベル差を持っている事、1A面北端で検出された泥岩列を境として更に段差のつく可能性がある事を考えれば、南から1B面→1A面→第2地業面と連続する罐壇状の造成面が想定される。

なお、裏八幡西谷遺跡では第2地業面の年代を15世紀後半~16世紀前半に位置付け、第1区西側と第2区の岩盤造成造構や第3区試掘坪4の杭列などほとんどの造構(図19)がこの時期に属するとしているが、本地点で使用した国産陶器の編年によれば15世紀前半まで遡ることが可能である。また、第2区上段造構第1削平面上にある第2面かわらけ溜り出土遺物(報告書32・33頁)は、15世紀前半より後出する様相を呈しているが、本地点では該期の造構面を検出することができなかつた。

1A面下の2枚の生活面(図18)は対応関係が明瞭でない。第1区東側第1地業面が小ピット群を伴う良好な生活面で、14世紀中葉~15世紀初頭(第4層出土遺物)に比定されていることからすれば、1A面下約10cmにある上位の面と繋がりそうに思うが、十分な確認を行っていないため断定は避けたい。2面に対応する生活面も不明である。第1区東側の岩盤面上には、粘性の極めて強い泥岩層(図18・破線)がほぼ同レベルに堆積しているが、造構は検出できず生活面には同定されていない。

1区西壁で確認された削平岩盤面は、第1区東側2号岩盤造成造構第2削平面(図18)と対応する。両地点の岩盤落ち際が直線的に繋がる(図19・破線)と仮定すれば、南北18m(約10間)以上の削平面を想定することができる。

服部 実喜『裏八幡西谷遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター 1984年

### 3. 問題点の整理

江戸末期の絵図(第一章/図2)に記された最勝院は、文禄二年(1593)に徳川家康が再興した五ヶ院の一つであり、ちょうど本地点の辺りにあったと考えられている。しかし、再興当時から移転していないとすれば、16世紀末~18世紀の造構・遺物が発見されなかった点に疑問が残る。

二十五坊は上杉神秀の乱(1417)、永享の乱(1438)、康正元年(1455)の足利成氏追捕に伴う寺社焼き討ちと続く争乱で衰退する。これは1A・1B面が15世紀前半をもって廃絶している点と符合しているが、同面上に残された炭屑がいずれの争乱によるものかは特定できなかつた。

約35mの調査で遺跡の全体像を知ることは難しいが、近隣地点との細かな比較対照によって遺跡本来の姿を甦らせることができるとなる。調査事例の増加に期待し、更なる検討を課題とした。

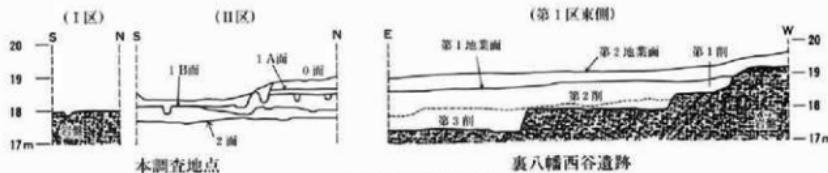


図18 生活面对比図

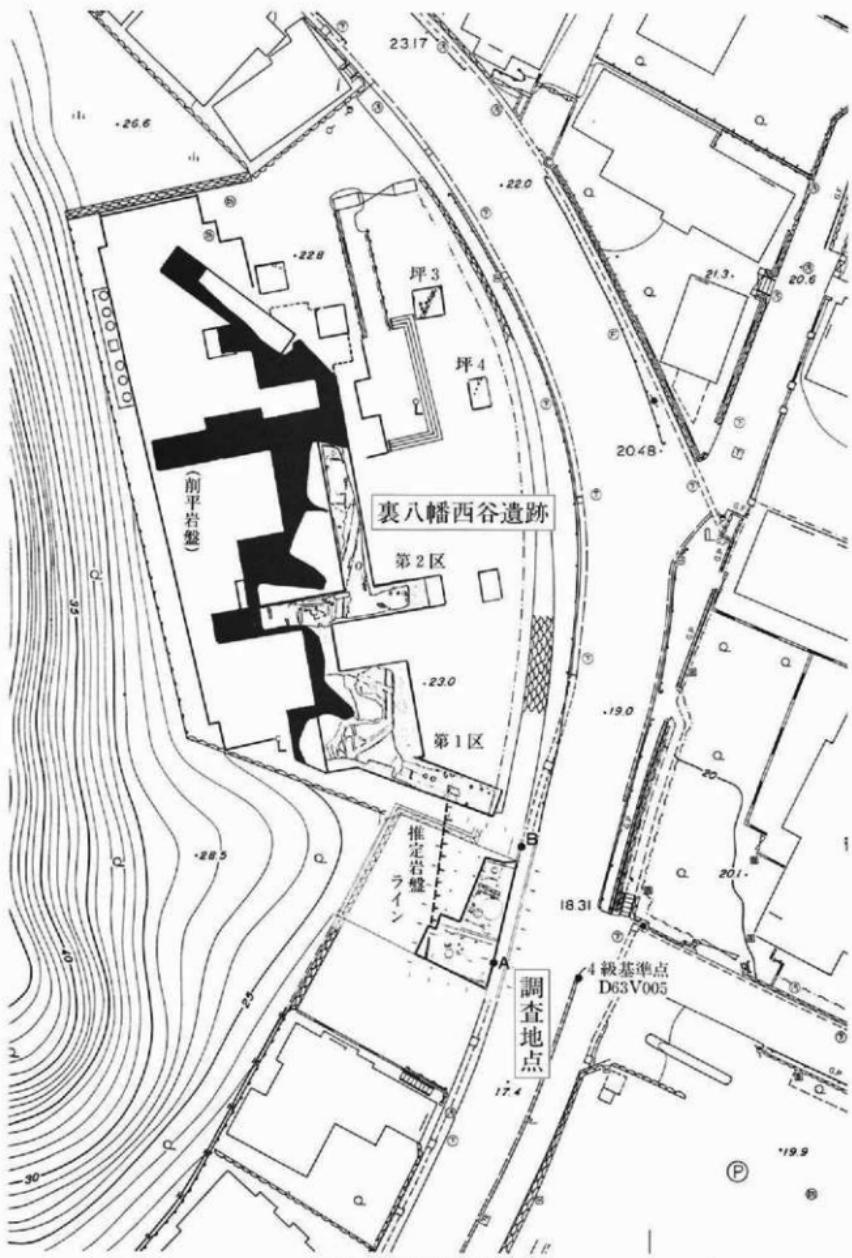


図19 検出遺構対比図 (1/500)



c. 1区2面調査状況（北から撮影）



d. 土塁7調査状況（東から撮影）



e. 調査地点近景（東から撮影）



b. 1区1B面全景（北から撮影）

図版2

b. 1区2面全景 (北から撮影)



a. 1区2面全景 (北から撮影)



c. 1区南北・機切り底の状態 (北から撮影)





a II区0面全景(北から撮影)



c II区1A・1B面下全景(北から撮影)



b II区1A・1B面全景(北から)



d II区2面全景(北から撮影)

b. II区0面の状態・左側の落ち込みは土堆1（栗から撮影）



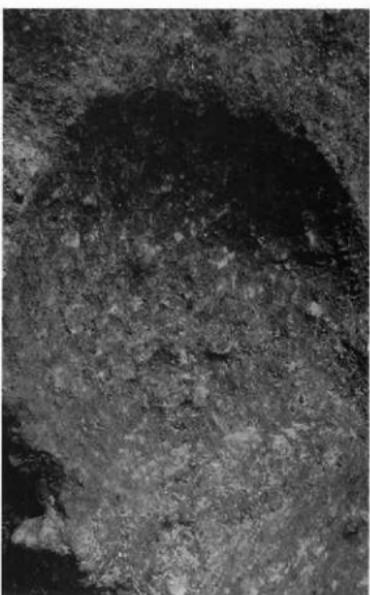
a. II区0面の状態・左側の落ち込みは土堆1（栗から撮影）

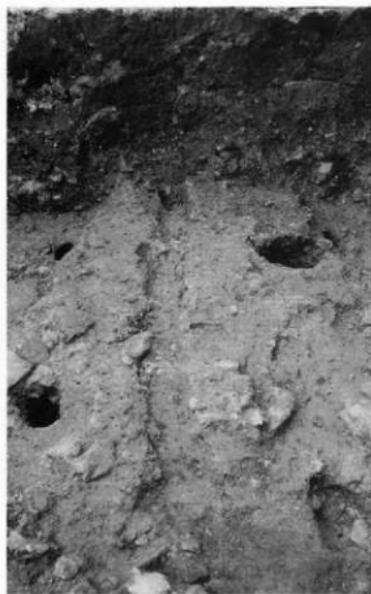


d. II区18面下・土堆8（手前は荒廃＝井戸）



c. II区18面・土堆4先端状態





図版6



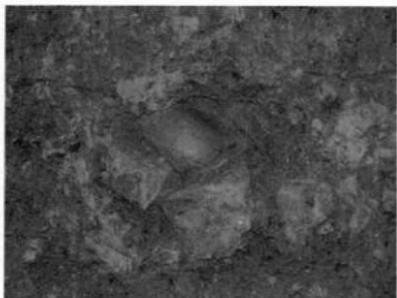
a. I区西壁・土層堆積状態（部分）下部に岩盤面が確認された



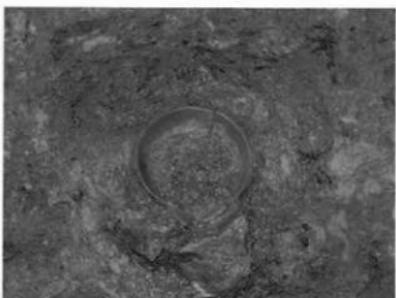
b. I区北壁・土層堆積状態



c. II区西壁・土層堆積状態



d. II区西壁・地質構造（側面から撮影）



e. 同左・上位のかわらけ皿をはずした状態  
(上方から撮影)



47



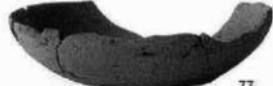
50



74



52



77



75



60

a. かわらけ



61



11



5



72



49



71



73

b. 瓦質製品



40



c. 瓦

番号は実測図番号と対応

図版8



1



2

a. 肥前産磁器



10



34



20

62



63



64

b. 柏原産器



3



21

39



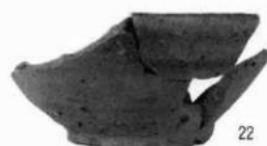
65



46



67



22



66



78



35

d. 山茶窯産陶器



24



69



f. 魚住産陶器



70

e. 常滑産陶器



4

g. 塚産陶器

番号は実測図番号と対応

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	12							
編集者名	菊川英政							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
つるおかはちまんぐう きゅううけいだいせき 鶴岡八幡宮旧境内遺 跡	神奈川県鎌倉市雪ノ 下二丁目	市町村	遺跡番号	...	...	19950209～ 19950311	35	自己用住宅に 係る車庫造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
鶴岡八幡宮旧 境内遺跡	寺院址	13世紀後半～ 15世紀前半	溝 土壤 泥岩列 地鎮石 柱穴	4条 8基 2列 1基 数口	かわらけ、常滑、瀬戸、舶載磁器、手培 り、銭 etc. テンバコ 4箱	15世紀前半に廃絶し た供僧坊の一画で、 縄壇状の造成面を検出。		

倉久保遺跡 (No.226)

鎌倉市山崎字清水塚1550番1外

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市山崎字清水塚1550番1外に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成6年7月21日～10月9日である。
3. 発掘調査の構成は次の通りである。

調査主任 田代郁夫  
調査員 雜 実  
調査補助員 梅木信之、村上和久、本田礼、土屋卓見、飯島容平、安田ヒデ、青木綾、成田サキ、荒井ソノ、蒲谷由利子、雑山千恵子
4. 本報の執筆は雑 実が行い、資料整理、図版作成には浜野洋一、遠藤雅一、本田礼、佐々木靖、村上和久、梅木信之が行い、土屋浩美、松山敬一朗、大坪聖子、深尾義子、辻由美子、西井末子、笠原さやか、佐藤慈子、鈴木真由美、山田純子の協力を得た。
5. 報告書に使用した図版のうち、造構図及びセクション図の縮尺は1/60、遺物の縮尺は1/3である。また、出土遺物のうち赤彩されたものについてはスクリーン・トーンを用いて表現した。
6. 本報に使用した写真は造構・遺物共に雑 実が撮影した。但し、遺跡全景写真は木村美代治（鎌倉考古学研究所）にリモコン式高所撮影装置による撮影を依頼した。
7. 発掘調査及び報告書作成に際しては次の諸機関・諸氏よりご協力とご教示を賜った。記して、御礼申し上げる。

松尾宣方、永井正憲、玉林美男、馬淵和夫（鎌倉市教育委員会）、大上周三（神奈川考古財団）、林原利明、手塚直樹、河野眞知郎、斎木秀夫、宮田真、宗臺秀明、大河内勉、福田誠、原廣志、宗臺富貴子、菊川英政、瀬田哲夫、菊川泉、清水菜穂、汐見一夫、根本志穂、（手塚以下鎌倉考古学研究所）、澤田大多郎
8. 本遺跡に於いて出土した遺物は鎌倉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

第一章 遺跡の立地と歴史的環境 .....	85
第二章 調査の経過 .....	87
第三章 基本層序 .....	87
第四章 検出した遺構 .....	87
・竪穴住居址 .....	87
・土 壤 .....	92
・ピット .....	92
・溝 .....	92
第五章 出土遺物 .....	94
・表採及び耕作土中出土遺物 .....	102
・遺物包含層中出土遺物 .....	102
・1号住居址出土遺物 .....	103
・2号住居址出土遺物 .....	104
・3号住居址出土遺物 .....	104
・4号住居址出土遺物 .....	104
第六章 まとめ .....	104

## 挿図目次

図-1 遺跡位置図 .....	84
図-2 遺跡全体図 .....	86
図-3 基本層序 .....	88
図-4 1号住居址 .....	90
図-5 1号住居址覆土セクション .....	91
図-6 2号住居址 .....	93
図-7 出土遺物(1)表採及び耕作土中出土遺物 .....	94
図-8 出土遺物(2)遺物包含層中出土遺物 .....	95
図-9 出土遺物(3)遺物包含層中出土遺物 .....	96
図-10 出土遺物(4)遺物包含層中出土遺物 .....	97
図-11 出土遺物(5)遺物包含層中出土遺物 .....	98
図-12 出土遺物(6)遺物包含層中出土遺物 .....	99
図-13 出土遺物(7)1号住居址出土遺物 .....	100
図-14 出土遺物(8)1号住居址出土遺物 .....	101
図-15 出土遺物(9)2号~4号住居址出土遺物 .....	102

## 図版目次

図版1 調査区遠景・調査区全景 .....	108
図版2 近世溝・包含層の遺物出土状況 .....	109
図版3 1号住居址・1号住居址内出土遺物 .....	110
図版4 1号住居址・2号住居址出土遺物 .....	111
図版5 2号住居址・2号住居址覆土セクション .....	112
図版6 出土遺物1(古墳時代前期) .....	113
図版7 出土遺物2(古墳時代前期) .....	114
図版8 出土遺物3(古墳時代前期) .....	115
図版9 出土遺物4(縄文、古代、中~近世) .....	116



図1 遺跡位置図

# 第一章 遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡はJR大船駅の南方1.5kmに位置する。住所は鎌倉市山崎字清水塚1550番1外。鎌倉市の中心部は山地で占められている。この山地は複雑に入り組んだ大小幾つもの谷戸を内包する。遺跡はこの山地の北端近く、台嶺と呼ばれる峰から北向きに開口する谷戸の入り口付近の東向きの斜面に展開する。遺跡の標高は約25~30m。

遺跡地周辺は、以前から山崎横穴墓群をはじめとする多数の横穴墓の存在が知られる地域であるが、現在ではその多くが開発により姿を消している。この他、縄文時代早期のものを最も古い例として、弥生時代後期~平安時代のものを主体とする遺物が付近一帯の丘陵上で採集されている。このように各時代を通じて遺跡の存在が認められていたものの、今まで本格的な発掘調査の機会にあまり恵まれなかつたが、近年、近隣の台山藤原治遺跡をはじめこの一帯の丘陵上で本格的な発掘調査が実施され、弥生時代中期~平安時代の集落の存在が確認されている。また、注目される事例としては、水道山戸ヶ崎遺跡、台山藤原治遺跡、岩瀬上耕地遺跡など近隣の丘陵上に位置する遺跡から古墳時代前期(5c代)の祭祀遺物や奈良三彩の破片といったものの出土があげられる(\*1)。このような丘陵部の状況に対して、谷戸内など低地部の状況は不明であったが、現在、山崎天神山麓の谷戸の開口部に於いて初めて本格的な発掘調査が実施されており、その成果が注目される。

最後に、今回調査した地点に隣接して稻荷社が設けられているが、これは、山崎の天神社より古く、元は山崎の鎮守であったとの伝承がある。

\*1: 各遺跡に於ける祭祀遺物の詳細は、以下のとおりである。

水道山戸ヶ崎遺跡: 石製勾玉、白玉

台山藤原治遺跡: 土製模造品(勾玉1点)、石製模造品(勾玉2点、有孔円盤1点、剣形1点、白玉50点)、手握土器など住居址覆土中から出土(和泉期の遺物と供伴)

岩瀬上耕地遺跡: 砂石製模造品(鏡1点)

## 《周辺の遺跡》

### 2. 台山藤原治遺跡

立地: 丘陵頂部

検出遺構: 縄文時代: 陥窓2基

弥生時代: 中~後期: 壁穴住居址25軒

古墳時代: 壁穴住居址4軒

平安時代: 壁穴住居址6軒

中世: 溝1条

出土遺物: 縄文~平安時代の土器、古墳時代(和泉期)の祭祀遺物

所収文献: 台山藤原治遺跡(台山藤原治遺跡発掘調査団 1985)

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1, 4, 8

(鎌倉市教育委員会 1985, 1988, 1992)

### 3. 岩瀬上耕地遺跡

立地: 丘陵

検出遺構: 縄文時代: 集石炉

弥生時代: 中~後期: 壁穴住居址5軒

古墳時代: 前期: 壁穴住居址18軒

後期: 横穴墓2基

奈良・平安時代: 壁穴住居址4軒

中世: 磐石建物址1棟、礎立柱建物址1棟、溝6条、地下式壙(?)1基

出土遺物: 縄文~中世の土器、古墳時代(和泉期)の祭祀遺物、古墳時代後期の玉器、武具、馬具、奈良三彩陶器

\* 現在発掘調査報告書作成準備中

### 4. 山崎天神山遺跡

立地: 谷戸内

検出遺構: 古墳時代: 壁穴住居址3軒

奈良・平安時代: 壁穴住居址4軒、土壙5基

中世: 池状遺構1、道路状遺構1、溝3条、(戰国期: 磐立柱建物址1棟、戸井址1、溝5条、土手状遺構1)

近世: 水田址、溝2条

\* 現在発掘調査を実施中(平成7年11月時点)

## 《参考文献》

「鎌倉市史 -考古編-」吉川弘文館

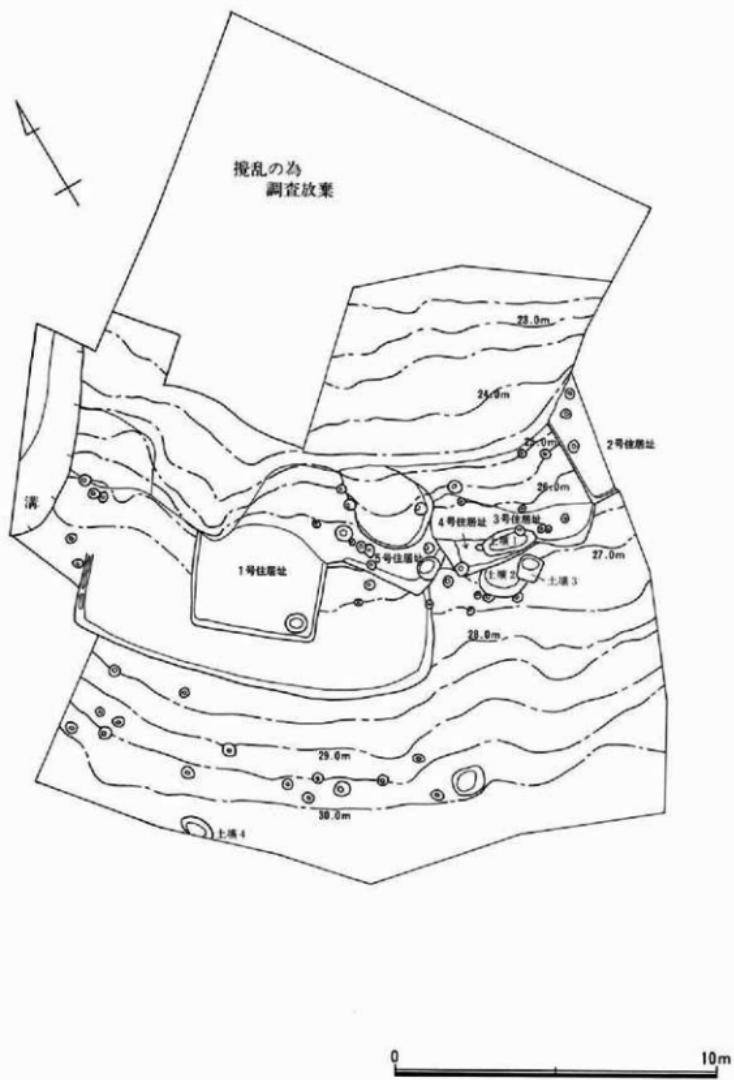


図2 遺跡全体図

## 第二章 調査の経過

調査区の現況は、斜面上に段々畠が営まれているといった状況であった。ここに宅地造成が計画され、鎌倉市教育委員会により埋蔵文化財確認の為の試掘調査が実施され、古墳・平安時代の窓穴住居址、戦国～近世の遺物が検出された。これをうけ、平成6年7月21日より本格的な発掘調査を実施した。

調査にあたっては、まず部分的には厚さ1.5mにも及ぶ耕作土を重機により除去した。耕作土は、新旧2層に大別され、このうち旧耕作面上から近世の溝を検出した。耕作土をすべて除去した段階で、遺物包含層を検出した。遺跡の展開する斜面は、これまで幾度かの地崩れに見舞われているようで、遺構を破壊する形で古墳時代初頭の土器類を主とする遺物包含層が上方から流れ込んでおり、近世以外の遺構はこの包含層下の黒褐色土上で検出した。尚、調査区の北半分はトレンチによる確認作業をしたところ、ローム層上まで耕作による攪乱を受けていることが確認され、調査を放棄した。

調査は記録的な猛暑の中、近世の溝1条・古墳時代～平安時代の窓穴住居址5軒・土壙4基・ピット約30基・遺物多数を検出し、平成6年10月9日に終了した。尚、調査面積は160m<sup>2</sup>である。

## 第三章 基本層序

- ・第1層：表土。暗褐色でしり、粘性共になし。最も厚く堆積した部分で140cmほどの堆積をみる。
- ・第2層：暗褐色土。しり、粘性共になし。染付など近世の遺物を若干含む。該期の耕作土と思われる。近世の遺構検出面。
- ・第3層：暗褐色土。しり弱、粘性あり。橙色スコリヤ、炭化物など少量含む。
- ・第4層：黒褐色土。色調明るい。橙色スコリヤを少量含む。しりあり、粘性あり。古墳時代前期及び奈良、平安時代の遺物包含層。
- ・第5層：黒褐色土。橙色スコリヤを少量含む。しり、粘性共にあり。古墳時代前期の遺物を若干量含む。近世以外の遺構はすべてこの層から切り込みが確認される。
- ・第6層：暗茶褐色土。しりやや弱、粘性強。地山であるローム層もしくは砂質凝灰岩（土丹）をブロック状に混入する。
- ・第7層：地山。ローム層もしくは砂質凝灰岩（土丹）である。

## 第四章 検出した遺構

前述したように、上方からの土砂の崩落によって遺構の残存はあまり良好ではない。

### ・窓穴住居址

5軒検出された。いずれも小谷戸を見下ろす北向きの斜面を削平して遺構が設けられている。前述したように、過去幾度かに亘る土砂崩れにより、すべての住居址が被害を受けている。

### 1号住居址（図-4,5・図版3）

調査区西側で検出された。当初、外側のテラス状の部分と、内側の窓穴住居を覆土断面の観察から別

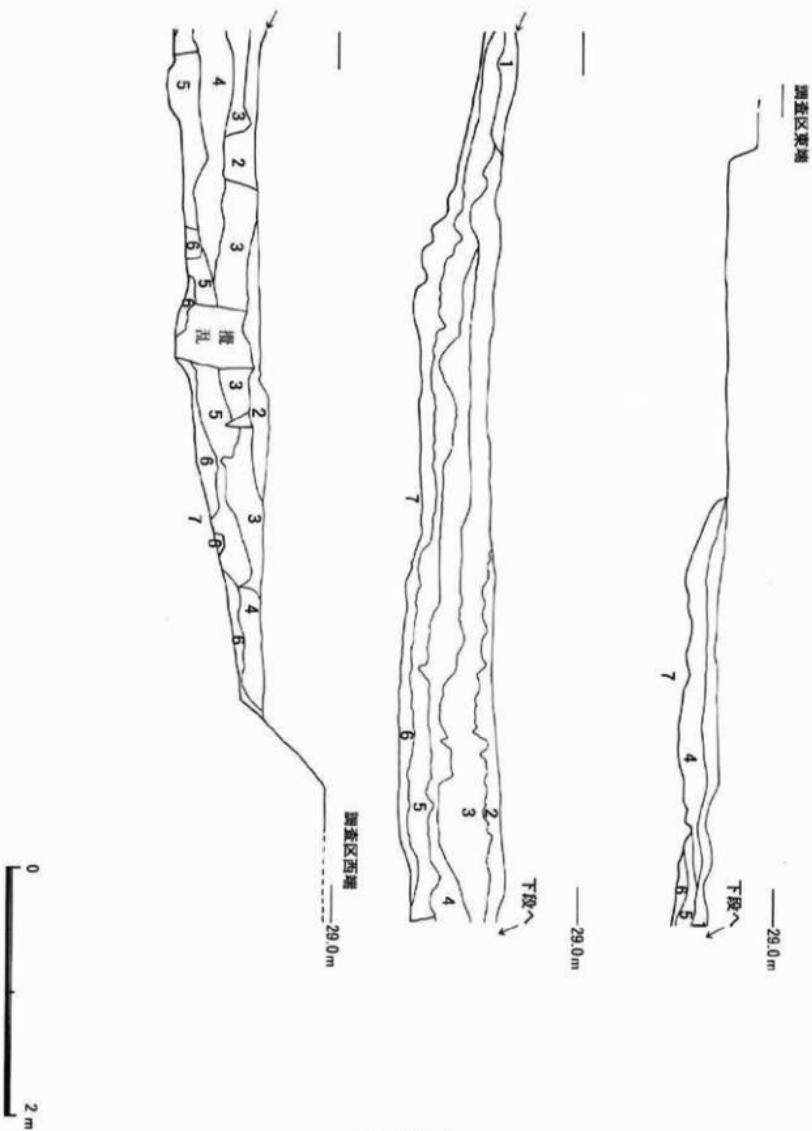


图3 基本层序

の遺構と解釈していたが、堅穴住居の周辺にテラス状の平場を設けた例が何例かあるのを知り、本遺構も同様の構成と判断した。

テラス部分のプランは隅丸方形。規模は、長軸1100cm、短軸530cm以上、黒褐色土を切り込んで構築されていたものと思われるが、上方は、崩落土により破壊されている。確認しうる壁高は約60cm。床面はフラットで、基本的にロームの地山を削り出して使用しているが、部分的に厚さ約5cm暗褐色土が堆積し、そのまま硬化面を形成するテラス部分の標高は、27.3m。西側コーナー部分にわずかに壁溝がみられる。幅10cm、深さは約5cmと浅い。遺構内及び周辺には数穴ピットが確認されているが、本遺構に伴うものではない。

内側の堅穴住居址は、このテラスのはば中央に構築される。プランは方形。規模は、長軸390cm、短軸330cm以上、壁高は約30cm。テラス部分同様、土砂崩れによって南側は削り取られており、遺物包含層によりパックされている。壁高は残存部分内に於いて全周する。幅20cm、深さ10cm。床面は凸凹に掘られた掘方もしくは斜面上に、暗褐色土を10~60cmほど盛って貼床が形成されている。面はフラットである。床面の標高は27m。柱穴は見あたらないが、南東側コーナーには直径約60cm、深さ50cmの貯蔵穴と思われるピットが1基設けられている。また、その外周を開む形で粘土を高さ10cmの土手状に盛り固めた状況が観察された。

住居址覆土はテラス部分及び住居址南側壁直下に、埋没初期の三角堆積が観察されるものの、殆どは上方から多量の遺物と共に流されてきた暗褐色粘質土が床面まで流れ込む。確実に住居に供伴する遺物としては壺1点、高环脚部が2点床上から、貯蔵穴内から鉢が1点出土している。

#### 2号住居址（図-6・図版5）

調査区東端に位置する。本住居址のみ、平安時代に属する。他の住居址より残存状況は良好であるようだが、地形的な状況で調査区を拡張するという調査方法をとれず、住居址西壁周辺のわずかな部分しか調査できなかった。残存部分の規模は、南北350cm、東西150cm、壁高は最大で約70cm。住居址は、床面も含め砂質凝灰岩の地山を削りだして構築されており、床上には居住中に堆積したやや炭混じりの粘質土が厚さ5cmほどの硬化面を形成しており、居住時には竈からの排出物により床面が上昇していく様子が窺える。床面の標高は約25m。竈は南壁（斜面上方側）に設けられていたものと思われる。壁溝は全周する。規模は、幅15cm、深さ7cm。溝底からは3ヶの小ピットが検出された。調査し得た範囲内では柱穴は確認されていないが、床上から直径40cm、深さ5cmほどの性格不明の窪みが3基検出された。住居址覆土は、基本的に暗褐色土であるが、上層や北側ではやはり古墳～平安期の遺物包含層によりパックされる。床上からはほぼ完形の須恵器の蓋が1点、土師壺片などが出土した。

#### 3号住居址（図-2・図版1）

2号住居址の西側で検出。住居址南側プランのみかろうじて残存する。住居址の規模は、一辺の長さが480cm、プランは隅丸方形である。床面までも流されており、詳細は不明。柱穴も確認できなかった。覆土は暗褐色土で、上層は遺物包含層でパックされる。覆土中より古墳時代前期の遺物が少量出土している。

#### 4号住居址（図-2・図版1）

3号住居址の南側にあり、同住居址に切られるが5号住居址を切る。住居址南側プランの一部のみ残

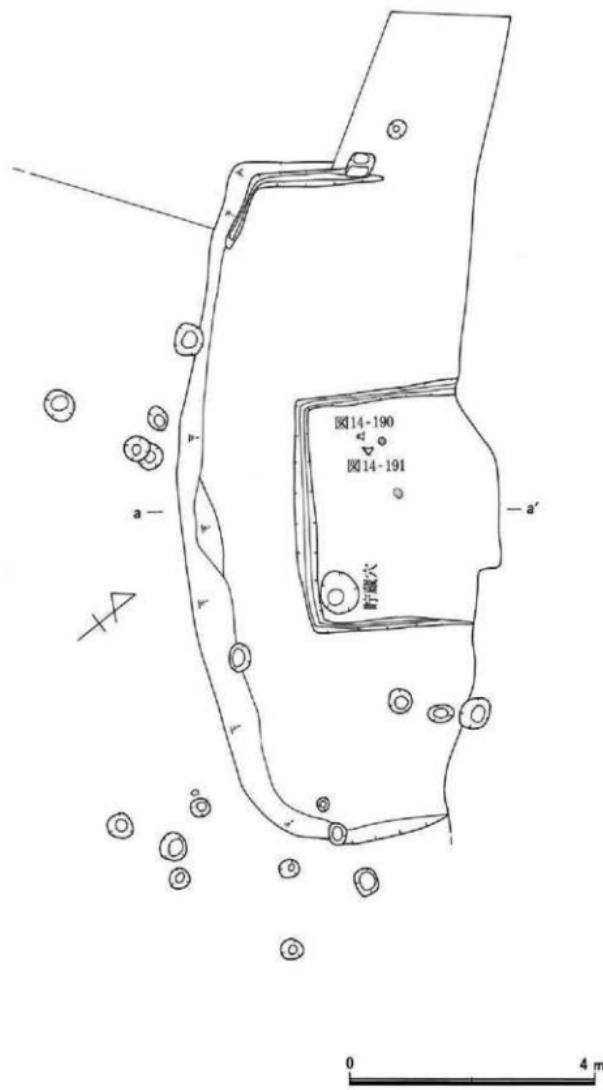


図4 1号住居址

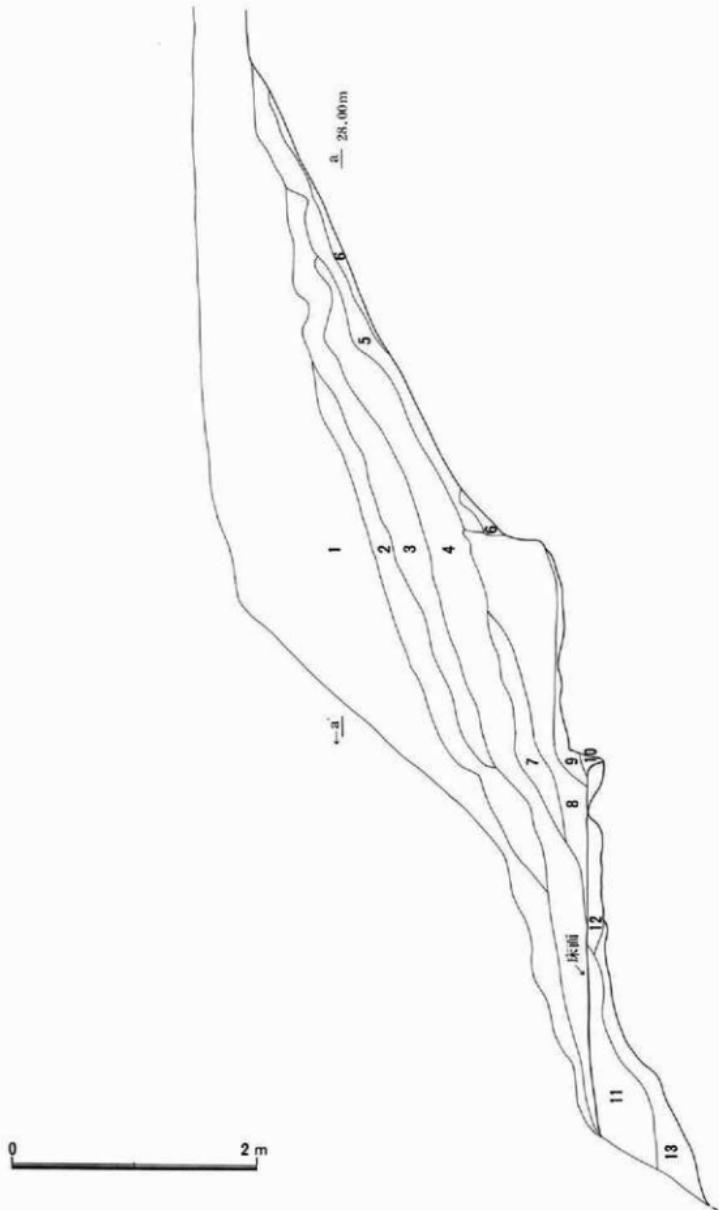


図 5 1号住居址覆土セクション

存。床面は3号住居址同様流されてしまっていた。覆土は3号住居址と同じ堆積状況を呈する。出土遺物としては、わずかに鉄釘、土師質の蓋のつまみと思われる小片が各1点ずつ出土したが、後から混入したものと思われる。覆土の性質は1号住居址に酷似する。

#### 5号住居址（図-2・図版1）

南側コーナー部分のみ残存。現地で観察した限りでは、4号住居址に切られる。残存状況悪く、詳細は不明である。覆土は3号住居址と同じ堆積状況を呈し、供伴遺物は皆無である。正確な時期は不明であるが、覆土の性質は1号住居址に酷似する。

#### ・土 壤

調査区内に於いて、4基検出した。土壤4を除き、4号住居址付近に集中しており、いずれも古墳時代前期の堅穴住居址と覆土の性質は同じであるが、新旧関係は、土壤の方が新しい。

#### 土壤1（図-2・図版1）

4号住居址内で検出された。プランは梢円形で、規模は160×70cm、確認面からの深さ40cm。覆土はやや茶がかった暗褐色土である。4号住居址よりは新しいが供伴遺物がなく、時期は不明。

#### 土壤2（図-2・図版1）

4号住居址に南隣する。プランは円形で、規模は直径150cm、確認面からの深さ50cm。4号住居址よりは新しいが供伴遺物がなく、時期は不明。

#### 土壤3（図-2・図版1）

土壤2を切る。プランは方形で、規模は一辺70cm、確認面からの深さ60cm。供伴遺物がなく、時期は不明。

#### 土壤4（図-2・図版1）

調査区最南部で検出。プランは円形で、規模は直径80cm、確認面からの深さ70cm。供伴遺物がなく、時期は不明であるが、覆土の観察から古墳時代の住居址及び他の土壤と同時期の所産と考えている。

#### ・ピット（図-2・図版1）

調査区全体で83基のピットを検出した。直径は約10~20cm、深さは10~30cmで、覆土はやはり暗褐色粘質土である。出土遺物はない。性格不明のものが殆どだが、流されてしまった堅穴住居址のものも確認できる。

#### ・溝（図-2・図版2）

調査区最西部で近世の溝が1条検出された。調査区の関係で溝の全貌は把握できなかったが、断面形はV字状を呈し、斜面に対して併行する。地割の溝であろうか。覆土は上層では現代の耕作土と同じであり、下層はやはり耕作土であるが、宝永スコリアをやや多く含む他、該期のかわらけ片・瀬戸縁軸小皿などの遺物がわずかに混入する。

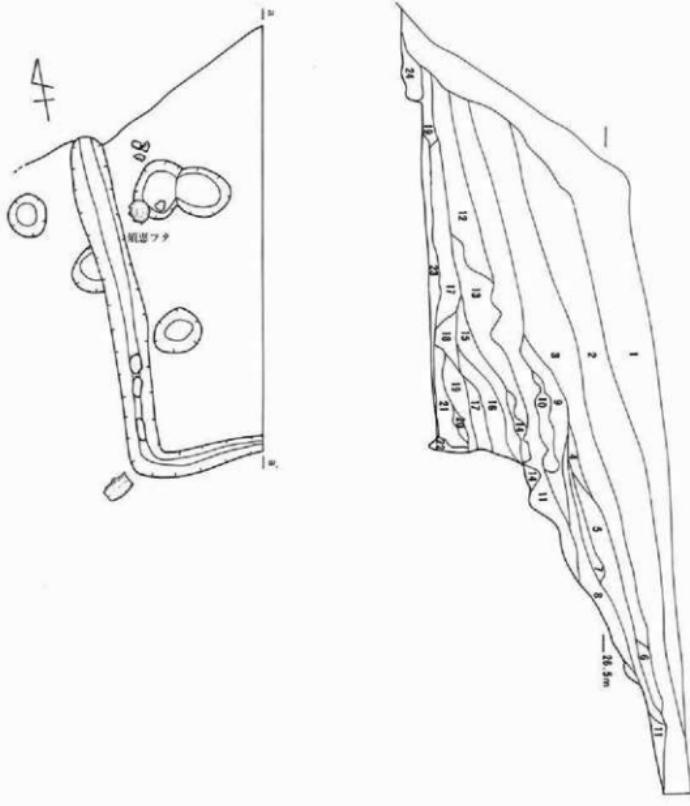


図6 2号住居址

## 第五章 出土遺物

出土遺物の総量は、テンバコ15箱分である。このうち遺構に供体するものはごく一部であり、遺構の上に堆積する上方からの流入土中に包含されていたものが殆どである。出土遺物の主体は、古墳時代前期及び、奈良～平安時代（9c前半）の土師器である。量的に卓越している古墳時代前期の遺物に関しては、今後この地域一帯の遺跡のあり方を考える為の基礎資料として図示できるものは可能な限り掲載した。他に若干量の中～近世、縄文時代の遺物が認められるが、これらについてはすべて図示した。

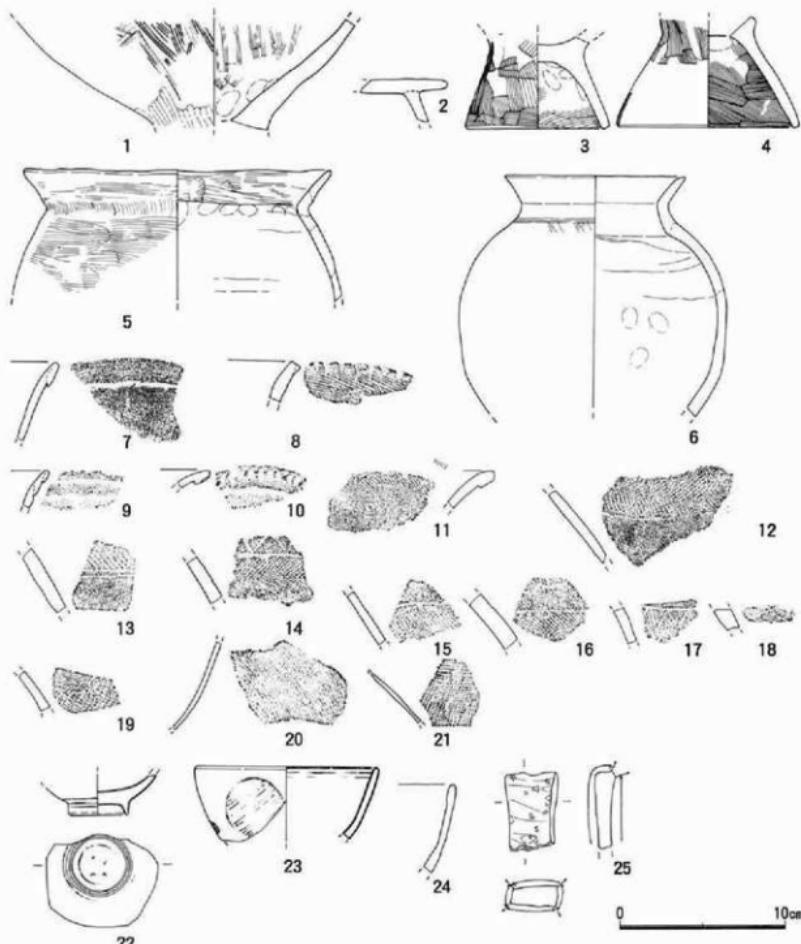


図7 出土遺物(1)

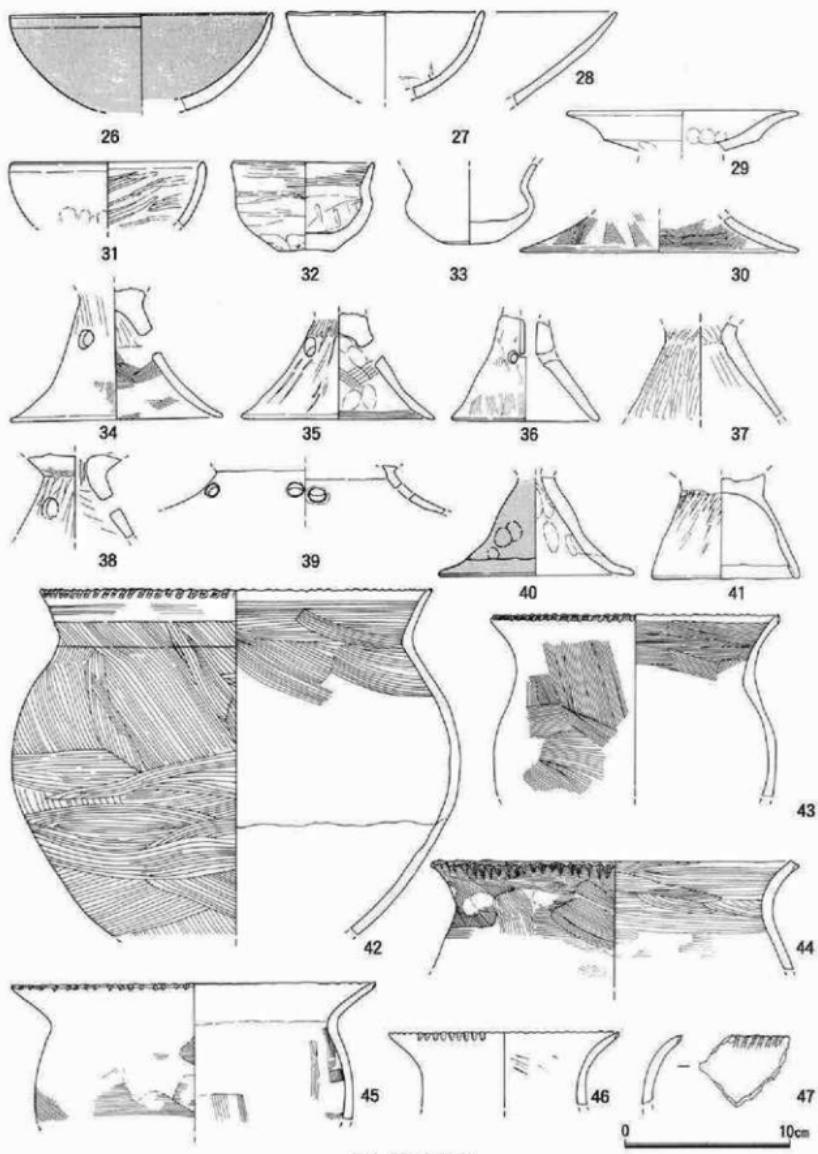


図8 出土遺物(2)

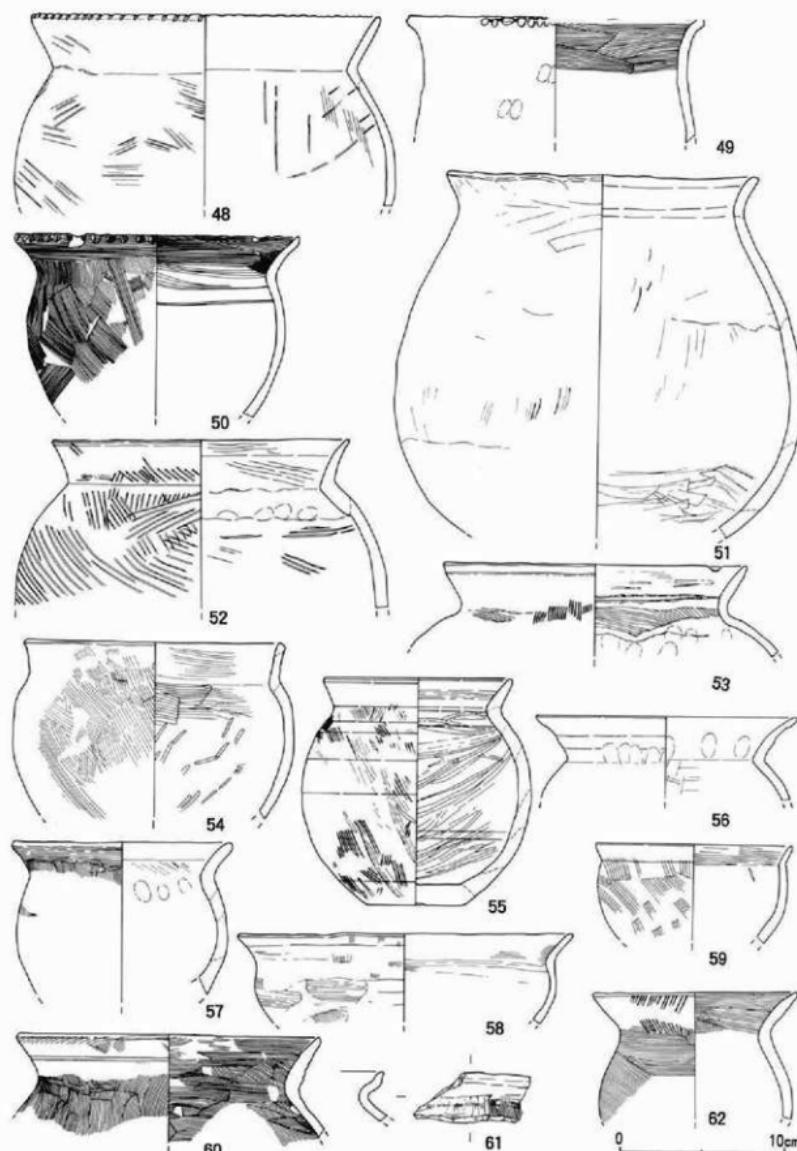


図9 出土遺物(3)

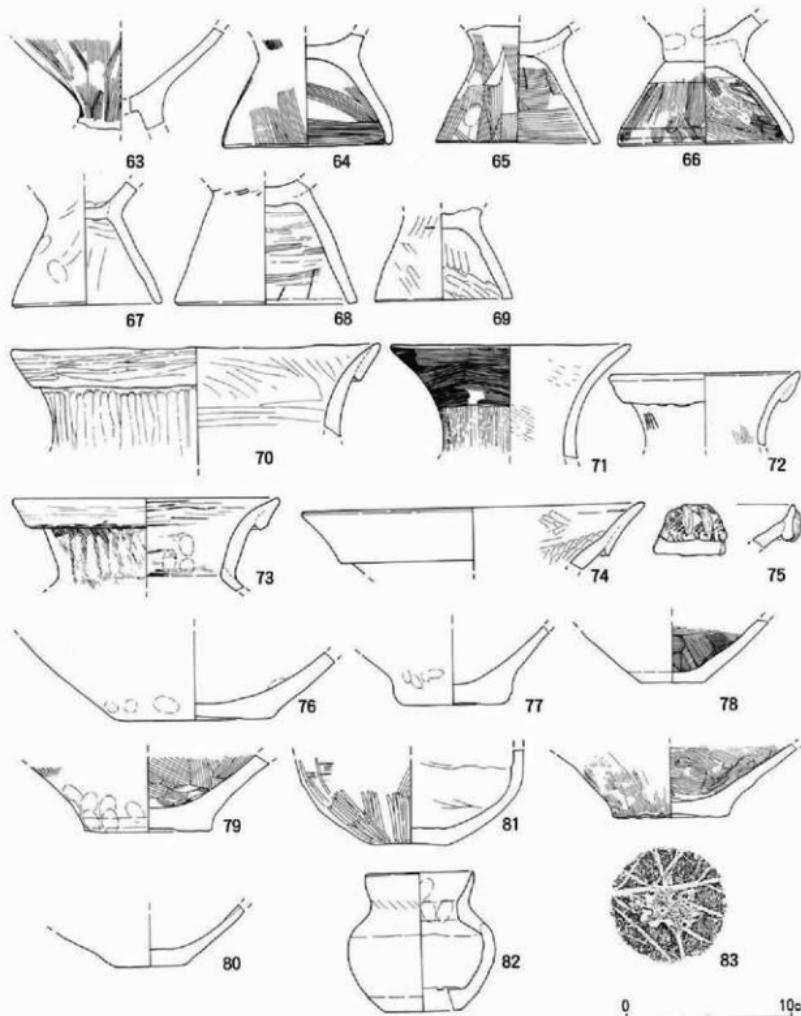


図10 出土遺物(4)

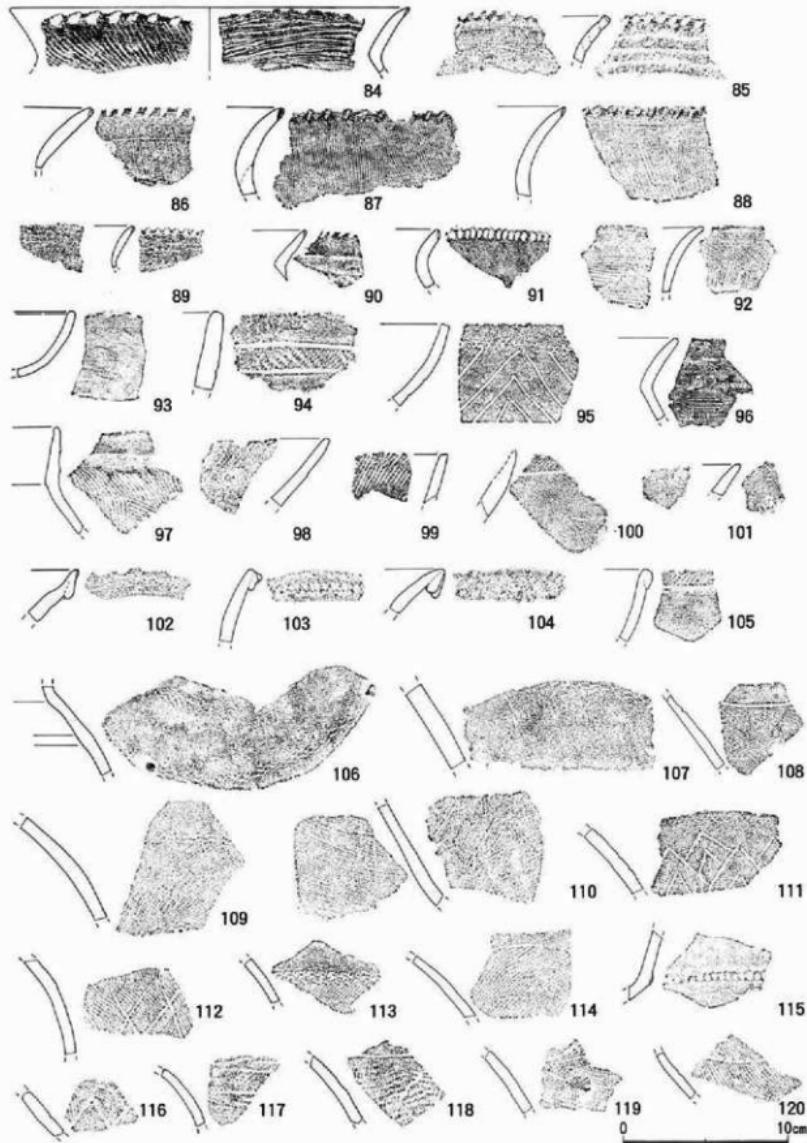


図11 出土遺物(5)

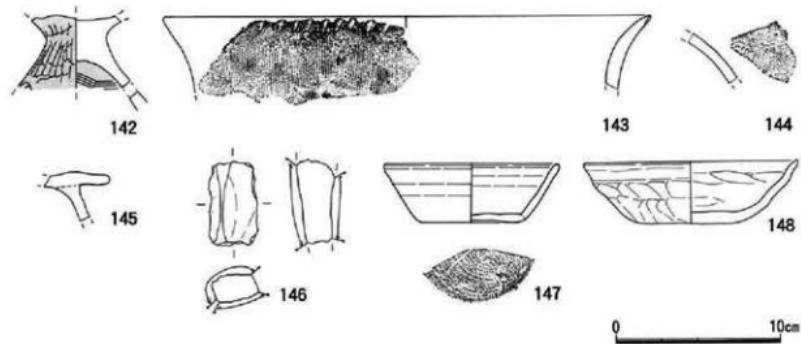
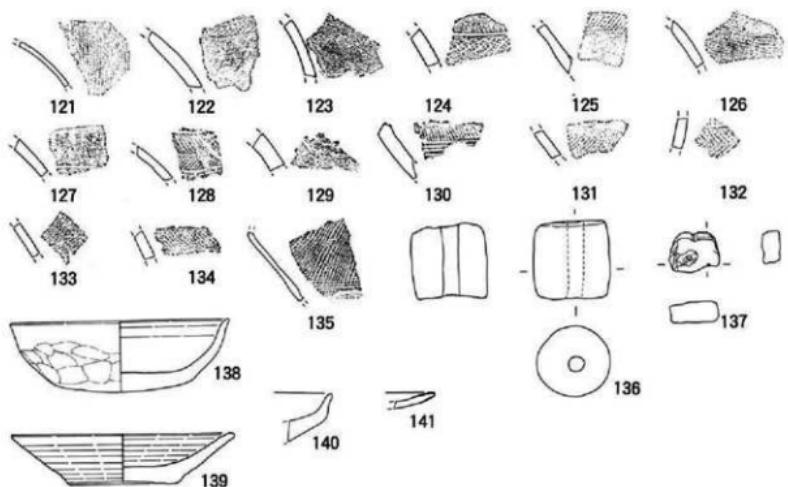


图12 出土遗物(6)

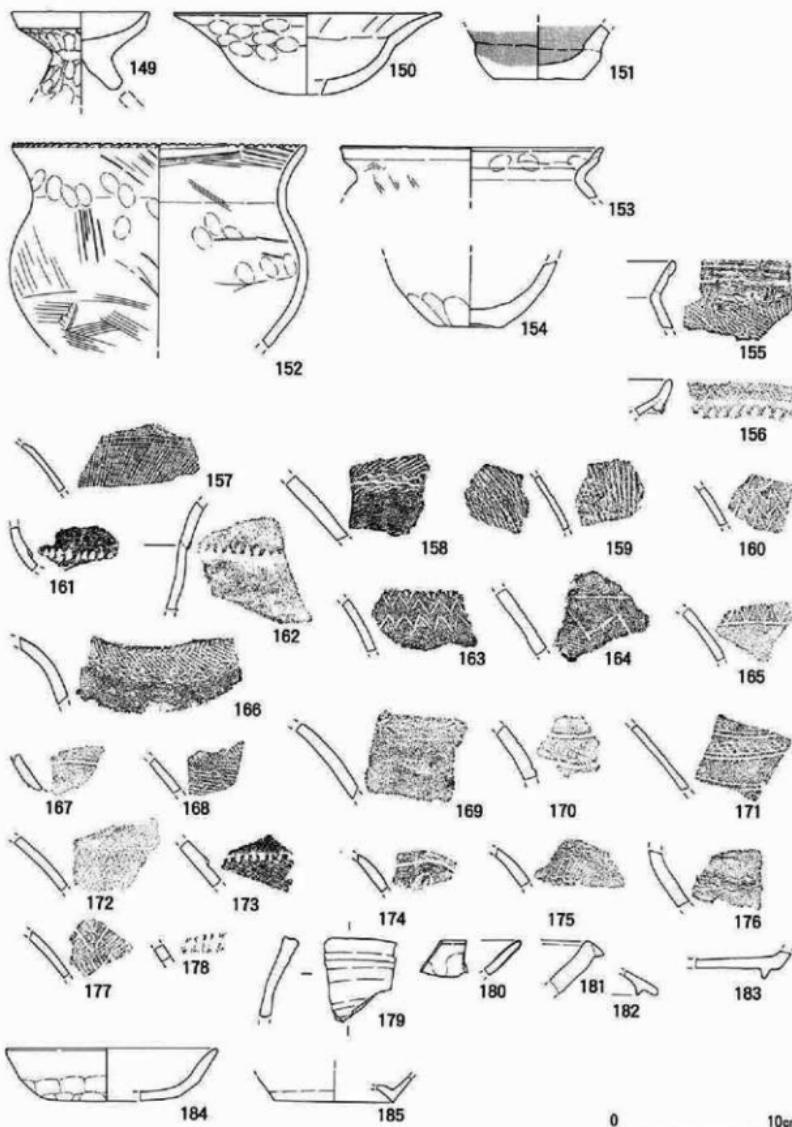


図13 出土遺物(7)

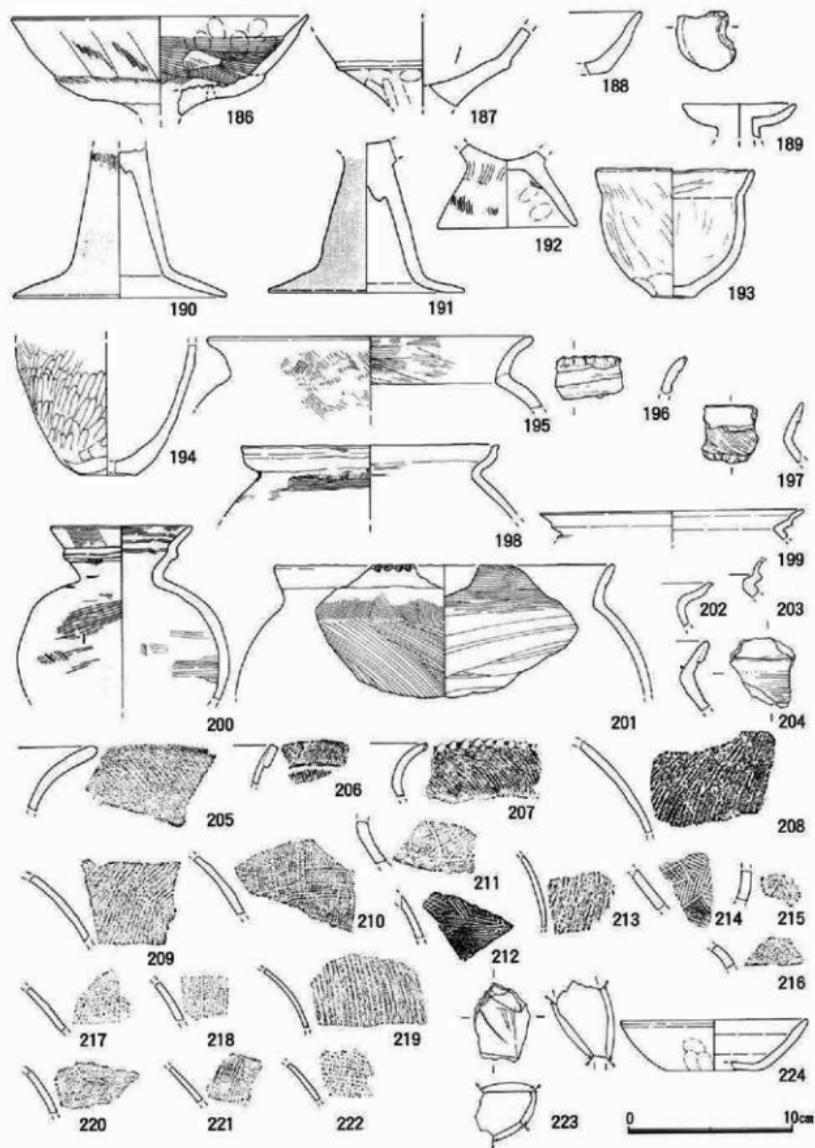


図14 出土遺物(8)

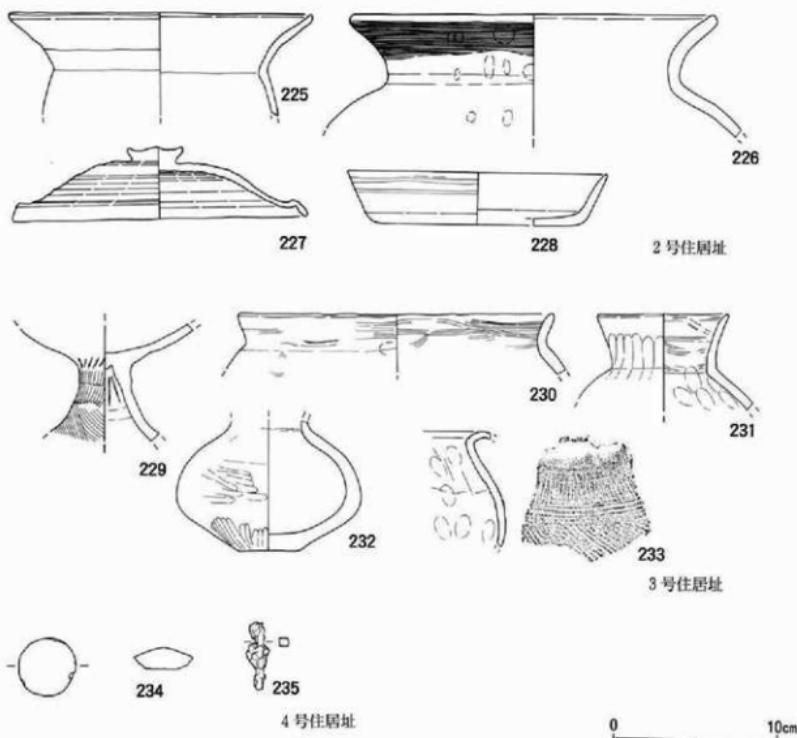


図15 出土遺物(9)

・表採及び耕作土中出土遺物 (図7-1~25・図版6~9)

耕作土中及び調査区周辺の畑地などから出土したものである。

1は高坏である。坏部上位及び脚部は欠損。内外面共に刷毛調整が施され、脚部結合部には棒状のヘラによる調整が施される。2は土師器であるが、器種は不明。上面にはミガキが施される。胎土や調整の手法から、古墳時代の遺物であろうと考えられる。3、4、5は台付甕である。いずれも内外面共に刷毛による調整が施される。5の法量は、口径19.0cm。6は広口壺である。口径11.0cm、胴部最大径16.2cm。7~19は甕、壺の小破片である。壺には前代から引き続き縦線で区画された縄文帯が巡るものが多い。9は輪積甕である。20、21は搬入品と思われるS字状口縁甕の胴部破片である。22、23は肥前染付丸碗。18c後半か。法量は22の底径が3.6cm、23の口径が11.0cmである。25は磁石である。

・遺物包含層中出土遺物 (図8-26~図12-148・図版6~9)

前述したとおり、出土遺物の大半は遺物包含層から出土したものである。主体は古墳時代前期の土師器で、全体の約80%を占める。残りの20%は奈良~平安期(9c初頭)の土師器が占める。

26~31は高坏である。胎土は微砂、白色針状物などを含むきめ細かいものである。いずれも内面はよく磨かれる。27、30は赤彩される。法量は26の口径が15.8cm、27の口径が12.0cm、29の口径が13.6cm、31の口径が11.6cmである。32は鉢、33は壺である。33は赤彩される。32は口径8.6cm、底径3.2cm、器高5.4cmである。34~41は脚部の破片で、36及び38~40は器台である。38、41は胎土がザラザラしたもので他とは異なる。41はS字状口縁甕の脚部か。39は大型器台と思われる。胎土はきめ細かいもので他とは異なる。やや注目される破片である。42~62は甕及び広口壺である。後述するS字状口縁甕を除き、胎土はいずれも黒色微砂、白色針状物、黒雲母などを含むものである。調整は、外面が刷毛によるもの、内面が刷毛もしくはナデによるものである。甕の口縁部には器面調整具と同じ刷毛を使用したキザミが施されるものと、そうでないものがある。61はS字状口縁甕である。胎土は黒、茶色の微砂を含む他、金雲母の混入が特徴的である。各遺物の法量は42が口径24.0cm、胴部最大径27.5cm、43が口径17.4cm、44が口径21.6cm、45が口径22.0cm、46が口径13.8cm、48が口径21.2cm、胴部最大径23.0cm、49が口径17.8cm、50が口径17.2cm、胴部最大径16.0cm、51が口径18.4cm、胴部最大径25.2cm、52が口径18.2cm、53が口径18.4cm、54が口径15.0cm、胴部最大径17.0cm、55が口径11.4cm、胴部最大径14.0cm、56が口径15.8cm、57が口径13.6cm、胴部最大径13.0cm、58が口径24.0cm、59が口径12.0cm、60が口径18.6cm、62が口径12.4cm、胴部最大径11.8cmである。63~69は台付甕の脚部である。胴部と脚部の結合には、底部充填のものと結合部をホゾ状にして組み合わせるものと2通りの方法がみられる。器面の調整は刷毛による。70~83は壺である。胎土はいずれも黒色微砂、白色針状物を含むきめ細かいものである。外面は棒状のヘラにより磨きが施される。内面は基本的にナデであるが、一部刷毛による調整もなされる。口縁部の処理は折り返しによる縁帯を形成するものが多い。また、底部破片を器台に転用したと思われるものも見受けられる。各遺物の法量は、70が口径22.3cm、71が口径14.4cm、72が口径11.4cm、73が口径16.2cm、74が口径21.0cm、83が口径6.6cm、胴部最大径9.0cm、器高8.5cm、84~135には甕・壺の小片の拓影と断面を提示した。84は口径24.0cm、85は輪積甕の口縁部である。95、105は鉢である。壺同様、沈線で区画される繩文帯や、S字結節文などによる装飾が表面に施される。121、135はS字状口縁甕の破片である。胎土は黒、茶色の微砂、黒雲母、金雲母などを含み硬質である。器壁は非常に薄い。外面の調整は棒による。136、137は土鍤である。136は他の土師器と同じ胎土で焼かれたものである。直径4.5cm、長さ5.0cm。137は土器片転用品である。138、139、148は土師坏片である。138は所謂、相模型の坏である。法量は138が口径13.4cm、器高4.3cm、139が口径13.6cm、底形6.8cm、器高3.0cm、139はロクロ成形品である。法量は、口径13.5cm、底径6.0cm、器高3.0cmである。145は2と同一個体である可能性がある。一応、器台としているが小片であり、よくわからない遺物である。146は砥石である。147は南多摩窯址G37窯式に比定される須恵坏である。法量は、口径11.6cm、底径6.6cm、器高3.6cm、148は所謂、相模型の坏である。法量は、口径13.0cm、底形5.4cm、器高3.8cmである。138、148共に147の須恵器と時期的にはほぼ併行するものと思われる。

#### ・1号住居址出土遺物（図13-149～図14-224・図版6～9）

図13は1号住居址外郭のテラス状施設から、図14は1号住居址内からの出土遺物である。このうち、189~191、200が床面上から、194が貯蔵穴中からの出土品で住居址に直接供する。覆土中検出遺物の器種別割合は、古墳時代前期のものに関しては、壺が約40%、甕が約34%、高坏が約9%、器台及びS字状口縁甕が1%、残りの16%を奈良・平安時代の土師、須恵器が占める。包含層中出土の遺物と内容的には同一である。壺の文様構成に関しては、S字状結節文または沈線で平行もしくは鋸歯状に区画され

た中に縄文もしくは撚糸文を配するものが多いが、173のように撚糸による斜格子状文なども少量見受けられる。149は小型器台、150は屈曲口縁鉢である。法量は、149が口径8.4cm、150が口径16.3cm、器高5.0cmである。152は台付甕である。法量は口径18.0cm、胴部最大径18.0cm、153是在地化したS字状口縁甕か。胎土は他のS字に見られる金雲母の混入がなく、器厚も厚い。口径は16.0cm。157、159、199、202、203、208～210、212、213、217～222はS字状口縁甕である。いずれも胎土は黒・茶色微砂、金雲母などを含み硬質である。器壁は非常に薄く、外面には櫛搔による調整が成される。水平方向に櫛による沈線を巡らせたものも見受けられる。198は口径15.6cm、199は口径16.0cmである。186、187は有段の高坏である。186は口径18.0cm。190、191共に住居址床上から出土した高坏脚部である。いずれも脚部が柱状を呈する。193は鉢である。法量は口径9.6cm、底径2.4cm、器高7.0cmである。194は貯蔵穴内に堆積した覆土の上層から出土したものである。200は口縁部有段の壺である。口径8.6cm、胴部最大径13.0cm。174は縄文土器である。179～185、223、224は古代～近世の造物である。179、182は瀬戸美濃の製品である。179は鉢、182は蓋の破片である。180は瀬戸縁釉小皿である。181は常滑こね鉢である。184、224は所謂、相模型の坏である。法量は184が口径12.0cm、器高3.2cm、224が口径11.4cm、底径6.2cm、器高3.0cmである。185は瀬戸の水注か。223は砥石。

#### ・2号住居址出土遺物（図15-225～228・図版6～9）

図示し得たものはわずかに4点である。いずれも床上から出土した。225は土師甕である。胎土は粉質できめ細かい。法量は口径18.4cm。226は土師質の壺である。胎土はやはり粉質できめ細かい。法量は口径22.2cm。227は須恵器蓋である。折返し部分がやや外側に開く。法量は直径17.8cm、器高4.3cmである。228は盤状坏の破片である。

#### ・3号住居址出土遺物（図15-229～233・図版6～9）

229は高坏である。外面には刷毛・ヘラによる調整が成される。230～232は壺の破片である。外面は棒状のヘラにより磨かれる。法量は、230が口径19.0cm、231が口径8.1cmである。233はS字状口縁甕である。胎土は黒・茶色微砂、金雲母などを含み硬質である。外面の調整は櫛搔で、胴部中央部付近に水平方向に櫛による平行沈線が巡る。

#### ・4号住居址出土遺物（図15-234、235・図版6～9）

覆土上層からの出土であり、後世の混入と思われる。234は土師器蓋のつまみと思われる。235は鉄釘である。断面は四角形を呈する。

## 第六章 まとめ

今回調査を実施した地点は丘陵斜面地であり、このような居住には不適と思われるところから竪穴住居が検出されたことは、やや意外な成果であったといえる。本文中何度も述べたように、調査地点は何度も土砂崩れに見舞われるような場所であり、現に調査初期には集中豪雨により小規模な土砂崩れなども発生した。上方からの流入土中からの、質・量ともに豊富な出土遺物の状況からみて、丘陵頂部に集落の中心が存在するものと思われる。これらの遺物の中にもまた古墳時代後期の遺物が含まれていないという状況は、あるいは古墳時代前期もしくは中期以降、奈良時代までこの付近が集落として利用され

れなかったということを物語るのかもしれない。

出土遺物に関しては、前述したとおり古墳時代と奈良・平安時代のものが主体を成すが、量的には前者が卓越している。遺物の時期としては、壺の類に胴部上半に沈線や繩文帯で装飾を施すものが、甕の類に口縁部にキザミを施すものがそれぞれ数多く認められるものの、高环類は東海系（元屋敷・小型高环B類）のプロポーションをもつものが目立つこと、小型丸底壺・小型器台・屈曲口縁鉢など所謂、小型精製土器群の存在、口縁がくの字に屈曲する甕などの存在から、主体は弥生末～古墳時代前期と考えられる。1号住居址に関しては、床上から出土した2点の高环の脚部や、覆土中から出土した有段の高环環部や壺などから、古墳時代前期のなかでも後半に位置するものと思われる。S字状口縁甕に関しては、胎土分析などを行っていない為断定はできないが、プロポーション、器面の調整、胎土などからみて濃尾平野系の搬入遺物であることはほぼ間違いないものと思われる。時期に関しては、口縁部の形状などから廻間遺跡に於いて赤塚次郎氏により再分類が行われたS字甕のBもしくはC類（廻間編年II～III式期=3C中～4C初）と思われる。該期の遺物としては、他にいずれも小片ではあるが注目される遺物として図7-2、図12-145の器受部がフラットな器台、図8-39の大型器台など特殊な器台が挙げられる。いずれも筆者の不勉強から類例を知らず、遺物の出自、性格など今後の課題にしたいと考えている。前者の場合、あるいは上下逆にして厚木市子ノ神遺跡1号住居址、横須賀市長井町内原遺跡A地区第2号住居址などで出土した埴器台結合土器のようなものになるのかもしれない。奈良～平安時代の遺物に関しては、遺物包含層や2号住居址内から出土した土師壺・須恵器蓋などから8c前半～9c前半のものが主体を成すが、139のような古代末と思われるロクロ成形の壺が1点出土している。2号住居址に関しては、出土した土師壺及び須恵器蓋から8c前半の所産と考えられる。

周辺の遺跡の状況から、弥生時代後期以降、少なくとも平安時代のはじめ頃までは、この付近一帯の丘陵上の狭小な平場や斜面には点々と集落が存在していた事が窺われる。これらの集落は眼下に見下ろす谷戸内の低湿地部分を生産基盤として成立していたものと考えられる。今後、丘陵上ののみならず各期の集落の全貌を探る意味も含め、遺跡地一帯の谷戸内の状況の解明が期待される。

### 《参考文献》

- 比田井 克仁 1993 『西相模における五世紀の社会構成－その基礎的な把握－』  
「西相模考古」第2号 西相模考古学会
- 比田井 克仁 1994 『南関東における庄内式併行期の土器』「庄内式土器研究Ⅶ－庄内式期の土器生産とその動き－」庄内式土器研究会
- 西川 修一 1994 『神奈川県西部（相模地域）の土器編年』「庄内式土器研究Ⅷ－庄内式期の土器生産とその動き－」庄内式土器研究会
- 立花 実 1992 『東日本の屈曲口縁鉢』「西相模考古」第1号 西相模考古学会
- 古庄 浩明 1995 『西相模地域における弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器編年－子ノ神遺跡編年再考』「西相模考古」第4号 西相模考古学会
- 滝澤 亮他 1987 「シンボジウム関東における古墳出現期の諸問題」日本考古学会編 学生社
- 東日本埋蔵文化財研究会 1993 「第2回 東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－」
- 東海大学文学部 東海大学校内遺跡調査団 1991 「足もとに見る歴史 西相模の三・四世紀」
- 財團法人 愛知県埋蔵文化財センター 1990 「廻間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集
- 横須賀市教育委員会 1982 「長井町内原遺跡」横須賀市文化財調査報告書 第9集
- 手広遺跡発掘調査団 1984 「手広八反目遺跡発掘調査報告書」
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1990 『神奈川県下における主要遺跡の分布とその問題点』「かながわの考古学 第1集」

神奈川県立埋蔵文化財センター 1993 「神奈川県の考古学の問題点とその展望」「かながわの考古学第3集」  
神奈川考古同人会 1983 「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題－相模国と周辺地域の様相－」  
東海大学校地内遺跡調査委員会 東海大学校地内遺跡調査団 1995 「伊勢原市下精屋 弥杉・上ノ合遺跡」

# 写 真 図 版

図版1



▲ 調査区遠景 現在でも土砂崩れに見舞われるような場所に遺跡は立地する

▼ 調査区全景 (1号住居址は調査中)





▲ 近世溝

▼ 包含層の遺物出土状況 左スミのベルトコンベアの下あたりが1号住居址前面である



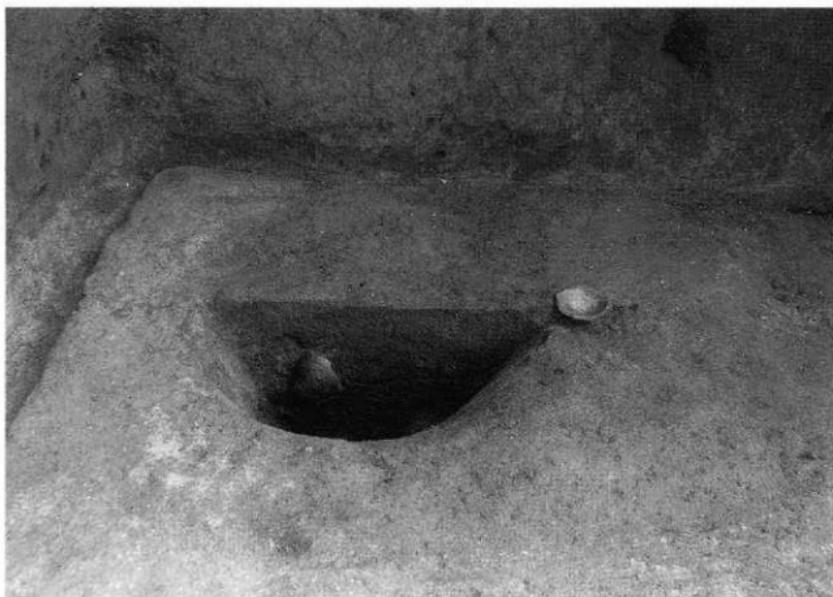
図版3



▲ 1号住居址 本体の周囲にテラス状の平場をもつ

▼ 1号住居址 床面で検出された遺物





▲ 1号住居址貯蔵穴　鉢が覆土中から出土した

▼ 2号住居址床面から出土した遺物



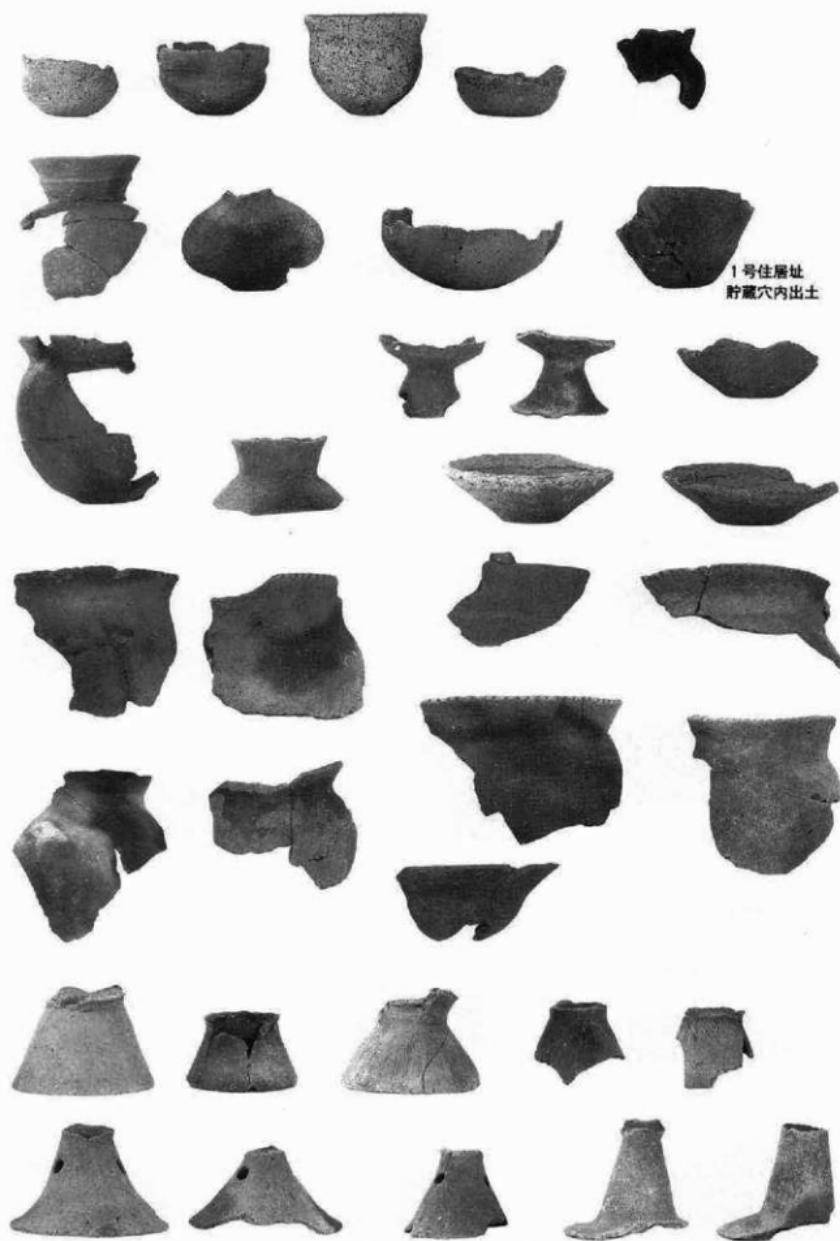
図版5



▲ 2号住居址

▼ 2号住居址覆土セクション ☆印の層が遺物包含層





1号住居址  
貯藏穴内出土

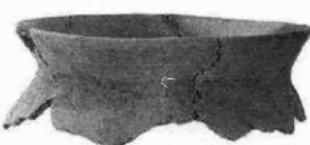
出土遺物 1 (古墳時代前期)



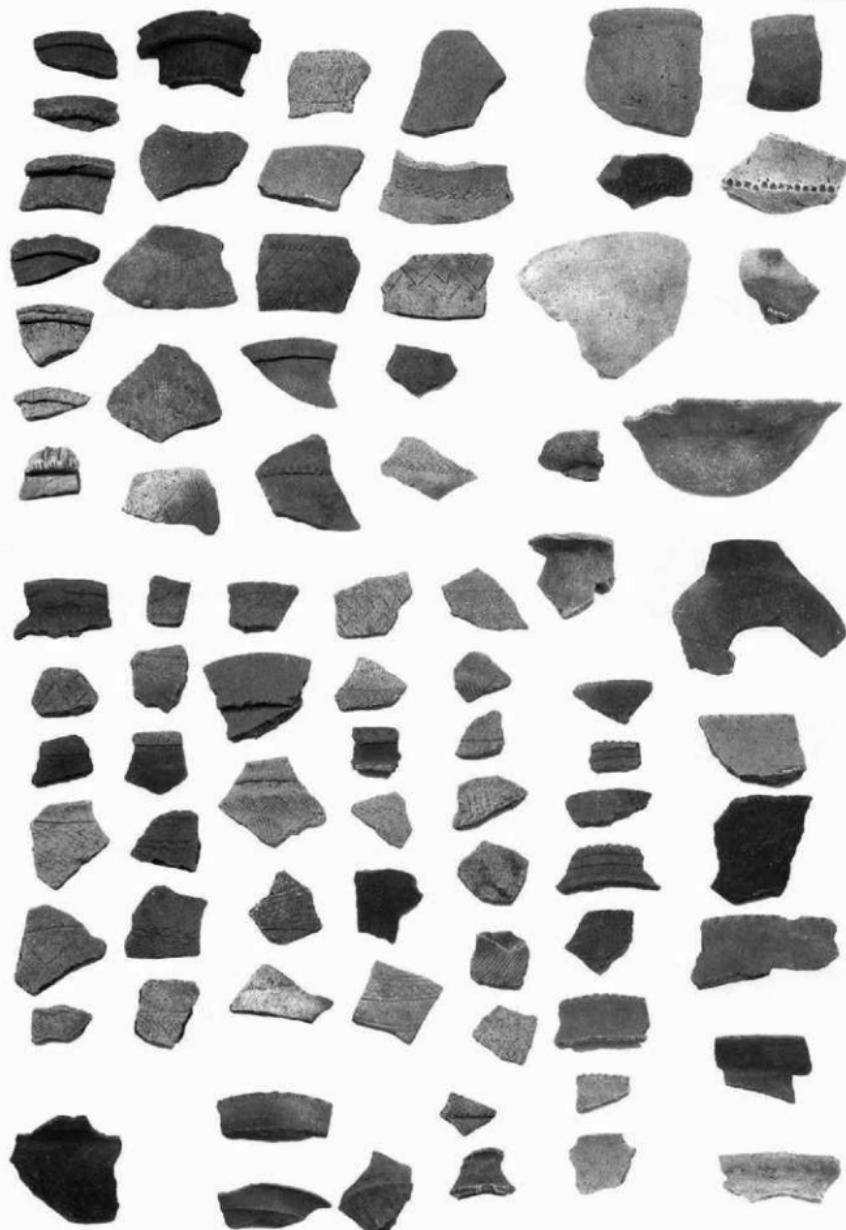
器台?



瀬尾平野系S字口縁



出土遺物2(古墳時代前期)



出土遺物3（古墳時代前期）

図版9



奈良・平安期（～9c初頭）



砥石



奈良・平安期（～9c初頭）



土瓶



土器片瓶  
(古墳時代前期)



縄文



中・近世

出土遺物4（縄文・古代・中～近世）

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいさんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	12							
編集者名	椎 実							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
くらくぼいせき 倉久保遺跡	神奈川県鎌倉市山崎 字清水塚1550番1外	204	226	35° 20' 08"	139° 31' 54"	1993.07.21～ 1993.10.09	160	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	集落址	古墳前期 (4～5C初)	竪穴住居址 土壤 ピット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古墳前期の土師器</li> <li>・奈良・平安時代の 土師・須恵器</li> <li>・中・近世の陶磁器</li> </ul>		濃尾平野系 S字状口縁甌の出土		
		奈良・平安 (8～9C前) 近世	竪穴住居址 ピット 溝					

北条小町邸跡（泰時・時頼邸）(No.282)

雪ノ下一丁目377番7地点

## 例　　言

1. 本報は鎌倉市雪ノ下一丁目377番7地点における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる住宅部分の報告である。
2. 発掘調査は店舗建設とともに原因者負担事業分と並行しておこなわれた。遺跡理解を損なわないために、本報にはできるかぎりその成果も取り入れている。
3. 調査体制は次のとおり。

担当者	馬淵和雄・原廣志
調査員	太田美知子・小林重子・渡部律子 (資料整理)・及川加代子(同前)
調査補助員	丹行正・須佐直子・山上玉恵・坂倉美恵子・折茂由利・森本康二・岡陽一郎・秋山哲雄・兼行俊枝 (資料整理)
調査参加者	富岡真之・福本寿夫・増田保・松崎靖弘・西川秋雄
4. 本書作成担当は次のとおり。

遺構図整理	太田・小林・山上・須佐・丹・渡部・及川・兼行・坂倉・馬淵
遺物実測	渡部・及川・兼行・坂倉・小林・須佐・馬淵(木簡)
遺物墨入れ	渡部・及川・兼行・坂倉・小林・須佐・馬淵(木簡)
遺物写真撮影	太田・馬淵(木簡)
原稿執筆	馬淵(第一章／第二章／第三章第1・2節／第五章) 岡(第三章第3節) 秋山(特論)
編集	馬淵
5. 花粉分析については(株)パレオ・ラボ鈴木茂氏に依頼した(第四章に掲載)
6. 出土遺物等、本発掘調査に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

# 目 次

第一章 調査地点概観	125
1. 位置と地勢	125
2. 都市鎌倉の沿革と調査地点	125
第二章 調査の概略	133
1. 調査にいたる経緯	133
2. 方眼設定方法	133
3. 調査経過	133
第三章 検出遺構と出土遺物	136
第1節 概 要	136
1. 屢序と遺構面のあり方	136
2. 出土遺物の概要	138
第2節 各 節	139
1. 近 代	139
2. 近 世	139
3. I 面	148
4. II 面	159
5. III 面	169
6. IV 面	225
7. 表土や櫛乱壙からの採集遺物	252
8. 古代遺跡	253
第3節 人名木簡について	254
1. 出土木簡概要	254
2. 出土状況	256
3. 木簡の性格	256
第四章 花粉分析	261
第五章 まとめと考察	271
第1節 遺 構	271
1. 遺構の変遷と画期について	271
2. 若宮大路の幅について	275
第2節 遺 物	275
1. 構成と変遷	275
2. 遺構別共伴関係	278
特論 御所と北条氏亭 秋山哲雄	282

## 挿 図 目 次

図1 調査地点の位置	125	図40 溝5・6変遷模式図	190
図2 調査地点と近辺の遺跡・旧跡	126	図41 溝5・6木枠部材実測図	折込み
図3 調査地点と近辺の遺跡（拡大）	127	図42 溝5・6肩柱穴列	193
図4 方眼設定図	134	図43 溝5-III・II出土遺物（1）	194
図5 土層断面図・大路側溝対応図	137	図44 溝5-II出土遺物（2）	195
図6 近代井戸	138	図45 溝5-II出土遺物（3）	196
図7 近世造構配置図	140	図46 溝5-II出土遺物（4）	197
図8 方形土壙、同出土遺物（1）	141	図47 溝5-II出土遺物（5）	198
図9 方形土壙、同出土遺物（2）	142	図48 溝5-II出土遺物（6）	199
図10 近世若宮大路側溝、同出土遺物	144	図49 溝5-I出土遺物（1）	200
図11 近世遺物	146	図50 溝5-I出土遺物（2）	201
図12 I面造構全図	149	図51 溝5-I出土遺物（3）	202
図13 建物1、同出土遺物	150	図52 溝6-III、同裏込め出土遺物	219
図14 土壙1・2・3、同出土遺物	151	図53 溝6-II、同裏込め出土遺物	220
図15 溝1、同出土遺物	152	図54 溝5・6東側裏込め出土遺物	224
図16 溝4(若宮大路側溝)、同出土遺物	153	図55 IV面造構全図	226
図17 溝4(若宮大路側溝)、同出土遺物	155	図56 建物8、同出土遺物	228
図18 I面上包含層出土遺物	157	図57 建物9、同出土遺物	229
図19 II面造構全図	160	図58 建物10、同出土遺物	230
図20 建物2・3	161	図59 建物11・大路側溝東肩柱穴列、同出土遺物	231
図21 建物4・5	162	図60 柱穴出土遺物（1）	233
図22 建物6、同出土遺物	163	図61 柱穴出土遺物（2）	234
図23 土壙4	164	図62 柱穴礎板検出状況	237
図24 大路側溝裏込め	164	図63 溝3、同出土遺物	238
図25 大路側溝裏込め下層石組出土遺物	165	図64 IV面上包含層出土遺物	239
図26 II面上包含層出土遺物	167	図65 溝7、同出土遺物（1）	241
図27 III面造構全図	170	図66 溝7出土遺物（2）	242
図28 建物7、同出土遺物（1）	172	図67 溝7出土遺物（3）	243
図29 建物7出土遺物（2）	173	図68 溝8	246
図30 遺物散在部分	174	図69 溝8出土遺物（1）	247
図31 遺物散在部分出土遺物	175	図70 溝8出土遺物（2）	248
図32 溝2、同木組み出水施設	177	図71 表土や擾乱層からの採集遺物	252
図33 溝2出土遺物	178	図72 古代遺物	253
図34 溝2木組み出水施設部材実測図	折込み	図73 人名木簡	257
図35 溝2出水施設出土遺物	181	図74 木簡出土位置図・比高図	260
図36 III面柱穴出土遺物	186	図75 中世造構変遷模式図	272
図37 III面貝砂層出土遺物	186	図76 近隣調査地点との対比	274
図38 III面上包含層出土遺物	187	図77 遺物共伴関係変遷図	277
図39 溝5・6	189		

## 表 目 次

表1 方形土壤出土遺物観察表	143	表34 溝5出土遺物観察表(7)	209
表2 近世若宮大路側溝出土遺物観察表	145	表35 溝5出土遺物観察表(8)	210
表3 近世遺物観察表	147	表36 溝5出土遺物観察表(9)	211
表4 建物1出土遺物観察表	151	表37 溝5出土遺物観察表(10)	212
表5 土壌1・2・3出土遺物観察表	151	表38 溝5出土遺物観察表(11)	213
表6 溝1出土遺物観察表	152	表39 溝5出土遺物観察表(12)	214
表7 溝4(若宮大路側溝)出土遺物観察表	154	表40 溝5出土遺物観察表(13)	215
表8 溝4'(若宮大路側溝)出土遺物 観察表(1)	155	表41 溝5出土遺物観察表(14)	216
表9 溝4'(若宮大路側溝)出土遺物 観察表(2)	156	表42 溝5出土遺物観察表(15)	217
表10 I面上包含層出土遺物観察表(1)	156	表43 溝5出土遺物観察表(16)	218
表11 I面上包含層出土遺物観察表(2)	158	表44 溝6-III, 同裏込め出土遺物 観察表(1)	221
表12 建物6出土遺物観察表	164	表45 溝6-III, 同裏込め出土遺物 観察表(2)	222
表13 大路側溝裏込め下層石組出土遺物 観察表	166	表46 溝6-II, 同裏込め出土遺物観察表	223
表14 II面上包含層出土遺物観察表(1)	167	表47 溝5・6東側裏込め出土遺物観察表	224
表15 II面上包含層出土遺物観察表(2)	168	表48 建物8・9・10・11出土遺物観察表	232
表16 建物7出土遺物観察表	173	表49 柱穴出土遺物観察表(1)	235
表17 遺物散在部分出土遺物観察表(1)	175	表50 柱穴出土遺物観察表(2)	236
表18 遺物散在部分出土遺物観察表(2)	176	表51 溝3出土遺物観察表	238
表19 溝2出土遺物観察表(1)	182	表52 IV面上包含層出土遺物観察表	240
表20 溝2出土遺物観察表(2)	183	表53 溝7出土遺物観察表(1)	243
表21 溝2出水施設出土遺物観察表(1)	183	表54 溝7出土遺物観察表(2)	244
表22 溝2出水施設出土遺物観察表(2)	184	表55 溝7出土遺物観察表(3)	245
表23 溝2出水施設出土遺物観察表(3)	185	表56 溝8出土遺物観察表(1)	249
表24 III面柱穴出土遺物観察表	186	表57 溝8出土遺物観察表(2)	250
表25 III面貝砂層出土遺物観察表(1)	186	表58 溝8出土遺物観察表(3)	251
表26 III面貝砂層出土遺物観察表(2)	187	表59 表土や擾乱壙からの採集遺物 観察表(1)	252
表27 III面上包含層出土遺物観察表	188	表60 表土や擾乱壙からの採集遺物 観察表(2)	253
表28 溝5出土遺物観察表(1)	203	表61 古代遺物観察表	253
表29 溝5出土遺物観察表(2)	204	表62 遺物計数表(1)	279
表30 溝5出土遺物観察表(3)	205	表63 遺物計数表(2)	280
表31 溝5出土遺物観察表(4)	206	表64 遺物計数表(3)	281
表32 溝5出土遺物観察表(5)	207		
表33 溝5出土遺物観察表(6)	208		

## 図版目次

図版1-1 若宮大路 (鶴岡八幡宮社頭上空から) ..... 289	図版10-1 溝5・6北壁土層断面(西半部) ..... 298
1-2 調査地点鳥瞰 ..... 290	10-2 同上(中央部) ..... 298
図版2-1 近代井戸(南から) ..... 290	10-3 同上(東半部) ..... 298
2-2 同上 埋没状況 ..... 290	図版11-1 溝5・6南壁土層断面(東半部) ..... 299
2-3 方形土壤木材検出状況(南から) ..... 290	11-2 同上(中央部) ..... 299
2-4 同上 完掘状況 ..... 290	11-3 同上(西半部) ..... 299
図版3-1 I面東側平坦部全景(西から) ..... 291	図版12-1 溝5 根太木4ホノ穴 ..... 300
3-2 同上 碎散在状況(北から) ..... 291	12-2 溝5 根太木4の刻印 ..... 300
3-3 同上 若宮大路側溝(溝4北から) ..... 291	12-3 溝5 根太木5の刻印 ..... 300
図版4-1 II面東側平坦部全景(西から) ..... 292	図版13-1 木簡4(図53-15)出土状況 ..... 301
4-2 同上 大路側溝裏込め上層石組(南から) ..... 292	13-2 溝5 土師器出土状況 ..... 301
4-3 同上 同 下層石組(南から) ..... 292	13-3 溝5 土師器・鳥帽子出土状況 ..... 301
図版5-1 III面東側平坦部全景(西から) ..... 293	13-4 溝7 土師器・漆器碗(図67-57) 出土状況 ..... 301
5-2 同上 若宮大路側溝東壁(南から) ..... 293	図版14-1 若宮大路側溝・(溝7)(中央の土のう 袋の入った溝) ..... 302
5-3 同上 溝2(西から) ..... 293	14-2 同上 南壁土層断面 ..... 302
図版6-1 III面溝2木組み出水施設土師器 出土状況(西から) ..... 294	図版15-1 若宮大路側溝・(溝8)(北から) ..... 303
6-2 同上 木組み完掘後 ..... 294	15-2 同左(南から) ..... 303
6-3 同上 上流側の板材差込み施設(南から) ..... 294	15-3 同上 北壁土層断面 ..... 303
図版7-1 IV面東側平坦部全景(西から) ..... 295	図版16-1 溝8東壁の工具痕 ..... 304
7-2 同上 若宮大路側溝(溝5)西壁 肩柱穴列(南から) ..... 295	16-2 同上 澄美こね鉢(図70-66)・土 師器(図70-61)出土状況 ..... 304
7-3 同前 東壁肩柱穴列(南から) ..... 295	16-3 同前 漆器碗(図70-71)・板材出土 状況 ..... 304
図版8-1 IV面柱穴232・233・234・235・236 礎板検出状況(南から) ..... 296	図版17 出土遺物(1) ..... 305
8-2 同上 柱穴194・217・271礎板検出 状況(南から) ..... 296	図版18 出土遺物(2) ..... 306
8-3 同上 溝3(西から) ..... 296	図版19 出土遺物(3) ..... 307
8-4 同 土層断面(東から) ..... 297	図版20 出土遺物(4) ..... 308
図版9 若宮大路側溝(溝5・6) ..... 297	図版21 出土遺物(5) ..... 309
	図版22 出土遺物(6) ..... 310

# 第一章 調査地点概観

## 1. 位置と地勢

鶴岡八幡宮前面の若宮大路東側は、神奈川県道跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市No.282）として登録されている。それは西辺を若宮大路、北辺を横大路、東辺を小町大路に囲まれた一辺約200mの方形区画で、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権泰時や時頼らの正亭のあった場所ともいわれている。調査地点はこの区画の一角にあり、鶴岡八幡宮社頭から50mほど南で、若宮大路の東側に臨む。地番は鎌倉市雪ノ下一丁目377番7ほか。

鎌倉市内中心部の平坦地を地勢上からみれば、東の朝比奈や二階堂の狭い谷間を流れてきた滑川と、西からの扇ガ谷川とが、河口近くで合流して形成した扇状地ということになる。調査地点は大体その北域に位置する。現在の海岸線までの距離は約1.8kmほどある。

鎌倉の中心部一帯はほぼ全面的に中世期以降の厚い整地層に覆われているが、その下には基盤層である強粘土質の特徴的な黒褐色土が堆積している。現地表面の海拔は、調査地点付近で約10m前後、黒褐色土上面で8.1m程度である。

## 2. 都市鎌倉の沿革と調査地点

この場所はまさしく中世鎌倉の中核にある。したがって、その沿革は「武家の都」としての鎌倉という都市そのものの変遷を抜きに語ることができない。幕府設置にいたるまでの歴史的変遷からみておきたい。なお、以下地名は便宜上現在のものを用いる。

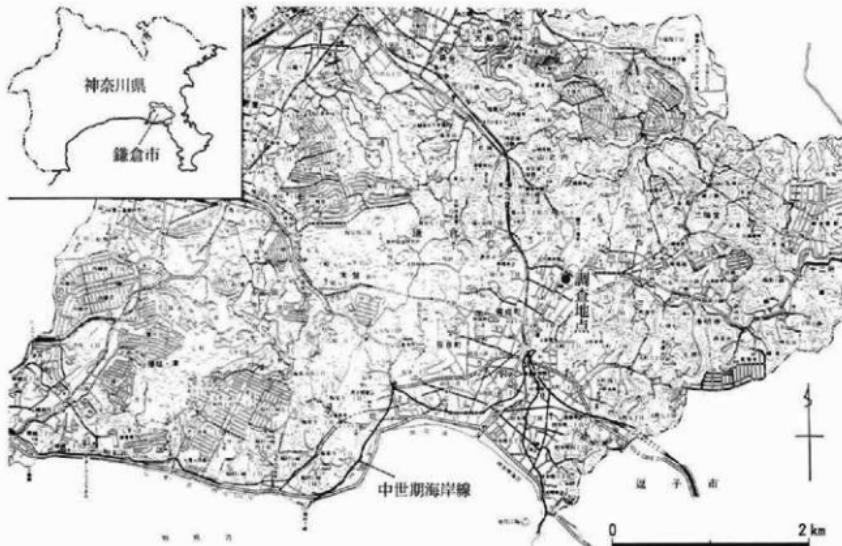


図1 調査地点の位置

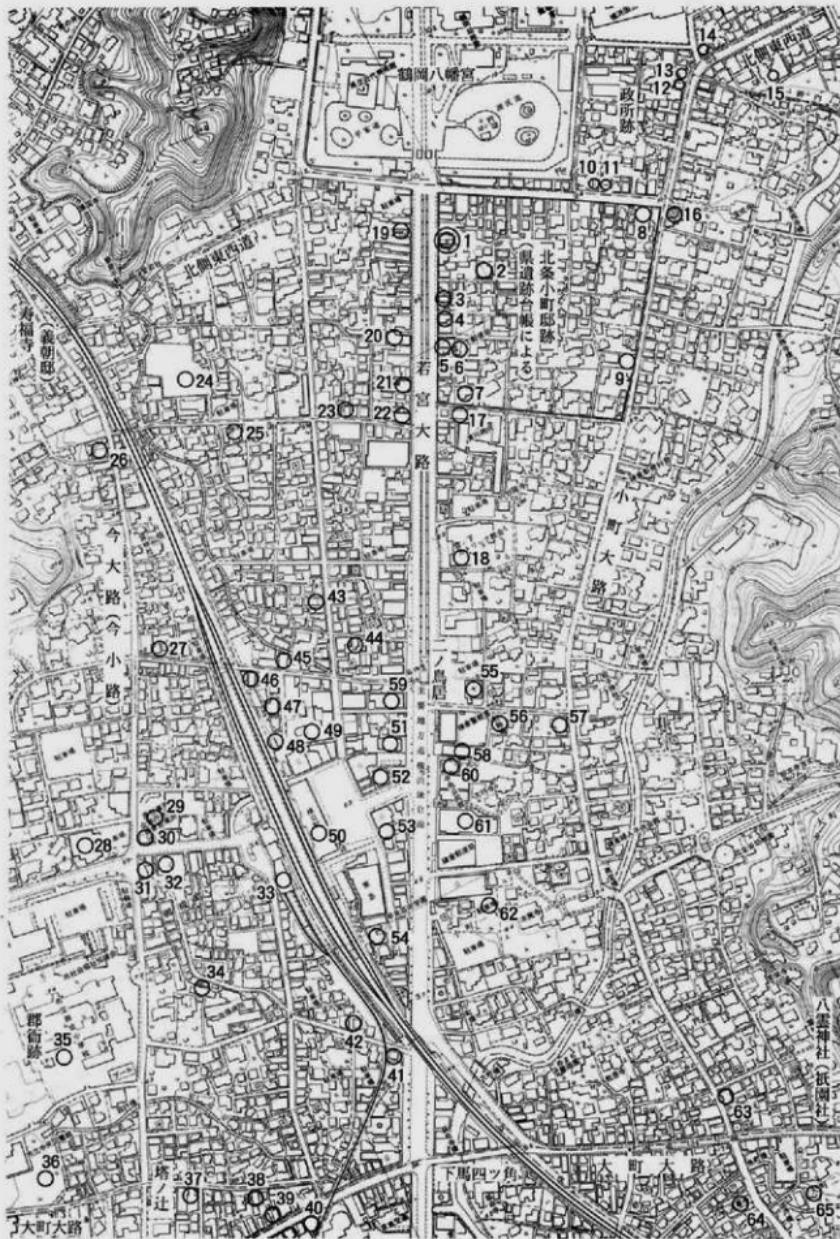


図2 調査地点と近辺の遺跡・旧跡

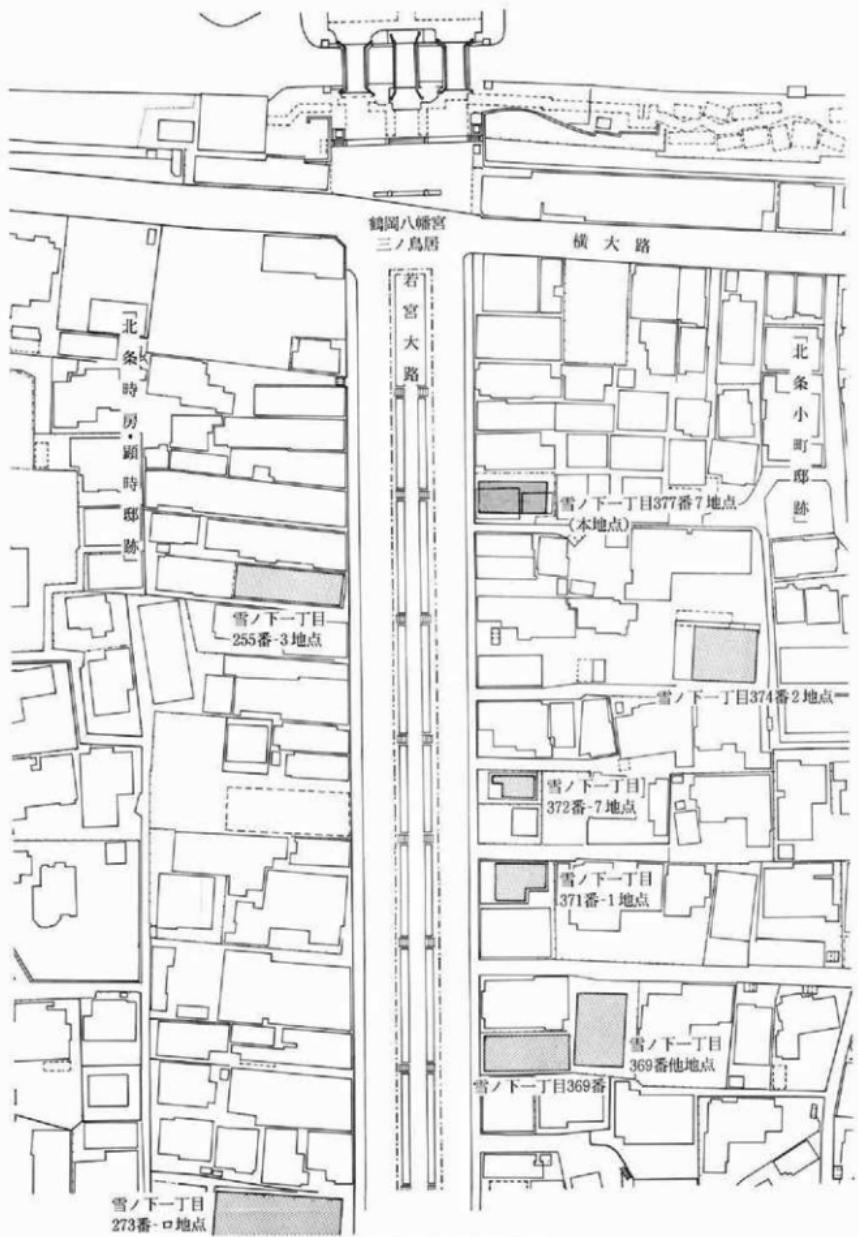


図3 調査地点と近辺の遺跡（拡大）

## 図2 調査地点名

1. 調査地点 2. 北（雪一丁目374番2）3. 北（雪一丁目371番1）4. 北（雪一丁目372番7）5. 北（雪一丁目369番）6. 北（雪一丁目369番他）7. 北（雪一丁目419番3）8. 北（雪一丁目395番他）9. 北（雪一丁目432番2）10. 政（雪三丁目988番）11. 政（雪三丁目987番1・2）12. 政（雪三丁目966番1）13. 政（雪三丁目965番）14. 大倉幕府周辺（雪三丁目606番1）15. 大倉南御門 16. 北条高時邸跡 17. 若（小二丁目366番他）18. 若（雪ノ下カトリック教会）19. 北時（雪一丁目293番1）20. 北時（雪一丁目271番1）21. 北時（雪一丁目273番）22. 北時（雪一丁目274番2）23. 北時（雪一丁目233番9）24. 若（雪一丁目210番）25. 若（小二丁目39番6他）26. 今（屋一丁目131番1）27. 若（屋一丁目74番8外）28. 千葉地 29. 千葉地東 30. 千葉地東（御成町228番2）31. 若（坂田ビル）32. 調訪東 33. 藏屋敷東 34. 若（佐藤病院）35. 今（御成小学校内）36. 今（社会福祉センター）37. 若（由一丁目123番5外）38. 若（由一丁目118番）39. 若（由一丁目）40. 下馬周辺 41. 若（御成町872番14）42. 若（御成町868番）43. 若（小二丁目12番18）44. 若（みのビル）45. 若（小二丁目63番3）46. 小一丁目120番1-47. 若（小一丁目116番）48. 若（駐輪場）49. 若（小一丁目106番）50. 蔵屋敷 51. 若（小一丁目67番2）52. 小一丁目75番地1号 53. 若（小一丁目81番8）54. 早見芸術学園 55. 小二丁目345番2-56. 若（駐輪場）57. 若（小一丁目325番以外）58. 若（スイミングクラブ）59. 日本生命ビル 60. 小1-309-561. (推定) 墓内定員邸跡(中央公民館) 62. 本覚寺境内 63. 大町清興ビル 64. 米町(大町二丁目933番) 65. 米町(大町二丁目2315番外)

※遺跡名称の「遺跡」「地点」「用地」は省略。略字は以下の通り——北=北条小町邸跡、雪=雪ノ下、政=政所、若=若宮大路周辺邸跡群、小=小町、北時=北条時房・劉時邸跡、今=今小路西遺跡、扇=扇谷谷、由=由比ヶ浜

## 律令期以前

この一帯で人の往来した痕跡が確認できるのは弥生時代中～後期からである。調査地点の東約400～500mにある大倉南御門遺跡からは、宮ノ台期と久ヶ原期の住居址数軒が検出されている<sup>1</sup>。調査区近辺からもしばしばこの時代の遺物が採集されており、遺構などは発見されていないものの、遺跡の存在する可能性は低くない。

古墳時代の集落はすでにいくつか発見されている。例えば、台峰・津峰などの周辺山稜部、由比ヶ浜を中心とした海岸砂丘地帯、二階堂・大倉一帯の平坦な微高地などである。これらの地域では大抵といつていいほど当該期の遺構・遺物が発見される。調査地点近辺でも、当該期の遺物は頻繁に採集されている。また、この分布が中世の集落範囲にも一致することに注意しておきたい。

由比ヶ浜にある「和田塚」と呼ばれている塚状の盛土は、この辺にあったという「下向原古墳群」の墳丘のひとつ「采女塚」である。石井進はその被葬者について、『古事記』にいう「鎌倉之別（ワケ）」と関連する可能性を指摘する<sup>2</sup>。鋭い意見というべきだが、当否は措くにしても、ワケの名は畿内政権と結びついた、この地方を統括する有力首長の存在を示すものであろう。そのことがおそらく、次代律令期鎌倉の繁榮を導く端緒になる。この時代末期には、丘陵裾部に多数の横穴墓が造営されている。後世の街並みの原型は、遺構・遺物の分布からみて、このころには形成されていたかもしれない。

## 律令時代

奈良時代には広く集落が展開する。この時代、鎌倉は「相模国封戸租交易帳」中に相模（模）国八郡の一つとして現れる（『正倉院文書』）。現在の若宮大路近辺の鎌倉中心部は、おそらく当時の鎌倉郷にあたり、調査地点もこのうちに含まれている。令制の郷は50戸をもって構成されるので、常に少なくともそれだけの戸数が鎌倉にあったことになる。

この時代の堅穴住居は海岸部・平野部・周辺丘陵部など、いたるところで検出されている。集落構造に枠組みとも呼べるもののが設けられたのはこの律令期が最初であり、以来変貌を遂げつつも、中世都市も基本的にはその枠組みの上に成り立っている。その意味で、律令期にこそ、鎌倉が都市化に向けて歩みだす直接の契機があったと言える。その枠組みを規定したものは、東海道と鎌倉郡衙である。

大化元年（645）に五畿七道制が定められて以来、宝亀二年（771）に改編されるまで、東海道は鎌倉を通っていた。下りでいえば、相模國府から東進して鎌倉郷を抜け、沼浜郷（逗子市）経由で三浦半島

の東岸に出て、横須賀市走水付近から浦賀水道を渡る、そして房総半島を北上し常陸国にいたる、という経路である。宝亀二年、この道はいわば支線に格下げされる<sup>4</sup>が、房総往還の幹線として依然として重要であった。

東海道の鎌倉に入った経路については確定的でない。稻瀬川を河口付近で渡り、海岸部を東行、滑川を渡って、名越から沼浜（逗子市）に抜ける。現在の国道134号線旧道であり、中世以後、若宮大路以東で「大町大路」と呼ばれた道もある。

鎌倉を東西に抜ける道は北の山際にもう一本あった。台峰の集落を抜け、化粧坂から下って鎌倉市内北辺の山裾を通り、朝比奈にいたる道である。この道（以下「北側東西道」と仮称）が当時から存在していたことは、次の点が示唆している。すなわち、現在今小路脇にある荒神社がもと葛原岡にあり、延暦二十年（801）坂上田村麿の勧請と伝えること、杉本寺が天平六年（734）創建と伝えること、などこの北側東西道に面した寺社が律令期に縁起を持っている点である<sup>5</sup>。また、朝比奈峠の麓で行われた発掘調査でも律令期の土器が採集されている<sup>6</sup>、という点もそれを補強する。

以上二本の東西道路を結ぶ道として、おそらく今小路が当時からあった。というのも、今小路西遺跡（御成小学校内）で発見された、鎌倉郡衙と目される大型掘立柱建物群の主軸方位は、現在の今小路と平行または直交しているからだ。つまり、明らかに道路主軸方位が意識されている。となれば、南辺と北辺を通る2本の東西道路、それをつなぐ南北の道、という現在にまでいたる鎌倉の原形は、このころにはほぼ出来上がっていたとみてよいだろう。

これまで市内では、石帶部材の駆尾が長谷小路周辺遺跡（由比ヶ浜三丁目1175番2外地点<sup>7</sup>）から、丸鞆が今小路西遺跡（御成小学校内）と宇津宮辻子幕府跡（雪ノ下カトリック教会地点<sup>8</sup>）から出土している。とくに宇津宮辻子幕府跡（雪ノ下カトリック教会地点）は、当調査地点から約300mという指呼の距離にあり、この一帯にも律令の官吏が往来していたことを示唆している。

#### 王朝国家時代

鎌倉郡衙は、報告書の所見によれば「10世紀のある時点<sup>9</sup>」で姿を消す。代わって登場するのは、新興の坂東武士である。

野口実によれば、当地に武士が入るのは、桓武平氏貞盛流の平維将（貞盛の嫡子）が、受領としての相模守になった正暦年間（990～995）頃である<sup>10</sup>。その孫の平直方は、奥州征伐に功のあった源賴義を見込んで女婿を迎へ、所領の鎌倉を与える。これにより鎌倉は源氏のものとなった。賴朝による開府はこのとき準備されたのであり、鎌倉は都市史上の大きな転機を迎えた。

この時代の集落構造は、基本的に前代を踏襲している。つまり、南の海岸べりの古東海道と北側東西道という二本の東西道路、それらをつなぐ南北の道、という道路配置である。大倉辺から大町に抜ける滑川沿いの南北道（現在の「小町大路」）も、道路脇にある八雲神社（大町祇園天王社）が11世紀末に勧請されているところから、このころには通じていたとみられる。現在の鎌倉は、後述するように、この構造に鶴岡八幡宮と若宮大路を被せたものということができる。

郡衙に代わって鎌倉の中心となったのは、源義朝の「鎌倉之櫛」である。その場所はのちの寿福寺であったという。これは北側東西道路と今小路の交差点に当たる。北側東西道路は、鶴岡八幡宮に寸断されて分かれにくくなっているが、杉本・大倉の辺を西進し、筋替橋から八幡宮西南角の「鉄の井」交差点を経て、直線的に西の源氏山山裾に達する。そこは義朝邸門前である。つまりこの道路は、八幡宮境内南域を斜めに通っていたことになるが、そのように推定すると、調査地点はこの道路からほんの60～70mしか離れていないことになる。

義朝は南北二本の東西道を重視していた。例えば北側東西道路の東側の六浦を常陸の那珂氏に与え<sup>11</sup>、西側の山内を首藤氏に与えた。ともに義朝と緊密な関係にある一族である。古東海道の方は東の沼浜（現在の逗子市）に自らの別邸を置き、西の鶴沼郷も我がものにしようとした。このことは以前に何度か書いたが<sup>12</sup>、ともかく彼が東西南北の守りを固めようとしていたのは確かである。そして、北側東西道路の両側には三浦一族の居館が配されていたらしい<sup>13</sup>。それが本当ならば、調査地点は三浦氏の居館群と至近の位置にある可能性もあるろう。

平安末期には、鶴岡八幡宮付近は小林郷北山と呼ばれていた（『吾妻鏡』治承四年十月十二日条<sup>14</sup>）。これはおそらく寛徳の莊園整理令（1045）にともなう郡郷制の再編により、鎌倉郷から新たに分立したものとみられる。調査地点は、鶴岡八幡宮に近接しているが、どの郷に属していたかは不明である。また八幡宮境内から源氏一族のものとみられる12世紀前半の男女の埋葬人骨が発見されたことがある<sup>15</sup>が、これについて、その状況が特異であること、人名比定の可能性があることなど、かつて筆者は詳論したことがある<sup>16</sup>ので、ここでは省略する。

平安時代末期の鎌倉には、すでに二十近く寺社があり、東国武士の棲梁である源義朝の館もあった。明らかに都市的な様相を備えていたと評価すべきだろう。このことは12世紀前半ごろまでに、東北に荏柄社、東南に抵園社、西南に御靈社、西北に佐助稻荷という、いずれも御靈性の強い都市神が鎌倉を開むように、四隅に次々に勧請されていることからも分かる。

このころ調査地点は義朝邸の東約400m、おそらくは武士の集住地のただなかにあった。

#### 鎌倉時代

『吾妻鏡』によれば、治承四年（1180）十月六日源頼朝は武藏国から鎌倉に入った。九日に大倉に「御亭」を造り始め、十二日には鶴岡八幡宮を由比ヶ浜から「小林郷北山」に遷した（『新宮若宮』）。大倉の新亭はたった二ヵ月後の十二月十二日に完成し、「移徒之儀」がおこなわれた。同日、「關巷直路。村里授号」と伝える。街区の整備が始まったのである。鎌倉がそれまで辺鄙な土地で、人も少なかったと書かれているのはこの日である。

養和元年（1181）七月、現在の鶴岡八幡宮本宮の場所に社殿の営作が始まり、翌月八月十五日に遷宮の儀式がとりおこなわれた。大倉亭といい、八幡宮社殿といい、驚くべきはやさで完成していることに注意したい。翌養和二年（寿永元年）三月十五日、八幡宮社頭から由比浦まで「詣往道」が真っ直ぐ通じた。若宮大路である。調査地点は直接に大路に接しているので、いわばこれ以後、文献資料と関わりを持つことになる。

四月二十四日には社前の田を掘り上げ、池が作られた。おそらくこのころには、八幡宮の方形区画もできていた。現代にいたる鎌倉の都市構造は、ほぼこの養和二年までにできたといってよい。鎌倉幕府の開始時期について文献史学の議論は分かれるが、都市史上では、ここにみた諸事業により、鎌倉は大きく変わることになる。律令期以来の集落構造が崩れ、中世政治都市としての新たな枠組みに移行したのである。それは都市史における鎌倉時代の始まりであった。

大倉幕府の時代は嘉禄元年（1225）まで、半世紀近く続いた。そしてこの年七月十一日、北条政子が死ぬ。すると前年執権に就任したばかりの北条泰時はただちに御所移転を実行した。十月三日に計画が群議され、翌四日に候補地を巡査、十二月にはやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、二十日には將軍藤原頼經移徒の義がおこなわれた。これもまた憤ただしいとしか言いようがないが、いずれにせよこのとき大倉幕府は廃絶、政治の中心は若宮大路一帯に移行した。それは武士の宿館の集合体から、急増する商・職人を主体とした町への転換でもあった。

このときの御所移転について、須藤博史・貫達人・松尾剛次らは『鎌倉市史 総説編』の考察の誤りを指摘している。すなわち、「吾妻鏡」嘉祥元年十一月二十日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という長さが、新御所の大きさではなく、方違にともなう測距の数値であることを明らかにした<sup>6</sup>。松尾の図化を信じるならば、宇津宮辻子幕府は若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道の、東半部北側ということになる。

執権泰時は鎌倉に初めて尺制を導入した。これは京都・奈良などで施行されていた都市の地割制度であり、街区が方眼区画に再編されたことを意味する。また屋敷単位として戸主制を採用した。本調査地点の変遷はこれらの事業を抜きに語れないが、以前にも書いているのでここでは簡単におく<sup>7</sup>。

街中の発掘調査をすると、鎌倉中期以降に地業による街区の刷新が急増することがわかる。そして地業層上の建物では、それまではさまざまであった柱間が統一され、約2mになることもわかってきた。2mとはおそらく198cm - 6尺6寸である。私はかつて、鎌倉時代中期以後の若宮大路の幅を33.6mと算出したことがある。これもほぼ11尺である。さらには、町割も22尺を単位にされているであろうことがおよそ判明した。いずれも1割増しということになる。おそらく、1尺の実長として33cmが採用され、したがって先の数値もそれぞれ6尺・10丈・20丈である可能性がある。明らかにこれはいっせいにとられた措置であり、このような大変革が権力の意思なくして成立しないのは間違いない。繰り返すが、地業は鎌倉時代前期にはまず見出せない。だとすると、これこそが泰時が採った町割改編の方法なのであろう。大事なことが後になつたが、大路幅が33.6mのとき、東側側溝はそれまでの薬研形から、箱形に変わっている（西側側溝のそれ以前の形は不明）。

嘉祥二年（1236）、宇津宮辻子から若宮大路「東頃」へ幕府が移る。しかし、それがどのようであったのか、他の既存施設との関係はどうであったか、など不明の点が多い。宇津宮辻子幕府と同一郭内を移動した、あるいは北に移った、などと言われる。宇津宮辻子幕府の北側にはかねて泰時の正亭があるので、幕府の北方への移動には当然泰時邸の変更がともなうはずだが、『吾妻鏡』にその辺の記述はない。この点は泰時邸の位置からはじめて、根本的な検討が必要であろう。調査地点と直接に関わる問題もある。

鎌倉時代の若宮大路側溝からは、人名の書かれた木簡が過去3点出土している。2点は本調査地点から約100m南の地点からで、「一丈 伊北太郎跡」・「一丈南 くにの井の四郎入道跡」とあった<sup>8</sup>。もう一点は大路をはさんで対面位置にある西側側溝からで、「口二丈 あかき入道□（跡カ）」と書かれていた。これらの木簡は、大路側溝工事という公共事業を幕府が御家人に請け負わせた際の、各々の担当地点を示すものである。御家人役の実例として注目される。なお前2点について、筆者はそれが嘉祥二年の幕府移転にともなうものだと考えている<sup>9</sup>。

鎌倉時代後期以降、調査地点一帯の文献記事は減り、消息はよく伝わらなくなる。しかし鎌倉幕府もこの場所からは移転していないので、付近の重要性は鎌倉幕末まで変わることはない。

#### 南北朝時代以後

南北朝～室町時代前期の鎌倉には、東国統治機関である鎌倉府がおかれて、このころまではなお繁栄を保っていたと想像される。しかし、調査地点付近の様子は不明である。

鎌倉幕府廃絶後、幕府所在地がどうなつたかよくわからない。一体に、公共建物の跡地利用については不明のことが多い。いささか奇異の念を禁じえないところだが、あるいは空地のまま、何も建てられないでおかれることもあったのではないか。というのも、筆者の調査した「東御所」比定地（大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字往柄38番1地点<sup>10</sup>）において、そのような状況が見て取れるからである。また、

鎌倉府跡地でも、近在住民がいつか「公方」の帰ってくることを期待して、空閑地のままにしておいたという伝承がある。

室町後期～戦国時代の鎌倉は町衆の往来する町場であったと、最近の研究は指摘している<sup>20</sup>。江戸時代には、江ノ島・鎌倉は江戸からの手近な観光地として賑わったらしい。またかつての北側東西道は相模湾の魚を江戸に運ぶ搬路として、盛んに荷車が行き來したという。

#### 〈注〉

1. 1981年度・1983年度ほか調査（報告書未刊行）  
及川良意「大倉南御門遺跡C地点出土の土器」馬瀬和雄他「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下字大倉耕地569番1地点発掘調査報告書」大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団 1990
2. 石井進「都市としての鎌倉」「武士の都 鎌倉」（『よみがえる中世』3）平凡社 1989 29頁
3. 「正倉院文書」正集十八（『神奈川県史 資料編』1-58）
4. 「光明天皇」『続日本紀』三十一
5. 以下、市内の寺社の沿革については次の諸書などによる  
川副武胤・貴達人他『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館 1959  
同上『鎌倉廃寺辞典』有隣堂 1979
6. 馬瀬和雄『鎌ヶ谷北遺跡』鎌ヶ谷北遺跡発掘調査団 1983
7. 馬瀬和雄・長谷小路周辺遺跡「由比ヶ浜三丁目1175番2外地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」10 鎌倉市教育委員会（以下市教委）1994
8. 「今小路西遺跡（御成小学校内）」発掘調査報告書 市教委 1980
9. 調査担当者兼実教示
10. 注8前掲報告書
11. 野口実「鎌朝以前の鎌倉」『古代文化』45 (財)古代学舎会 1993
12. 網野善彦「柳家家所蔵『大中臣氏略系図』について」『茨城県史研究』48 茨城県史編集委員会 1982 37頁
13. 馬瀬和雄「武士の都 鎌倉 一その成立と構想をめぐってー」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』(『中世の風景を読む』2) 新人物往来社 1994 23～25頁
14. 石丸熙『都市鎌倉の武士たち』新人物往来社 1993 17～19頁
15. 以下、「吾妻鏡」の引用は『新訂増補 国史体系』本による
16. 松尾宣方他『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査』市教委 1986
17. 注13馬瀬前掲論文 25～29頁
18. 注13馬瀬前掲論文 21・22頁
19. 須藤博史「宇都宮辻子幕府の位置について」「鎌倉」11 鎌倉文化研究会 1963  
貴達人「第二章 古代・中世の鎌倉」「鎌倉市史 近世通史編」吉川弘文館 1989 59・60頁  
松尾剛次「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館 1993 36～70頁
20. 馬瀬和雄「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」「鎌倉」69 鎌倉文化研究会 1992  
注13馬瀬前掲論文 43～47頁
21. 馬瀬和雄「中世鎌倉若宮大路側溝出土の木簡」「日本歴史」第439号 吉川弘文館 1984  
同「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地点発掘調査報告書」市教委 1985
22. 注13馬瀬前掲論文 49頁
23. 馬瀬和雄「大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄38番1地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」9 市教委 1993
24. 藤木久志「中世鎌倉の祇園会と民衆」「神奈川地域史研究」11号 1993 など

## 第二章 調査の概略

### 1. 調査にいたる経緯

1993年4月、鎌倉市雪ノ下一丁目377番7地点において、店舗併用住宅の開発申請にともなう事前相談があった。申請地が「北条小町邸跡」（鎌倉市No.282遺跡）にあるところから、鎌倉市教育委員会文化財保護課は同年5月13日に予定地内で試掘調査をおこない、現地表下約70cm以下に良好な遺物包含層と遺構面を確認した。建築計画が地下約5mの掘削をともなうため、設計変更が不可能ならば埋蔵文化財発掘調査は不可避である、と文化財保護課は判断した。そして施主らと協議を重ねた結果、次のように発掘調査が実施されることになった。

建築面積117m<sup>2</sup>のうち店舗部分が65m<sup>2</sup>、自己用住宅部分が52m<sup>2</sup>であり、前者を原因者負担により、後者を国庫補助事業としておこなう。それぞれの調査期間については、全体を面積比と応分に分割することにする。

調査は、残土処理の都合上調査区を東西に分割し、まず東半部から始めることにした。地表下約80cm前後まで近・現代の整地層が及んでいるため、70cmまで重機によって除いた。東半部の調査終了後、続いて西半部の調査に入った。こちらもまず、重機により近・現代の土を除いてから始めた。

### 2. 方眼設定方法

測量方眼の設定方法は次のとおり。

方眼は若宮大路中心軸に平行・直交する方向で、5m間隔で配した。便宜上、平行方向の軸線を南北軸、直交方向のそれを東西軸と呼び、前者に西から算用数字を、後者に北からアルファベット（大文字）を順に付した。各方眼区画の呼称は、その北西角の軸線交点を充てた。方位はすべて真北を使用している。南北軸方位はN-28° 06' -Eである。

この方眼は次のように鎌倉市4級基準点に連結している。

調査地点近辺の4級基準点は、鶴岡八幡宮社頭のT002と、社頭から約100m南の若宮大路葛脇のT025の2点がある。まず、調査区西側外のB軸延長上に任意点V.P.01を置いた。これは軸交点2-Bから5.34mの位置にある。このV.P.01とT025の関係は、B軸から時計回りで角度100°、距離44.30mである。一方、4級基準点からV.P.01をみると、T002とT025の2点を結んだ線から、T025を支点に5°36' 東で、距離44.30mの位置にある。

調査地点は、中心付近で北緯35°19'11" 4、東経139°33'28" 8に位置する（小数点第2位以下切り捨て）。

### 3. 調査経過

調査期間は原因者負担分を'94年12月1日から'95年1月19日まで、国庫補助事業分を同1月20日から2月28日までとした。日誌抄によりその間の経過を記すが、発掘調査という作業の性質上、両者を切り離すことには無理があり、ここでは併せて記載する。

12月1日 機材調達と整備

5日 重機掘削開始

8日 機材搬入

9日 遺構面検出作業開始

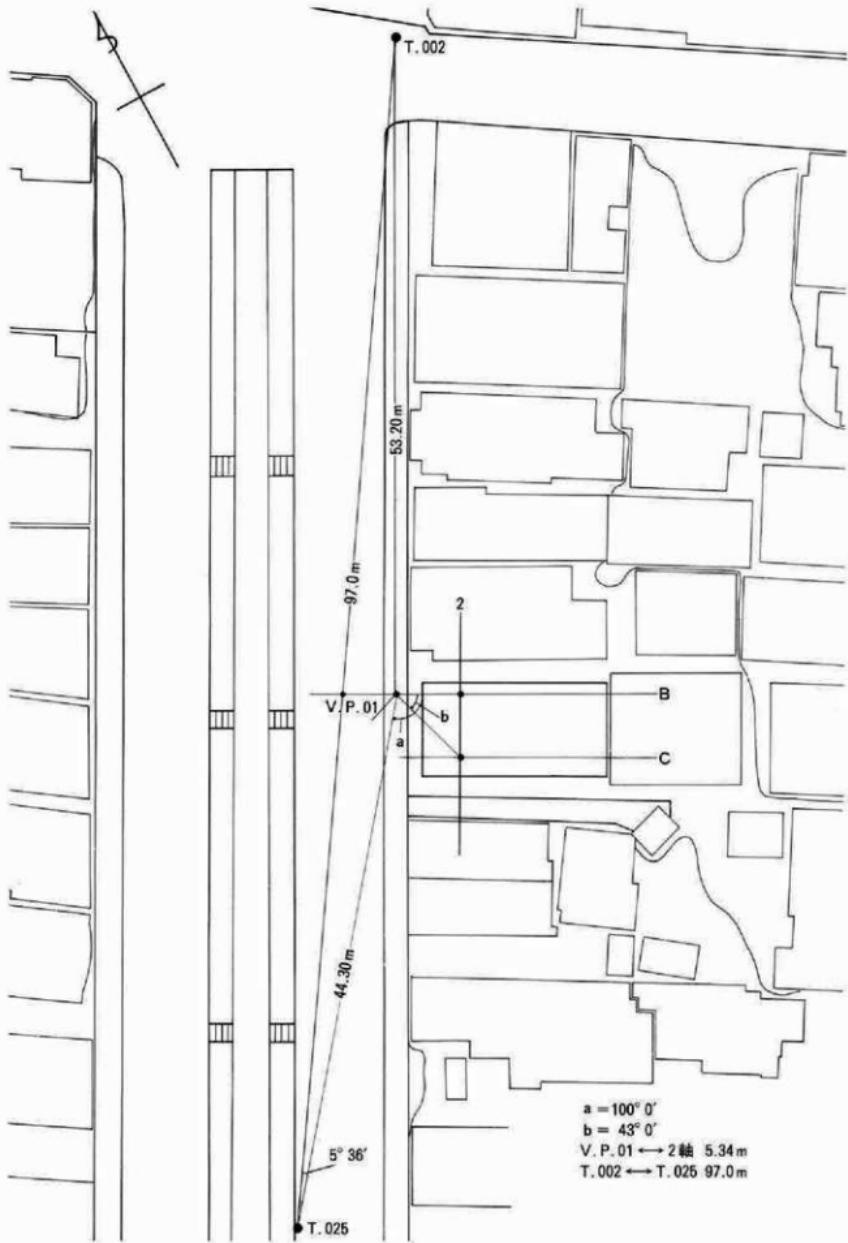


図4 方眼設定図

- 17日 I 全景写真撮影  
19日 II面造構検出手作業開始  
24日 II面全景写真撮影  
26日 III面造構検出手作業開始  
1月13日 III面全景写真撮影  
14日 IV面造構検出手作業  
19日 IV面全景写真撮影  
20日 西半部重機掘削開始  
2月10日 若宮大路側溝（溝5・6）写真撮影（外部委託）  
18日 若宮大路側溝（溝7）写真撮影（外部委託）  
27日 若宮大路側溝（溝8）写真撮影  
28日 機材撤収

#### 謝 辞

現地調査および資料整理を通じ、多くの方々や機関から助言・援助を賜った。ここに銘記し、感謝の意を表する。

網野善彦・石井進・伊原恵司・大河内勉・大三輪龍彦・小川淳一・小野正敏・金丸義一・菅野成寛・菊川英政・小島道裕・小松茂憲・五味文彦・惟村忠志・斎藤直子・坂井秀弥・佐藤仁彦・汐見一夫・水藤真・鈴木亘・関口欣也・武内正和・田代郁夫・玉林美男・繼実・手塚直樹・Trinh Cao TUONG・永井正憲・貫達人・根本志保・野本賢二・服部敬史・服部久美・服部実喜・BUR. Michel・福田誠・藤沢良祐・藤原良章・堀内明博・堀越宏一・松尾剛次・松尾宣方・三浦勝男・宮田次郎・村井章介・山崎理香・吉岡康暢・吉田靖

(五十音順)

社団法人鎌倉市高齢者事業団・東国歴史考古学研究所・(株)紅谷・(株)三井建設

### 第三章 検出遺構と出土遺物

#### 第1節 概 要

##### 1. 層序と遺構面のあり方

層序と遺構面の概要を略述するが、遺構は上層から下層まで大きく二つに分けることができる。すなわち、建物や土壌などのある調査区東半の平坦部と、若宮大路側溝が何条も南北に走る西半部である。なお、以下それぞれ「東側平坦部」および「大路側溝部」と仮称する。また、大路側溝を数えるとき、形態や位置が大きく変わったことを目安にしているので、基本的に済済や小さな形状変化は数に加えていない。ただし、重要な形状変化を認めたときには、溝番号の次に古い順にローマ数字を付して、区別した。

第二章でも触れたとおり、地表下80cm前後まで近・現代の客土層が及んでいる。調査はこの層を70cmまで重機で排除することから始められた。以下は人力によったが、10cmほどの厚みの残ったこの層を除くと、すぐに中世前期の包含層が現れる。中世後期から近世にかけ、遺跡一帯に人の往来がなかったとは考えられず、実際に近世期の遺構自体は当調査で検出されているので、この状況は近代になって付近が削平されたことを物語っている。これは鎌倉の近代史を考えるひとつの材料となるだろう。

さて、客土層下の包含層は灰褐色砂質土だが、10cm前後の厚みしかなく、これを除くと最も中世の生活面が現れる。これをⅠ面と呼び、最初の遺構面とした。海拔は8.6m前後である。中世後期以後については、生活面などの遺存はないものの、井戸や土壌といった深い掘方を持つ遺構を、この面でいくつか検出することができた。また調査区西域で、近世の若宮大路とその側溝を検出した。大路側溝は中世期のものに比べ、浅く、細い。

Ⅰ面の主体である中世遺構には、掘立柱建物や土壙、若宮大路側溝などがある。この面の東北域には円礫やシルト岩小塊、貝殻片などを敷いた面も認められた。

Ⅰ面が載っているのは、主として土器片などを多く含む明褐色、あるいは橙褐色の粘質土である。この層は15~20cmの厚みがあり、これを除くと炭化物が薄く、しかし広範に堆積している。Ⅱ面はこの炭化層下にある。海拔は8.4m程度である。

Ⅱ面東側平坦部には掘立柱建物が数棟かさなり、若宮大路側溝の脇には柱穴列が並んでいる。また相互の関連こそ認められなかつたが、ほかにも多数の柱穴が検出された。大路側溝はしっかりした逆台形の掘方を持ち、木枠の存在も確認できた。

Ⅱ面下には10~20cmほどの厚みをもった暗褐色粘質土がある。これを排除すると、割合均質な砂や細かく碎いた貝片を敷いた層が現れる。この面をⅢ面とした。海拔8.2~8.3mにある。

Ⅲ面では、東側平坦部に掘立柱建物数棟を含む柱穴群、木製の排水口を持つ東西溝などを検出した。また、大路側溝はやはり逆台形で、箱形の木枠を入れている。特筆すべきは、御家人役を示すと考えられる木簡が3枚、溝中から出土したことである。また側溝の両横には、控え柱のものとみられる柱穴列が並ぶ。さらに中世若宮大路らしきシルト岩を敷いた版築面も、調査区西辺で認められた。

Ⅲ面の下は貝殻片やシルト岩粒子をたくさん含む暗褐色粘質土で、15cm前後の厚みがある。この下がⅣ面である。Ⅳ面は茶褐色ないし黒褐色強粘質の中世基盤層、およびその直上層である。海拔8~8.2mあたりに位置する。

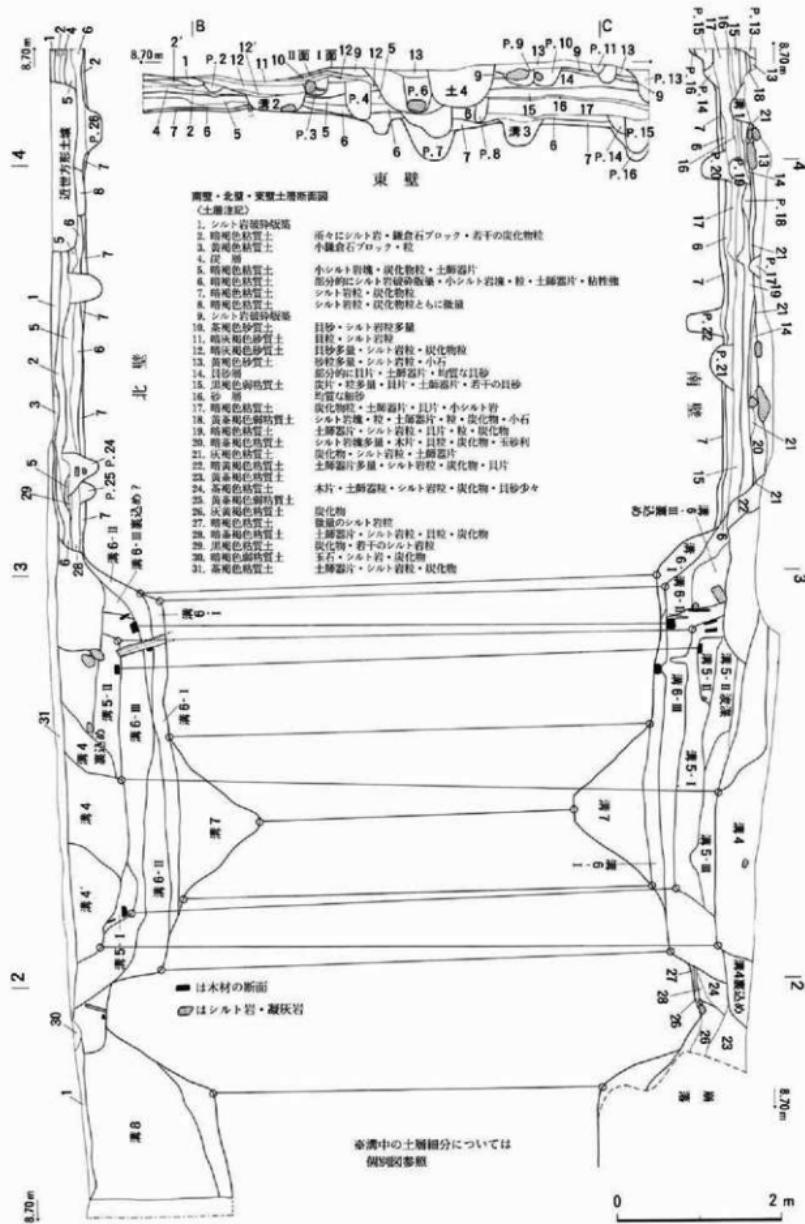


図5 土層断面図・大路側溝対応図

IV面では、東側平坦部で数棟の掘立柱建物や柱穴列、土壙、東西に走るU字溝などを検出した。また大路側溝としては、薬研形と箱形の2条があった。いずれも鎌倉時代の初期に属し、素掘りである。

IV面下の中世基盤層の厚さは50~70cmほどもあり、その下は青灰色で無遺物の海成砂層となる。この層は湧水が大変多く、掘削後はほとんど即座に原形が損なわれる。

## 2. 出土遺物の概要

出土遺物は、テン箱換算で総数135箱に及んだ。そのほとんどが中世土師器〔かわらけ〕と木製品で、このほか中世陶器と自然遺物がある。舶載陶磁器は異例に少なかった。木製品の多くは大路側溝部からの出土である。層位・地点別出土点数の詳細については、第五章第2節に示す。

以下、中世土師器は単に「土師器」と呼ぶ。またその成形技法については、ロクロ成形を「R種」、手づくり成形を「T種」と略称する。

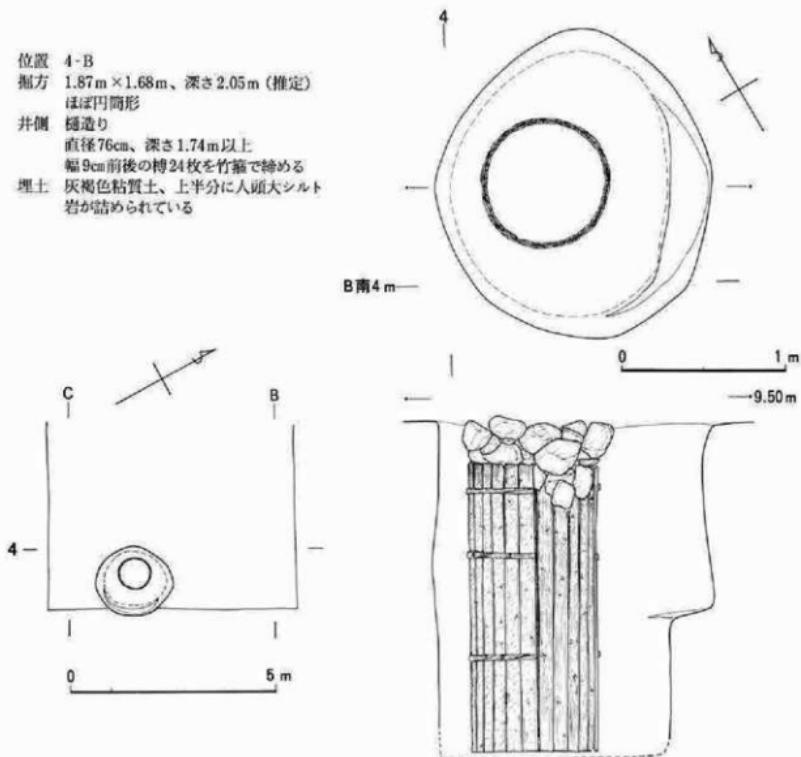


図6 近代井戸

## 第2節 各 説

### 1. 近 代

前節で触れたとおり、近・現代の客土層を剥がすとすぐに中世層が現れるところから、近世以降の生活面は削平されたものとみられる。しかし、井戸や土壌といった深い掘方を持つ造構はⅠ面以下にまで達していたので、辛うじていくつかを検出することができた。ここでは、そのうち近代造構として唯一残っていた井戸を紹介しておく。

#### 近代井戸（図6）

調査区東壁際4-Bにある。当調査の全造構中で最も新しい。崩落の危険性があって底面まで掘りきることはできなかったが、井側を抜き取れたので、およその深さを推定することは可能である。

井側は桶造りで、直径76cm。深さは2.05m以上になる。幅9cmの博（くれ）24枚を、縫った竹の箱（たが）で締めている。箱は3段を確認できた。下端から1.7m前後のところで壊され、人頭大のシルト岩で埋められている。博表面に機械で削った跡があるが、現況建物下にあり、第2次大戦前後の井戸の好資料といえる。

### 2. 近 世

近世造構も生活面が残っていたわけではなく、Ⅰ面調査時に、深い掘方を持つ土壌や溝が検出されたものである。したがって、図7の近世造構全図は実際に検出した面を図化したのではなく、Ⅰ面造構から近世に属することが確実なものを抽出して作図したものであることをことわっておきたい。

#### 方形土壌（図8・9）

調査区北壁際東寄りに検出した。4軸とB軸の交点付近にあり、北半は調査区外にある。方形もしくは長方形で、南辺の長さ2.08m、確認面からの深さ35cm。断面は箱型をしている。

埋土は非常に特徴的で、上層には板や角材、日常雑器などが乱雑に投げ込まれ、間層をはさんで中層以下には、サザエをはじめとした貝殻が大量に詰まっていた。あたかも貝塚のように、ほとんど貝殻のみで層を形成している。

この状況から想像するに、付近の若宮大路脇に休憩所を兼ねた観光客相手の土産物屋があり、客に食べさせたサザエの殻などを、この土壌に捨てていたものと考えられる。上層の板材などは廃棄時に投げ込まれたのである。

出土遺物には日常雑器が多い。18世紀後半から幕末か。

#### 近世若宮大路側溝（図10）

2軸より西に近世期のものとみられる若宮大路側溝を検出した。上部を削り取られているので正確な寸法は不明だが、現況で最大幅1.20m、深さ15cmほどある。埋土は灰褐色砂質土。断面は皿形。

出土遺物には、溝であるためか土師器をはじめとする中世のものが多い。瀬戸・美濃産の鬼板すり鉢が出土している。

本址で注意しなければならないことは、その位置である。後述する鎌倉後期の大路側溝より中心で約4m前後若宮大路側に寄っている。大路の西側では近世期の側溝が検出されていないので、道路幅の算出はできないが、狹まったことは確かであろう。側溝自体、壁・底面とも良好とはいがたく、近世期若宮大路の營繕があまりしっかりしていなかったことを物語るのだろうか。

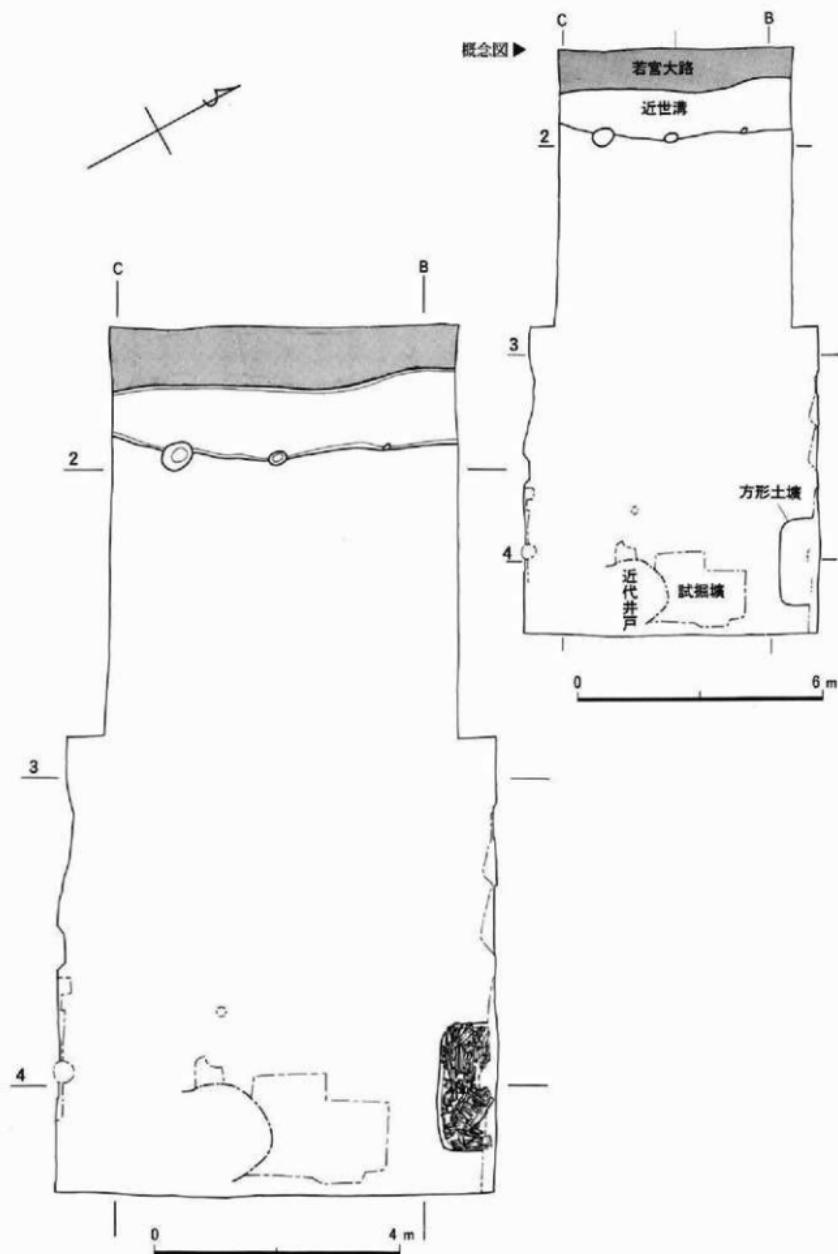


図7 近世遺構配置図

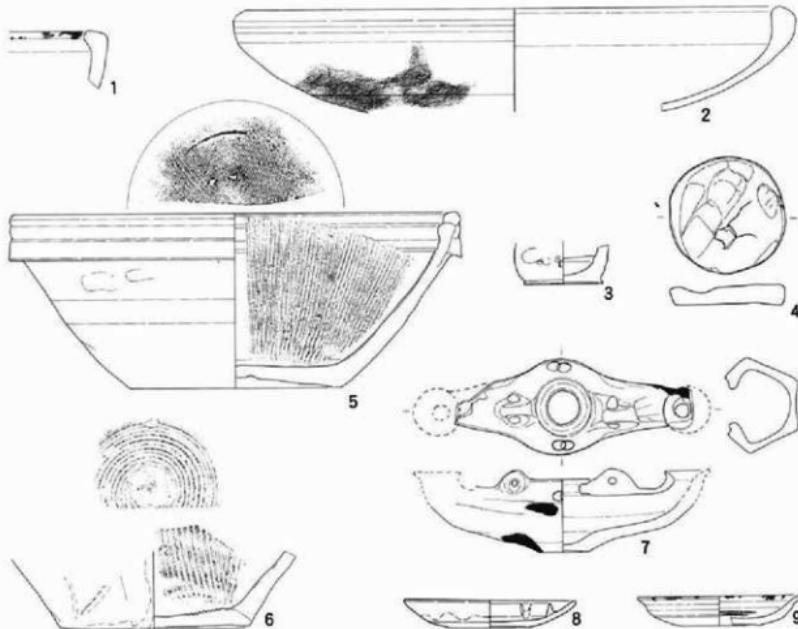
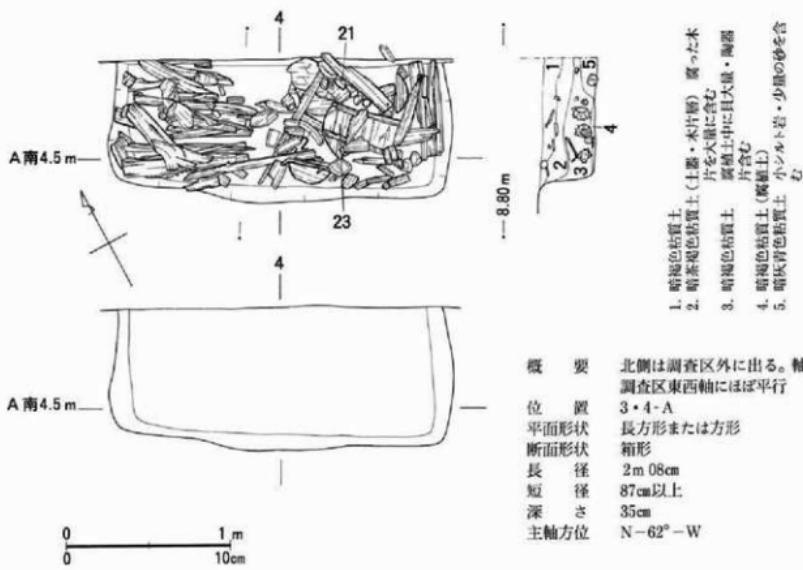


図8 方形土壙、同出土遺物 (1)

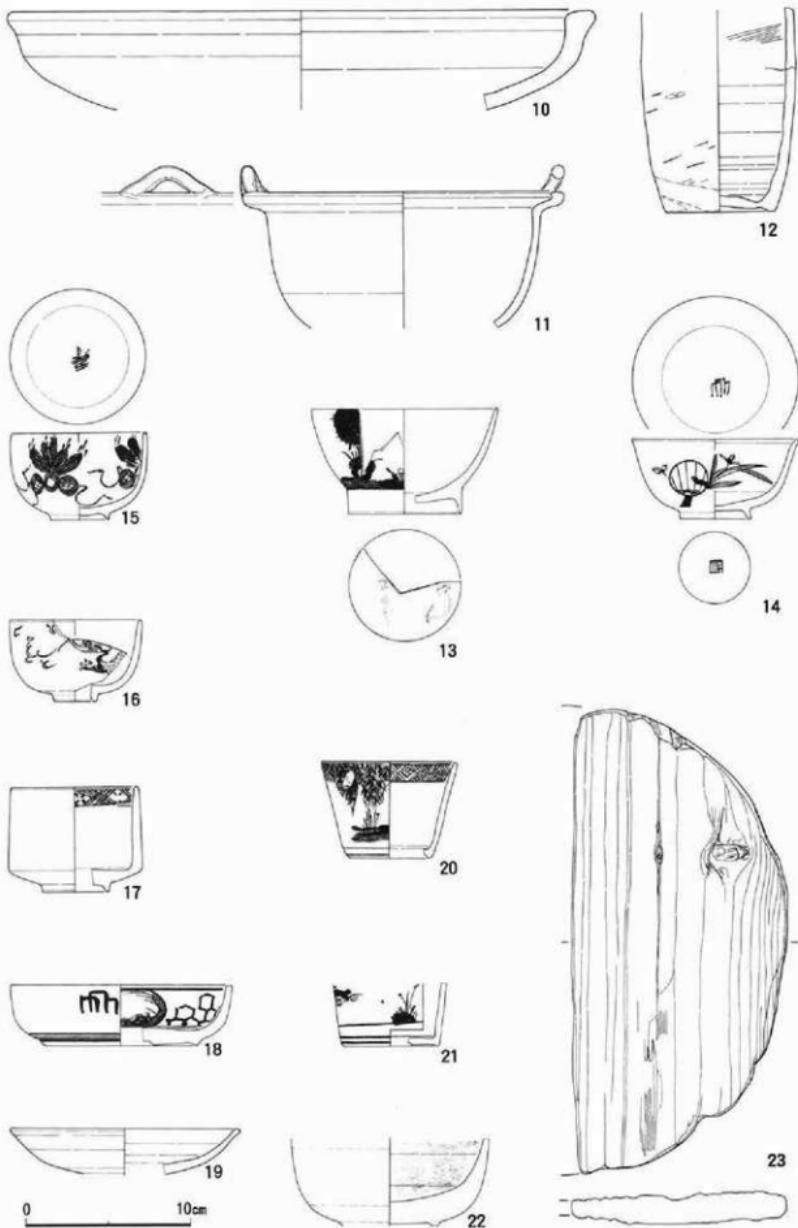


圖9 方形土塘 同出土遺物 (2)

1	土製 火鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 針状物質含む キメ細かい 色調 橙色 備考 スス付着
2	ほうろく	寸法 口径(32.8)cm 成形 ロクロ引き上げ 外底部へラ削り 胎土 針状物質含む キメ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 外底部に煮焼き使用痕あり
3	不明土製品	寸法 底径4.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 灰褐色 焼成 良好
4	土製品	寸法 径7.0cm 厚さ1.3cm 成形 手づくね 片面に指頭痕あり 胎土 灰褐色 焼成 良好
5	備前 すり鉢	寸法 口径27.0cm 底径13.0cm 器高10.7cm 成形 ロクロ 回転台使用 内側面内底面条線あり 胎土 長石 黄色粒子多数含む 色調 赤褐色 焼成 良好
6	瀬戸美濃 すり鉢	寸法 底径11.6cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 外面下部へラ削り 内面条線1束12本 内底部にも同心円状に茶擦巡る 胎土 淡茶灰色 小石 白色粒 シルト岩粒含む 軸薬 茶褐色 内外面共施釉 焼成 良好
7	近世 土製品 ひょう燭	寸法 口径2.0cm 底径3.0cm 器高4.5cm 全長(18cm) 胎土 橙色 針状物質 白色粒含む 軸薬 橙褐色不透明 焼成 良好 備考 スス付着
8	美濃 灯明皿受け皿	寸法 口径10.4cm 底径4.6cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 胎土 灰白色 針状物質 白色粒含む 軸薬 ツヤのある鉄筋 焼成 良好
9	志戸呂 灯明皿上皿	寸法 口径10.0cm 底径4.8cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 胎土 赤褐色 針状物質 石粒子含む 軸薬 ツヤのない鉄筋 焼成 良好 備考 スス付着
10	瀬戸美濃浅鉢	寸法 口径(36.0)cm 胎土 淡黃白色 気孔多・軟質土 軸薬 黄灰緑色の灰釉 焼成 良好
11	陶器鍛軸轔	寸法 口径19.6cm 成形 ロクロ 胎土 白色粒含む 色調 暗茶褐色 焼成 良好
12	瀬戸 徳利	寸法 底径6.8cm 成形 ロクロ 脳部中位に難ぎ目あり 上下に分けて成形し脳部で難ぎ足したか? 胎土 淡黃灰色 軸薬 黄灰緑色の灰釉 焼成 良好
13	肥前系染付け 広東瓶	寸法 口径11.4cm 底径(7.0)cm 器高6.4cm 成形 ロクロ 素地 灰白色 文様 草花 内底面に文字又は文様あり 焼成 良好 備考 焼き難ぎ度あり
14	肥前系 染付 瓢箪	寸法 口径10.2cm 底径4.4cm 器高4.9cm 成形 ロクロ 素地 黄白色 文様 風鈴又はうちわと植物文を3ヵ所描く 内底面に源氏香文 底裏にくずれた洞窟文あり 焼成 良好
15	肥前系 染付 瓢箪	寸法 口径8.2cm 底径3.6cm 器高5.3cm 成形 ロクロ 素地 灰色 硬質 文様 植物文を3ヵ所描く 内底面に寿の文字か? 焼成 良好
16	肥前系 染付 瓢箪	寸法 口径8.0cm 底径(2.4)cm 器高5.0cm 成形 ロクロ 素地 灰白色 文様 蝶鳳凰 内面口縁部 内底面に2本の線あり 焼成 良好
17	肥前系 かけ分け瓶	寸法 口径7.6cm 底径(4.2)cm 器高6.4cm 成形 ロクロ 素地 灰白色 文様 内面口縁に格子文 軸薬 内面透明釉 外面青磁釉 焼成 良好
18	肥前系 染付 皿	寸法 口径13.6cm 底径(9.2)cm 器高3.7cm 成形 ロクロ 龜ノ目高台 素地 白色 文様 内面草花 龜甲文 外面に源氏香文 焼成 良好
19	磁器	寸法 口径14.0cm 成形 ロクロ 素地 灰白色 黒色粒子 軸薬 内外面青磁釉 内底面龜ノ目軸剥ぎ 焼成 良好
20	肥前系 染付 猪口	寸法 口径8.2cm 底径(4.8)cm 器高5.9cm 成形 ロクロ 素地 白色 文様 箕と人物 内面口縁部連続文 焼成 良好
21	肥前系 染付 猪口	寸法 底径(6.0)cm 成形 ロクロ 龜ノ目高台 素地 白色 微気泡あり 文様 草花と青海波か? 焼成 良好
22	漆器 瓢箪	寸法 底径(6.0)cm 成形 内面朱漆塗り 外面黒漆塗り,
23	曲物 底板	寸法 径(28.5)cm 厚さ1.8cm

表1 方形土壙出土遺物観察表

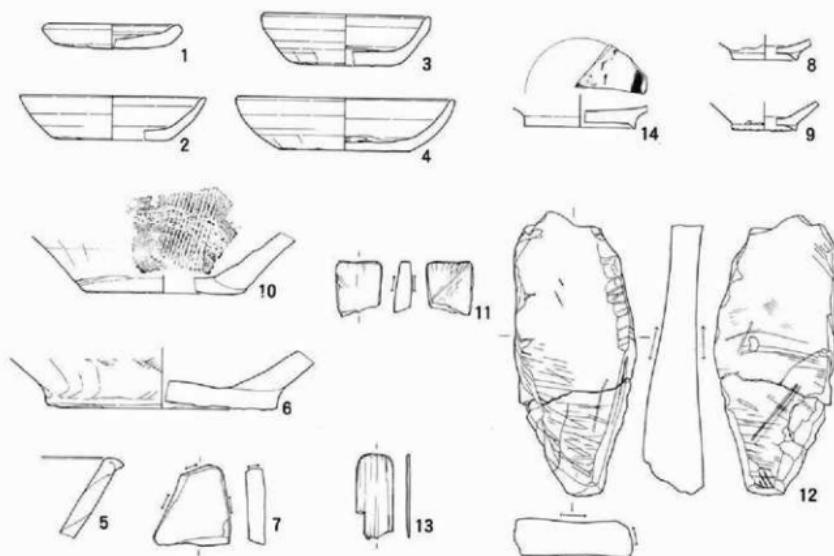
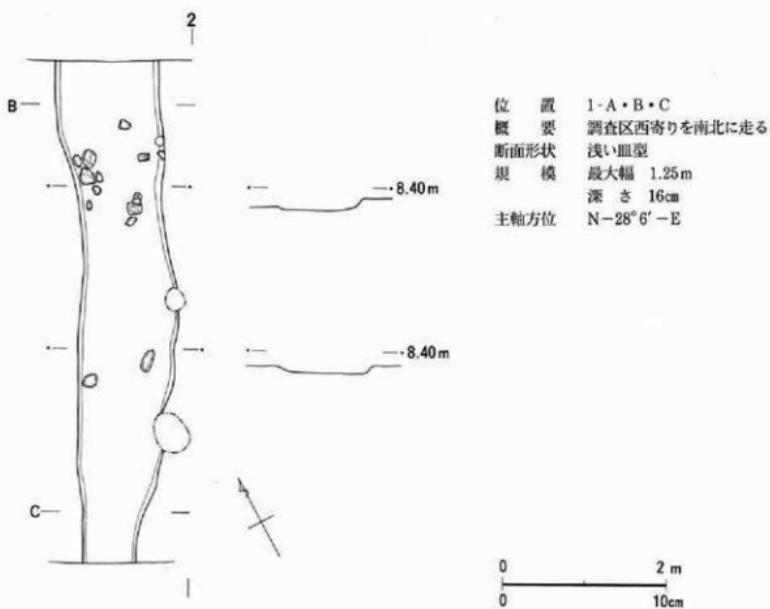


図10 近世若宮大路側溝、同出土遺物

1	土 師 器	寸法 口径 8.6cm 底径 6.0cm 器高 1.5cm 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
2	土 師 器	寸法 口径 11.4cm 底径 (7.0)cm 器高 2.7cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好
3	土 師 器	寸法 口径 10.4cm 底径 (6.2)cm 器高 3.1cm 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 茶褐色 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好
4	土 師 器	寸法 口径 13.4cm 底径 8.0cm 器高 3.2cm 胎土 針状物質 小石含む 色調 淡橙色 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
5	常滑ごね鉢 II類	寸法 不明 成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 灰黒色 砂粒 小石 長石含む 色調 赤紫色 燒成 良好 備考 板状圧痕あり
6	常滑ごね鉢 II類	寸法 底径 (14.0)cm 成形 輪積 胎土 灰褐色 砂粒 小石 長石含む 色調 灰褐色 燒成 良好
7	転用常滑	寸法 長さ 4.9cm 幅 4.6cm 厚さ 1.0cm 胎土 灰黒色 小石 長石含む 色調 椿褐色 燒成 良好
8	早 烏	寸法 底径 (4.0)cm 成形 手づくね 内底部ナデ 高台貼り付け 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰白色 燒成 良好
9	山茶碗 北 部 系	寸法 底径 (4.0)cm 成形 ロクロ 高台貼り付け 高台に粉剝離あり 胎土 砂粒 小石含む 色調 白褐色 燒成 良好
10	瀬戸美濃 すり鉢	寸法 底径 (10.0)cm 成形 輪積 内側面条線1束12本 胎土 黄灰色 砂粒 小石含む 瓜葉 鉄輪
11	砥 石	寸法 長さ (3.0)cm 幅 (3.0)cm 厚さ 0.6cm~0.9cm 備考 中砥 4面砥面
12	砥 石	寸法 長さ 1.8cm 幅 7.4cm 厚さ 1.8cm~3.5cm 備考 中砥 5面砥面 二次焼成を受ける
13	不明木製品	寸法 長さ (5.2)cm 幅 2.3cm 厚さ 0.2cm 備考 極目取り ヘラか?
14	肥前系 染付皿	寸法 底径 6.8cm 成形 ロクロ 素地 灰褐色 粉っぽい 文様 山水? 貞須 筆書き 藍色 燒成 良好

表2 近世若宮大路側溝出土遺物観察表

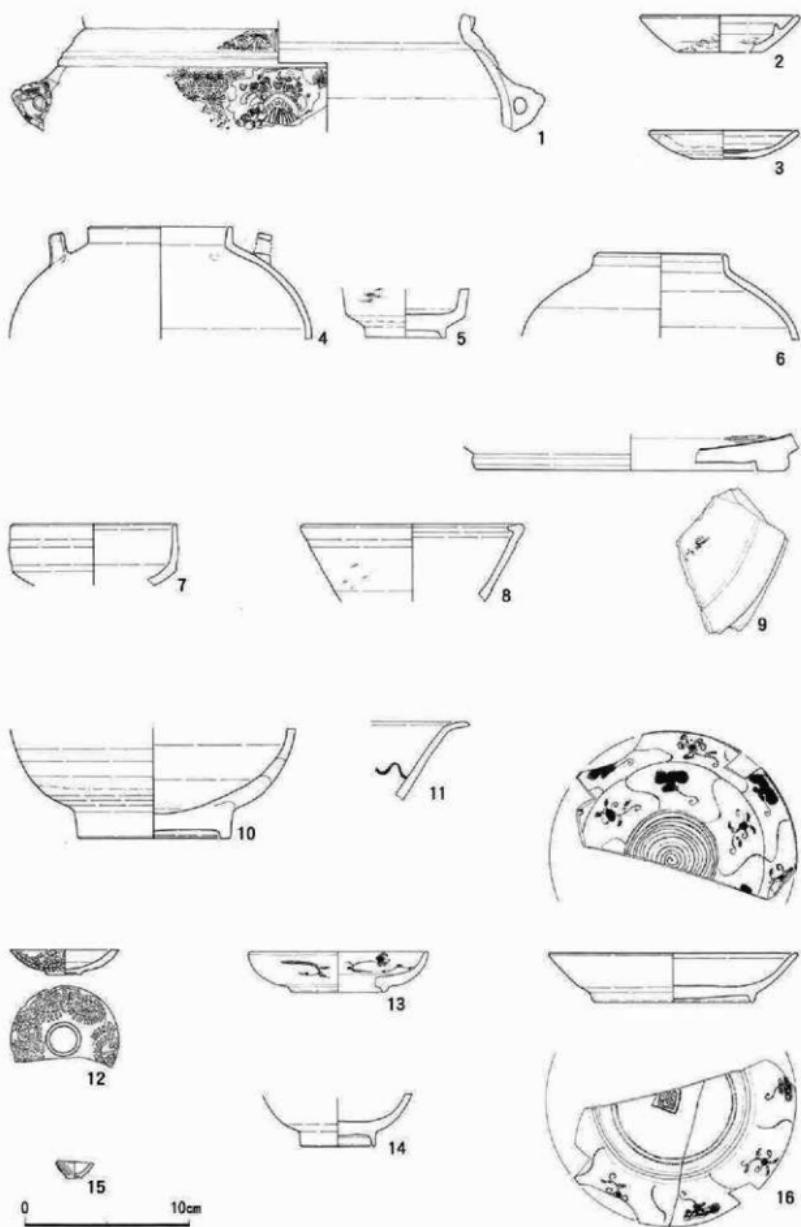


図11 近世遺物

1	瓦器 土釜	成形 輪轉後回転台使用 文様 把手取付け部に獅子頭の装飾貼り付け 連続菊花文の押印 胎土 灰白色 白色粒子含む 焼成 良好
2	陶器 灯明皿受	寸法 口径9.8cm 底径(5.2)cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 灰白色 白色粒子含む 軸薙 ヤのある鉄輪 焼成 良好 備考 外側面重ね焼き痕あり
3	美濃 灯明皿上皿	寸法 口径9.2cm 底径3.8cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 灰色 シルト岩粒含む 軸薙 ヤのある鉄輪 焼成 良好 備考 重ね焼き痕あり
4	相馬 縄袖土瓶	寸法 口径8.8cm 成形 ロクロ 胎土 黄白色 きめ細かい 軸薙 淡黄色と緑色のまだら 焼成 良好
5	京焼き風 陶器	寸法 底径5.0cm 成形 ロクロ 胎土 黄白色 白色粒子含む 軸薙 淡黄色 刷下部 内面無釉 焼成 良好 備考 内底面に重ね焼き痕 底裏に雲と押印
6	相馬 土瓶	寸法 口径8.2cm 成形 ロクロ 胎土 黄白色 軸薙 二次焼成により不明 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
7	瀬戸美濃 せんじ碗	寸法 口径10.0cm 成形 ロクロ 胎土 黄白色 軸薙 黄緑色透明 天祐 焼成 良好
8	瀬戸美濃 灯明具	寸法 口径13.6cm 成形 ロクロ 胎土 針状質含む 軸薙 黄釉 焼成 良好
9	瀬戸美濃 鉢	寸法 底径(19.4)cm 成形 ロクロ 胎土 黄白色 砂粒含む 気孔あり 軸薙 淡灰緑色 灰釉 焼成 良好 備考 内底部に重ね焼き痕 底裏に墨書きあり
10	瀬戸美濃 鉢	寸法 底径9.4cm 成形 ロクロ 胎土 黄白色 軸薙 始胎 刷下部から高台露胎 備考 内底部に重ね焼き痕あり
11	肥前系 蓬反り鉢	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 内側面に文様あり 素地 灰白色 軸薙 青白色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
12	瀬戸美濃 白磁皿	寸法 口径6.8cm 底径2.1cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 文様 外面タコ唐草文押印 素地 灰白色 織密 軸薙 内面 口縁部施釉 焼成 良好 備考 完形
13	肥前系 小皿	寸法 口径11.0cm 底径(5.6)cm 器高2.5cm 成形 ロクロ 文様 内面樹皮文 外面植物文 素地 灰白色 黒色粒子含む 焼成 良好
14	肥前系 白磁碗	寸法 底径4.6cm 成形 ロクロ 素地 青白色 黒色粒子含む 軸薙 青白色半透明 焼成 良好
15	瀬戸美濃白磁 ミニチュア碗	寸法 口径2.4cm 底径0.8cm 器高1.1cm 成形 手づくね 文様 外側面鶴彫 素地 黄色 軸薙 青白色半透明 焼成 良好
16	肥前系 染付け皿	寸法 口径(15.2)cm 底径9.6cm 器高2.5cm 成形 ロクロ 文様 内底面に渦巻き文 内外面草花 底裏に印跡有り 軸薙 青白色半透明 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける 焼き痕あり

表3 近世遺物観察表

### 3. I 面

先述したように、近・現代客土層のすぐ下に厚さ10cmほどの中世期の包含層があり、それを除去すると中世の最初の生活面が現れる。これをI面とした。この面で検出された主な遺構は建物1棟・土壙2基・溝1条・大路側溝2条である。また面上には礫やシルト岩を敷いた部分が調査区北域にあったが、北側が区外に出ていて全容がつかめず、性格は分からなかった。このほか、建物を形成するにはいたらなかった柱穴様の小穴が、約50穴検出された。

#### 建物1(図13)

東側平坦部のほぼ全面を占めている。東側列の北から3穴まで櫛乱塙や後世の遺構により失われており、また礫石自体の並びもやや乱雑ではあるものの、ほぼ1間間隔に礫石や根固め石などの入った柱穴列が検出されたため、1棟の建物としてここに抽出した。現況で2×3間、調査区外に拡がる可能性もある。柱間距離196～207cmである。

柱穴から、実測可能な土師器が2点出土している。

#### 土壙1(図14)

調査区東南、C軸にかかる4軸西約2m付近にある。不整円形で直径160cm、深さ16cm、断面は非常に浅い皿形をしている。建物1と重複するが、本址のほうが古い。性格不明。

R種土師器大小2点を図示する。

#### 土壙2(図14)

調査区南東角の4-Cにある。南側は調査区外に出ており、東側上半部も溝1に切られているが、現況で直径50cm、深さ30cmほどある土壙。ほぼ円形であろう。これも性格不明。

#### 土壙3(図14)

これも4-Cにあり、上部のほとんどを溝1に切られている。円形で直径85cm、深さ15cm、浅い皿状の断面をもつ。性格不明。

#### 溝1(図15)

土壙2・3を切って南北方向に走る。南側は調査区外に延び、北側は近代井戸か試掘塙の中で消滅している。幅45cm、深さ30cmほどで、開いたV字形の断面をもち、北から南に下っている。位置と北側の非完結性からみておそらく地割の役目ではなく、水回りにともなう排水施設の可能性が高い。

#### 溝4(若宮大路側溝、図16・17)

ほぼ2軸付近にそって西壁のある幅約2.5m、深さ約50cmの側溝で、後述する鎌倉期の側溝に比べ規模は小さくなっている。断面は絶じて整った逆台形で、北側には浚渫もししくは掘り直しの痕跡が認められる(溝4')。木枠の有無は不明である。あるいは4'が木枠抜き取り痕かもしれない。溝中にはシルト岩が多数投げ込まれている。

先述の近世期の側溝はかなり西に寄っているが、このI面期のものは、規模は縮小されていても、位置は鎌倉期のものとあまり変わらない。したがって大路自体は、前代と同程度の幅が確保されている可能性が高い。おそらく、I面時には前代の町割が依然として踏襲されていたと考えられる。ただし、規模の縮小、前代ほどのしっかりした木枠を持たないこと、などの点は明らかにひとつの明白な画期を経たことを窺わせるものであろう。

溝4出土遺物には、やはり土師器のほか、国産陶器、瓦、竜泉窯青磁碗などがある。ここにも若干の混乱が認められるが、おおむね鎌倉時代後期から南北朝時代前期と考える。

溝4'出土遺物には、多量の土師器のほか、瓦器質火鉢や備前すり鉢などがある。年代的には多少の

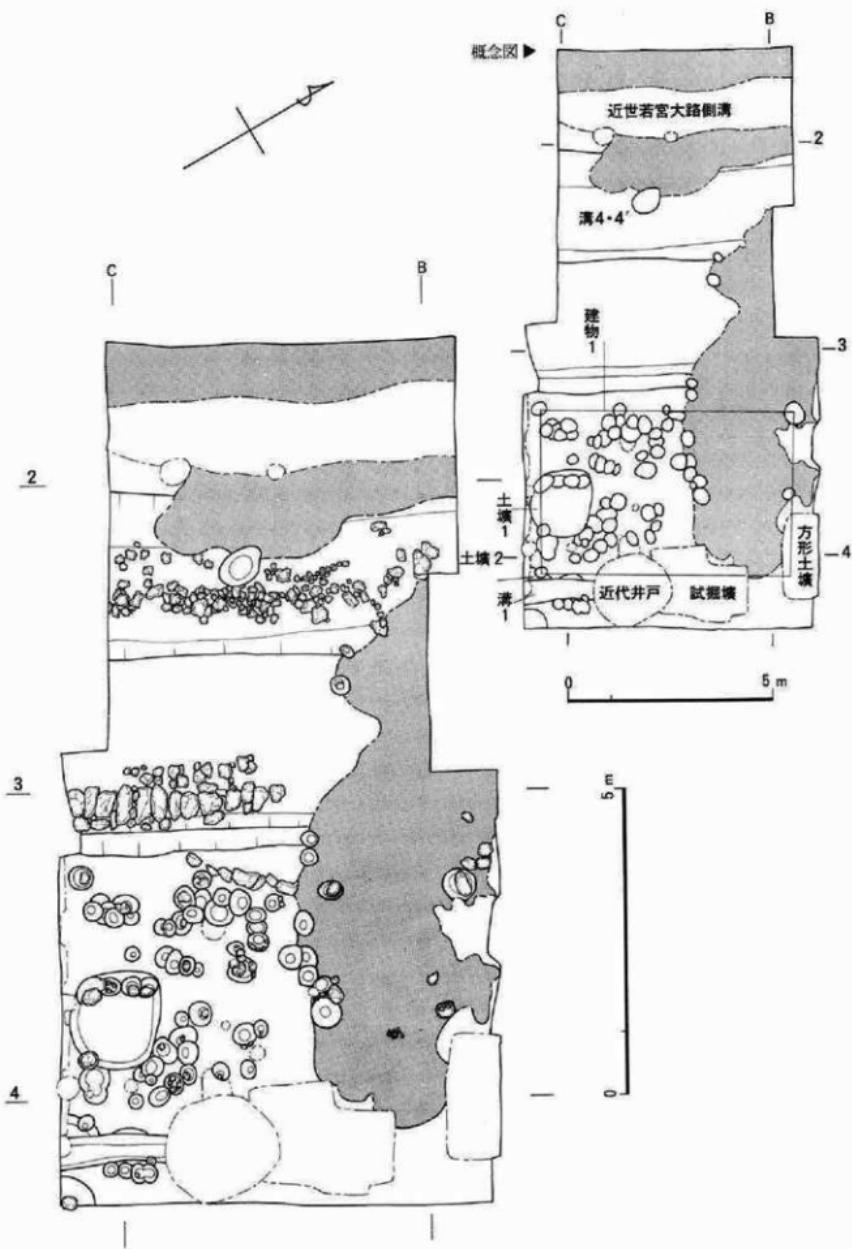
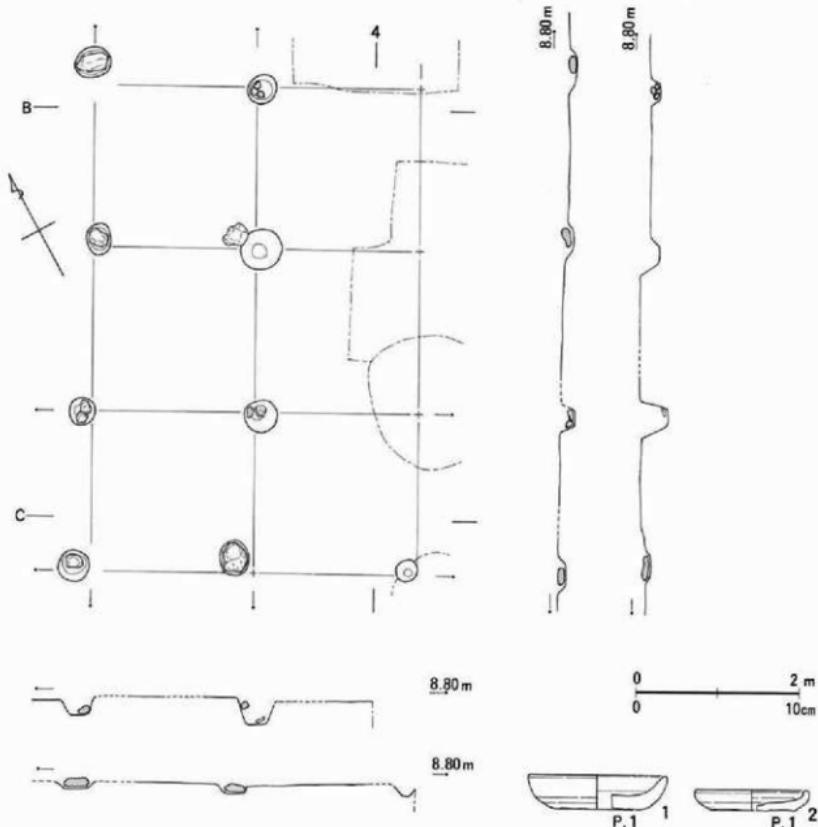


図12 1面造構全図



	単位 cm			
	長径×短径	深さ	底面	壁石上
P.1	46×38	20	849	851
P.2	38×36	7	848	
P.3				上層造構によ り消失
P.4	43×30	19	855	856
P.5	50×50	17	848	
P.6				試掘場により 消失
P.7	34×32	6	853	
P.8	42×40	30	839	846
P.9				礫石に常有の 隙片を使用
P.10	38×38	5	862	858
P.11		17	857	862
P.12	25×22	12	855	

位 置 3・4-B・C  
規 模 2間(4.0m)×3間(5.9m)  
面 積 23.6m<sup>2</sup>  
平 面 形 長方形  
形 長軸方位 N-27°30' - E  
柱穴形態 円・椭円  
備 考 上層造構により大きく攢乱される

図13 建物1, 同出土遺物

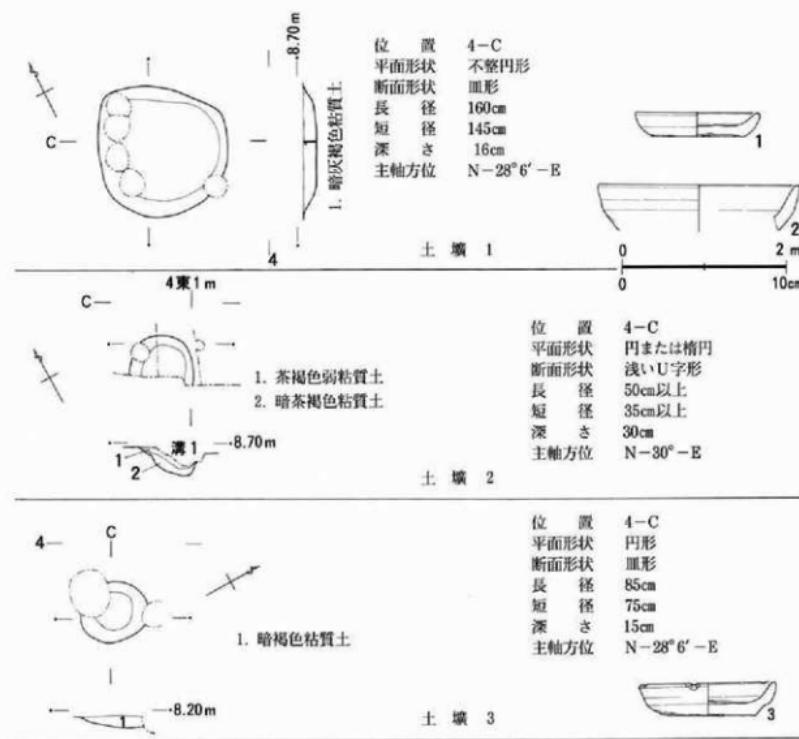


図14 土壌1・2・3、同出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(4.6)cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 赤色小粒 針状物質 砂粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器	寸法 口径7.0cm 底径(5.1)cm 器高1.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 微砂粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表4 建物1出土遺物観察表

1	土師器	寸法 口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 砂粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器	寸法 口径12.4cm 成形 ロクロ 胎土 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径8.3cm 底径5.4cm 器高1.95cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 打ち欠く 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表5 土壌1・2・3出土遺物観察表

混乱がみられるが、大きくて南北朝期ととらえておきたい。

なお、I面調査時に東側平坦部西端の落ち際で大路側溝裏込めとみられるシルト岩の並びが検出されたが、下層に属する可能性があり、詳細は次項I面の報告文中にて述べる。

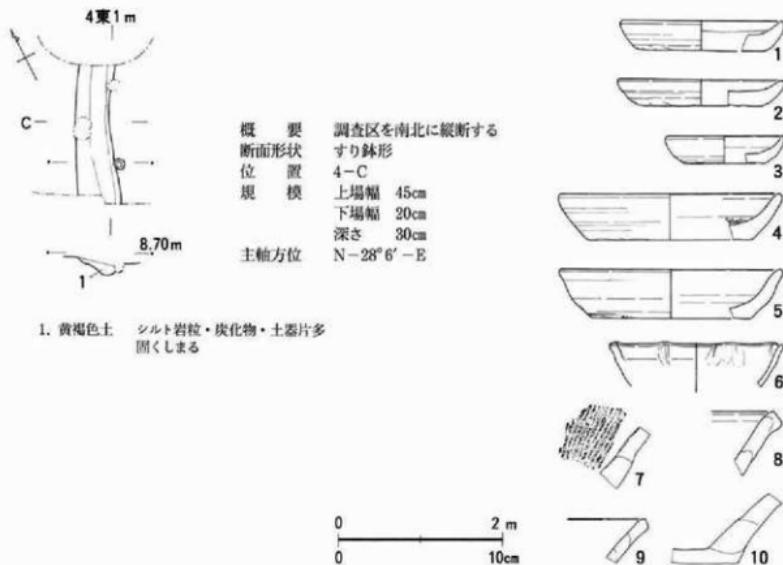


図15 溝1, 同出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.0cm 底径(10.0)cm 器高2.8cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 広褐色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径 10.2cm 底径(6.6)cm 器高1.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径 7.2cm 底径(5.0)cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好
4	土師器 灯明皿	寸法 口径 13.8cm 底径(10.0)cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 広褐色 焼成 良好 備考 スヌ付着
5	土師器	寸法 口径 13.6cm 底径(9.6)cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
6	瀬戸 入れ子	寸法 口径 10.6cm 成形 ロクロ 輪花 胎土 灰色 気孔あり 軸麁 斜灰緑色透明 外底露胎 内面に少量の降灰あり 焼成 良好
7	信楽 すり鉢	寸法 不明 成形 輪筋 内面茶条線あり 胎土 淡橙色 砂粒 白色粒含む 色調 橙褐色 焼成 良好
8	常滑こね鉢 II類	寸法 不明 成形 輪筋後ナデ 胎土 茶褐色 長石 褐色粒 白色粒含む 色調 褐色 焼成 良好
9	常滑こね鉢 II類	寸法 不明 成形 輪筋 胎土 暗灰色 長石 石英含む 色調 内面褐色 外面橙褐色 焼成 良好
10	常滑こね鉢 I類	寸法 不明 成形 輪筋 胎土 針状物質 長石 貝粒子 小石含む 色調 暗褐色 焼成 良好

表6 溝1出土遺物観察表

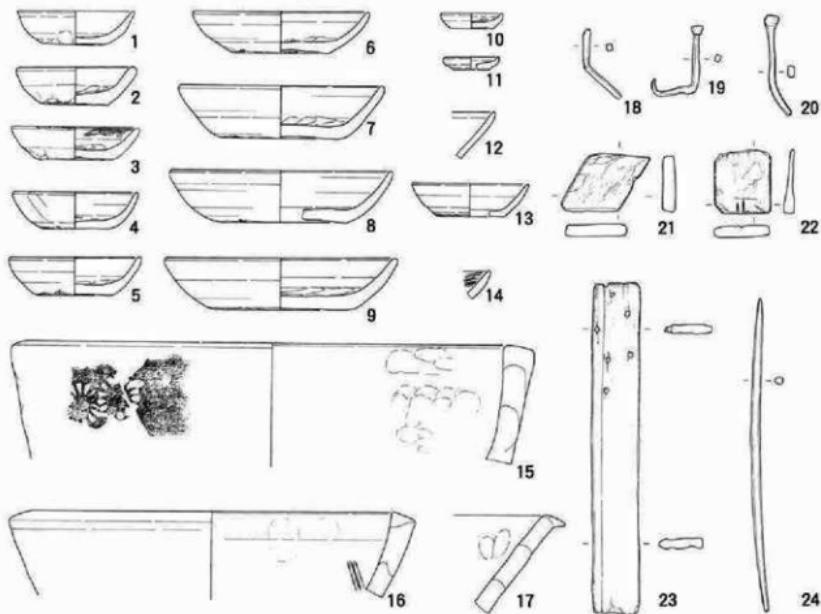
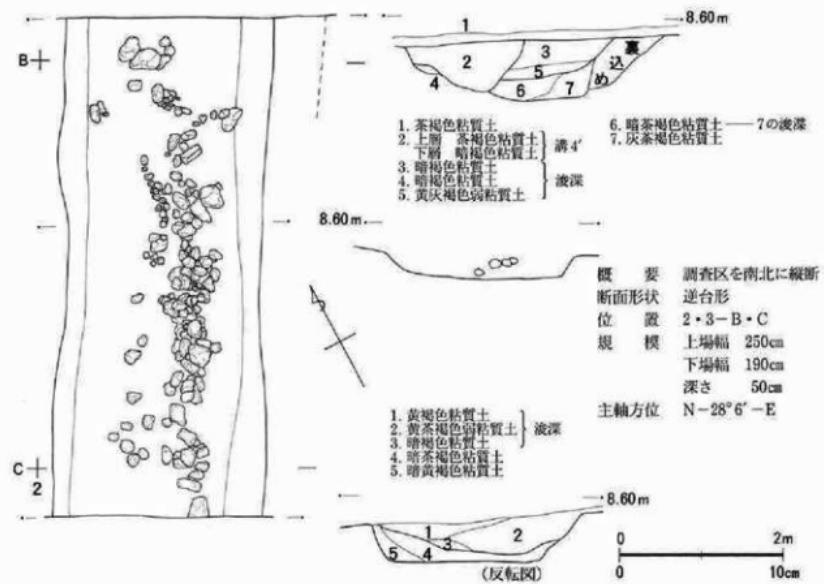


図16 溝4(若宮大路側溝) 同出土遺物

1	土師器	寸法 口径7.2cm 底径4.0cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器	寸法 口径7.4cm 底径4.0cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
3	土師器 灯明皿	寸法 口径7.9cm 底径5.0cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 スス付着 板状圧痕あり
4	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.0cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 半完形
5	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.6cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器	寸法 口径10.8cm 底径5.8cm 器高2.5cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 雲母 貝粉含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
7	土師器	寸法 口径12.6cm 底径7.6cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
8	土師器	寸法 口径13.6cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
9	土師器	寸法 口径14.2cm 底径8.0cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土師器 極小	寸法 口径3.8cm 底径2.6cm 器高0.9cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
11	土師器 極小	寸法 口径3.8cm 底径(2.2)cm 器高0.8cm 成形 ロクロ 内底墨ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
12	土師器 白色系	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 灰白色 焼成 良好
13	土師器 白色系	寸法 口径7.2cm 底径(4.2)cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒含む 色調 橙白色 焼成 良好
14	瓦器	寸法 不明 成形 ロクロ 内面へラ磨き 胎土 胎心部灰白色 きめ細かい 色調 内外面灰黒色 焼成 良好
15	瓦質鉢 火	寸法 口径32.0cm 成形 輪積後回転台使用 内外面へラ磨き 外面菊花文押印 胎土 灰色 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰黒色 焼成 良好
16	備前 すり鉢	寸法 口径22.8cm 成形 輪積後ナデ 内面に条模あり 胎土 灰褐色 長石 石英 小石含む 色調 内面暗灰橙色 外面赤褐色 外面に降灰 焼成 良好
17	常滑ごね鉢 II類	寸法 不明 成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 灰黒色 小石 長石含む 色調 赤褐色 内外面に降灰 焼成 良好
18	鉄製品 釘	寸法 長さ(0.5)cm 幅0.3cm 厚さ0.4cm
19	鉄製品 釘	寸法 長さ7.0cm 幅0.3cm 厚さ0.4cm
20	鉄製品 釘	寸法 長さ(6.1)cm 幅0.4cm 厚さ0.7cm
21	砥石	寸法 長さ3.5cm 幅3.6cm 厚さ0.8cm 磨地 鳴滌 色調 灰黄色 備考 仕上砥 5面砥面
22	砥石	寸法 長さ3.8cm 幅3.4cm 厚さ0.7cm 磨地 鳴滌 色調 灰褐色 備考 仕上砥
23	不明木製品	寸法 長さ20.3cm 幅2.6cm 厚さ0.5cm 備考 7カ所に穿孔あり
24	箸	寸法 長さ19.3cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm 備考 両口

表7 溝4(若宮大路側溝)出土遺物観察表

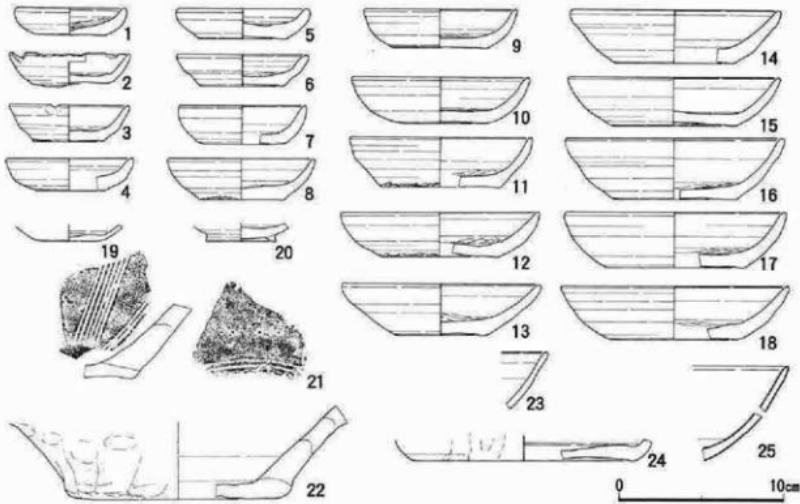


図17 溝4'（若宮大路側溝）出土遺物

1	土師器	寸法 口徑6.8cm 底径4.2cm 器高1.6cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口徑7.4cm 底径4.8cm 器高2.0cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
3	土師器	寸法 口徑7.4cm 底径4.4cm 器高2.2cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
4	土師器	寸法 口徑7.8cm 底径4.2cm 器高2.0cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 覆母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
5	土師器	寸法 口徑8.2cm 底径5.2cm 器高1.8cm 胎土 針状物質 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
6	土師器	寸法 口徑8.0cm 底径5.2cm 器高1.9cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好
7	土師器	寸法 口徑6.8cm 底径(5.4)cm 器高2.3cm 胎土 針状物質 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	寸法 口徑9.0cm 底径5.2cm 器高2.5cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
9	土師器	寸法 口徑9.4cm 底径5.8cm 器高2.3cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 貝母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
10	土師器	寸法 口徑11.0cm 底径5.2cm 器高2.8cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口徑11.2cm 底径(7.0)cm 器高3.0cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
12	土師器	寸法 口徑12.2cm 底径(7.0)cm 器高2.7cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
13	土師器	寸法 口徑12.4cm 底径5.4cm 器高3.1cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表8 溝4'（若宮大路側溝）出土遺物観察表(1)

14	土師器	寸法 口径 12.8cm 底径 (7.2)cm 器高 3.2cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内面ヘラ磨き 色調 灰褐色 焼成 良好
15	土師器	寸法 口径 13.0cm 底径 7.4cm 器高 2.9cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
16	土師器 穿孔	寸法 口径 13.4cm 底径 (7.4)cm 器高 3.7cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 側面に 1カ所穿孔あり 色調 灰褐色 焼成 良好
17	土師器	寸法 口径 13.6cm 底径 (8.4)cm 器高 3.4cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 雪母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
18	土師器	寸法 口径 14.0cm 底径 (8.2)cm 器高 3.3cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
19	土師器 白色系	寸法 底径 3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒小量含む きめ細かい 色調 灰白色 焼成 良好	
20	早鳥	寸法 底径 4.4cm 成形 手づくね 内底部ナデ 高台貼り付け 高台に糊被痕あり 胎土 砂粒 白色粒子含む 色調 灰白色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける	
21	備前鉢 すり鉢	寸法 不明 成形 輪廻後ロクロ 内面に条線1束6本 体部外面下位に2筋沈線あり 胎土 灰色~淡褐色 砂粒 小石含む 色調 赤褐色 焼成 良好	
22	常滑ごね鉢 Ⅱ類	寸法 底径 (14.0)cm 成形 輪廻 外側面底部へ削り 指頭痕あり 胎土 橙色 石英 小石多量含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 外底部スス付着	
23	瀬戸入れ子	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 灰色 黒色粒子含む 色調 内面灰褐色 外面灰褐色 降灰 焼成 良好	
24	瀬戸鉢	寸法 底径 (13.0)cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 黄灰色 小石含む 輪廻 淡褐色透明 焼成 良好 備考 重ね焼き痕あり	
25	青磁 電気窯	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 外面複複弁 素地 暗灰色 気孔あり 色調 灰綠色半透明 焼成 良好	

表9 溝4' (若宮大路側溝) 出土遺物観察表 (2)

1	土師器	寸法 口径 9.0cm 底径 (4.4)cm 器高 2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器	寸法 口径 9.4cm 底径 7.0cm 器高 2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径 9.4cm 底径 (5.0)cm 器高 1.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質含む 色調 淡褐色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径 12.4cm 器高 (2.6)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
5	土師器	寸法 口径 14.2cm 底径 (7.0)cm 器高 3.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
6	土師器	寸法 口径 7.6cm 底径 4.8cm 器高 2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
7	土師器	寸法 口径 7.8cm 底径 (5.0)cm 器高 2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	寸法 口径 7.8cm 底径 (4.8)cm 器高 2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
9	土師器	寸法 口径 8.0cm 底径 5.1cm 器高 2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
10	土師器	寸法 口径 8.0cm 底径 (5.4)cm 器高 1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 淡褐色 焼成 良好
11	土師器	寸法 口径 8.2cm 底径 4.9cm 器高 1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 赤褐色 焼成 良好

表10 I面上包含層出土遺物観察表 (1)

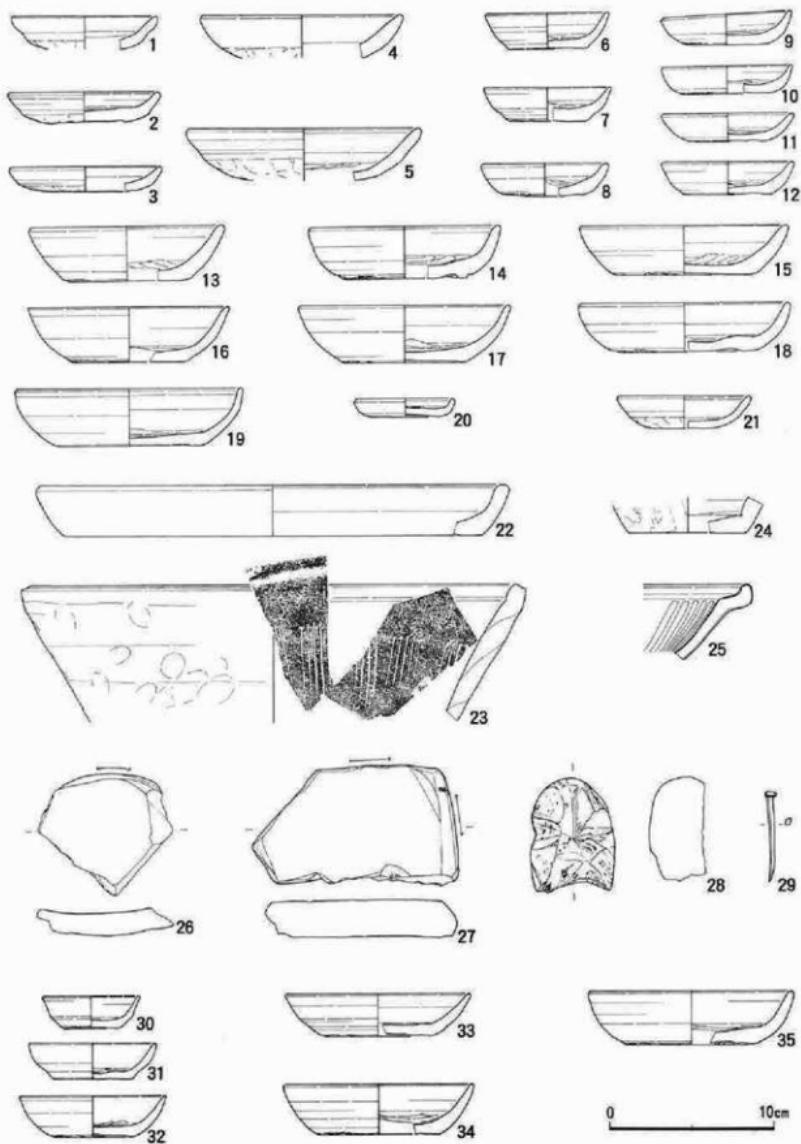


図18 I面上包含層出土遺物

12	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.4cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡褐色 焼成 良好
13	土師器	寸法 口径12.0cm 底径(7.0)cm 器高3.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好
14	土師器	寸法 口径11.8cm 底径(7.6)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
15	土師器	寸法 口径12.8cm 底径9.2cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
16	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(7.2)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 淡褐色 焼成 良好
17	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.6cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
18	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(8.4)cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 橙色 焼成 良好
19	土師器	寸法 口径14.0cm 底径8.6cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
20	土師器 極小	寸法 口径6.2cm 底径4.4cm 器高1.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
21	土師器 白色系	寸法 口径8.2cm 底径(4.0)cm 器高2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 檀白色 焼成 良好
22	土製品	寸法 口径29.0cm 底径(25.3)cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 橙色 焼成 良好
23	不 明 すり跡	寸法 口径31.0cm 成形 輪積後ナデ 内面に茶線1束5本 外面に指頭痕あり 胎土 明系褐色 砂粒 小石 白色粒子含む 色調 明茶褐色 焼成 良好
24	瀬戸 小 壺	寸法 底径(7.2)cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 灰色 砂粒 小石含む 色調 灰綠褐色 透明 焼成 良好
25	青 磁 電気蒸折緑鉢	寸法 不明 成形 ロクロ 素地 灰白色 軸裏 灰綠色 透明 焼成 良好
26	転用常滑	寸法 長さ7.4cm 幅8.3cm 厚さ1.3cm 胎土 淡褐色 砂粒 小石 白色粒子含む 色調 明茶褐色 焼成 良好 備考 1面底面
27	転用瓦	寸法 長さ11.0cm 幅7.0cm 厚さ2.2cm 胎土 灰色 瓦質 砂粒 小石含む 色調 灰黒色 焼成 良好 備考 2面底面
28	輕石	寸法 長径6.0cm 短径5.0cm 厚さ3.5cm 色調 灰白色
29	鉄製品 釘	寸法 長さ5.5cm 最大幅0.3cm
30	土師器	寸法 口径6.0cm 底径3.4cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
31	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.0cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色粒子含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
32	土師器	寸法 口径9.0cm 底径5.4cm 器高2.55cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
33	土師器	寸法 口径11.4cm 底径(6.4)cm 器高2.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色粒子含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
34	土師器	寸法 口径11.7cm 底径(7.5)cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
35	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(8.2)cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好

表11 I面上包含層出土遺物観察表(2)

### I 面上包含層出土遺物（図18）

土師器・國產陶器・竜泉窯青磁鉢その他がある。土師器のうちにはT種が若干含まれており、全体にここにも年代的混乱があるが、主体は南北朝時代にあるとみて大過あるまい。溝4・4'出土遺物と、おむね整合している。

### 4. II面

I面下の包含層は15~20cmほどで、その下には炭化層が広く認められる。II面はその下にある。この面で検出されたのは、建物3棟・土壤1基・若宮大路側溝1条である。大路側溝は何度も掘り直され、両横には木枠部材とみられるホゾ穴のあいた角材が、並行して南北に走っている。このほか、建物とはなり得なかつた柱穴が53口検出された。

なお、ここで建物として抜き出した柱列のなかには、にわかにはそう首肯しがたいものもある。しかし、規模や配列に共通性、あるいは規則性が認められればひとまず一連のものと考え、ここに取り上げておいた。

#### 建物2（図20）

東側平坦部3・4-B・Cにある礎石建物。多くの礎石が残っていないが、西側の側柱とみられる位置に人頭大シルト岩が面上に置かれたような状態にあったので、いちおう建物の可能性があるとみて抽出しておいた。現状で1×2間の規模がある。柱間は200cm前後か。

建物4の北西角の柱穴と切り合っているが、本址が新しい。その他の建物とも重複するものの、明確な切り合い関係がなく、新旧は不明。

#### 建物3（図20）

東側平坦部の東寄り、3-B・Cにある。柱穴の中に礎石と礎板の遺存した掘立柱建物。調査区内では西側の側柱列しかないが、東側壁外に伸びる可能性が高い。柱間はほぼ2mで安定している。南端の1穴のみシルト岩の礎石が残る。

他の建物との新旧は不明。

#### 建物4（図21）

これも東側平坦部の東寄り、3・4-B・Cにある掘立柱建物。やや並びは不規則だが、断面皿状の浅い柱穴が210cm前後の間隔をおいて配される。現状で1×2間、おそらく東側あるいは南北調査区外に拡がるであろう。検出された6穴中の1穴に礎板が、2穴にシルト岩の礎石が残る。

先述のように、建物2と切り合い関係があり、本址の方が古い。

#### 建物5（図21）

東側平坦部の3・4-B・Cにある。礎石とおぼしいシルト岩、およびその抜き跡らしい痕みが規則性をもって並ぶので建物とした。大半後世に攪乱壊され、現状で1×2間だが、これも調査区外まで拡がる可能性が高い。他の建物と重なっているが、直接の切り合いはなく、新旧不明。

西側列の北のふたつのシルト岩には、角形に抉り取られた部分がある。これがもし柱を固定していたとすれば、このシルト岩は礎石ではなく、根固めであったと考えられる。

#### 建物6（図22）

東側平坦部3・4-B・Cにある。礎板や礎石をもつ深めの柱穴が並んでいる。ただし、南側列の中央の当該位置に穴はなく、平たい礎石のみである。北側列の3穴は礎板を持ち、うち西側2穴の礎板上には柱根が遺存する。この建物もおそらく調査区外に拡がっている。

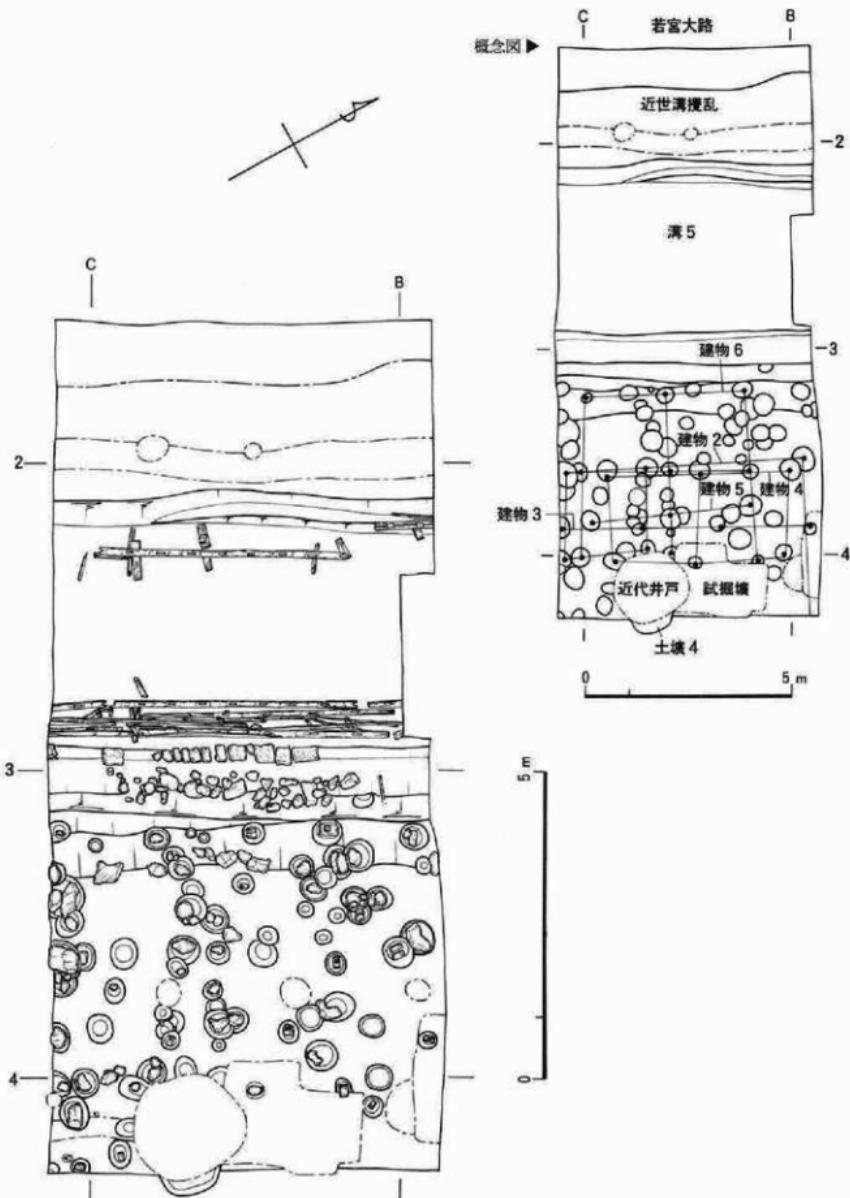
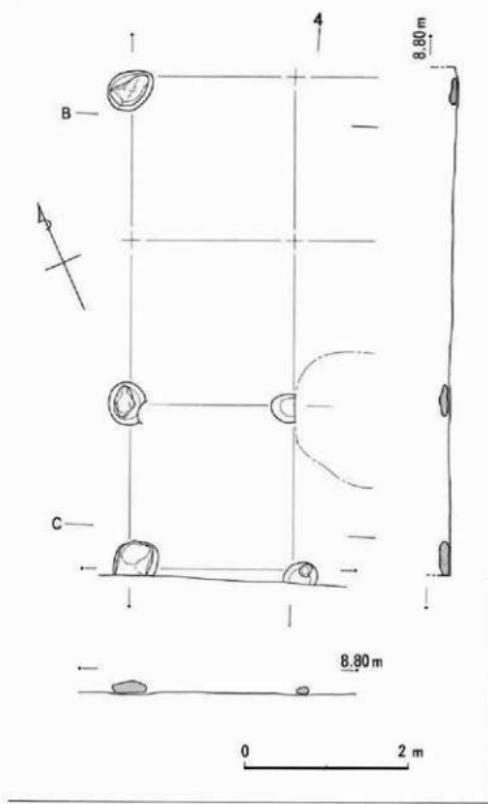


図19 II面造構全図



位 構造  
規 面積  
面 形  
長軸方位  
柱穴形態

3・4-B・C  
1間(2.0m)×3間(5.9m)  
11.8m<sup>2</sup>  
長方形  
N-25°-E  
円形・楕円形

単位 cm					
	長径×短径	深さ	底面積	壁面積	備考
P.1	60×47	2	847	855	上部構造により削減
P.2					未検出
P.3					試掘孔により消滅
P.4					
P.5	52×45	3	854	866	
P.6	(38)×35	8.5	844		近代井戸により削減
P.7	(42)×32			863	
P.8	(35)×28	1.5	848		

### 建物 2



位 構造  
規 面積  
面 形  
長軸方位  
柱穴形態  
備 考

3-B・C  
N-28°-E  
円形・楕円形  
東壁方向に延長される  
可能性あり

単位 cm					
	長径×短径	深さ	底面積	壁面積	備考
P.1	(360)×(30)	34	817	818	
P.2	37×34	6	845	849	
P.3	39×25	11	832	843	
P.4	44×(25)	22	830	860	礫石

図20 遺物 2・3

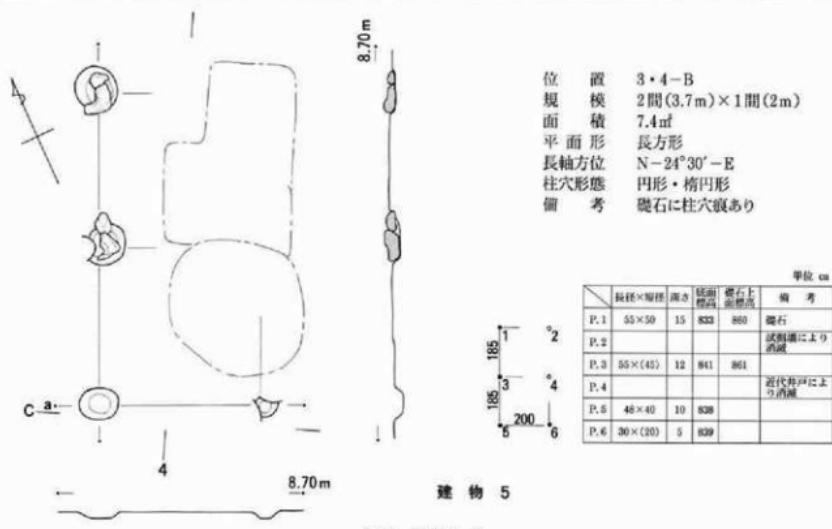
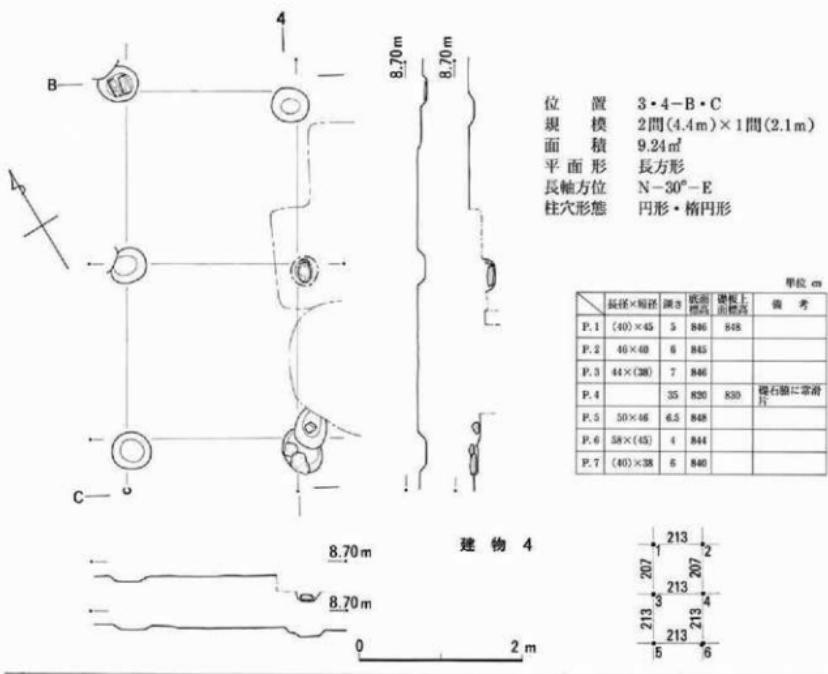
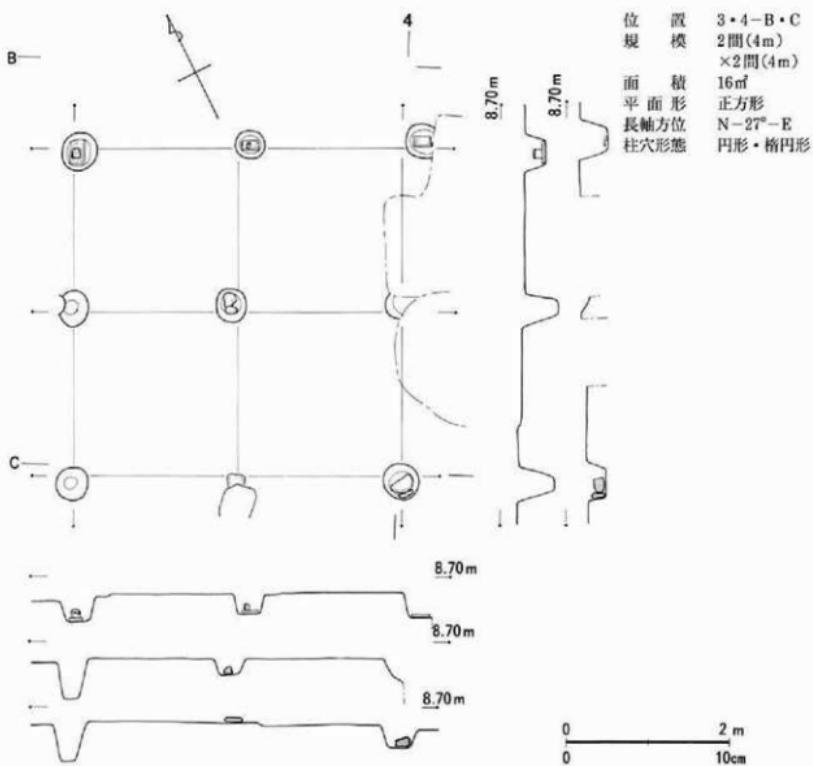


図21 建物4・5



単位 cm				備考
長径	短径	深さ	種類	
P. 1 48×42	35	817	819	
P. 2 36×36	25	821	833	
P. 3 42×(28)	30	823	825	
P. 4 48×(38)	50	799		
P. 5 48×35	23	835	839	鐵石
P. 6 (30)×(25) (30)			1	
P. 7 46×40	50	804		
P. 8 45×45	35	823	834	鐵石

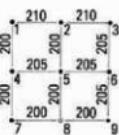


図22 建物6、同出土遺物

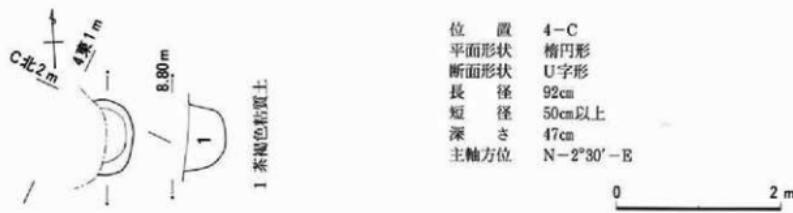


図23 土壠

4	土 壴	寸法 口径14.4cm 底溝10.7cm 溝高3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 赤色小粒 鈍状物質 砂粒含む 色調 橙色 燃成 良好 参考 板状圧痕あり
---	-----	--

表12 建物6出土遺物観察表

位 置  
概 要  
大路側溝木枠と掘方の間にある石列  
上・下二段あり、上段は人頭大シルト  
岩、下段は凝灰岩切石が並べられる

規 模  
幅1m20cm  
深さ 26cm  
主軸方位 N-28°6'-E

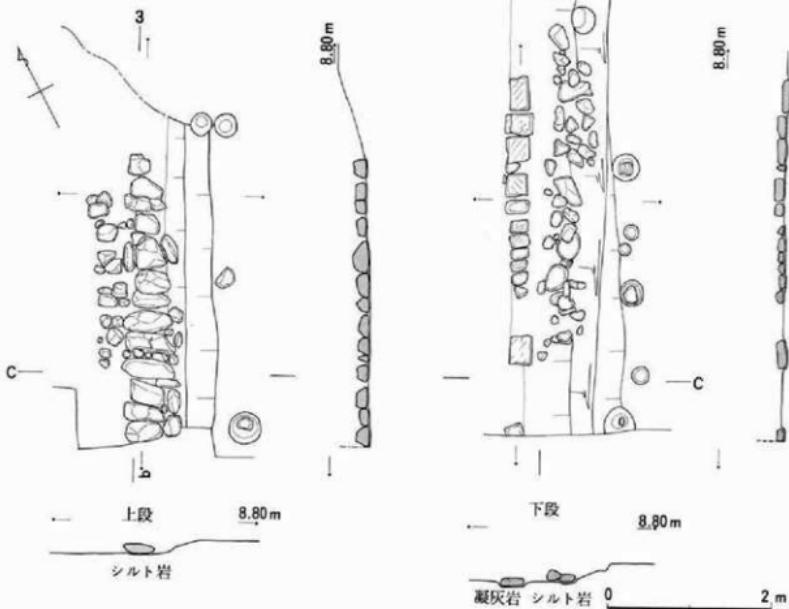


図24 大路側溝裏込め

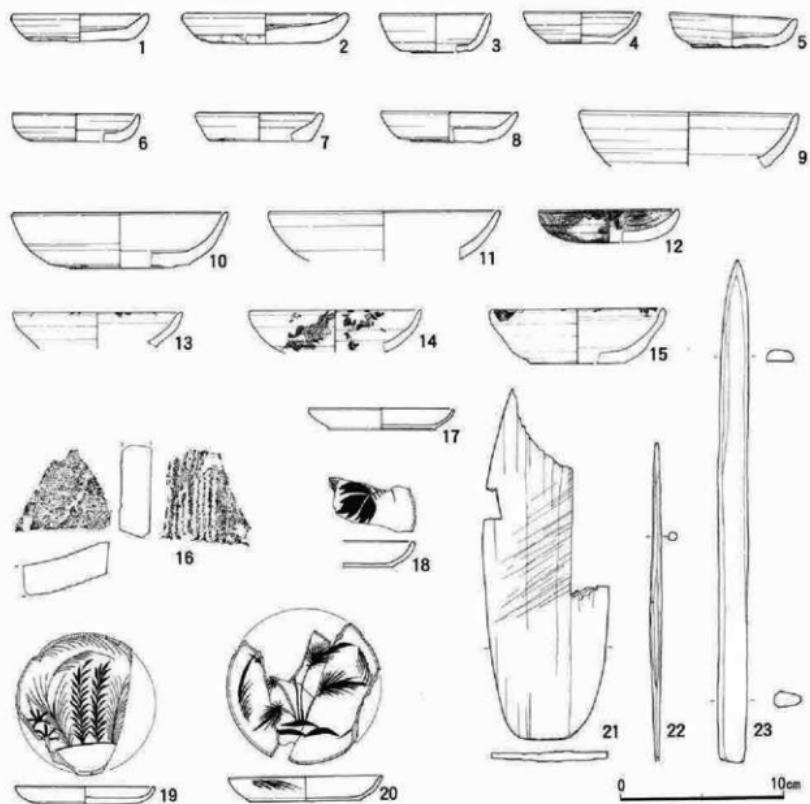


図25 大路側溝裏込め下層石組出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.4cm 底径6.2cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径10.2cm 底径4.6cm 器高1.85cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径6.8cm 底径(4.2)cm 器高2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 濾砂粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
4	土師器 焼	寸法 口径7.2cm 底径4.2cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
5	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.8cm 器高1.95cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.3cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
7	土師器	寸法 口径7.8cm 底径6.3cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
8	土師器	寸法 口径8.4cm 底径4.6cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
9	土師器	寸法 口径13.4cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
10	土師器	寸法 口径13.2cm 底径(6.7)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口径14.2cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
12	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(3.6)cm 器高2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 内外面スス付着
13	土師器 灯明皿	寸法 口径10.4cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 赤色小粒 雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
14	土師器 灯明皿	寸法 口径10.6cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
15	土師器 灯明皿	寸法 口径10.8cm 底径5.7cm 器高3.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
16	平瓦	寸法 厚さ2.0cm 色調 黒灰色
17	漆器皿	寸法 口径8.9cm 底径6.5cm 器高1.3cm 成形 内外面黒漆塗り 無文 高台削り出し
18	漆器皿	寸法 不明 成形 内外面黒漆塗り 内底面に朱漆で草花文
19	漆器皿	寸法 口径8.6cm 底径3.9cm 器高1.1cm 成形 内外面黒漆塗り 文様 内底面に朱漆で秋草文
20	漆器皿	寸法 口径9.5cm 底径6.8cm 器高1.5cm 成形 内外面黒漆塗り 文様 内外面に朱漆で秋草文
21	板草履	寸法 幅7.6cm 厚さ0.7cm 成形 杠目取り
22	著	寸法 幅0.65cm 厚さ0.5cm 両口
23	不明木製品	寸法 長さ30.3cm 幅1.7cm 厚さ0.9cm 備考 ヘラ?

表13 大路側溝裏込め下層石組出土遺物観察表

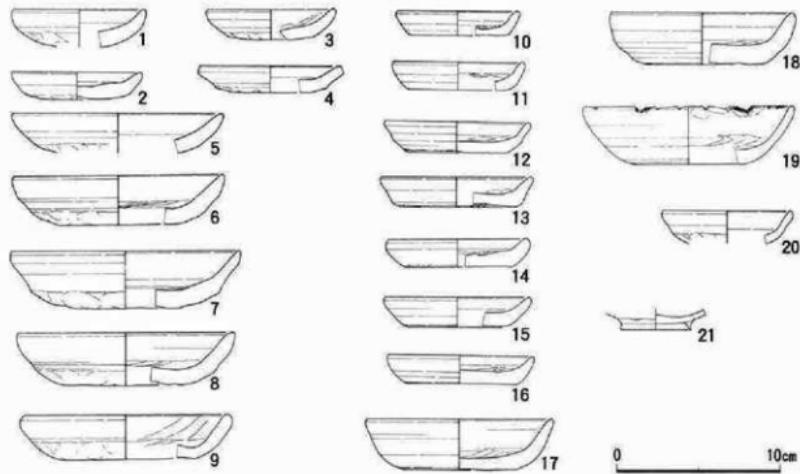


図26 II面上包含層出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.0cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡橙色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.0cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径8.0cm 底径(4.0)cm 器高1.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径9.0cm 底径(5.0)cm 器高1.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
5	土師器	寸法 口径13.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
6	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(6.5)cm 器高2.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好
7	土師器	寸法 口径14.2cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 黄褐色 焼成 良好
8	土師器	寸法 口径13.4cm 底径(6.6)cm 器高3.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 黄褐色 焼成 良好
9	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(8.0)cm 器高2.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質含む 気孔あり 色調 橙色 焼成 良好
10	土師器	寸法 口径7.6cm 底径(6.4)cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
11	土師器	寸法 口径8.2cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好
12	土師器	寸法 口径9.0cm 底径6.0cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好
13	土師器	寸法 口径9.4cm 底径(7.0)cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
14	土師器	寸法 口径8.8cm 底径(6.4)cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表14 II面上包含層出土遺物観察表(1)

15	土師器	寸法 口径9.0cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
16	土師器	寸法 口径9.0cm 底径6.9cm 器高1.7cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
17	土師器	寸法 口径11.6cm 底径7.0cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 明褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
18	土師器	寸法 口径11.4cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 暗褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好
19	土師器 灯明皿	寸法 口径13.0cm 底径(7.0)cm 器高3.6cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 明褐色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 焼成 良好 備考 スス付着
20	土師器 白色系	寸法 口径8.0cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 灰白色 気孔有り 色調 淡明褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好
21	早島	寸法 底径4.4cm 成形 手づくね 高台貼り付け 胎土 砂粒含む 色調 灰白色	高台に柄紋痕あり 焼成 良好

表15 II面上包含層出土遺物観察表(2)

他の建物と重複するが、新旧は不明。しかし、柱穴自体はしっかりした深いもので、やや古相との感触を禁じえない。

#### 土壤4(図23)

調査区東壁際4-Bにあり、西側部分の大半を近代井戸に削り取られている。平面形状はおおむね円または楕円形か。U字形の断面をもつ。直径90cm以上、深さ50cmほどある。性格不明。

#### 溝5(若宮大路側溝、図40)

本址の溝木枠の部材は後述する溝6と複雑に入り組んでおり、現場作業中に両者の部材を厳密に区別しながら掘削することは、実際上不可能であった。そのため、遺構実測図は溝6と同一図に組み込んである。また詳細についても、溝6の項であわせて論じる。なお埋土そのものの区別は作業中にも可能であったため、出土遺物の分別はできた。

ほぼ2軸と3軸の間におさまっており、幅約3.5mの掘方の中に木枠の根太材が残る。根太材の位置から幅を推定すると、ほぼ3mという数値が得られる。

ここではおおむねひとつずつ数えるが、実際には二度ほど浚渫または改修のあったことが土層断面から観察できる。位置的には後述するⅢ面時の側溝と大体同じところにあり、本址はその大幅な改修ととらえられる。中世期若宮大路側溝の変遷に関しては、後論する。出土遺物についても同様。

なお注目すべき出土遺物に、人名の書かれた木簡がある。溝西側根太材の南側末端付近から出土したもので、「二けん おぬきの二郎」とある。これについては他2点の人名木簡とあわせ、本章第3節であらためて紹介する。

#### 大路側溝裏込め(図24・25)

東側平坦部西端で、大路側溝の裏込めとみられる人頭大シルト岩の並びが検出された。調査区中央部以南にあり、3軸にはば沿っている。この裏込め西面には当然大路側溝の存在が予想されるが、切り込み肩が削られ、厳密な層位の対応は確認できなかったが、位置的にみておそらく、上層石組みは溝5、下層石組みは溝6の木枠にともなう可能性がある。

10cm前後の間隔を挟んで上下二段の並びが認められるが、上段・下段、いずれも3.5mほどで、側溝に沿ってずっとあるわけではない。この部分のみ、何か強化の要があったのだろうか。

### 5. III 面

東側平坦部のII面下10~20cmに、砂や細かく碎いた貝殻などを敷いた生活面がある。砂は割合に均質で細かい。これがIII面で、ここからは掘立柱建物1棟を含む柱穴101口、東西溝1条、若宮大路側溝1条などが検出された。この面には、シルト岩を敷いた部分も観察された。調査区西端には当該期の若宮大路が見られる。東西溝の大路側溝との接続部分には、排水施設らしい木枠が備わっていた。また大路側溝両脇には柱穴列もある。

#### 建物7(図28)

東側平坦部3・4-B・Cにある掘立柱建物。いずれも整った円形の柱穴で、大半に礎板や柱根が残る。現況で2×2間の規模だが、調査区外に伸びているのは確定である。柱間は2mほど。角柱の一辺は9cmが多い。南東角の1穴には根固めのためらしいシルト岩塊が、いくつか詰まっている。

遺物散在部と重なっているが、本址が新しい。

#### 遺物散在部分(図30)

東側平坦部には部分的に破碎シルト岩を敷いた面があるが、それは東西約5m、南北約3mにわたって途切れています。そこに土師器・鹿角製品・曲物などが散在していました。建物7の下になる。

出土遺物に日用雑器などが多く、また位置的にも後述の、出水口を持つ溝2に近いところから、生活臭が色濃く漂う。

ここからは土師器がかなりまとまって出土している。T種が多い。曲物が面上に置かれたような状態で出土したほか、鹿角も出ている。後者はあるいは自在鉤であった可能性もある。

#### 溝2(図32)・同木組み出水施設(図32・34)

東側平坦部北寄り、3・4-B北辺を東西に走行する。東側の状況は不明だが、西端は若宮大路側溝に流れ込む。大路側溝との接続部は出水施設らしき箱型の木組みを持ち、この部分には土師器が一時に投げ込まれたような状況があった。

溝2本体は皿形もしくは逆台形の断面で、幅1m、深さ約40cm、先端部を除き、木枠はない。浅い上に壁もさほどしっかりしておらず、地割というよりも排水が主たる機能であったと考えられる。

木組み出水施設は幅45cm、深さ25cmで、若宮大路側溝である溝5・6の肩口で終わっている。現況の長さは140cm。上部には梁がわたされ、その上に蓋となる板が載っているが、大路側溝側に梁はない。この状況は、本来もっと先端が先に出ていたのが、溝5あるいは6のいずれかの掘削時に削り取られたことを物語っている。

この木組みで注目されるのは、北側壁体内側に縦位に取り付けられた2本の角材である。これは2.5cmほどの間隔をあけて釘で平行に打ちつけられたもので、南壁の対面位置にも同様の釘痕が見られるところから、両者の間に板を差し込んで水流を遮断する、堰のような機能を想像できる。蓋も特徴的で、決して全体を覆うのではなく、東端から55cm前後のところから始まり、しかも13~15cmの隙間が主軸方向に沿って中央部に確保されている。沢山の土師器が投げ込まれているので、この木組みが露頭していたことは明らかである。

以上の状況から想像を逞しくすれば、この木組みは、あるいは水洗便所である可能性があるのではないか。すなわち、まず木組み入口に板を差して上流側にしかるべき量の水をため、蓋に跨がりその空隙に向けて排便したあと、一気に板を引き抜いて水圧で排泄物を流すのである。

水洗便所は、最近各地の都市遺跡で検出例が報告されている。形態こそ異なれ、想定できる本址の使用方法にもっとも相応しい機能は、水洗便所であると考える。当初その認識を欠いていたので、残念な

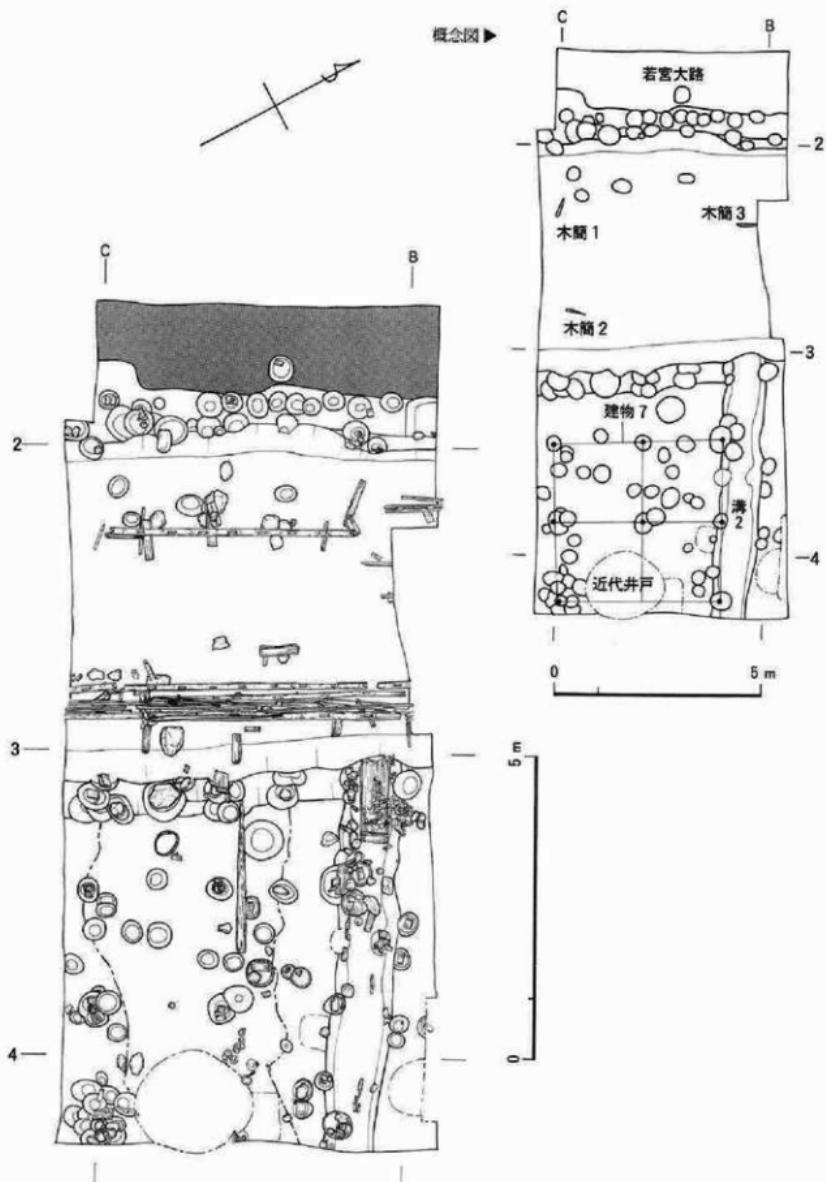


図27 III面遺構全図

がら土壤試料を採集しておかなかった。なお、鎌倉では手塚直樹が、千葉地遺跡で検出された「木樋遺構」に、水洗便所の可能性を指摘している（手塚直樹「中世のトイレ」『歴史と地理』481 山川出版社 1995）。市内検出の便所遺構については、筆者も簡単にまとめたことがあるので、参照されたい（馬淵和雄「便所遺構について」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会 1995）。

#### 溝5・6（若宮大路側溝、図39・40）

ほぼ2軸と3軸の間に存在する。位置や規模からみて、中世鎌倉最盛期の若宮大路側溝であるのは間違いない。溝5と6は同じような位置に何度も掘り直されており、両者間に明白な断絶を認めることは難しい。そこで溝5の項で述べたように、両者を一連ととらえ、ここであわせて報告する。図40に詳細図を、図40に6から5にいたる変遷模式図を示したほか、図5でも溝の対応関係を示しておいた。

なお、溝は複雑に切り合っており、上端から底部まで完存しているものは少ない。そのため、以下で記す溝寸法などの数値には、土層断面からの推定値も混じっている。

まず、鎌倉時代初期の溝7（後述）が埋められて、溝6が掘られる（溝6-I）。断面は整った逆台形で、掘方下端幅約4m、上端幅はおそらく5mほどにもなる大きなものである。深さは1m前後か。これには木枠がないが、たぶん抜き取られたのであろう。

次にこの溝は大幅に改修される（溝6-II）。これも断面は整った逆台形をしており、掘方下端幅約4.4m、上端幅は5.5m前後（北壁）から6mに及ぶ（南壁）。位置はほとんど変わらない。深さは1mほどである。木枠はやはり抜かれたらしい。

溝6の2度目の改修では、形状は変わらないが、規模は若干縮小気味になる（溝6-III）。掘方下端幅約4m、上端幅約4.6~4.7m、深さ約1m。この溝の東岸には木枠やその根太が遺存している。根太は幅12cm、厚さ9cmほどの角材で、木枠の壁体はその外側に密着して立っている。根太材は西側には残っていないが、およその推定位置から判断した溝本体の幅は、4m前後になる。

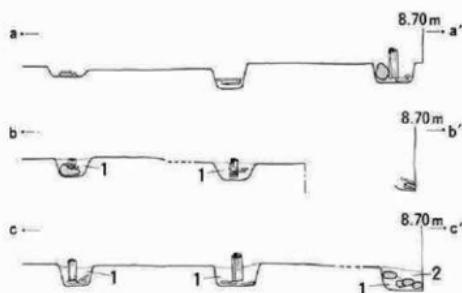
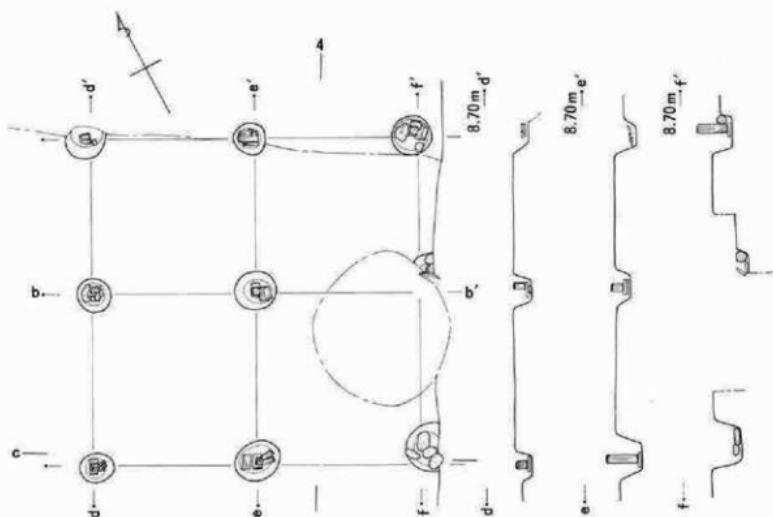
この溝は、次には幅約3mの木枠を持つものに変わる。そして以後何時期か、ほぼその大きさを保ちながら推移する。規模的にはかなりの縮小というべきで、若宮大路側溝はこの時大きく変化したことになる。そこでこの一群を、前代と区別する意味で溝5と呼ぶ。掘方断面はおおむね逆台形で、木枠は箱型である。層位的にはII面にともなう可能性がある。

この一群の最初のもの（溝5-1）には、北壁に両側の根太が残っており、幅がよく分かる。それによると、木枠溝の幅は芯で294~298cmになる。深さは、もしII面に帰属するならば、70~80cm程度を計る。掘方は逆台形の断面で、下端幅3.2m前後、上端幅は3.7m前後になると考えられる。

この溝は浚渫され、壁体が改修されるが（溝5-II）、位置はほとんど変わらず、規模も同程度に保たれる。そしてもう一度大きく掘り直され（溝5-III）、さらに浚渫を受けたあと、前述の溝4の時期に移行する。

以上、最盛期中世若宮大路の変遷を、大雑把にたどってきた。これら大きな変化のほか、土層断面からは頻繁な浚渫や掘り直しが観察できる。また溝枠も何度も作り直され、根太や板材が幾重にも重ねられているので、掘方との相關関係を把握するのは大変困難であった。しかしそれでも、土層断面で判断するかぎり、側溝中心軸自体にほとんど変移のないことがうかがえる。そこにこの間の町割の一貫性が看取できよう。大事なことが後になったが、溝5の幅3mという数値は、大路西側で過去に検出された側溝木枠の数値に等しい。

根太は厚み・幅に若干の個体差がある（図41）ほか、その長さや、束柱の立つゾ穴の間隔にも、次のような違い、あるいは共通性が認められる。すなわち、西側で唯一全長の分かる根太4は長さ393.2cm、



位  
置  
規  
模  
面  
平  
面  
形  
長  
軸  
方  
位  
柱  
穴  
形  
態  
考  
査

3・4-B・C  
2間(4.0m)×2間(4.1m)  
16.4m<sup>2</sup>  
正方形  
N-27°30'-E  
円形・楕円形  
柱アリ

1. 暗褐色粘質土  
2. 暗褐色弱粘質土



	長径×短径	厚さ	底面	表面	備考
P.1	50×(40)	9	866	859	
P.2	40×38	22	853	861	柱根遺存
P.3	48×48	24	858	860	柱根遺存
P.4	42×42	30	865	877 (871)	柱根遺存
P.5	50×46	22	856	871	
P.6 (35)×(35)	12	843	850		
P.7	44×37	24	854	859	柱根遺存
P.8	60×47	24	848	852	柱根遺存
P.9	60×(40)	29	843	860	礫石

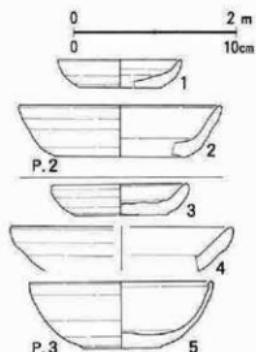


図28 建物7、出土遺物 (1)

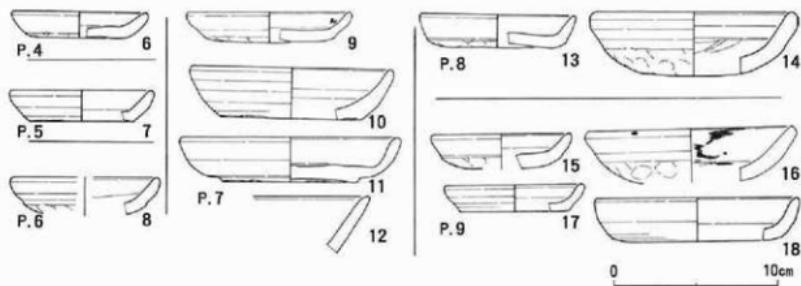


図29 建物7出土遺物(2)

1	土師器	寸法 口径7.4cm 底径5.1cm 器高1.7cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(8.0)cm 器高3.15cm 胎土 砂粒 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径8.4cm 底径5.6cm 器高1.95cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 雲母含む 粗い	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
4	土師器	寸法 口径(13.0)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける	
5	土師器	寸法 口径11.2cm 底径4.6cm 器高4.1cm 胎土 氣孔あり 色調 灰白色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 燒成 良好
6	土師器	寸法 口径8.2cm 底径(5.6)cm 器高1.6cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ
7	土師器	寸法 口径8.8cm 底径(6.3)cm 器高1.9cm 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 燒成 良好
8	土師器	寸法 口径(9.2)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける	
9	土師器	寸法 口径10.2cm 底径(6.5)cm 器高1.9cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 粗い	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
10	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(8.6)cm 器高3.1cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 粗い	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口径13.6cm 底径8.2cm 器高2.7cm 胎土 砂粒 針状物質含む 粗い	成形 手づくね 口縁部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
12	常滑こね跡 II類	寸法 不明 成形 細積 胎土 增灰色 白色粒 砂粒含む	色調 暗茶褐色 焼成 良好
13	土師器	寸法 口径9.6cm 底径(6.4)cm 器高2.0cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰橙色 焼成 良好
14	土師器	寸法 口径12.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む きめ細かい	色調 淡灰橙色 焼成 良好
15	土師器	寸法 口径8.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒 雲母貝粒含む	色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
16	土師器	寸法 口径13.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 貝粒含む	色調 灰橙色 焼成 良好
17	土師器	寸法 口径8.6cm 底径6.8cm 器高1.6cm 胎土 砂粒 針状物質含む 粗い	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
18	土師器	寸法 口径12.6cm 底径9.4cm 器高2.7cm 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 粗い	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表16 建物7出土遺物観察表

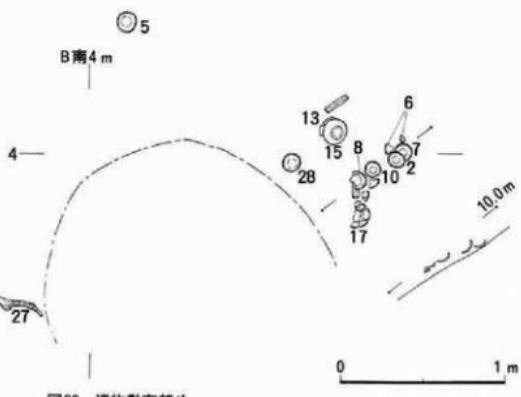
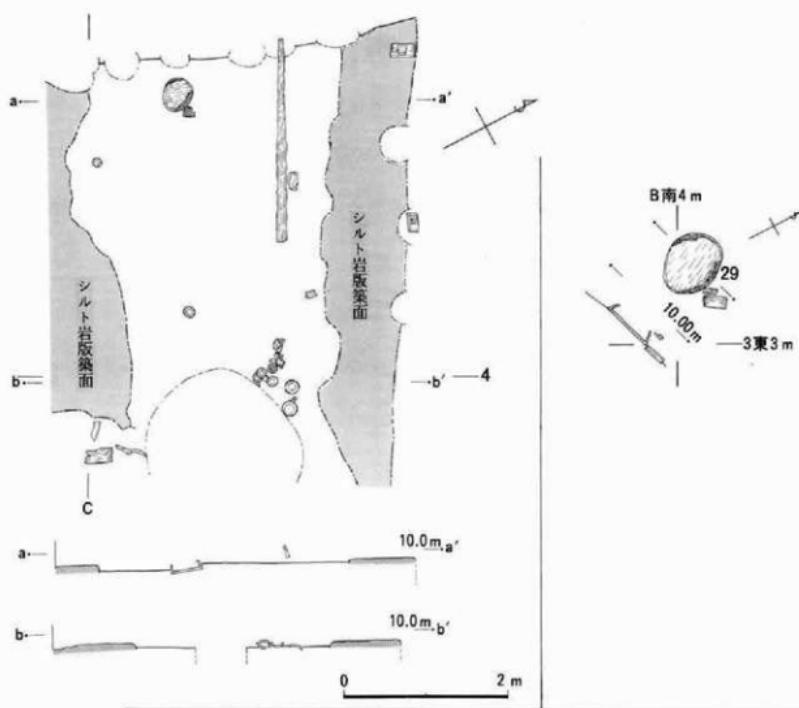


図30 遺物散在部分

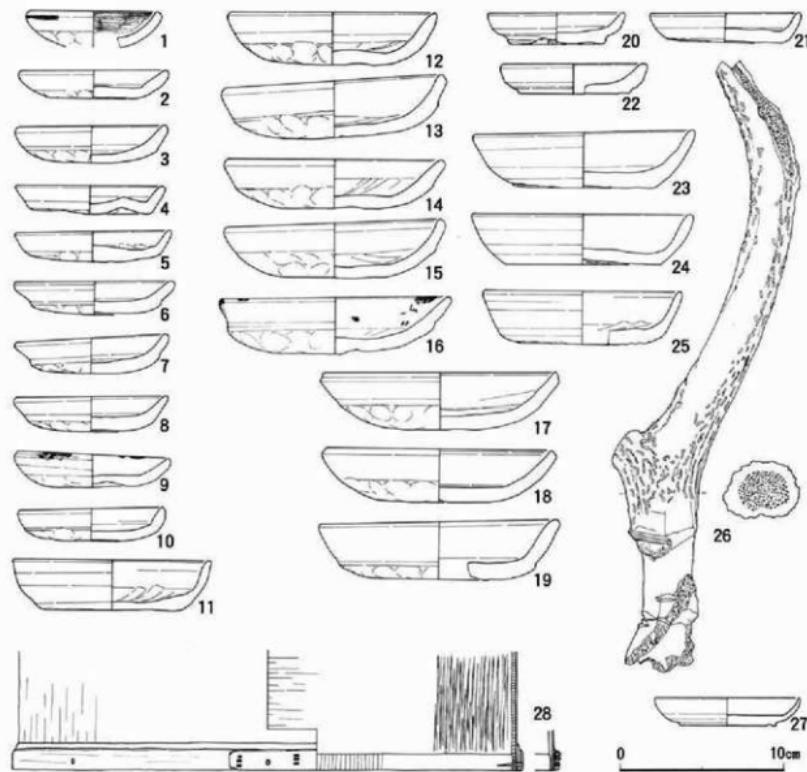


図31 遺物散在部分出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
2	土師器	寸法 口径9.2cm 底径5.0cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む きめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
3	土師器	寸法 口径9.4cm 底径2.7cm 器高1.75cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む きめ細かい 色調 淡灰褐色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径9.2cm 底径7.2cm 器高1.75cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒含む きめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 半完形
5	土師器	寸法 口径9.6cm 底径4.2cm 器高1.85cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒多い 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 完形
6	土師器	寸法 口径9.8cm 底径5.4cm 器高2.25cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒少量含む きめ細かい 色調 淡灰褐色 焼成 良好
7	土師器	寸法 口径9.4cm 底径4.0cm 器高2.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒含む きめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形

表17 遺物散在部分出土遺物観察表(1)

8	土師器	寸法 胎土	口径9.4cm 底径3.1cm 針状物質 微砂粒含む	器高2.2cm 色調 淡灰粉色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好	
9	土師器 灯明皿	寸法 胎土	口径9.6cm 底径4.8cm 砂粒 針状物質含む	器高2.0cm 色調 灰橙色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好	備考 二次焼成を受ける 全体に剥離あり
10	土師器	寸法 胎土	口径9.0cm 底径4.2cm 砂粒 針状物質含む	器高2.0cm 色調 灰橙色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好	備考 完形
11	土師器	寸法 胎土	口径8.5cm 底径8.5cm 砂粒 針状物質	器高3.05cm 色調 赤色小粒	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好	備考 板状圧痕あり
12	土師器	寸法 胎土	口径12.8cm 底径4.6cm 赤色小粒 砂粒	器高3.2cm 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好 備考 半完形
13	土師器	寸法 胎土	口径13.8cm 底径3.6cm 針状物質	器高3.5cm 微砂粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰橙色	焼成 良好
14	土師器	寸法 胎土	口径13.6cm 底径5.9cm 微砂粒含む	器高3.0cm 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰橙色	焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
15	土師器	寸法 胎土	口径13.6cm 底径4.5cm 砂粒	器高3.35cm 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰橙色	焼成 良好 備考 半完形
16	土師器 灯明皿	寸法 胎土	口径14.4cm 底径3.9cm 針状物質	器高3.45cm 砂粒 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 淡灰褐色	焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
17	土師器	寸法 胎土	口径14.6cm 底径4.5cm 砂粒	器高3.5cm 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰褐色	焼成 良好
18	土師器	寸法 胎土	口径14.4cm 底径6.8cm 砂粒	器高3.25cm 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好
19	土師器	寸法 胎土	口径14.8cm 底径(8.0)cm 微砂粒	器高3.5cm 針状物質 雲母含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好
20	土師器	寸法 胎土	口径8.4cm 底径5.8cm 砂粒	器高1.9cm 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 灰橙色	焼成 良好 備考 板状圧痕あり
21	土師器	寸法 胎土	口径9.2cm 底径6.7cm 砂粒	器高1.8cm 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 暗橙色	焼成 良好 備考 板状圧痕あり
22	土師器	寸法 胎土	口径9.0cm 底径(6.8)cm 砂粒	器高1.85cm 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 橙色	焼成 良好
23	土師器	寸法 胎土	口径13.6cm 底径8.8cm 砂粒	器高3.4cm 針状物質 赤色小粒 雲母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 暗橙色	焼成 良好 備考 板状圧痕あり
24	土師器	寸法 胎土	口径13.6cm 底径9.6cm 砂粒	器高3.1cm 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 灰橙色	焼成 良好 備考 板状圧痕あり
25	土師器	寸法 胎土	口径12.7cm 底径(7.7)cm 砂粒	器高3.2cm 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 色調 暗橙色	焼成 良好 備考 板状圧痕あり
26	鹿角	寸法	長さ37.8cm 成形	断面最大径5.4cm 根元と先端部を切断	根元近くに切断を試みた痕 二段の一本も切断	根元近くに切断を試みた痕 5か所以上あり
27	漆器皿	寸法	口径8.8cm 底径5.9cm 成形	器高1.7cm	内外面 黒漆塗り	無文
28	曲物	寸法	径30.0cm 底径1.0cm 成形	目の薄板を2枚(綾目と横目)重ねて底板を巻き 底部に巻いた柱 目のオビを桜の皮で縫ひあわせ 5本の木釘で底板に止め付けている		

表18 遺物散在部分出土遺物観察表(2)

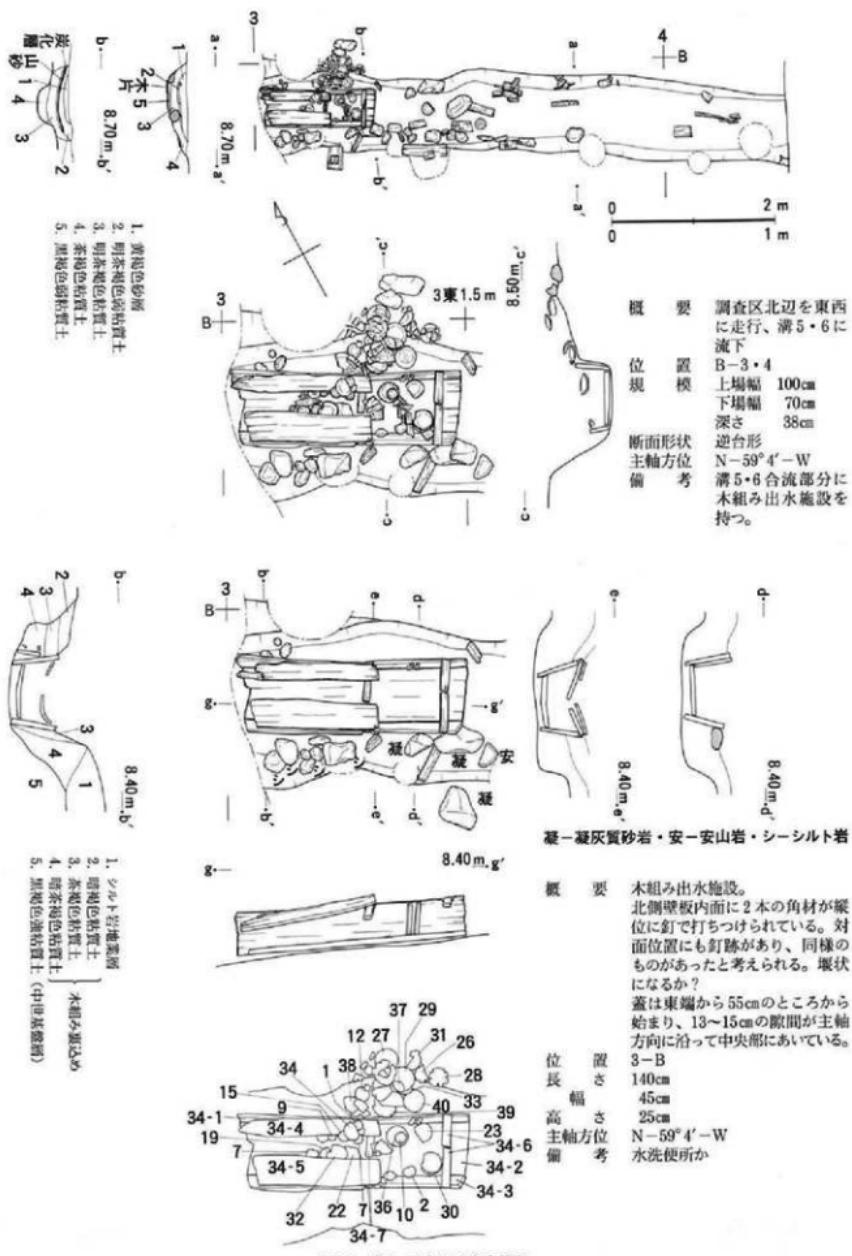


図32 溝2、同木組み出水施設

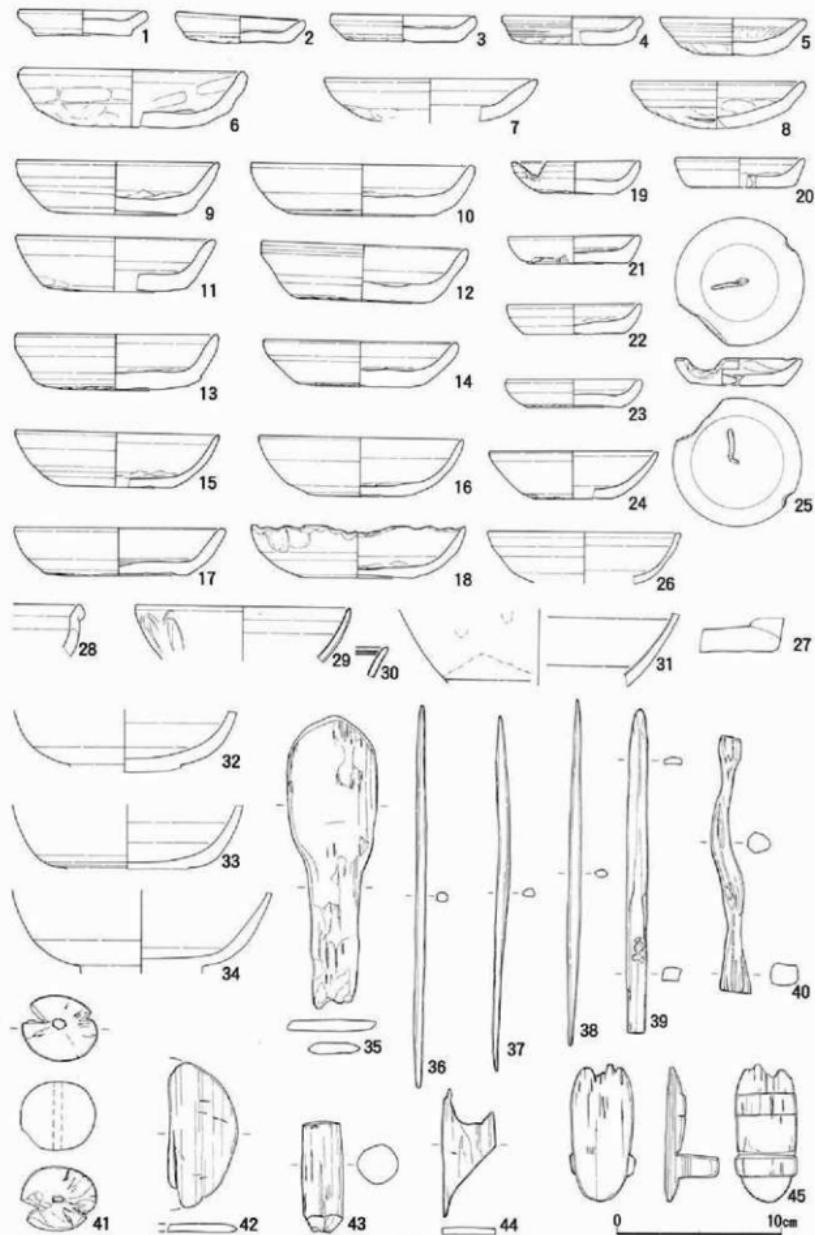


图33 满2出土遗物

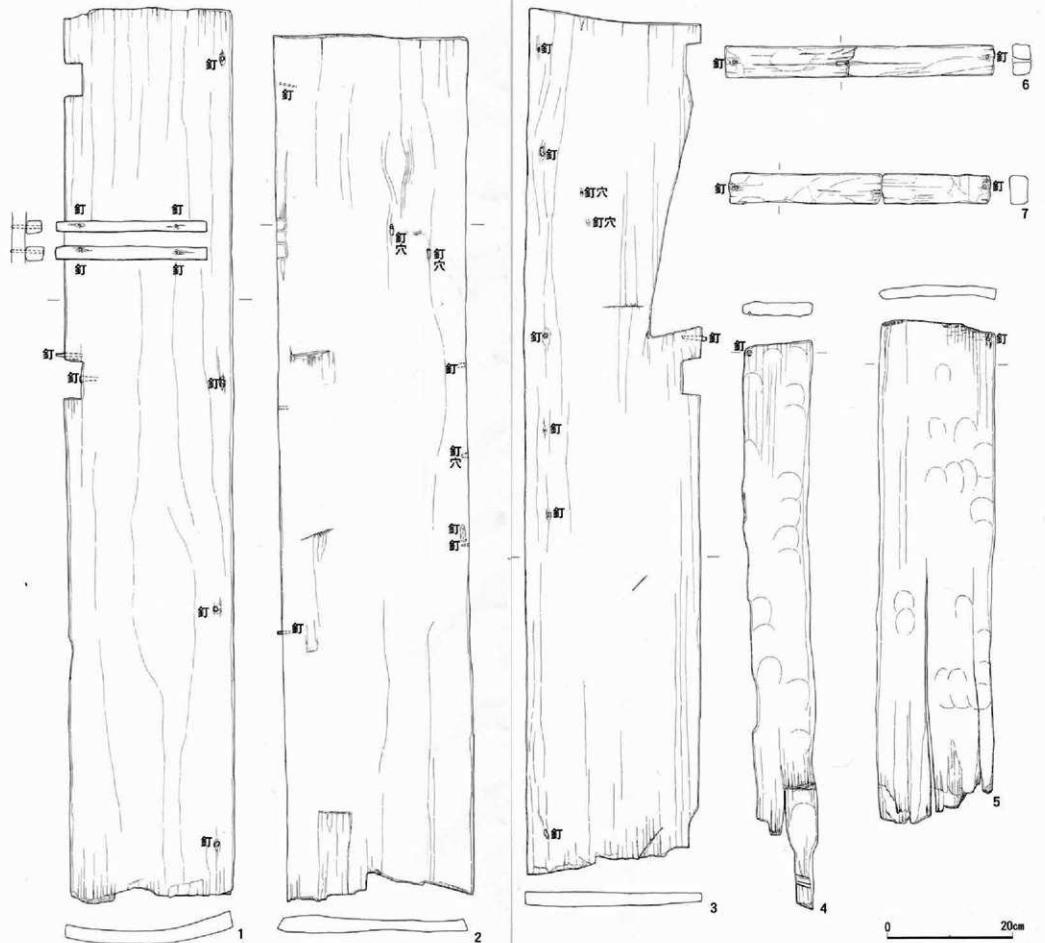
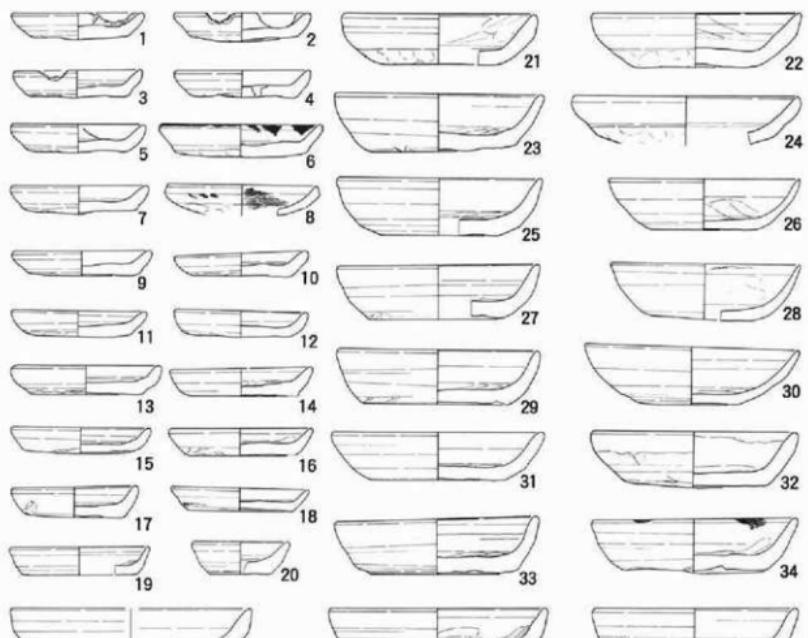


図34 清2木組み出水施設部材実測図



42~51 横方

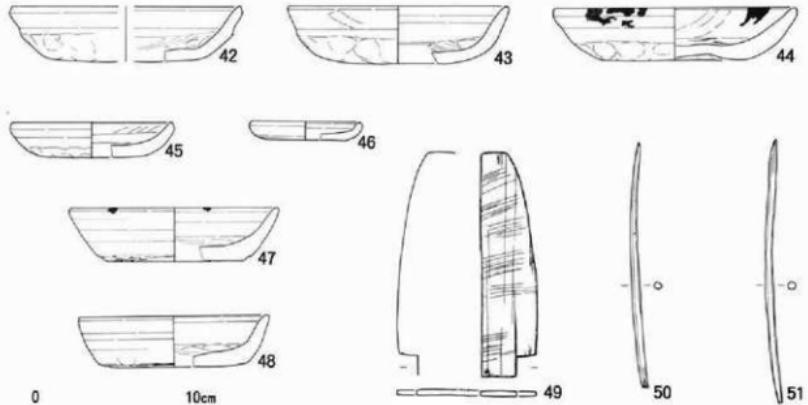


图35 溝2出水施設出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.5cm 胎土 砂粒・針状物質含む 色調 灰褐色 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.7cm 器高1.1cm 胎土 赤色粒子・針状物質含む 色調 淡橙色 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好 備考
3	土師器	寸法 口径9.0cm 底径6.0cm 器高1.6cm 胎土 砂粒・雲母含む 色調 灰褐色 成形 手づくね 口縁部 外底部ナデ 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
4	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(5.2)cm 器高1.7cm 胎土 針状物質 赤色粒子 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好 備考
5	土師器	寸法 器高8.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 雲母・針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考
6	土師器	寸法 口径14.0cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考
7	土師器	寸法 口径13.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考
8	土師器	寸法 口径10.6cm 底径2.0cm 器高2.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 橙色 成形 良好 備考
9	土師器	寸法 口径12.6cm 底径8.5cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒 赤色粒子含む 色調 橙色 成形 良好 備考
10	土師器	寸法 口径13.8cm 底径9.0cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色粒子 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(9.0)cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒 赤色粒子含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考 板状圧痕あり
12	土師器	寸法 口径12.8cm 底径8.6cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 赤色粒子 シルト岩粒 砂粒含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考 板状圧痕あり
13	土師器	寸法 口径12.6cm 底径8.8cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 シルト岩粒 針状物質 赤色粒子含む 燒成 良好 備考 板状圧痕あり
14	土師器	寸法 口径12.0cm 底径6.4cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色粒子 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 成形 良好 備考 板状圧痕あり
15	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(6.8)cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄い 胎土 きめ細かい 色調 淡橙色 燒成 良好 備考 板状圧痕あり
16	土師器	寸法 口径12.6cm 底径6.5cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄い 胎土 雲母 微砂粒含む きめ細かい 色調 淡橙色 燒成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
17	土師器	寸法 口径13.0cm 底径8.7cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色粒子 シルト岩粒含む 色調 橙色 燒成 良好 備考 完形
18	土師器	寸法 口径13.2cm 底径7.2cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 回転糸切り 口縁部を打ち欠く 内薄い 胎土 赤色粒子含む きめ細かい 色調 橙色 燒成 良好 備考 板状圧痕あり
19	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.6cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 燒成 良好 備考 二次焼成を受ける 板状圧痕あり
20	土師器	寸法 口径8.0cm 底径6.6cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 回転糸切り 胎土 針状物質 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 燒成 良好 備考 二次焼成を受ける 板状圧痕あり
21	土師器	寸法 口径8.2cm 底径6.0cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 回転糸切り 胎土 針状物質 赤色粒子含む 色調 橙色 燒成 良好 備考 板状圧痕あり
22	土師器	寸法 口径8.2cm 底径6.1cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 回転糸切り 胎土 雲母 針状物質 赤色粒子 砂粒含む 色調 灰褐色 燒成 良好 備考 板状圧痕あり
23	土師器	寸法 口径8.4cm 底径5.6cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 回転糸切り 胎土 針状物質 シルト岩粒 砂粒含む 色調 灰褐色 燒成 良好 備考

表19 滝2出土遺物観察表(1)

24	土師器	寸法 口径10.2cm 底径(4.6)cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄 胎土 針状物質含む キメ細かい 色調 淡褐色 焼成 良好
25	土師器孔穿	寸法 口径6.8cm 底径5.6cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 内外底部に穿孔部分から溝状の削りがある 胎土 針状物質 赤色粒子 砂粒含む 色調 橙色 備考 板状圧痕あり 完形
26	土師器白色系	寸法 口径11.8cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
27	瓦火質鉢	寸法 不明 成形 輪轍後ナデ 胎土 雲母 長石含む 気孔あり 色調 灰赤色 焼成 良好
28	瀬戸鉢	寸法 不明 成形 ロクロ 玉緑 胎土 灰白色 欲氣孔あり 釉薬 淡灰緑色 半透明 内外面ハケ塗り 焼成 良好
29	青磁竜泉窯碗	寸法 口径13.0cm 成形 ロクロ 文様 外面連弁 素地 灰白色 軸渠 淡青緑色 半透明 焼成 良好
30	青磁碗	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 繰刺 素地 灰緑色 軸渠 淡緑色 透明 焼成 良好
31	白磁碗	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 無文 素地 灰白色 気孔あり 釉薬 淡灰色 不透明 焼成 良好
32	漆器椀	寸法 不明 成形 内外面黒漆塗り 文様 無文
33	漆器碗	寸法 不明 成形 内外面黒漆塗り 文様 無文
34	漆器碗	寸法 不明 成形 内外面黒漆塗り 文様 無文
35	杓子	寸法 最大幅5.5cm 柄幅3.0cm 厚さ0.7cm
36	箸	寸法 長さ23.3cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm 両口
37	箸	寸法 長さ21.6cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 両口
38	箸	寸法 長さ21.0cm 幅0.7cm 厚さ0.4cm 両口
39	木製品	寸法 長さ19.2cm 幅1.3cm 厚さ0.8cm ヘラか
40	木製品	寸法 長さ15.7cm 最大幅1.8cm 最小幅0.7cm 厚さ1.2cm 鳥形か
41	木製品	寸法 径4.6cm～4.2cm 成形 球状 ほぼ中央に0.5cmの棒を差込む 把手か
42	曲物板	寸法 径(9.6)cm 厚さ0.5cm 成形 目取り
43	不明木製品	寸法 長さ8.8cm 径2.5cm 円柱の一端を削る
44	不明木製品	寸法 幅3.2cm 厚さ0.45cm 成形 板目取り
45	下駄	寸法 長さ8.5cm 幅3.8cm 最大厚3.0cm 最小厚0.3cm

表20 溝2出土遺物観察表(2)

1	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.8cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
2	土師器	寸法 口径8.4cm 底径6.6cm 器高1.8cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 雲母 砂粒 シルト岩粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
3	土師器	寸法 口径7.9cm 底径5.9cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 赤色粒子 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
4	土師器穿孔	寸法 口径8.4cm 底径6.4cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 底部に穿孔あり 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
5	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.5cm 器高1.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 内面に引っ搔き底あり 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形

表21 溝2出水施設出土遺物観察表(1)

6	土師器 灯明皿	寸法 口径10.0cm 底径4.2cm 器高2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 スス付着
7	土師器	寸法 口径8.4cm 底径7.1cm 器高1.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
8	土師器	寸法 口径9.4cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 針状物質 赤色粒子含む 色調 橙色 捻成 良好 備考 二次焼成を受ける
9	土師器	寸法 口径8.6cm 底径6.8cm 器高1.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 霧母 含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 半完形
10	土師器	寸法 口径8.2cm 底径6.1cm 器高1.4cm 成形 手づくね 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
11	土師器	寸法 口径8.3cm 底径5.0cm 器高1.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 霧母 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
12	土師器	寸法 口径8.2cm 底径6.2cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
13	土師器	寸法 口径7.2cm 底径6.8cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 淡灰赤色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
14	土師器	寸法 口径8.8cm 底径6.6cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
15	土師器	寸法 口径8.6cm 底径6.8cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
16	土師器	寸法 口径8.8cm 底径6.6cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
17	土師器	寸法 口径7.8cm 底径6.1cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色粒子 砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 完形
18	土師器	寸法 口径8.4cm 底径6.2cm 器高1.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄い 胎土 針状物質 シルト岩粒 白色粒子含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
19	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(7.2)cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
20	土師器	寸法 口径6.0cm 底径(4.0)cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質含む ややきめ細かい 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける 板状圧痕あり
21	土師器	寸法 口径12.0cm 底径(6.0)cm 器高3.1cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
22	土師器	寸法 口径12.8cm 底径6.6cm 器高3.3cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 赤色粒子 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
23	土師器	寸法 口径12.8cm 底径7.9cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒 砂粒 霧母 赤色粒子 含む 色調 灰橙色 備考 板状圧痕あり
24	土師器	寸法 口径14.0cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 針状物質 シルト岩粒含む ややきめ細かい 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
25	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(7.2)cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄い 胎土 針状物質 シルト岩粒 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
26	土師器	寸法 口径11.8cm 底径6.6cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄い 胎土 針状物質含む キメ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける 板状圧痕あり
27	土師器	寸法 口径12.5cm 底径(8.3)cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色粒子 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 半完形 板状圧痕あり
28	土師器	寸法 口径11.6cm 底径(6.1)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 ヘラ削り 胎土 砂粒 赤色粒子含む キメ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 半完形 内外面引っかき傷あり
29	土師器	寸法 口径12.6cm 底径8.3cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒 赤色粒子含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表22 溝2出水施設出土遺物観察表(2)

30	土師器	寸法 口径13.2cm 底径6.1cm 器高3.5cm 胎土 雲母含む きめ細かい 色調 橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
31	土師器	寸法 口径13.0cm 底径8.0cm 器高2.9cm 胎土 赤色粒子 針状物質含む 色調 橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 備考 板状圧痕あり
32	土師器	寸法 口径12.6cm 底径8.8cm 器高3.4cm 胎土 針状物質 赤色粒子 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 器肉薄い 色調 灰褐色 備考 板状圧痕あり 完形
33	土師器	寸法 口径12.6cm 底径8.0cm 器高3.3cm 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 完形
34	土師器 灯明皿	寸法 口径12.6cm 底径8.4cm 器高3.3cm 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 橙色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 シルト岩粒 焼成 良好 備考 板状圧痕あり スス付着 完形
35	土師器	寸法 口径(7.4)cm 底径(9.2)cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 シルト岩粒 針状物質含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好
36	土師器	寸法 口径13.4cm 底径9.1cm 器高3.4cm 胎土 雲母 シルト岩粒 砂粒 針状物質含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 備考 板状圧痕あり 完形
37	土師器	寸法 口径12.6cm 底径8.7cm 器高3.5cm 胎土 針状物質 赤色粒子 砂粒含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 備考 板状圧痕あり 半完形
38	土師器	寸法 口径14.6cm 底径9.4cm 器高3.4cm 胎土 針状物質 砂粒 シルト岩粒 赤色粒子含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 備考 板状圧痕あり
39	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(8.6)cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
40	土師器	寸法 口径13.0cm 底径8.0cm 器高3.3cm 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
41	土師器 白色系	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 針状物質含む きめ細かい 色調 灰白色	
42	土師器	寸法 口径(14.2)cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 白色粒子含む 色調 橙色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
43	土師器	寸法 口径13.6cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 胎土 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
44	土師器 灯明皿	寸法 口径18.0cm 底径8.0cm 器高3.2cm 胎土 針状物質 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好 備考 スス付着
45	土師器	寸法 口径10.0cm 底径(6.0)cm 器高2.0cm 胎土 針状物質 きめ細かい 色調 淡褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
46	土師器 極小	寸法 口径7.0cm 底径(4.8)cm 器高1.1cm 胎土 砂粒 赤色粒子含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
47	土師器	寸法 口径12.8cm 底径(8.4)cm 器高3.3cm 胎土 赤色粒子 針状物質含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
48	土師器	寸法 口径11.8cm 底径(7.5)cm 器高3.1cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色粒子含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好
49	板草履	寸法 厚さ0.3cm 備考 板目取り	
50	箸	寸法 長さ15.0cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm	
51	箸	寸法 長さ16.1cm 幅0.5cm 厚さ0.4cm	

表23 清2出水施設出土遺物観察表(3)

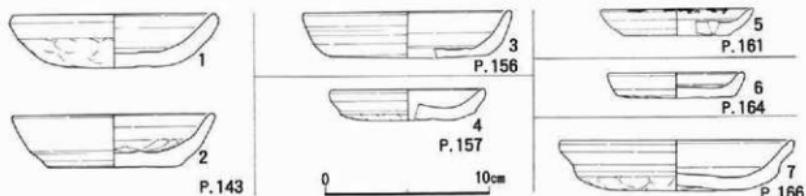


図36 III面柱穴出土遺物

P.143	1	土師器	寸法 口径 12.8cm 底径 6.0cm 器高 3.3cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	2	土師器	寸法 口径 12.4cm 底径 7.9cm 器高 3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 雲母 シルト岩粒 小石含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
P.156	3	土師器	寸法 口径 12.8cm 底径 (9.4)cm 器高 2.85cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 粗い 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
P.157	4	土師器	寸法 口径 9.6cm 底径 5.5cm 器高 1.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
P.161	5	土師器 灯明皿	寸法 口径 9.4cm 底径 (6.6)cm 器高 1.65cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部にスス付着 刻離著しい 内底から外底へ穿孔あり
P.164	6	土師器	寸法 口径 8.4cm 底径 6.0cm 器高 1.55cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
P.166	7	土師器	寸法 口径 14.4cm 底径 8.0cm 器高 3.05cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 薄砂粒 針状物質含む 色調 暗紅褐色 焼成 良好

表24 III面柱穴出土遺物観察表

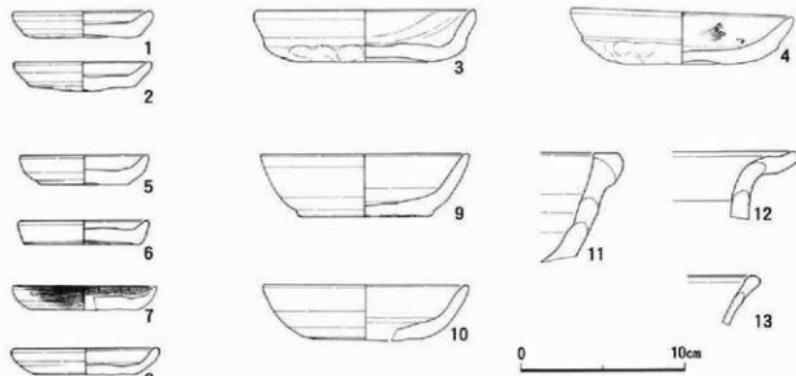


図37 III面貝砂層出土遺物

1	土師器	寸法 口径 8.6cm 底径 6.1cm 器高 1.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径 8.4cm 底径 1.1cm 器高 1.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好

表25 III面貝砂層出土遺物観察表(1)

3	土師器 胎土	寸法 口径13.6cm 底径8.6cm 器高3.15cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 赤色小粒 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
4	土師器 灯明皿 胎土	寸法 口径13.7cm 底径6.8cm 器高3.15cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 微砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 口縁部 内底部スス付着
5	土師器 胎土	寸法 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
6	土師器 寸法 胎土	口径8.0cm 底径6.8cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
7	土師器 灯明皿 胎土	口径8.8cm 底径(6.6)cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 赤色小粒 砂粒含む 色調 灰灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
8	土師器 胎土	口径9.0cm 底径6.2cm 器高3.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 砂粒 針状物質 雪母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
9	土師器 胎土	口径13.8cm 底径8.2cm 器高3.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土師器 胎土	口径12.6cm 底径(6.2)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 赤色小粒 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	瓦質鉢 胎土	寸法 不明 成形 輪積 砂粒多く含む 赤色粒 小石含む 色調 灰色 焼成 良好
12	涅美甕 胎土 色調	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 白色粒含む 赤褐色 軸渠 刷毛塗り 焼成 良好 備考 口縁部剥れ口断面にも胎がかかる
13	常滑こね跡 I類 胎土	寸法 不明 成形 輪積 砂粒 小石含む 色調 暗灰色 焼成 良好

表26 III面貝砂層出土遺物觀察表(2)

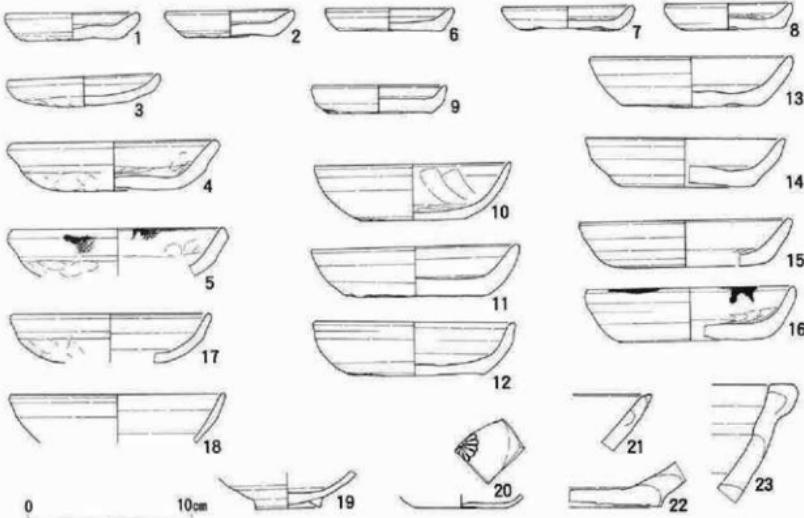
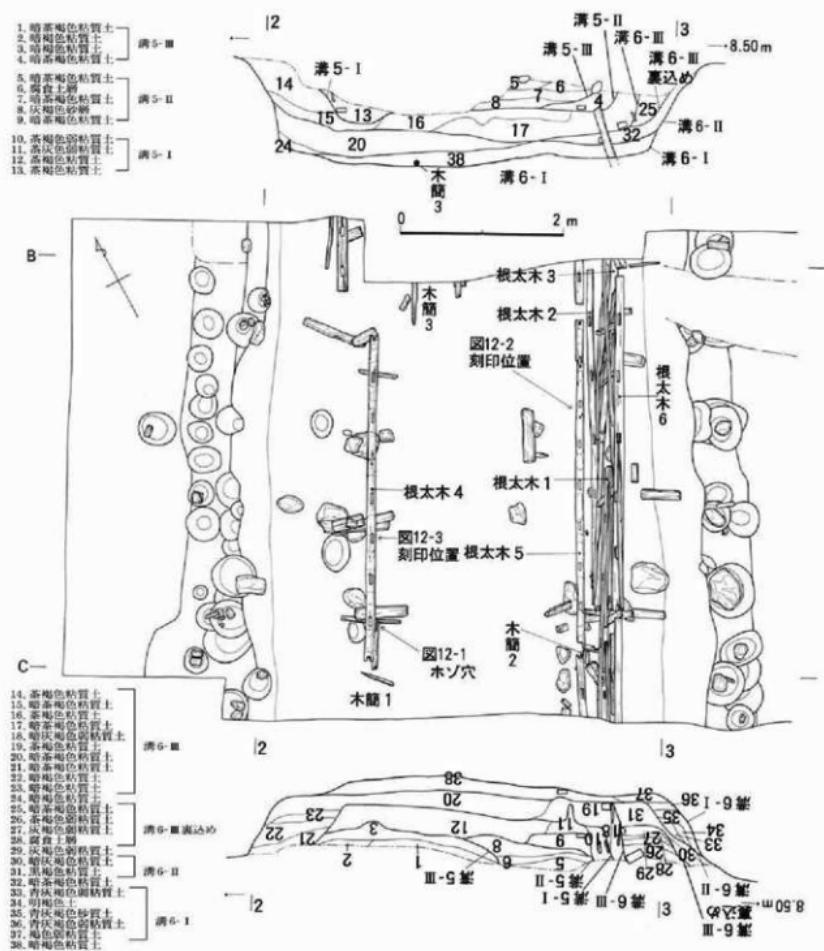


图38 III面上包含層出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.7cm 器高1.7cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 半完形
2	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.0cm 器高1.6cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径9.4cm 底径3.0cm 器高1.8cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
4	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.0cm 器高3.0cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
5	土師器 灯明皿	寸法 口径13.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 スス付着
6	土師器	寸法 口径7.9cm 底径6.5cm 器高1.4cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
7	土師器	寸法 口径8.1cm 底径6.0cm 器高1.45cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
8	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.9cm 器高1.6cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
9	土師器	寸法 口径8.3cm 底径6.4cm 器高1.7cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土師器	寸法 口径12.0cm 底径6.6cm 器高3.4cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む きめ細かい 色調 明橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口径12.8cm 底径8.4cm 器高3.05cm 成形 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
12	土師器	寸法 口径12.4cm 底径8.5cm 器高3.3cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
13	土師器	寸法 口径12.5cm 底径8.5cm 器高3.1cm 成形 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
14	土師器	寸法 口径12.4cm 底径6.6cm 器高3.0cm 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好
15	土師器	寸法 口径13.0cm 器高(2.8)cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
16	土師器 灯明皿	寸法 口径13.0cm 底径8.4cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 スス付着 板状圧痕あり
17	土師器 白色系	寸法 口径12.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む 気孔有り 色調 淡橙白色 焼成 良好
18	土師器 白色系	寸法 口径13.2cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒含む 色調 灰白色 焼成 良好
19	早鳥	寸法 底径4.0cm 成形 手づくね 内底部ナデ 高台貼り付け 高台に粉殻痕あり 胎土 砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
20	瓦器	寸法 底径(5.5)cm 成形 手づくね 内底部ナデ 内底面に菊花の暗文 胎土 砂粒 霊母含む 色調 灰白色 焼成 良好
21	常滑こね跡 Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 灰褐色 長石 石英 小石含む 色調 茶褐色 焼成 良好
22	常滑こね跡 Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積 外面下位ヘラ削り 内底面指痕あり 胎土 灰褐色 長石 シルト岩粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好
23	瓦質鉢 火	寸法 不明 成形 輪積 胎土 黄灰色 砂粒 小石含む 色調 谈橙色 焼成 良好

表27 Ⅲ面上包含層出土遺物観察表



溝5-III	概要	調査区を南北に継断 断面図形	溝5-1
位	置	2-B・C	
規	模	上堤幅及び下場幅溝5- Iに切られ不明	
	深さ(確認面から)	40cm	
	主方位	N-28°6' -E	

溝5-II	概要	調査区を南北に縦断 断面逆台形
位	置	2-B・C
規	模	上場幅及び下場幅溝5- Iに切られ不明
		深さ(種認面から) 45cm
	本輪左方	N.L. - 925.2m. E.

概要 調査区を南北に継断  
位 置 断面逆台形  
規 模 2-B・C  
上堤幅 340cm  
下堤幅 310cm  
深さ(確認面から) 60cm  
主軸方位 N-28°6' E

概要 調査区を南北に縦断  
位 置 断面逆台形  
規 模 2-B・C  
上堤幅 570cm  
下堤幅 440cm  
深さ(確認面から) 80cm  
本体高さ 2.25m

溝 6-II 概 位 規	要 同じ 断面逆台形 2-B・C 上揚幅 570cm 下揚幅 450cm 深さ(確認面から) 90cm
主軸方位	N-28°E-F

溝6-1	概要	調査区を南北に継断 断面はばく形(殆ど溝6-Ⅲ、 Ⅱに切られる為不明)
位 置	2-B・C	
規 模	溝6-II、Ⅲに切られる為不明 深さ(測定面から) 20cm	
主な物質	N = 0.026% E	

図39 課5・6

ホゾ穴間隔は芯心の平均49.2cm。東側の根太木2は長さ417.6cm、ホゾ穴間隔は平均70cm。東側根太木3は長さ424.6cm、ホゾ穴間隔は平均53.2cm。東側根太木5(個別図なし)は長さ398cm(接ぎ足し部含む)、ホゾ穴間隔は平均49cm。東側根太木6は長さ406cm、ホゾ穴間隔は平均71cm。東側根太木1は折損しているため全長は不明だが、ホゾ穴間隔は平均70.4cmである。

これによれば、西側の根太木4と東側根太木5、東側の1・2・6がそれぞれ共通のホゾ穴間隔にあることが分かる。特に前者は全長も共通しており、同時期のものである可能性があるが、ホゾ穴同士は向き合っておらず、対応性は不明である。後者のうち、2と6のホゾ穴は上下同じ位置にある。これは一つの溝の上辺と底辺のかも知れない。この問題は、材木の再利用を考慮にいれ、いま少し資料の蓄積を待ちたい。

出土遺物は大量で、図43以下に示したとおりである。溝6から人名木簡が2点出土したことが注目される。1点は東側根太の継ぎ目近くから出土したもので、「二けん まきのむくのすけ」と書かれている。もう1点は調査区北壁際の西側根太寄りで出土し、「二けん かわしりの五郎」とあった(図74・75)。これらは先述の「二けん おぬきの二郎」木簡と同じく、幕府が若宮大路側溝工事という公共事業を御家人に負担させた、その当該地点の表示札であろう。中世史にとって重要な発見であることは間違いないが、これについては次節であらためて論じたい。

#### 溝5・6肩柱穴列(図42)

溝5・6の東西の肩口には、柱穴が溝に沿って並ぶ。おそらく溝枠の内側への倒壊を防ぐため、束材から控え柱を曳き、さらにその控えを根元で固定する柱、あるいは杭を埋めた穴であろう。何列か重複しているが、個々の溝との対応関係は把握できなかつた。

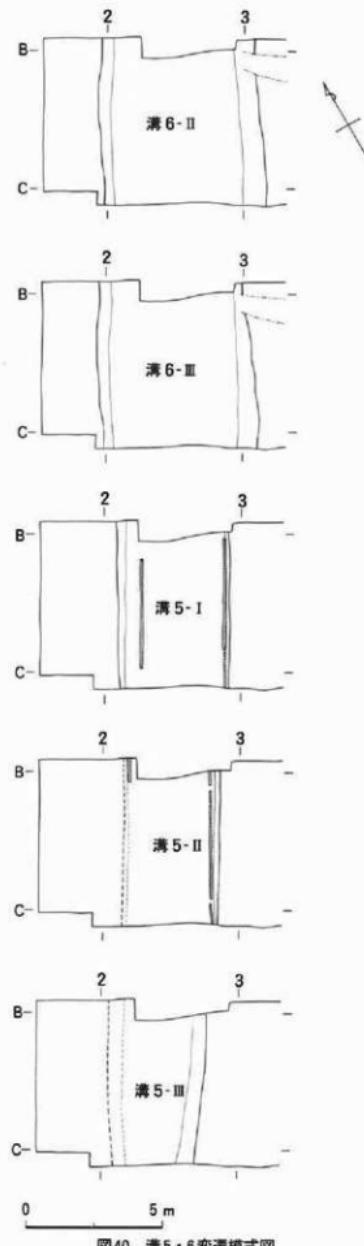
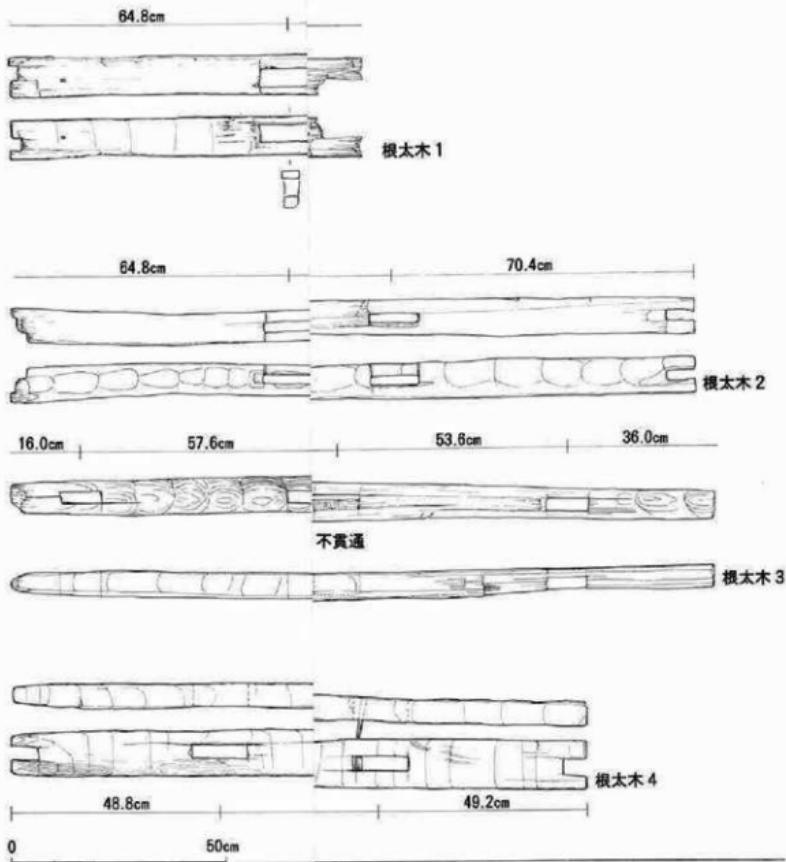
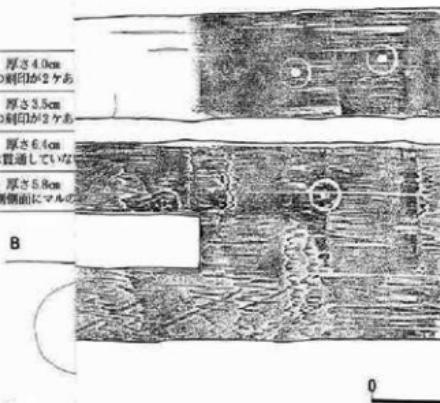
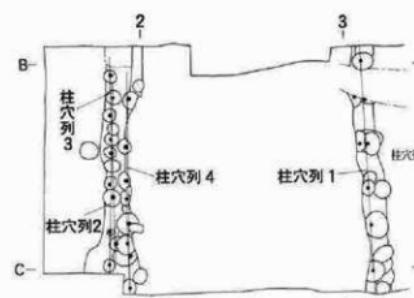


図40 溝5・6変遷模式図



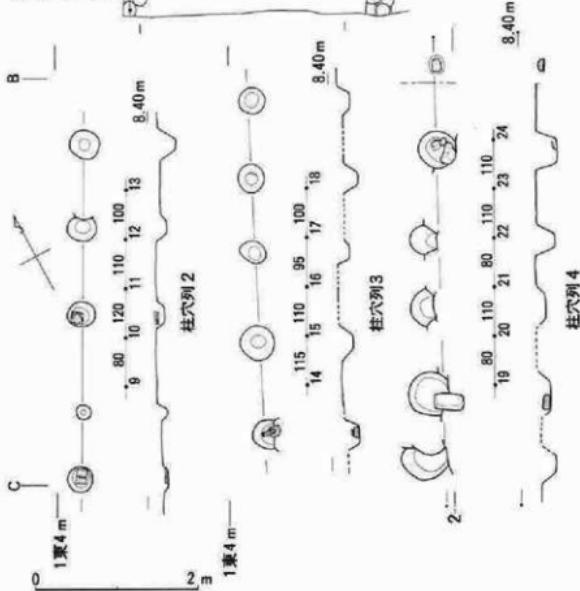
1	寸法 長さ341.6cm 幅8.8cm 厚さ4.0cm 4ヶ所あり 備考 下面に梅の刺印が2ヶあ
2	寸法 長さ417.6cm 幅8.8cm 厚さ3.5cm 5ヶ所あり 備考 下面に梅の刺印が2ヶあ
3	寸法 長さ426.6cm 幅9.0cm 厚さ6.0cm 8ヶ所あり (そのうちの3ヶ所は貫していない)
4	寸法 長さ393.2cm 幅11.6cm 厚さ5.8cm 7ヶ所あり 備考 上面と東側側面にマルの





位置	規模	輪方位
1-3-B-C	2圓半(5m)	N-26°E
2-2-B-C	2圓(4m)	N-27°6'E
3-2-B-C	2圓(4m)	N-27°E
4-2-B-C	2圓半(5m)	N-27°E

溝側倒柱穴1				单孔 cm
幅員×延長	深さ	底面積	底面積	備考
P.1 50×(40)	46	785	783	石と丸瓦を使用
P.2 65×(69)	36	395	393	石と丸瓦を使用
P.3 35×(30)	45	222	202	砾石に丸瓦使用
P.4 (25)×(10)	46	290		
P.5 (50)×(37)	30	801	822	砾石に丸瓦使用
P.6 40×(25)	34	282		
P.7				計測不能
P.8 33×(40)	22	295		



生穴列4

清西侧柱列2					单位 mm
	长径×短径	深 S	面宽 mm	板厚 mm	参考
P.9	39×30	5	274	779	模板#
P.10	18×16	9	274		
P.11	30×(30)	8	274	791	模板#
P.12	36×(28)	11	276		
P.13	35×35	24	263		

溝西側柱穴列3				単位
	長径×短径	深さ	鏡面 側面 裏面	備考
P14	(40)×35	13	767 777	
P15	42×42	17	772	
P16	33×35	7	776	遺物あり
P17	33×32	16	765	
P18	30×30	16	774	

溝西側柱穴列4				単位 cm
長径×短径	幅	高さ	壁面形状	備考
P.19 (60)×(30)	43	237		
P.20 (55)×(33)	18	268	774	礫石に安山岩
P.21 (30)×(40)	23	268		
P.22 (35)×(35)	33	769		
P.23 (42)×(46)	47	742		遺物あり
P.24 (22)×(19)	19	229	776	礫石に安山岩

图42 治5·6肩柱穴列

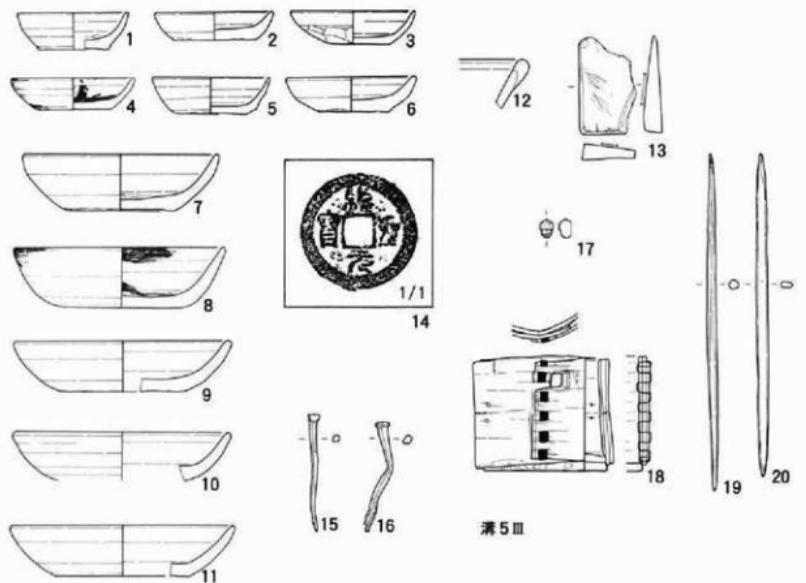


図43 漢5-III・II出土遺物(1)

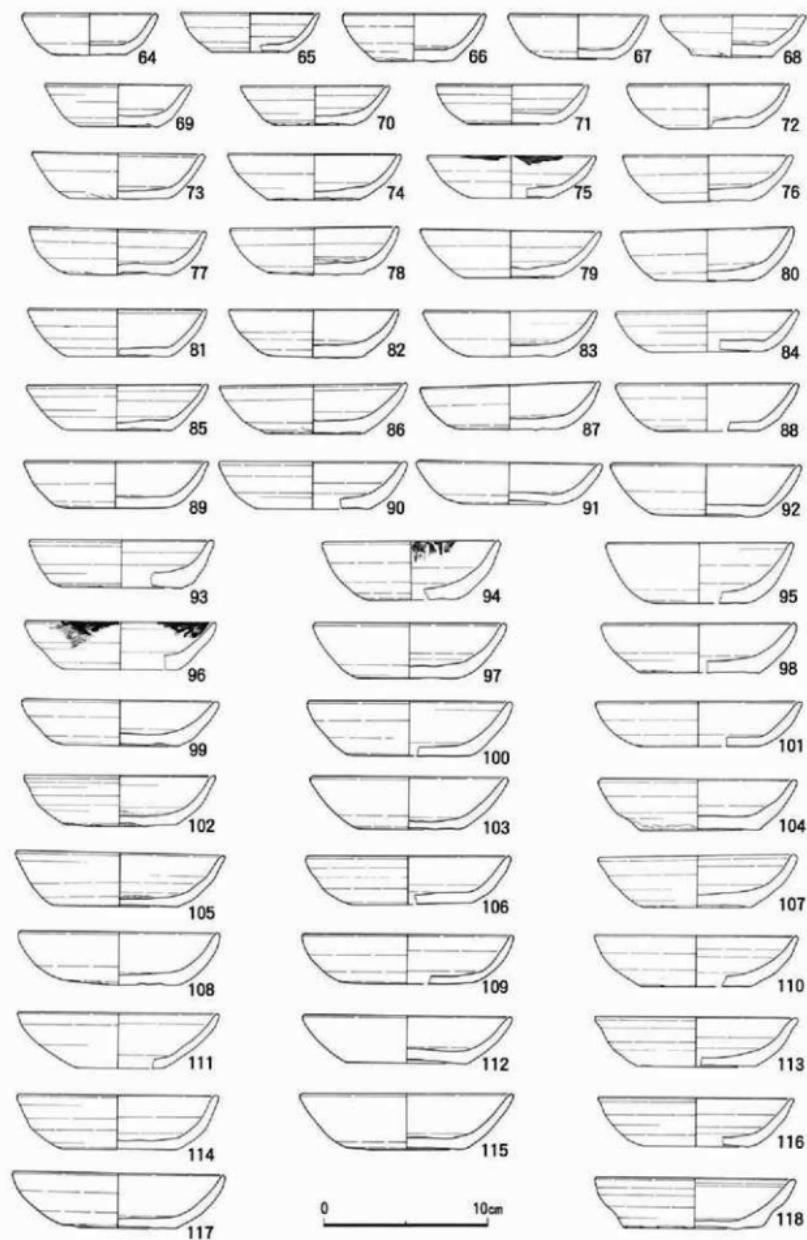


図44 满5-II出土遺物(2)

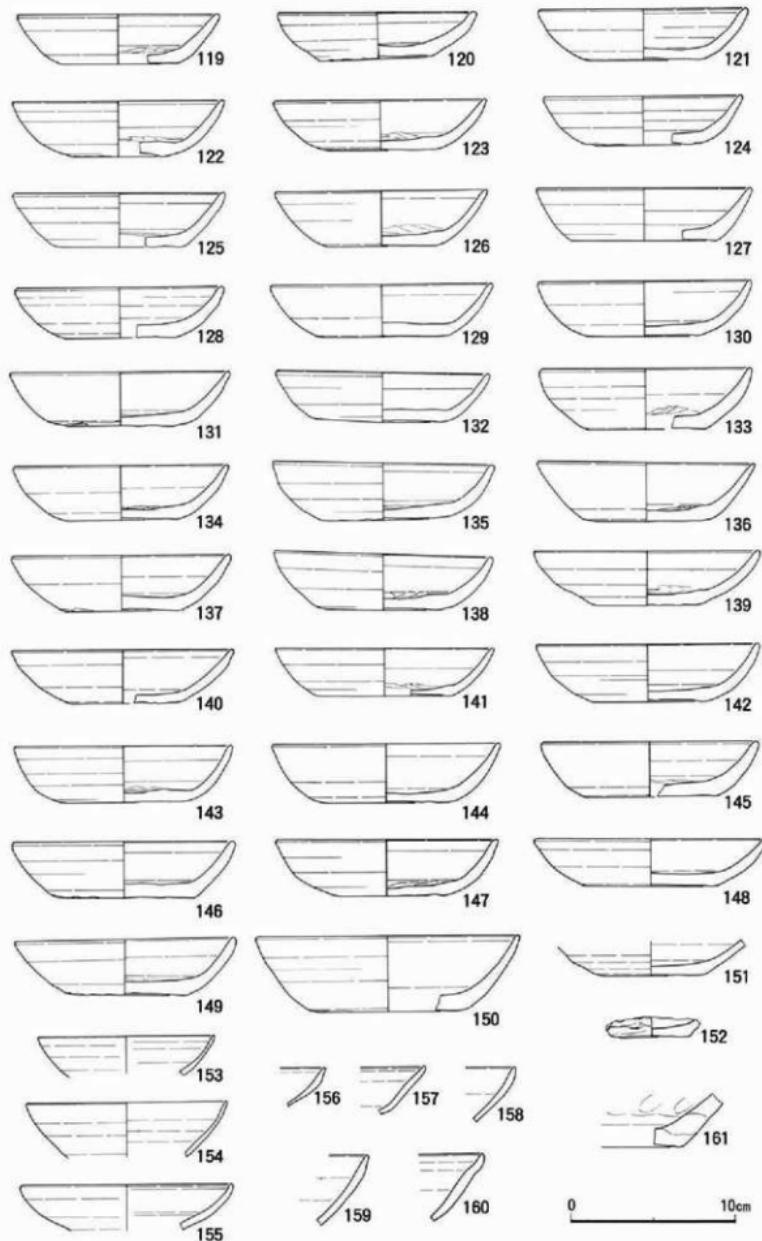
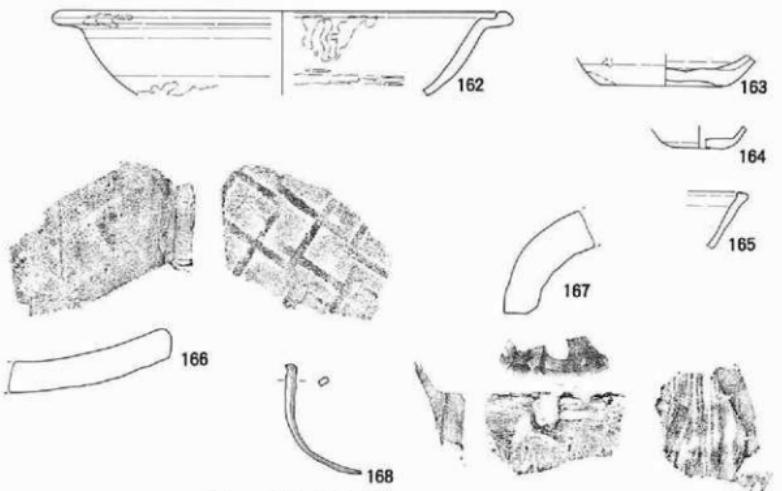


図45 漢5-II 出土遺物(3)



溝5Ⅱ 土師器層出土遺物

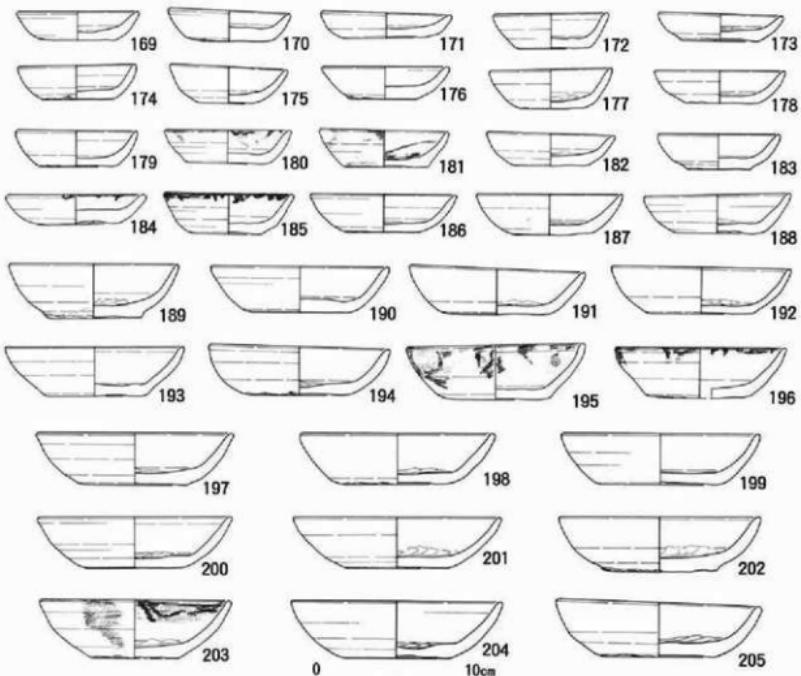


図46 溝5-Ⅱ出土遺物(4)

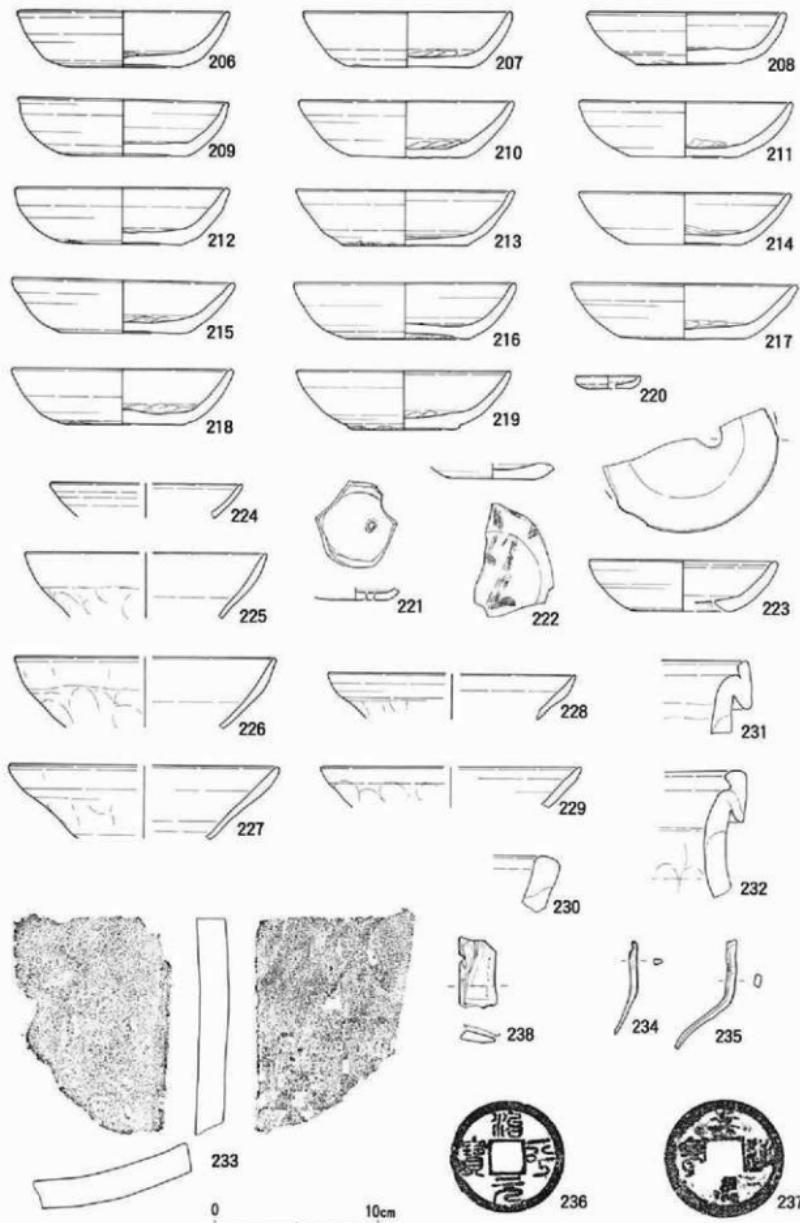


圖47 滋5-II出土遺物(5)

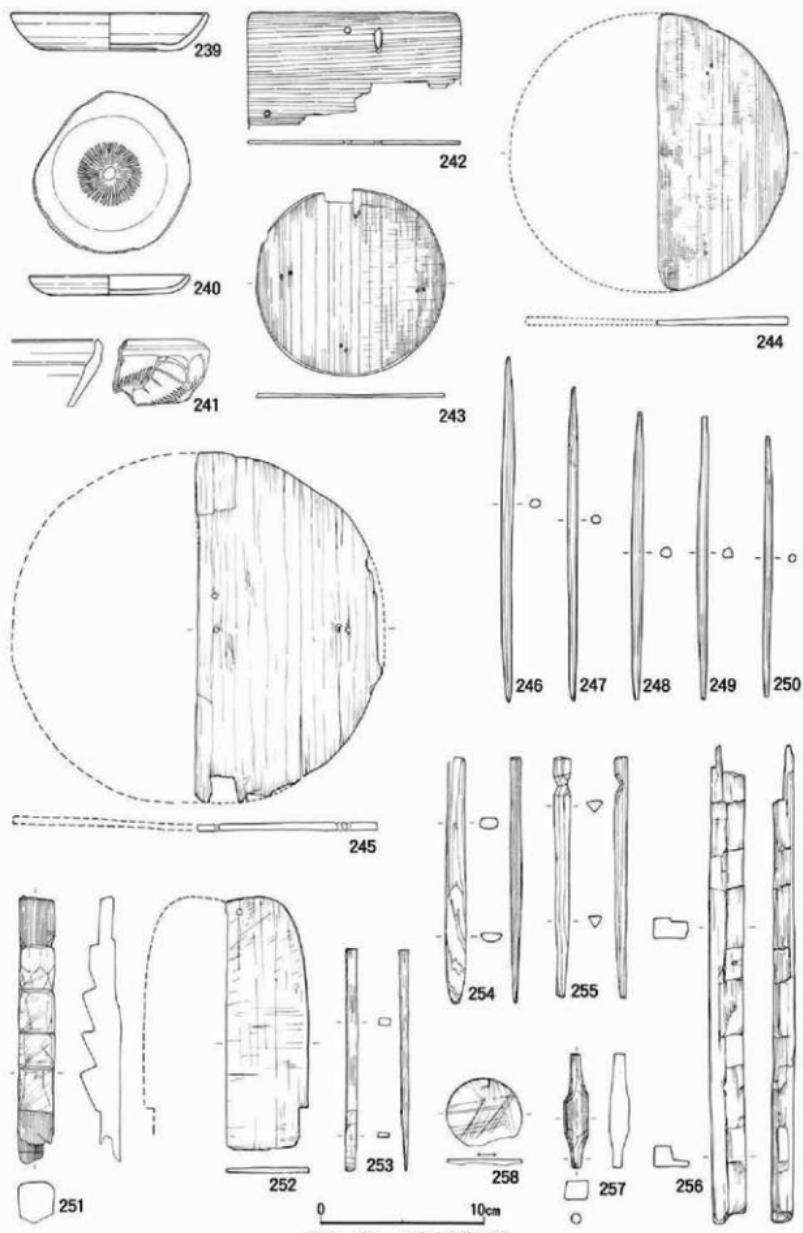


图48 滝5-II出土遗物(6)

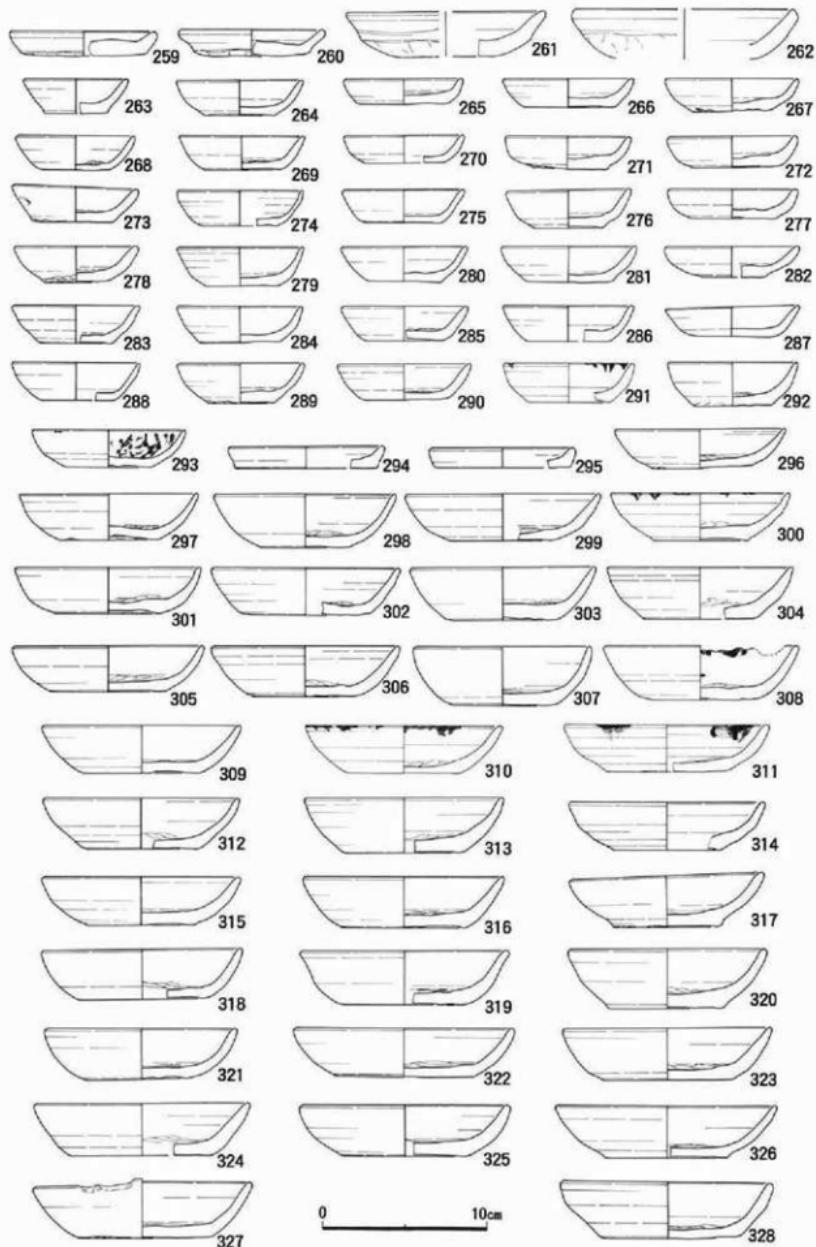


图49 池5-I 出土遗物(1)

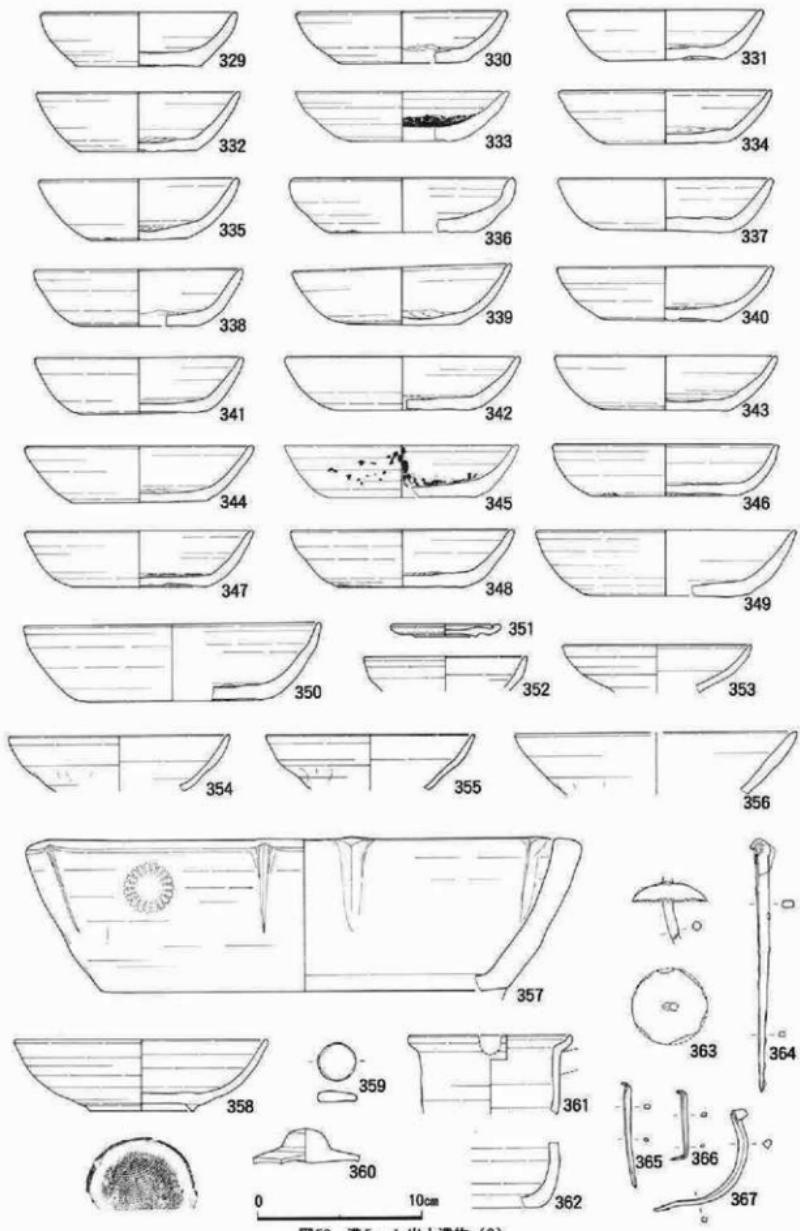
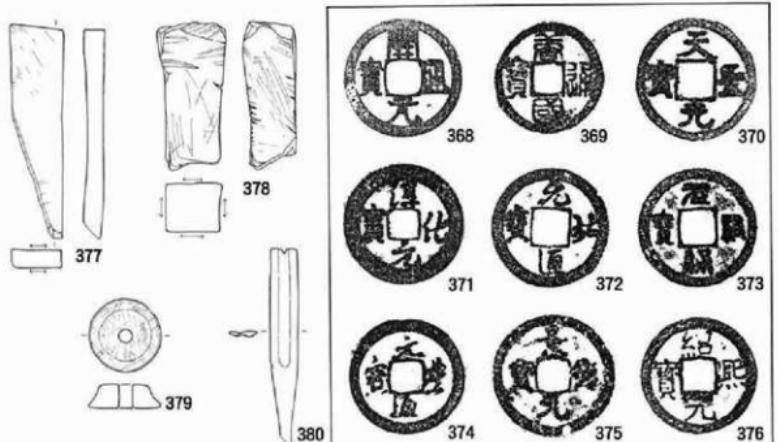


図50 满5-I 出土遺物 (2)



1/1

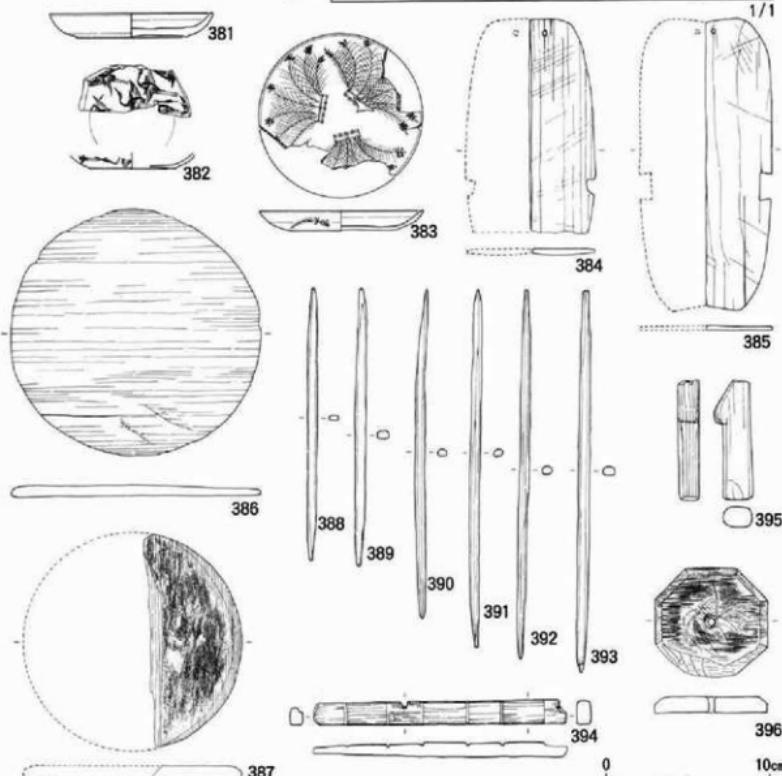


図51 满5-I出土遺物(3)

1	土師器	寸法 口径6.8cm 底径(4.2)cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径7.4cm 底径5.1cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
3	土師器	寸法 口径7.6cm 底径3.85cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰色 焼成 良好
4	土師器 灯明皿	寸法 口径7.6cm 底径4.5cm 器高1.05cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 内底部に多量のスス付着 板状圧痕あり
5	土師器	寸法 口径7.25cm 底径4.3cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.3cm 器高2.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 暗灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
7	土師器	寸法 口径12.1cm 底径6.3cm 器高3.45cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
8	土師器 灯明皿	寸法 口径12.95cm 底径8.0cm 器高3.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部 内底部にスス付着 板状圧痕あり
9	土師器	寸法 口径13.4cm 底径(7.8)cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土師器	寸法 口径13.4cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
11	土師器	寸法 口径13.8cm 底径(8.2)cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
12	常滑ごね鉢 1類	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰色 焼成 良好
13	砥石	寸法 幅3.35cm 厚さ1.1cm 色調 乳白色 産地 北関東 備考 中磁 1面底面
14	銛	銛聖元宝 北宋 初鋤1094年 篆書
15	鉄製品 銛	寸法 長さ7.2cm 幅0.35cm 厚さ0.4cm
16	鉄製品 銛	寸法 幅0.4cm 厚さ0.5cm
17	不明木製品	寸法 長さ1.1cm 最大径0.8cm
18	曲物	寸法 長径10.0cm 短径8.1cm 高さ7.0cm 底厚6.0cm 成形 横目の薄板を桜の皮で縫じ合わせる 縫じ部は三重
19	箸	寸法 長さ21.6cm 幅0.55cm 厚さ0.6cm 両口
20	箸	寸法 長さ20.8cm 幅0.7cm 厚さ0.35cm 両口
21	土師器	寸法 口径7.4cm 底径4.6cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 内底部微凸状工具痕あり 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
22	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
23	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.9cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 霧母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
24	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.9cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
25	土師器	寸法 口径7.4cm 底径4.2cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 完形
26	土師器	寸法 口径7.4cm 底径4.55cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 頁粒 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形

表28 清5出土遺物観察表(1)

27	土師器	寸法 口径7.7cm 底径5.1cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
28	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.7cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 シルト岩粒 針状物質 赤色小粒 雪母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
29	土師器	寸法 口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
30	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.4cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
31	土師器	寸法 口径7.2cm 底径5.8cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒 小石含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
32	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.7cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
33	土師器	寸法 口径9.9cm 底径4.5cm 器高1.05cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 地面色 焼成 良好
34	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.7cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
35	土師器	寸法 口径7.4cm 底径4.4cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 雪母 目粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 完形
36	土師器	寸法 口径7.5cm 底径4.6cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
37	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.0cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 地面色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
38	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.3cm 器高2.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
39	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.0cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 雪母 赤色小粒 目粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
40	土師器	寸法 口径7.5cm 底径4.7cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
41	土師器	寸法 口径7.2cm 底径4.4cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
42	土師器	寸法 口径7.5cm 底径4.4cm 器高2.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 目粒少量含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
43	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.8cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 シルト岩粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
44	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.6cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 雪母 赤色小粒 小石 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
45	土師器	寸法 口径7.6cm 底径3.4cm 器高2.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
46	土師器	寸法 口径7.7cm 底径4.15cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 地面色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
47	土師器	寸法 口径7.8cm 底径5.3cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 砂粒含む 色調 地面色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
48	土師器	寸法 口径7.6cm 底径5.0cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 雪母含む 色調 橙色 焼成 良好
49	土師器	寸法 口径7.7cm 底径4.55cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
50	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.1cm 器高2.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒多量 雪母含む 色調 地面色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表29 溝5出土遺物観察表(2)

51	土師器	寸法 口径7.7cm 底径4.7cm 器高2.3cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 暗褐色含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
52	土師器	寸法 口径7.9cm 底径5.1cm 器高1.95cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
53	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.7cm 器高2.0cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
54	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.6cm 器高1.9cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
55	土師器	寸法 口径7.5cm 底径4.3cm 器高2.2cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 小石 シルト岩粒含む 色調 橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
56	土師器	寸法 口径7.7cm 底径4.8cm 器高2.3cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
57	土師器	寸法 口径8.1cm 底径5.7cm 器高1.65cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
58	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.1cm 器高2.05cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 雲母含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
59	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.5cm 器高1.5cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
60	土師器	寸法 口径7.6cm 底径3.9cm 器高2.4cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 雲母含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
61	土師器	寸法 口径7.7cm 底径4.6cm 器高2.2cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
62	土師器	寸法 口径8.1cm 底径4.8cm 器高1.8cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝粒含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
63	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.4cm 器高2.4cm 胎土 針状物質 赤色小粒 小石少量含む 色調 淡緑色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
64	土師器	寸法 口径8.3cm 底径4.7cm 器高2.55cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
65	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(4.8)cm 器高2.4cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
66	土師器	寸法 口径8.8cm 底径4.8cm 器高2.95cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
67	土師器	寸法 口径8.6cm 底径4.4cm 器高2.7cm 胎土 砂粒 針状物質 貝粒少量 赤色小粒含む 色調 淡緑色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
68	土師器	寸法 口径8.95cm 底径5.0cm 器高2.6cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
69	土師器	寸法 口径9.0cm 底径4.8cm 器高2.6cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 雲母含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
70	土師器	寸法 口径9.2cm 底径4.8cm 器高2.4cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
71	土師器	寸法 口径9.4cm 底径5.2cm 器高2.4cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
72	土師器	寸法 口径10.0cm 底径(5.6)cm 器高2.7cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
73	土師器	寸法 口径10.6cm 底径6.0cm 器高2.8cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 小石 貝粒含む 色調 淡橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
74	土師器	寸法 口径10.7cm 底径5.8cm 器高2.8cm 胎土 砂粒 針状物質 雲母 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表30 溝5出土遺物観察表(3)

75	土師器 灯明皿	寸法 口径 10.4cm 底径 5.0cm 器高 2.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
76	土師器	寸法 口径 10.5cm 底径 5.7cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
77	土師器	寸法 口径 10.9cm 底径 6.5cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
78	土師器	寸法 口径 10.4cm 底径 5.8cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
79	土師器	寸法 口径 11.1cm 底径 6.0cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
80	土師器	寸法 口径 10.6cm 底径 6.2cm 器高 3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒多量含む 色調 淡灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
81	土師器	寸法 口径 11.0cm 底径 6.0cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 薄赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
82	土師器 灯明皿	寸法 口径 10.4cm 底径 6.3cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 貝殻 赤色小粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
83	土師器	寸法 口径 10.7cm 底径 5.4cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
84	土師器	寸法 口径 11.2cm 底径 (6.6)cm 器高 2.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
85	土師器	寸法 口径 11.2cm 底径 6.5cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒 小石含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
86	土師器	寸法 口径 11.6cm 底径 6.2cm 器高 3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
87	土師器	寸法 口径 11.0cm 底径 6.0cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 貝殻 赤色粒多量含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
88	土師器	寸法 口径 11.2cm 底径 (6.4)cm 器高 2.95cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 赤色粒 含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
89	土師器	寸法 口径 11.4cm 底径 7.2cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 シルト岩粒 針状物質 赤色粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
90	土師器	寸法 口径 11.6cm 底径 (6.8)cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
91	土師器	寸法 口径 11.4cm 底径 5.6cm 器高 2.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
92	土師器	寸法 口径 11.7cm 底径 6.3cm 器高 3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 土薙片 赤色粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
93	土師器	寸法 口径 11.4cm 底径 (7.4)cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
94	土師器 灯明皿	寸法 口径 11.0cm 底径 (6.0)cm 器高 3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
95	土師器	寸法 口径 11.5cm 底径 (6.8)cm 器高 3.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
96	土師器 灯明皿	寸法 口径 11.8cm 底径 (7.0)cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
97	土師器	寸法 口径 11.9cm 底径 6.6cm 器高 3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 赤色粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
98	土師器	寸法 口径 12.0cm 底径 (7.0)cm 器高 3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 脱土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表31 溝5出土遺物観察表(4)

99	土師器	寸法 口径12.2cm 底径7.2cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色粒少量含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
100	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(8.0)cm 器高3.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
101	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(7.0)cm 器高2.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 目粒 針状物質 シルト岩粒 赤色粒少量含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
102	土師器	寸法 口径11.8cm 底径7.0cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
103	土師器	寸法 口径12.2cm 底径6.8cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
104	土師器	寸法 口径12.2cm 底径7.4cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒多量含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
105	土師器	寸法 口径12.9cm 底径7.8cm 器高3.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
106	土師器	寸法 口径12.5cm 底径(8.0)cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒多量 土器片含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
107	土師器	寸法 口径12.2cm 底径4.6cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
108	土師器	寸法 口径12.4cm 底径6.8cm 器高3.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝粒 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
109	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(8.2)cm 器高3.05cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 貝粒 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
110	土師器	寸法 口径12.5cm 底径(7.1)cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 雪母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
111	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(5.2)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 橙白色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
112	土師器	寸法 口径12.9cm 底径7.4cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
113	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(7.4)cm 器高3.05cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
114	土師器	寸法 口径12.4cm 底径6.9cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
115	土師器	寸法 口径13.2cm 底径7.2cm 器高3.45cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝粒多量含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
116	土師器	寸法 口径12.0cm 底径(6.4)cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
117	土師器	寸法 口径13.1cm 底径7.3cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
118	土師器	寸法 口径12.2cm 底径8.4cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
119	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(7.4)cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒 雪母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
120	土師器	寸法 口径12.2cm 底径6.9cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
121	土師器	寸法 口径12.8cm 底径6.9cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
122	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(5.8)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表32 溝5出土遺物観察表(5)

123	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.2cm 器高3.1cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 露母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
124	土師器	寸法 口径12.2cm 底径(5.6)cm 器高3.0cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
125	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(7.2)cm 器高3.3cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
126	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.2cm 器高3.4cm 胎土 砂粒 針状物質 貝殻 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
127	土師器	寸法 口径13.2cm 底径(8.6)cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
128	土師器	寸法 口径12.8cm 底径(6.8)cm 器高3.1cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒少量含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
129	土師器	寸法 口径13.7cm 底径8.0cm 器高3.25cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
130	土師器	寸法 口径13.1cm 底径7.0cm 器高3.4cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 露母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
131	土師器	寸法 口径13.5cm 底径6.6cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 貝殻 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
132	土師器	寸法 口径13.1cm 底径8.0cm 器高3.1cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
133	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(7.4)cm 器高3.7cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
134	土師器	寸法 口径13.2cm 底径6.8cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
135	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.0cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒 貝殻含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
136	土師器	寸法 口径13.3cm 底径7.8cm 器高3.6cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 貝殻含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
137	土師器	寸法 口径13.4cm 底径7.5cm 器高3.4cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
138	土師器	寸法 口径13.4cm 底径8.2cm 器高3.9cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好
139	土師器	寸法 口径13.8cm 底径6.8cm 器高3.3cm 胎土 砂粒 針状物質 露母 小石 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
140	土師器	寸法 口径13.6cm 底径(7.2)cm 器高3.3cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 露母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
141	土師器	寸法 口径13.4cm 底径(8.2)cm 器高2.9cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 暗赤橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
142	土師器	寸法 口径13.5cm 底径7.0cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 針状物質 露母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
143	土師器	寸法 口径13.4cm 底径7.8cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 針状物質 露母 赤色小粒 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
144	土師器	寸法 口径14.0cm 底径7.7cm 器高3.6cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
145	土師器	寸法 口径13.2cm 底径(8.4)cm 器高3.35cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
146	土師器	寸法 口径13.7cm 底径8.6cm 器高3.45cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表33 第5出土遺物観察表 (6)

147	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.0cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
148	土師器	寸法 口径14.2cm 底径8.4cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒少量含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
149	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.3cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
150	土師器	寸法 口径16.2cm 底径(8.4)cm 器高4.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒少量含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
151	土師器 硬質	寸法 底径6.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 貝粒 赤色小粒少量含む 色調 淡灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
152	土師器	寸法 底径4.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
153	土師器 白色系	寸法 口径(10.8)cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
154	土師器 白色系	寸法 口径12.3cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 小石含む 色調 乳白色 焼成 良好
155	土師器 白色系	寸法 口径(13.0)cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 焼成 良好
156	土師器 白色系	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
157	土師器 白色系	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
158	土師器	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
159	土師器	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
160	土師器	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
161	常滑こね跡 Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積 外面へら削り 外面下位指頭痕 胎土 黄褐色 小石 白色粒 砂粒含む 色調 外面 黄褐色 内面 褐色 焼成 良好
162	瀬戸 折板皿	寸法 口径28.2cm 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 小石 砂粒含む 軸薬 灰緑色 透明 内面下方はハケ塗り 焼成 良好
163	瀬戸 平鍋	寸法 底径8.0cm 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 砂粒含む 軸薬 黒褐色 不透明 焼成 良好
164	瀬戸 入れ子	寸法 底径3.4cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 胎土 灰白色 砂粒含む 気孔あり 軸薬 無輪 焼成 良好
165	瀬戸 卸し皿	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 灰白色 砂粒含む 軸薬 黒褐色 不透明 焼成 良好
166	平瓦	寸法 厚さ1.85cm 成形 四面 布目なし 指ナ子調整 微妙粒付着 凸面 たたき目 X状斜め格子側面 へら削りの後指ナ子 胎土 瓦質 灰白色 赤色粒多量 小石 粗土 白色粒含む 焼成 甘い軟質
167	丸瓦	寸法 厚さ2.3cm 成形 凸面 繩目ナ子 凹面 布目 端部ヘラナ子 胎土 灰橙色 瓦質 小石 砂粒 長石 気孔あり 焼成 青地
168	釘	寸法 長さ9.0cm 幅0.6cm 厚さ0.3cm
169	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.8cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
170	土師器	寸法 口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 霧母 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好

表34 濑5出土遺物観察表(7)

171	土師器	寸法 口径8.1cm 底径5.0cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 雲母 小石 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
172	土師器	寸法 口径7.1cm 底径4.5cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 雲母 シルト岩粒 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
173	土師器	寸法 口径7.7cm 底径4.7cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
174	土師器	寸法 口径7.3cm 底径4.4cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
175	土師器	寸法 口径7.3cm 底径3.5cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 小石 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
176	土師器	寸法 口径7.9cm 底径4.2cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
177	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.0cm 器高2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
178	土師器	寸法 口径8.1cm 底径4.4cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 雲母 シルト岩粒 針状物質含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
179	土師器	寸法 口径7.5cm 底径4.8cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
180	土師器 灯明皿	寸法 口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付首
181	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.2cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 二二次焼成により不明 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 内外面スス付首
182	土師器	寸法 口径7.9cm 底径4.5cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝片 小石 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
183	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.0cm 器高2.15cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好
184	土師器 灯明皿	寸法 口径8.6cm 底径5.4cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付首
185	土師器 灯明皿	寸法 口径8.0cm 底径4.2cm 器高2.5cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付首 完形
186	土師器	寸法 口径9.0cm 底径4.5cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝片 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好
187	土師器	寸法 口径9.0cm 底径5.0cm 器高2.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝粒 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
188	土師器	寸法 口径9.0cm 底径5.2cm 器高2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
189	土師器	寸法 口径10.0cm 底径6.5cm 器高3.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好
190	土師器	寸法 口径11.0cm 底径5.6cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好
191	土師器	寸法 口径10.8cm 底径6.6cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝片 小石 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
192	土師器	寸法 口径11.0cm 底径6.2cm 器高2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
193	土師器	寸法 口径11.0cm 底径5.8cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
194	土師器	寸法 口径11.1cm 底径6.5cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形

表35 溝5出土遺物観察表(8)

195	土師器 灯明皿	寸法 口径11.0cm 底径6.5cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着 完形
196	土師器 灯明皿	寸法 口径10.6cm 底径6.1cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 増橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
197	土師器	寸法 口径12.1cm 底径6.6cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝粒 小石 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
198	土師器	寸法 口径12.0cm 底径6.7cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
199	土師器	寸法 口径12.2cm 底径7.5cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
200	土師器	寸法 口径12.0cm 底径6.0cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好
201	土師器	寸法 口径12.8cm 底径6.2cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
202	土師器	寸法 口径12.4cm 底径7.2cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
203	土師器 灯明皿	寸法 口径11.8cm 底径5.4cm 器高3.6cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
204	土師器	寸法 口径13.0cm 底径6.4cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
205	土師器	寸法 口径12.6cm 底径6.9cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
206	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.0cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝片 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
207	土師器	寸法 口径12.8cm 底径7.7cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 貝片 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
208	土師器	寸法 口径12.3cm 底径6.4cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
209	土師器	寸法 口径12.9cm 底径7.7cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
210	土師器	寸法 口径13.2cm 底径7.2cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
211	土師器	寸法 口径13.1cm 底径6.8cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝片 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
212	土師器	寸法 口径13.2cm 底径7.5cm 器高3.45cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝片 シルト岩粒 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
213	土師器	寸法 口径13.4cm 底径7.6cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝片 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
214	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.0cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
215	土師器	寸法 口径13.7cm 底径7.5cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 雲母含む 色調 橙色 焼成 良好
216	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.5cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
217	土師器	寸法 口径13.9cm 底径7.8cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
218	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.4cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表36 溝5出土遺物観察表(9)

219	土師器	寸法 口径13.2cm 底径6.8cm 器高3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 サラ粒 針状物質 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
220	土師器 極小	寸法 口径4.0cm 底径(2.6)cm 器高0.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 サラ粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
221	土師器 穿孔	寸法 底径4.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 サラ粒 針状物質 赤色小粒 雲母含む 色調 淡橙色 焼成 良好
222	土師器 墨書き	寸法 底径5.6cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 赤色小粒 針状物質 サルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 外底面に墨書き
223	土師器 孔	寸法 口径11.8cm 底径(6.2)cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 サラ粒 針状物質 シルト岩粒 小石 赤色小粒 雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
224	土師器 白色系	寸法 口径(11.8)cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 サラ粒含む 色調 灰白色 焼成 良好
225	土師器 白色系	寸法 口径(14.8)cm 成形 手づくね 胎土 サラ粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
226	土師器 白色系	寸法 口径(16.0)cm 成形 手づくね 胎土 サラ粒含む 色調 灰白色 焼成 良好
227	土師器 白色系	寸法 口径(16.6)cm 成形 手づくね 胎土 サラ粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
228	土師器 白色系	寸法 口径(15.2)cm 成形 手づくね 胎土 サラ粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
229	土師器 白色系	寸法 口径(16.0)cm 成形 手づくね 胎土 サラ粒含む 色調 乳白色 焼成 良好
230	瓦質 火鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 長石 小石含む 色調 灰黒色 焼成 普通
231	常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 長石 小石含む 色調 褐色 焼成 普通
232	常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 長石 小石 サラ粒含む 色調 暗褐色 焼成 普通
233	平 瓦	寸法 厚さ1.8cm 成形 凹面 格子 木松模様 凸面 砂目 胎土 サラ粒 褐色粒子 色調 淡灰橙色 胎土 サラ粒 褐色粒子含む 色調 淡灰橙色
234	鉄製品 釘	寸法 幅0.5cm 厚さ0.25cm
235	鉄製品 釘	寸法 幅0.8cm 厚さ0.4cm
236	銭	治平元宝 北宋 初鑄1064年 篆書
237	銭	嘉祐通宝 北宋 初鑄1056年 篆書
238	磁 石	寸法 長さ4.0cm 幅2.1cm 厚さ0.6cm 產地 嘴龍 色調 黄灰色 備考 仕上紙1面紙面
239	漆器 皿	寸法 口径12.0cm 底径7.2cm 器高2.3cm 成形 内面 朱漆塗り 外面 黒漆塗り 無文
240	漆器 皿	寸法 口径9.8cm 底径7.4cm 器高1.2cm 成形 内外面 黒漆塗り 文様 内底部 朱漆の菊花文
241	漆器 大椀	寸法 不明 成形 内外面黒漆塗り 文様 外面に朱漆で垣根に秋草文
242	折 敷	寸法 幅13.0cm 厚さ0.2cm 横目取り
243	曲物 蓋	寸法 径11.5cm 厚さ0.25cm 横目取り 4ヶ所に2コずつの穴あり
244	曲物 蓋	寸法 径17.0cm 厚さ0.55cm 横目取り 2ヶ所に2コずつの針穴あり
245	曲物 蓋	寸法 厚さ0.5cm 横目取り 数ヶ所に穴あり
246	箸	寸法 長さ21.1cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 両口
247	箸	寸法 長さ19.1cm 幅0.55cm 厚さ0.5cm 両口

表37 满5出土遺物観察表(10)

248	箸	寸法 長さ17.6cm 幅0.7cm 厚さ0.6cm 両口
249	箸	寸法 長さ17.3cm 幅0.6cm 厚さ0.6cm 両口
250	箸	寸法 長さ15.9cm 幅0.45cm 厚さ0.45cm 両口
251	不明木製品	寸法 長さ16.4cm 幅2.2cm 厚さ2.4cm
252	板 草履	寸法 幅(10.1)cm 厚さ0.35cm 成形 平面は前後端を切った長円形 侧面は中央や後に切り込み 板目取り
253	箒 木	寸法 長さ11.7cm 幅0.65cm 厚さ 最大0.45cm 最小0.1cm
254	箒 木	寸法 長さ15.0cm 幅1.2cm 厚さ 最大0.7cm 最小0.3cm
255	人 形	寸法 長さ14.7cm 幅 最大1.0cm 最小0.5cm 厚さ0.7cm
256	格子の部材	寸法 長さ29.0cm 幅2.1cm 厚さ 最大1.25cm 最小0.3cm
257	不明木製品	寸法 長さ7.0cm 幅 最大1.3cm 最小0.6cm 厚さ1.2cm
258	不明骨製品	寸法 径4.6cm 厚さ0.3cm
259	土 師 器	寸法 口径9.0cm 底径(4.0)cm 器高1.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 淡褐色 焼成 良好
260	土 師 器	寸法 口径9.0cm 底径4.0cm 器高1.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 淡褐色 焼成 良好
261	土 師 器	寸法 口径(12.2)cm 底径(6.0)cm 器高2.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好
262	土 師 器	寸法 口径(13.8)cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 白色粒子含む 色調 淡褐色 焼成 良好
263	土 師 器	寸法 口径5.4cm 底径(3.8)cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
264	土 師 器	寸法 口径7.8cm 底径4.2cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 金雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
265	土 師 器	寸法 口径7.3cm 底径5.5cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 完形
266	土 師 器	寸法 口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
267	土 師 器	寸法 口径8.2cm 底径4.8cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 スリッパ含む 細い 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
268	土 師 器	寸法 口径7.3cm 底径4.2cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
269	土 師 器	寸法 口径7.6cm 底径4.8cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 白色小粒 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
270	土 師 器	寸法 口径7.4cm 底径(4.9)cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好
271	土 師 器	寸法 口径7.8cm 底径4.6cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 白色粒子含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
272	土 師 器	寸法 口径8.0cm 底径5.4cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
273	土 師 器	寸法 口径7.6cm 底径5.0cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 粘土カス付着
274	土 師 器	寸法 口径7.7cm 底径(4.6)cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 精緻 色調 淡橙色 焼成 良好
275	土 師 器	寸法 口径7.4cm 底径4.6cm 器高2.05cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 精緻 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形

表38 溝5出土遺物観察表 (11)

276	土師器	寸法 口径7.65cm 底径4.2cm 器高2.35cm 胎土 針状物質 小石 スコリア含む 色調 灰褐色	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
277	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.2cm 器高1.75cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
278	土師器	寸法 口径7.5cm 底径4.0cm 器高2.25cm 胎土 砂粒 針状物質 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 指頭痕強い 完形
279	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.5cm 器高2.4cm 胎土 針状物質 白色粒子含む 気孔あり	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
280	土師器	寸法 口径8.8cm 底径4.4cm 器高2.2cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける 完形
281	土師器	寸法 口径8.3cm 底径5.1cm 器高2.2cm 胎土 針状物質 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
282	土師器	寸法 口径8.2cm 底径(4.1)cm 器高1.9cm 胎土 砂粒 針状物質 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
283	土師器	寸法 口径7.8cm 底径(4.5)cm 器高2.3cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 気孔あり	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好
284	土師器	寸法 口径7.7cm 底径5.0cm 器高2.2cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 内面スス付着
285	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.5cm 器高2.1cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
286	土師器	寸法 口径8.0cm 底径(5.0)cm 器高2.15cm 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 気孔あり	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
287	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.0cm 器高1.75cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 半完形
288	土師器	寸法 口径7.8cm 底径(4.7)cm 器高2.3cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰褐色 焼成 良好
289	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.2cm 器高2.4cm 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好
290	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.0cm 器高2.2cm 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 淡灰褐色 焼成 良好
291	土師器 灯明皿	寸法 口径8.0cm 底径(5.0)cm 器高2.4cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 塗母含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
292	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.7cm 器高2.7cm 胎土 針状物質 小石含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
293	土師器 灯明皿	寸法 口径9.4cm 底径5.2cm 器高2.3cm 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 烧成 良好 備考 板状圧痕あり スス付着
294	土師器	寸法 口径9.6cm 底径(8.9)cm 器高1.35cm 胎土 針状物質 白色小粒含む 精微	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
295	土師器	寸法 口径9.0cm 底径(8.2)cm 器高1.2cm 胎土 針状物質 白色小粒含む	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好
296	土師器	寸法 口径10.5cm 底径6.2cm 器高2.45cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
297	土師器	寸法 口径10.8cm 底径6.0cm 器高2.8cm 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
298	土師器	寸法 口径11.2cm 底径5.4cm 器高3.25cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
299	土師器	寸法 口径12.0cm 底径(5.4)cm 器高2.85cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表39 清5出土遺物観察表 (12)

300	土師器 灯明皿	寸法 口径 11.0cm 底径 5.6cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
301	土師器	寸法 口径 11.4cm 底径 6.4cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
302	土師器	寸法 口径 11.5cm 底径 (8.0)cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
303	土師器	寸法 口径 11.4cm 底径 5.4cm 器高 3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 粗い 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
304	土師器	寸法 口径 11.4cm 底径 (7.0)cm 器高 3.2cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好
305	土師器	寸法 口径 11.7cm 底径 7.1cm 器高 2.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
306	土師器	寸法 口径 11.5cm 底径 6.0cm 器高 3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
307	土師器	寸法 口径 11.0cm 底径 6.0cm 器高 3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
308	土師器	寸法 口径 12.0cm 底径 6.5cm 器高 3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
309	土師器	寸法 口径 12.2cm 底径 7.0cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 粗い 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
310	土師器 灯明皿	寸法 口径 12.2cm 底径 6.9cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 雪母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
311	土師器 灯明皿	寸法 口径 12.6cm 底径 (7.2)cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
312	土師器	寸法 口径 12.0cm 底径 (7.0)cm 器高 3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
313	土師器	寸法 口径 12.2cm 底径 (7.4)cm 器高 3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 色調 灰褐色 焼成 良好
314	土師器	寸法 口径 12.0cm 底径 (6.6)cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
315	土師器	寸法 口径 12.2cm 底径 6.6cm 器高 2.9cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
316	土師器	寸法 口径 12.2cm 底径 5.6cm 器高 3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
317	土師器	寸法 口径 12.0cm 底径 5.7cm 器高 3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
318	土師器	寸法 口径 12.3cm 底径 (7.6)cm 器高 3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 貝 含む 色調 灰褐色 焼成 良好
319	土師器	寸法 口径 12.8cm 底径 (7.8)cm 器高 3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
320	土師器	寸法 口径 12.2cm 底径 7.0cm 器高 3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
321	土師器	寸法 口径 11.8cm 底径 6.3cm 器高 3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 多量含む 粗い 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
322	土師器	寸法 口径 13.5cm 底径 8.4cm 器高 3.05cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
323	土師器	寸法 口径 12.8cm 底径 8.0cm 器高 3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表40 溝5出土遺物觀察表(13)

324	土師器	寸法 口径13.2cm 底径(8.5)cm 器高3.2cm 胎土 針状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
325	土師器	寸法 口径12.8cm 底径(7.8)cm 器高3.15cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
326	土師器	寸法 口径13.5cm 底径(7.5)cm 器高3.2cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む 精微 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
327	土師器	寸法 口径13.4cm 底径8.3cm 器高3.4cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形	成形 ロクロ 内底部回転糸切り痕
328	土師器	寸法 口径13.0cm 底径8.4cm 器高3.5cm 胎土 針状物質 小石 スコリア含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
329	土師器	寸法 口径12.0cm 底径7.6cm 器高3.15cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
330	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(8.0)cm 器高3.15cm 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 粗い 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
331	土師器	寸法 口径12.0cm 底径7.0cm 器高3.15cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
332	土師器	寸法 口径12.4cm 底径7.2cm 器高3.7cm 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
333	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(6.0)cm 器高3.1cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 白色小粒含む 色調 暗緑色 焼成 良好 備考 内底部スス付着	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
334	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.7cm 器高3.3cm 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
335	土師器	寸法 口径12.3cm 底径6.0cm 器高3.7cm 胎土 小石 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
336	土師器	寸法 口径13.8cm 底径(9.0)cm 器高3.4cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成受ける	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
337	土師器	寸法 口径13.2cm 底径8.0cm 器高3.3cm 胎土 小石 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
338	土師器	寸法 口径12.8cm 底径(7.0)cm 器高3.4cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 粗い 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
339	土師器	寸法 口径13.4cm 底径6.7cm 器高3.5cm 胎土 砂粒 貝粒 金雲母含む 精微 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
340	土師器	寸法 口径13.2cm 底径7.2cm 器高3.3cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 色調 暗灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
341	土師器	寸法 口径12.8cm 底径8.0cm 器高3.4cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 金雲母含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
342	土師器	寸法 口径14.4cm 底径(8.0)cm 器高3.3cm 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
343	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.9cm 器高3.35cm 胎土 針状物質 小石 赤色小粒 スコリア含む 色調 橙色 焼成 良好	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
344	土師器	寸法 口径14.0cm 底径8.2cm 器高3.5cm 胎土 針状物質 黒色スコリア含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
345	土師器 灯明皿	寸法 口径14.4cm 底径(9.0)cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 内底部スス付着	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕
346	土師器	寸法 口径13.8cm 底径9.0cm 器高3.2cm 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕
347	土師器	寸法 口径14.0cm 底径8.4cm 器高3.45cm 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり	成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕

表41 溝5出土遺物観察表(14)

348	土師器	寸法 口径13.6cm 底径7.6cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 金雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
349	土師器	寸法 口径15.9cm 底径(10.0)cm 器高4.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒 金雲母含む 精緻 色調 淡灰橙色 焼成 良好
350	土師器	寸法 口径18.2cm 底径(10.6)cm 器高4.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 精緻 色調 淡灰橙色 焼成 良好
351	土師器 白色形	寸法 口径6.8cm 底径3.8cm 器高0.75cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 小石 雲母含む 色調 灰白色 焼成 良好
352	土師器 白色形	寸法 口径10.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 小石含む 色調 檻白色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
353	土師器 硬焼き	寸法 口径11.6cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
354	土師器 白色形	寸法 口径13.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 白色粒子含む 色調 乳白色 焼成 良好
355	土師器 白色形	寸法 口径12.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 乳白色 色調 乳白色 焼成 良好
356	土師器 白色形	寸法 口径(17.4)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 乳白色 焼成 良好
357	瓦質火鉢	寸法 口径34.0cm 底径(24.7)cm 成形 輪轍後ロクロ 輪轍 口縁部外面へラ磨き 文様 外面体 部に型押し菊花文 胎土 砂粒 小石 白色粒子含む 色調 内外面灰黒色 焼成 良好
358	駿東系 山系瓶	寸法 口径15.6cm 底径6.3cm 器高4.4cm 成形 静止糸切り 高台貼り付け 胎土 砂粒 小石含む 色調 暗灰色 焼成 良好
359	土製品 円錐瓶	寸法 径2.4cm 厚さ0.65cm 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡橙色
360	不明土製品	寸法 径(6.5)cm 高さ 2.1cm 胎土 砂粒含む きめ細かい 色調 乳白色 焼成 良好
361	漸戸 雪平鍋	寸法 口径10.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 胎土 灰色 軸蓋 暗緑色 透明 内外面施 輪 外面体下位から底まで露胎 色調 緑灰色 焼成 良好
362	漸戸 洗	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 砂粒 小石 白色粒含む 灰色 軸蓋 緑褐色不透明 ハケ塗り 外底部露胎
363	鉄製品 坊姫車	寸法 径4.6cm
364	鉄製品 釘	寸法 長さ15.5cm 幅0.7cm 厚さ0.4cm
365	鉄製品 釘	寸法 幅0.35cm 厚さ0.2cm
366	鉄製品 釘	寸法 長さ5.3cm 幅0.3cm 厚さ0.2cm
367	鉄製品 釘	寸法 長さ10.0cm 幅0.4cm 厚さ0.35cm
368	錢 開元通宝	唐 初鑄 621年 楷書
369	錢 唐開通宝	南宋 初鑄 959年 篆書
370	錢 天聖元宝	北宋 初鑄 1023年 楷書
371	錢 淳化元宝	北宋 初鑄 990年 行書
372	錢 元祐通宝	北宋 初鑄 1086年 行書
373	錢 元祐通宝	北宋 初鑄 1086年 篆書
374	錢 元豐通宝	北宋 初鑄 1078年 行書
375	錢 景德元宝	北宋 初鑄 1004年 楷書
376	錢 紹熙元宝	南宋 初鑄 1190年 楷書

表42 清5出土遺物觀察表 (15)

377	砥 石	寸法 長さ(12.7)cm 幅3.2cm 厚さ1.2cm 色調 灰黄色 備考 中砥 2面砥面
378	砥 石	寸法 長さ(8.7)cm 幅3.8cm 厚さ3.1cm 薄地 上野 色調 灰色 備考 中砥 4面砥面
379	石 製 品	寸法 高さ4.4cm 厚さ1.5cm 色調 灰色 備考 滑石鍋を砥石に転用か 捺痕多数
380	骨製品 爪	寸法 幅1.7cm 厚さ0.3cm 色調 褐色
381	漆器 皿	寸法 口径10.0cm 底径6.8cm 器高1.5cm 内外面黒漆塗り 無文
382	漆器 皿	寸法 底径(6.8)cm 内外面黒漆塗り 内面に朱漆で飛鶴文
383	漆器 皿	寸法 口径10.0cm 底径6.2cm 器高1.2cm 内外面黒漆塗り 内面に朱漆で草花文
384	板 草 履	寸法 幅(7.9)cm 厚さ0.4cm
385	板 草 履	寸法 長さ17.8cm 幅8.0cm 厚さ0.3cm
386	曲物 底	寸法 径15.2cm 厚さ0.6cm 横目取り
387	不明木製品	寸法 径(13.4)cm 厚さ0.85cm 円盤状 表裏面 漆が塗ってある
388	著	寸法 長さ16.7cm 幅0.6cm 厚さ0.3cm
389	著	寸法 長さ17.0cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm
390	著	寸法 長さ20.2cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm
391	著	寸法 長さ21.9cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm
392	著	寸法 長さ22.6cm 幅0.6cm 厚さ0.5cm
393	著	寸法 長さ(23.4)cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm
394	不明木製品	寸法 長さ(15.5)cm 幅1.5cm 厚さ0.9cm
395	陽 物	寸法 長さ(7.3)cm 幅1.8cm 厚さ1.2cm 横目取り
396	不明木製品	寸法 長さ6.8cm 幅6.9cm 厚さ1.0cm 成形 八角形 表面部は面取り 基で塗装 中心穿孔部より剥し傷あり 横目取り 独楽か?

表43 溝5出土遺物観察表 (16)

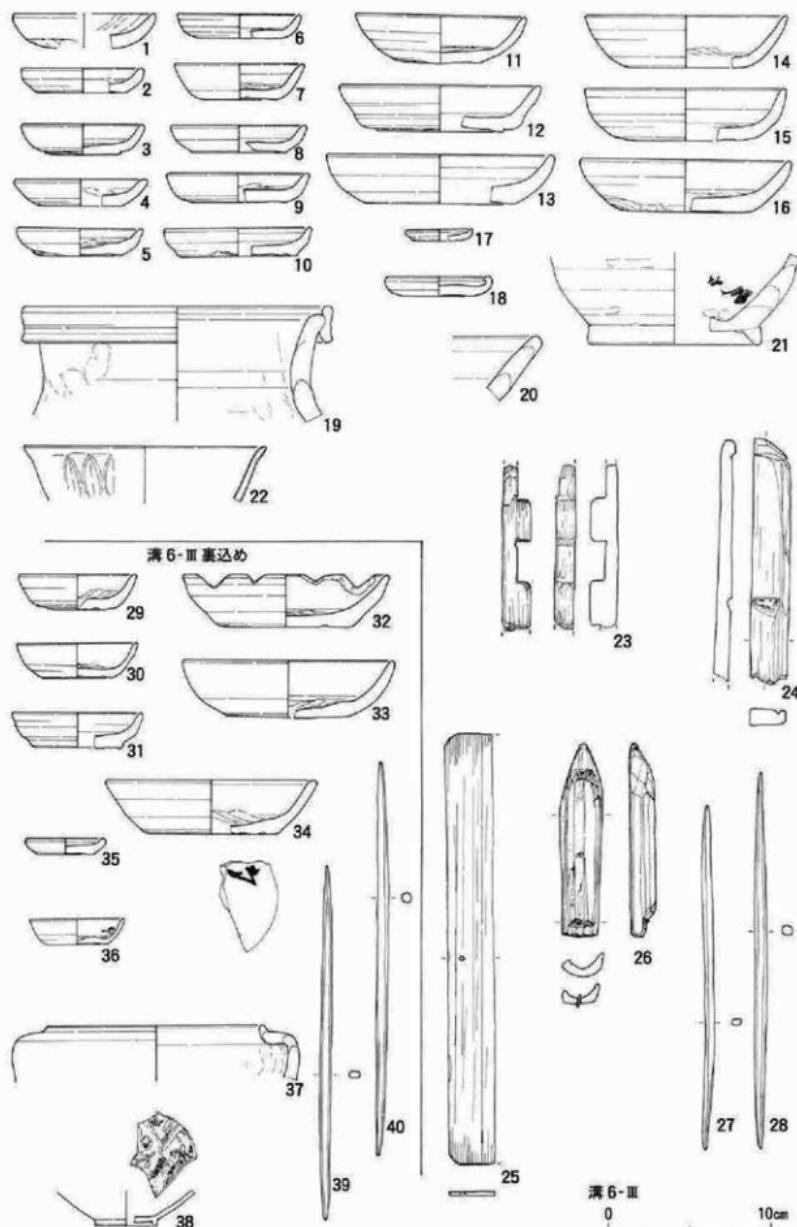
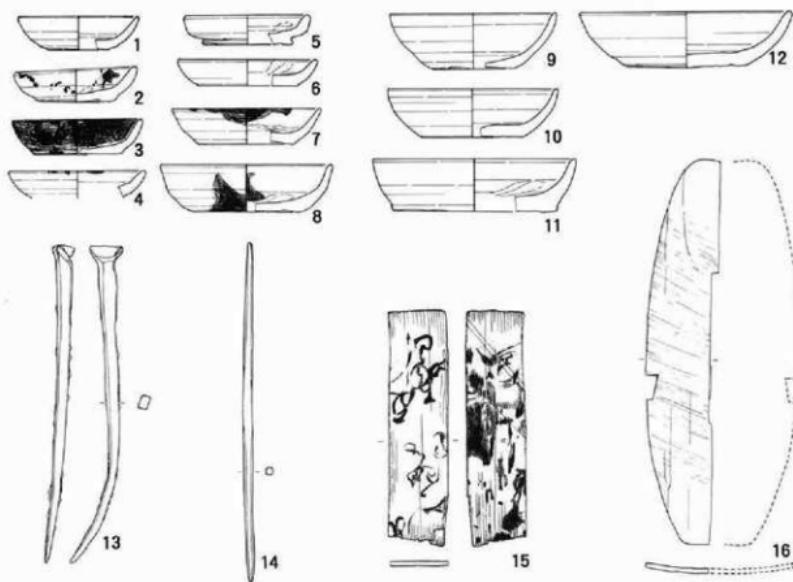
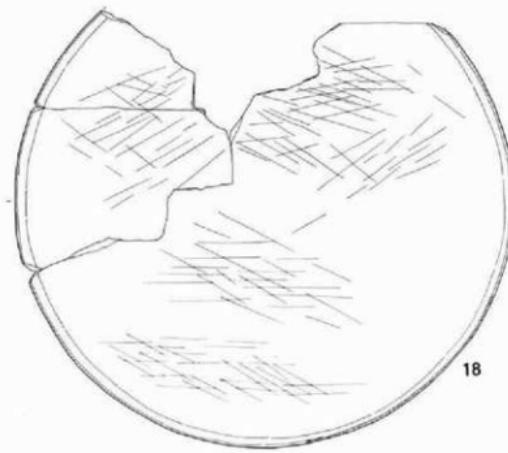


図52 溝6-III, 同墓込み出土遺物



溝6-II出土遺物



溝6-II裏込め出土遺物



図53 溝6-II, 同裏込め出土遺物

1	土 師 器	寸法 口径(8.8)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 青母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
2	土 師 器	寸法 口径7.6cm 底径(5.6)cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 青母 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
3	土 師 器	寸法 口径7.6cm 底径4.7cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 小石 砂粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
4	土 師 器	寸法 口径8.2cm 底径(5.0)cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
5	土 師 器	寸法 口径7.8cm 底径5.0cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土 師 器	寸法 口径7.6cm 底径(4.8)cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
7	土 師 器	寸法 口径8.0cm 底径5.0cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
8	土 師 器	寸法 口径8.4cm 底径(5.7)cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 青母含む 色調 楊色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
9	土 師 器	寸法 口径8.8cm 底径(5.6)cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土 師 器	寸法 口径9.0cm 底径(7.1)cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 青母 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土 師 器	寸法 口径10.5cm 底径5.5cm 器高2.95cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
12	土 師 器	寸法 口径12.4cm 底径(7.8)cm 器高2.85cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 小石 シルト岩粒針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
13	土 師 器	寸法 口径14.0cm 底径(9.2)cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
14	土 師 器	寸法 口径12.4cm 底径(7.8)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 暗橙色 焼成 良好
15	土 師 器	寸法 口径12.4cm 底径(7.4)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
16	土 師 器	寸法 口径13.0cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
17	土 師 器 極 小	寸法 口径4.2cm 底径(3.3)cm 器高0.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
18	土 師 器 極 小	寸法 口径6.6cm 底径4.4cm 器高1.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 青母 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 内折型
19	常 滑 甕	寸法 口径19.0cm 成形 輪積 胎土 暗灰色 砂粒 小石含む 色調 明褐色 焼成 良好
20	常滑こね跡 I 類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 暗灰色 砂粒 小石 シルト岩粒 貝粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好
21	常滑こね跡 I 類	寸法 底径(10.6)cm 成形 輪積後ロクロ 外面下位ヘラ削り セ底 高台貼り付け 胎土 白色砂 砂粒 小石含む 気孔あり 色調 暗灰色 焼成 良好 備考 内面スス付着
22	青 瓶 竜泉窯 确	寸法 口径14.8cm 素地 灰白色キメ細かい 微砂粒含む 軸薬 灰緑色 半透明 文様 離弁文 単弁 焼成 良好
23	格子の部材	寸法 幅1.2cm 高い部分1.65cm 低い部分0.8cm 成形 横目取り
24	鏡 形	寸法 幅(2.3)cm 厚さ0.85cm 横目取り 亂部と縁の間は線刻

表44 溝6-III, 同臺込み出土遺物観察表(1)

25	折 敷	寸法 長さ20.4cm 厚さ0.2cm 粒目取り
26	舟 形	寸法 長さ11.9cm 幅2.6cm 厚さ1.6cm 粒目取り くり抜き整形 縫1.5mmの穿孔に軸を通している
27	箸	寸法 長さ20.2cm 幅0.6cm 厚さ0.4cm 両口
28	箸	寸法 長さ23.1cm 幅0.75cm 厚さ0.55cm 両口
29	土 師 器	寸法 口径7.2cm 底径4.2cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 微砂粒 雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
30	土 師 器	寸法 口径7.4cm 底径4.2cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
31	土 師 器	寸法 口径8.0cm 底径(5.4)cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
32	土 師 器	寸法 口径12.6cm 底径7.4cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 胎土 赤色小粒 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
33	土 師 器	寸法 口径13.0cm 底径(7.6)cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
34	土 師 器	寸法 口径13.0cm 底径(8.2)cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 シルト岩粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 外底部に墨書き
35	土 師 器 極 小	寸法 口径5.0cm 底径3.5cm 器高1.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
36	瀬 戸 入 れ 子	寸法 口径5.8cm 底径3.7cm 器高1.55cm 成形 ロクロ 胎土 灰色 キメ細かい 砂粒含む 色調 内面 黄灰色 外面 灰色 内面に降灰 焼成 良好 備考 内面にスス付着
37	常 滑 短 頭 盆	寸法 口径5.8cm 成形 輪筋 胎土 灰色 砂粒 白色粒含む 色調 灰色 焼成 良好
38	青 白 磁 碗	寸法 底径(3.8)cm 成形 ロクロ 高台削り出し 素地 白色 密 軸窓 青白色 透明 内外面施釉 文様 内面に印花文
39	箸	寸法 長さ21.8cm 幅0.65cm 厚さ0.45cm 両口
40	箸	寸法 長さ24.2cm 幅0.7cm 厚さ0.55cm 両口

表45 溝6-II, 同裏込め出土遺物観察表(2)

1	土師器	寸法 口径7.4cm 底径(3.5)cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
2	土師器 灯明皿	寸法 口径7.6cm 底径4.5cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スヌ付着
3	土師器	寸法 口径8.0cm 底径(5.5)cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受け全面スヌ付着
4	土師器 灯明皿	寸法 口径8.4cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 口縁部スヌ付着
5	土師器	寸法 口径7.8cm 底径(5.4)cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(6.0)cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
7	土師器 灯明皿	寸法 口径9.2cm 底径(5.6)cm 器高2.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 雲母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スヌ付着
8	土師器	寸法 口径10.6cm 底径(6.5)cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
9	土師器	寸法 口径10.2cm 底径(4.9)cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 器壁薄く美しい
10	土師器	寸法 口径10.4cm 底径(6.2)cm 器高3.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(10.0)cm 器高3.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
12	土師器	寸法 口径13.0cm 底径7.2cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 雲母 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
13	鉄製品 釘	寸法 長さ19.4cm 幅0.6cm 厚さ0.8cm
14	箸	寸法 長さ20.7cm 幅0.55cm 厚さ0.45cm 両口
15	木簡	寸法 幅3.6cm 厚さ0.3cm 判読不明
16	板草履	寸法 長さ23.6cm 幅(8.0)cm 厚さ0.3cm 板目取り
17	漆器皿	寸法 口径9.2cm 内外面黒漆塗り 外面に朱漆で文様の一部残存
18	木製盆 転用俎	寸法 径30.4cm 最大厚0.9cm 成形 横目取り 全面黒漆塗り 平面円形 端部に細い縁をめぐらす 破損の扱 俎に転用か

表46 清6-II, 同裏込め出土遺物観察表

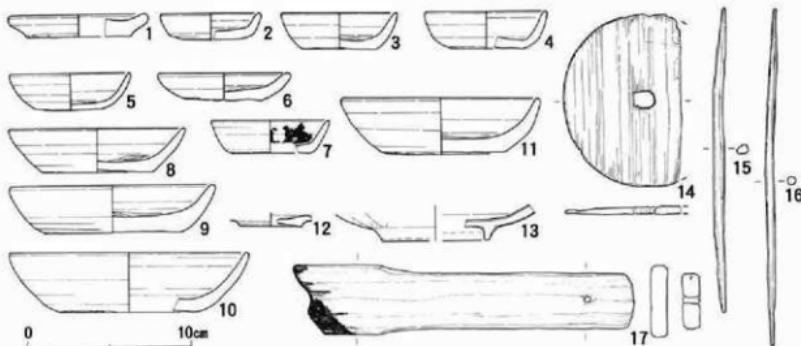


図54 溝5・6東側裏込め出土遺物

1	土師器	寸法 口径(8.6)cm 底径(6.35)cm 器高1.35cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 淡橙色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径(6.2)cm 底径(3.4)cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 暗灰褐色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径7.1cm 底径4.6cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
4	土師器	寸法 口径(7.5)cm 底径(4.8)cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 霧母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
5	土師器	寸法 口径7.4cm 底径4.0cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底溝ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器	寸法 口径8.2cm 底径4.6cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
7	土師器 灯明皿	寸法 口径(7.3)cm 底径(4.6)cm 器高2.05cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 内面ヌス付着
8	土師器	寸法 口径10.9cm 底径6.8cm 器高2.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
9	土師器	寸法 口径12.7cm 底径8.4cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土師器	寸法 口径(14.7)cm 底径(8.6)cm 器高3.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	土師器	寸法 口径12.2cm 底径7.7cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
12	土師器 白色系	寸法 底径(3.8)cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 霧母含む 色調 淡灰白色 焼成 良好
13	青磁 竈泉窯 跡	寸法 底径(6.6)cm 成形 ロクロ 高台割り出し 文様 外面單連弁文 素地 淡灰色 高台あたり橙色 砂粒含む 軸楽 灰緑色半透明 高台置付き露胎 焼成 良好
14	曲物 底	寸法 径(10.3)cm 底厚0.5cm 成形 平面円形 中心に穴 極目取り 備考 中心に穴が開いているのはせいろとして使用されたものか?
15	箸	寸法 長さ19.6cm 幅0.7cm 厚さ0.55cm
16	箸	寸法 長さ21.5cm 幅0.5cm 厚さ0.45cm
17	不明木製品	寸法 長さ(21.0)cm 幅4.3cm 厚さ1.0cm 板目取り 端に穴あり 備考 焼痕あり 約子か?

表47 溝5・6東側裏込め出土遺物観察表

#### 6. IV 面

IV面はⅢ面下15cmほどのところにある生活面で、茶褐色ないし黒褐色の強粘質土上にある。この土層が中世基盤層であり、これ以下に中世遺構は存在しない。この面で検出されたのは掘立柱建物4棟、柱穴列1列、これらを含む柱穴115穴、東西溝1条、そして、鎌倉時代初期の若宮大路側溝2条などである。特に当該期の若宮大路側溝は、3例目の検出だが、初めてほぼ全容がうかがえるという点で、特筆に値する。なお柱穴礎板の重なり具合を図62に示しておいたので、参照されたい。

##### 建物8(図56)

東側平坦部3・4-Bで検出された掘立柱建物。現況で2×2間だが、調査区外に拡がる可能性が高い。柱穴掘方はやや細めで、30cm程度から50cmを越えるものまである。南側の3穴には礎板が遺存している。柱間は210cmが多い。柱穴からT種土師器3点、瓦器1点が出土している。

##### 建物9(図57)

東側平坦部3・4-B・Cにある掘立柱建物で、現況で2×2間だが、北辺の西側2穴が上層遺構に削り取られている。これもおそらく調査区外にのびる。柱穴掘方は大体40cm前後から50cmを越えるものがあり、おおむね深く、大きい。大半の柱穴底面に礎板が残る。柱間は東西203~205cm、南北210cmで、安定している。出土遺物にはT種土師器4点がある。

建物11と切り合うが、本址が新しい。

##### 建物10(図58)

東側平坦部3・4-Bで検出された掘立柱建物。並びにやや不安定なところもあるが、いちおう建物として提示しておく。現況で2×2間、調査区外にのびるのは確実である。柱穴掘方は直径30~50cmあるが、建物8や9ほどには深くない。5穴に礎板がある。柱間は210cmが多い。T種1点、R種2点の土師器を示す。R種のうち1点には、口縁部を意図的に打ち欠いたあとがみられる。

##### 建物11(図59)

東側平坦部3・4-B・Cにある。東西に長い1×2間の掘立柱建物で、東と南に拡がる可能性がある。柱穴はどれもほぼ円筒形で直径50~60cm、整った形に掘られており、4穴に礎板がある。柱間は南北215cm、東西220cmあり、鎌倉時代初期の遺跡で検出される大きめのものに共通する。出土遺物にはT種2点、R種1点の土師器がある。

建物9と切り合うが、本址が古い。

##### 大路側溝東肩柱穴列(図59)

大路側溝東側の肩3-B・Cに、直径50~60cm、深さ50cm前後のしっかりした柱穴が並ぶ。ほとんどの底面に礎板がある。柱間は113cmで半間毎になっており、塀か檻の柱列であろう。同様の遺構は、大路反対側の西側溝の西肩でも検出されている。南方では、約120mほど離れた雪ノ下一丁目369番地点で、同様の柱穴列が確認されている(瀬田哲夫「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目369番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会 1991)

出土遺物にはT種土師器1点、R種土師器2点がある。

この柱列が本期に帰属する後述の溝7、あるいは8にともなうかどうかは、肝心のところをのちの溝(5・6など)に削り取られているため、明らかでない。しかし、本址が東側平坦面の遺構中もっとも古い一群に属しており、また一方溝7・8も大路側溝中最初期あるいはそれに続く時期のものであるので、上限年代からいっても、両者が少なくともある時期共存していたのは確実であろう。

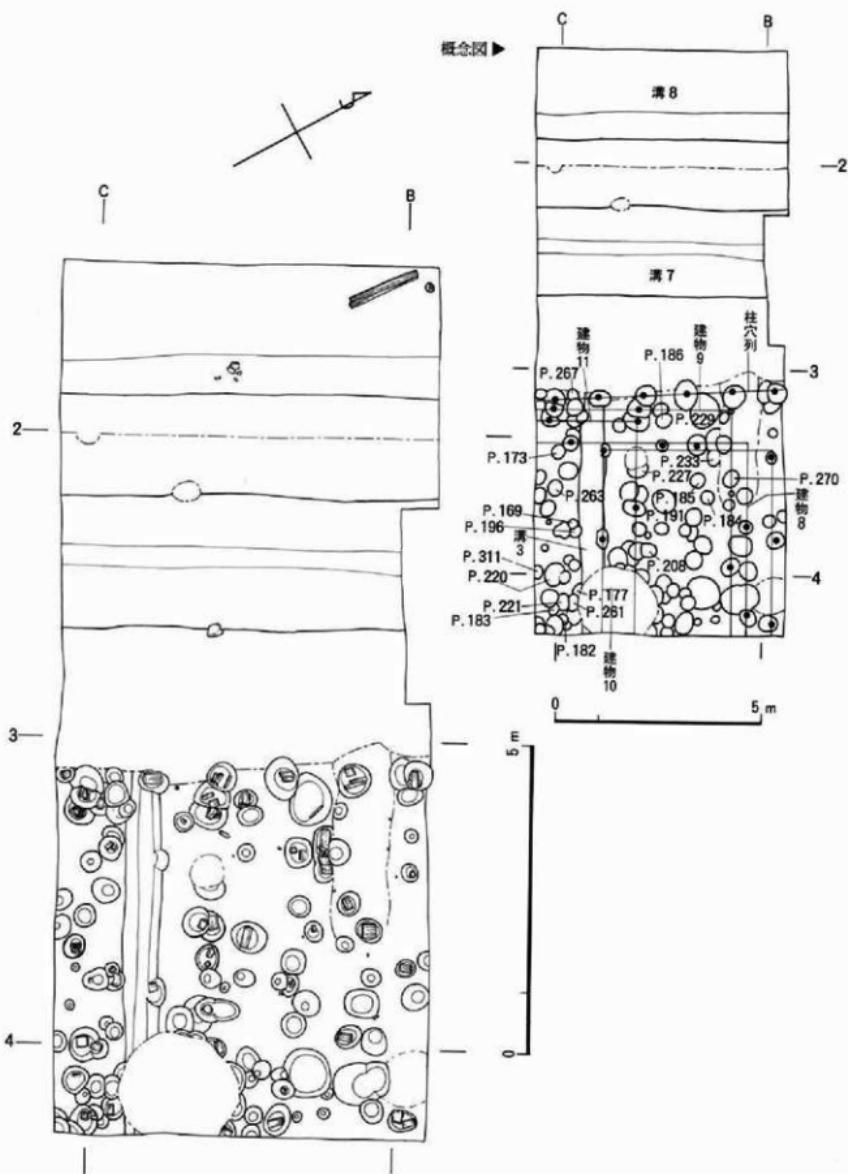


図55 IV面遺構全図

### 溝3(図63)

東側平坦部南寄り、3・4-B・Cを東西に流れる。大路側溝に直交する。東の調査区外からきて、大路側溝に流下する。側溝のどれにつながるかは不明である。幅64cm、深さ40cm弱、断面は上部の開いたU字形をしている。埋土は挟雜物の多い黒褐色粘質土で、一般に鎌倉時代初期に多い。

真っ直ぐな溝で、地割の役目もあったであろう。R種1点とT種7点の土師器を図示する。

### 溝7(若宮大路側溝、図65~67)

溝5・6直下、2軸と3軸の間に検出した薬研形の大溝である。上辺を溝6に削平されているため、現状で幅2.2m、深さ1.1mとなっている。しかし削平部分をIV面の高さまで復元した場合、おそらく幅3m以上、深さ2m近くに及ぶ。当地点の大路側溝としては、層位的にみて最初期もしくは二番めの古さであり、その実年代も鎌倉時代初期から前期に属することは間違いない。

該址の検出は三度めになる。最初は雪ノ下一丁目371番-1地点であり(馬淵和雄『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1地点発掘調査報告書』1985)、二度めは雪ノ下一丁目369番地点である(瀬田哲夫前出報告)。今回はこれまで最もよく形態のわかる検出となった。しかし、やはり平坦部からどう落ち込んでいくのかは、不明のままである。また、後述する溝8との新旧関係も、先行2地点と同様土層断面からは判断できない。だが、位置的に後代の溝5・6に共通する点に、8より新しい要素を見出すことはできる。形状はよく整ったV字型を呈し、壁の傾きは、急なところでは65度もある。断面観察の限りで、浚渫は看取できなかった。

該址は海成砂層に掘り込まれ、下半部は激しい湧水のため露頭後ほとんど即座に原型が失われる。中世期の地下水の水位や壁体の保護方法に、興味を引かれるところである。

出土遺物には土師器や国産陶器、木製品などがあるが、年代的に13世紀第一四半期を出るものではない。

### 溝8(図68~70)

調査区西端に沿って検出された大溝で、溝5・6期若宮大路の路面を剥がした下にある。西半部は現況大路歩道下にもぐり込んでおり、検出されたのは東半部である。

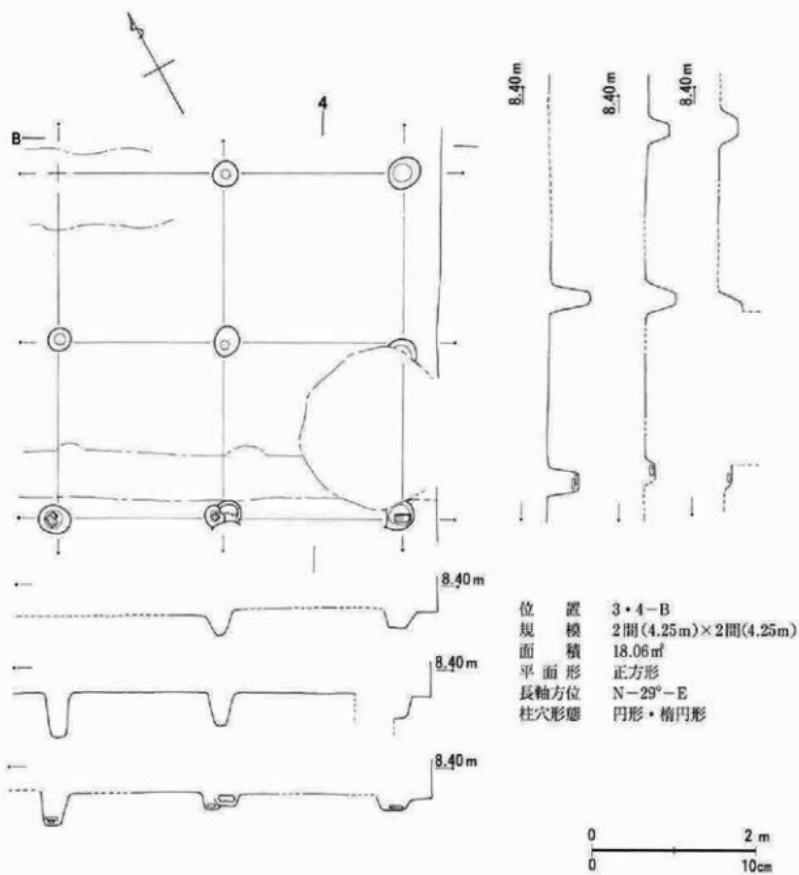
よく整った逆台形の断面をもち、深さは溝中央部近くの深いところで1.7m、壁傾斜は最大67度に達する。幅は不明だが、現況でも2mを超え、底面が大路側にさらに落ちていくところからみて、おそらく3mを大きく超えるであろう。壁面には溝掘削時の工具痕がよく残っている(図版16-1)。

この溝の検出はやはり三度めで、雪ノ下一丁目372番-7地点(馬淵和雄『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目372番-7地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1 鎌倉市教育委員会1985)、前出雪ノ下一丁目369番地点に続く。後者では断面観察によりほぼ全貌が判明しているが、それによると上端幅約3.2mとなっている。

最下層に木片の多い茶褐色土が堆積し、一度浚渫されたあと埋め戻されている。その埋土は砂層に茶褐色～黒褐色粘質土の小塊が大量に混じたもので、おそらく、溝付け替えにともなう地山掘削によって大量に出た残土を用いたものと考えられる。

本址は層位的にみて検出遺構中最古のものである。現況大路下にさらに古い側溝が存在する可能性を否定しあしないが、出土遺物から見ても鎌倉時代最初期に属するのは明らかで、あるいはこれこそが、養和二年(1182)3月12日に通じたという「諸往道」(若宮大路)の側溝かもしれない。

出土遺物にはT種・R種双方の土師器、渥美こね鉢のほか、竜泉窯画花文青磁碗など舶載陶磁器・木製品・金属製品・刻文のある骨・自然遺体などがある。いずれも鎌倉時代初期に属する。



	長径×短径			厚さ	底面 積	側壁上 部面積	備考
P.1	210	1	210	2	210	210	3
P.2	207	207	208	208	208	208	
P.3	210	4	208	5	208	208	
P.4	210	207	210	210	210	210	6
P.5	210	7	217	8	217	217	9
P.6	210	8	217	9	217	217	10
P.7	210	9	217	10	217	217	
P.8	210	10	217	11	217	217	
P.9	210	11	217	12	217	217	
P.10	210	12	217	13	217	217	

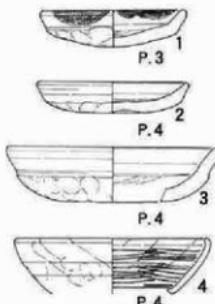
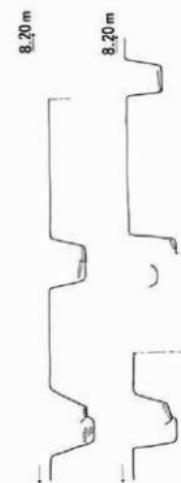
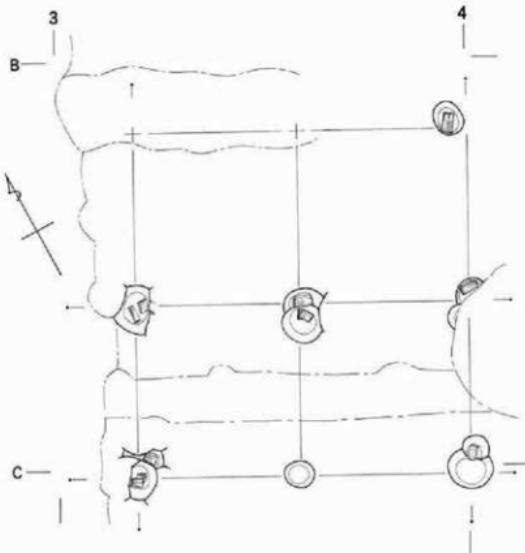


図56 建物8、同出土遺物



位規  
置模  
 $3 \times 4 - B \cdot C$   
2間(4.1m)×  
2間(4.2m)  
面積  
平面形  
正方形  
長軸方位  
N-27°-E  
柱穴形態  
円形・梢円形

0 2 m  
0 10 cm

	長径×短径	高さ	底面 形状	側板上 部構造	備考
P.1					上部造様によ り直繋
P.2					上部造様によ り直繋
P.3	43×32	42	787	769.5	
P.4	45×(30)	38.5	764.5	769.5	
P.5	(20)×(42)	35	773	726	
P.6	45×45	42	766	773	6
P.7	(40)×(20)	57	753	755	
P.8	(26)×(10)(32)	(776)			
P.9	(50)×(16)	44	764	768	
P.10	(45)×(30)	59	787	767	6, 7, 8
P.11	35×35	31	777		
P.12	(30)×30	42	765	758	
P.13	82×(45)	53	784		

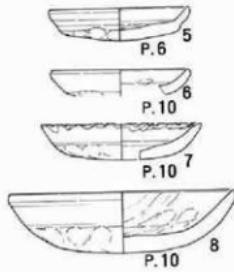
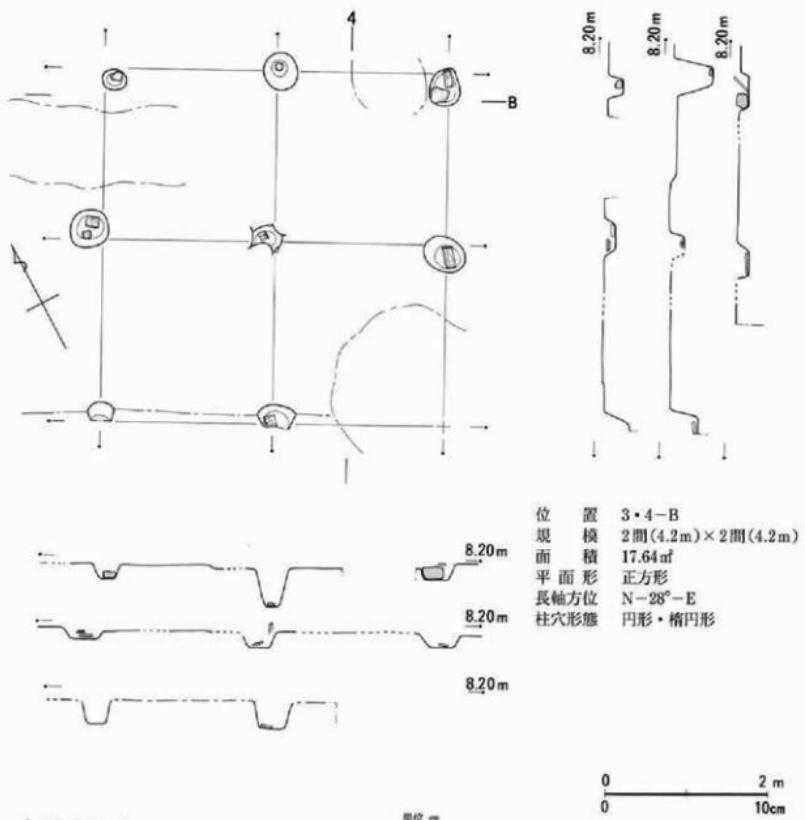


図57 建物9、同出土遺物



	単位 cm				備考
	長径×短径	深さ	底面積	壁面積	
P.1	30×26	17	792	792	既に縫合石
P.2	45×40	44	762	762	
P.3	45×35	11	797	816	
P.4	50×45	13	798	803	
P.5	(35)×32	18	792	797	10
P.6	50×40	16	794	797	11
P.7	(20)×(25)	31	776		
P.8	(40)×(26)	36	773	776	清代漆器による塗装
P.9					

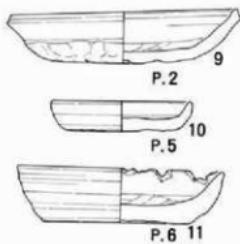


図58 建物10, 同出土遺物

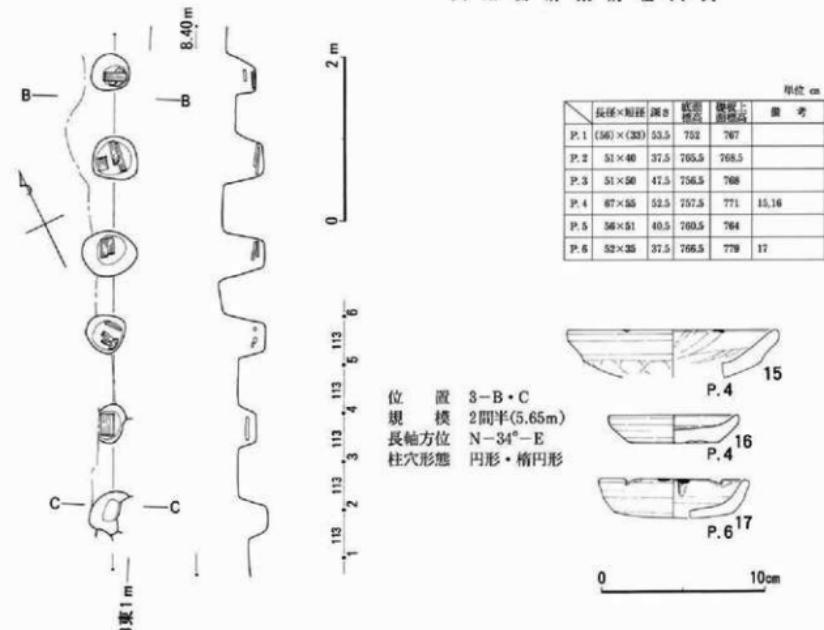
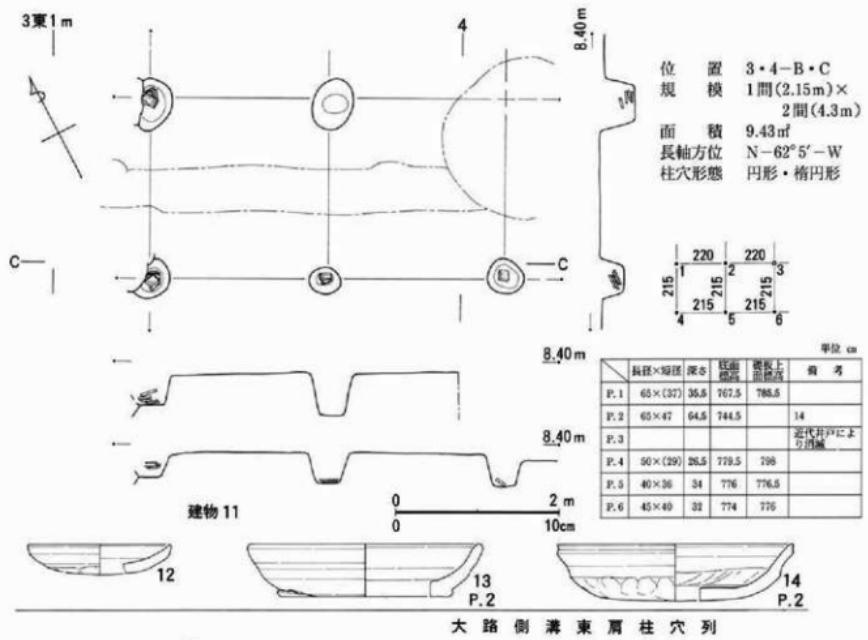
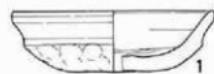


図59 建物11・大路側溝東肩柱穴列、同出土遺物

1	土師器 灯明皿	寸法 口径 9.0cm 底径 1.6cm 器高 2.25cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部ス付着
2	土師器	寸法 口径 9.4cm 底径 4.2cm 器高 1.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径 13.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
4	瓦器 碗	寸法 口径 12.0cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 内面体部へらみがき 胎土 灰白色 きめ細かい 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成か?
5	土師器	寸法 口径 8.6cm 底径 7.0cm 器高 2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
6	土師器	寸法 口径 8.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 少量含む きめ細かい 色調 灰褐色 焼成 良好
7	土師器	寸法 口径 9.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む きめ細かい 色調 橙色 焼成 良好 備考 口縁部を打ち欠く
8	土師器	寸法 口径 13.8cm 底径 8.0cm 器高 3.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好
9	土師器	寸法 口径 14.4cm 底径 7.2cm 器高 3.1cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
10	土師器	寸法 口径 8.6cm 底径 6.6cm 器高 1.85cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
11	土師器	寸法 口径 12.6cm 底径 8.6cm 器高 3.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
12	土師器	寸法 口径 8.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
13	土師器	寸法 口径 14.4cm 底径 10.4cm 器高 3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
14	土師器	寸法 口径 14.4cm 底径 (6.8)cm 器高 3.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
15	土師器 灯明皿	寸法 口径 13.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部ス付着
16	土師器	寸法 口径 8.0cm 底径 5.3cm 器高 1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
17	土師器 灯明皿	寸法 口径 9.2cm 底径 (7.3)cm 器高 2.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部ス付着 口縁部を打ち欠く

表48 建物8・9・10・11出土遺物観察表



1



2

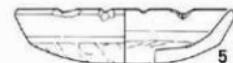


3

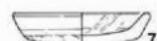
P - 229



4



5



7

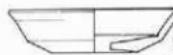


8

P - 177



P - 181



P - 186



0 10cm

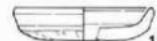
11

P - 226



12

P - 267



13

P - 263



14

P - 173



15

P - 196



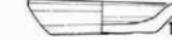
16

P - 182



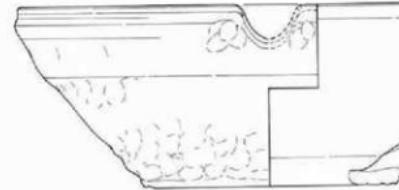
17

P - 208



18

P - 311



19

P - 221



20



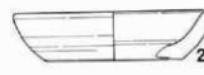
21

P - 194



22

P - 227



23

P - 183



24

P - 233



25

P - 191

0

10cm

図60 柱穴出土遺物 (1)



26

27

28

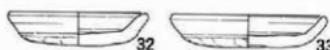
31



29

30

P - 220



32

33

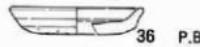


34



35

P - 184



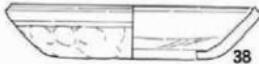
36 P.B

0 10cm



37

P - 169



38



44



39



45

P - 230



P - 270



41

P - 239



P - 261



P.E



46

P.H



47

P - 219



P.D 48

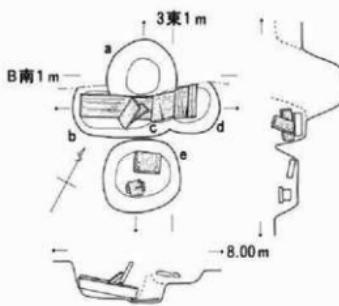
圖61 柱穴出土遺物 (2)

P.229	1	土師器	寸法 口徑 12.4cm 底径 (5.2)cm 器高 3.75cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	2	土師器	寸法 口徑 8.6cm 底径 (6.2)cm 器高 1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	3	青磁 電気窯 碗	寸法 口徑 15.8cm 成形 ロクロ 文様 内面蓮華画文 素地 灰白色 微砂粒含む 軸蓋 淡灰緑色透明 焼成 良好
P.185	4	土師器 灯明皿	寸法 口徑 9.6cm 底径 2.4cm 器高 2.05cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 口縁部ス付着
	5	土師器	寸法 口徑 13.4cm 器高 (3.3)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
	6	常滑 甕	寸法 口徑 (37.0)cm 成形 輪型 胎土 灰色 砂粒 白色粒 シルト岩粒含む 気孔あり きめ細かい 色調 内面褐色 外面 降灰による暗緑色 焼成 良好
P.177	7	土師器	寸法 口徑 8.4cm 底径 2.3cm 器高 2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 霧母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	8	土師器	寸法 口徑 6.8cm 底径 (6.0)cm 器高 3.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 霧母含む 色調 橙色 焼成 良好
P.181	9	青磁 同安窯系皿	寸法 口徑 (10.6)cm 底径 (5.2)cm 器高 2.65cm 成形 ロクロ 文様 内底面描き画文 素地 緑灰白色 気孔あり 軸蓋 淡灰緑色透明 外底面霧胎 焼成 良好
P.186	10	鉄製品 釘	寸法 幅 0.5cm 厚さ 0.5cm
P.226	11	土師器	寸法 口徑 8.8cm 底径 (6.4)cm 器高 1.85cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
P.267	12	土師器	寸法 口徑 9.7cm 底径 (7.8)cm 器高 1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 霧母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
P.263	13	土師器	寸法 口徑 8.6cm 底径 (5.0)cm 器高 2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む きめ細かい 色調 灰橙色 焼成 良好
P.173	14	土師器	寸法 口徑 (13.6)cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
P.196	15	土師器	寸法 口徑 9.6cm 底径 (5.0)cm 器高 1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好
P.182	16	土師器	寸法 口徑 9.4cm 底径 4.7cm 器高 1.75cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
P.208	17	土師器	寸法 口徑 9.8cm 底径 (7.4)cm 器高 1.8cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 霧母含む 色調 灰橙色 焼成 良好
P.311	18	土師器	寸法 口徑 9.2cm 底径 6.6cm 器高 2.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
P.221	19	常滑こね鉢 Ⅱ類	寸法 口徑 31.0cm 底径 (15.4)cm 器高 11.1cm 成形 輪筋後ナデ 口唇脇指頭痕 胎土 暗灰色 砂粒 長石 小石含む 内面 降灰 焼成 良好
P.194	20	土師器	寸法 口徑 13.6cm 器高 (3.6)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
	21	土師器	寸法 口徑 8.4cm 底径 (5.9)cm 器高 1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 粗い 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
P.227	22	土師器	寸法 口徑 12.2cm 器高 (3.3)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む きめ細かい 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
P.183	23	土師器	寸法 口徑 12.2cm 底径 (8.3)cm 器高 3.0cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒多量 針状物質 霧母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
P.233	24	土師器	寸法 口徑 9.4cm 底径 6.7cm 器高 1.7cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 胎土 砂粒 針状物質 霧母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

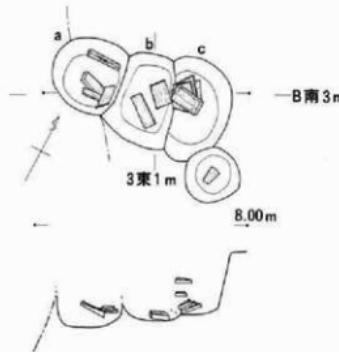
表49 柱穴出土遺物観察表 (1)

P.191	25	土師器	寸法 口径14.6cm 器高(3.0)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
P.220	26	土師器	寸法 口径8.4cm 底径(4.4)cm 器高1.85cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	27	土師器	寸法 口径9.2cm 底径5.6cm 器高1.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	28	土師器	寸法 口径9.8cm 器高(1.6)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
	29	土師器	寸法 口径9.2cm 底径5.0cm 器高2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ちにくく 内底部 ノミ痕多数 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける完形
	30	土師器 灯明皿	寸法 口径15.0cm 器高(3.7)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 スス付着
	31	土師器 灯明皿	寸法 口径10.2cm 底径(6.5)cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 雲母含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 スス付着
P.184	32	土師器	寸法 口径8.6cm 底径4.0cm 器高2.05cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質 雲母含む 色調 橙色 焼成 良好
	33	土師器	寸法 口径9.6cm 底径4.2cm 器高2.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質 雲母含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
	34	土師器 灯明皿	寸法 口径13.2cm 器高3.3cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 スス付着
	35	陶美 こね鉢	寸法 底径(12.9)cm 成形 輪積後ナデ 外面下部へラ削り 高台貼り付け 胎土 暗灰色 砂粒含む 気孔あり 色調 暗灰褐色 内面陥没 焼成 良好
P.B.	36	土師器	寸法 口径6.2cm 底径4.3cm 器高1.65cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
P.169	37	常滑 広口鉢	寸法 口径28.6cm 器高(7.3)cm 成形 輪積 胎土 暗灰色 長石 砂粒 小石含む 降低 焼成 良好
P.270	38	土師器	寸法 口径15.6cm 器高(3.2)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
	39	土師器 転用	寸法 長さ6.0cm 幅3.0cm 厚さ0.6cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 粗い 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	40	瓦器 碗	寸法 口径(14.4)cm 器高(2.9)cm 成形 口縁部ナデ 内面 ヘラ磨き 胎土 灰褐色 白色 キメ細かい 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
P.239	41	土師器	寸法 口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.85cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好
P.261	42	土師器 穿孔	寸法 不明 成形 手づくね 底部穿孔あり
P.E.	43	鉄製品 釘	寸法 幅0.5cm 厚さ0.4cm
P.230	44	土師器	寸法 口径9.6cm 底径5.0cm 器高1.95cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	45	土師器	寸法 口径8.8cm 底径6.05cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 磁砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
P.H.	46	土師器	寸法 口径14.2cm 器高(2.6)cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 磁砂粒含む 色調 淡灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
P.219	47	土師器	寸法 口径9.2cm 底径(5.6)cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 磁砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
P.D.	48	不明木製品	寸法 長さ29.7cm 幅1.55cm 厚さ11.3cm 横目取り 空孔は貫通 先端は尖っている ヘラか?

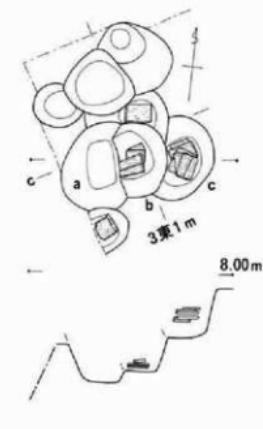
表50 柱穴出土遺物観察表(2)



**概要**  
 a・b・c・dは上層造構に切られる  
 aはb・c・dに、cはb・dに切られる  
 bとdの新旧関係は不明  
 bは厚さ5cmの角材・2cmの板2枚出土  
 cは厚さ1cmの板出土  
 dは厚さ2cmの板出土  
 eは厚さ3cmの板・2cmの角材出土 (建物8の柱穴4)



**概要**  
 bはa・cに切られる  
 aは厚さ2cmの角材・3cm・2cm・1cmの板1枚ずつ出土  
 (大路側溝東脇柱穴列の柱穴4)  
 bは厚さ2cmの板2枚出土 (建物9の柱穴3)  
 cは厚さ1cmの板5枚出土 (建物11の柱穴1)



**概要**  
 bはa・cを切る  
 bは厚さ2cmの板1枚・1cmの板2枚出土 (建物9の柱穴10)  
 cは厚さ1cmの板5枚出土 (建物11の柱穴4)

0 1 m

図62 柱穴磁板検出状況

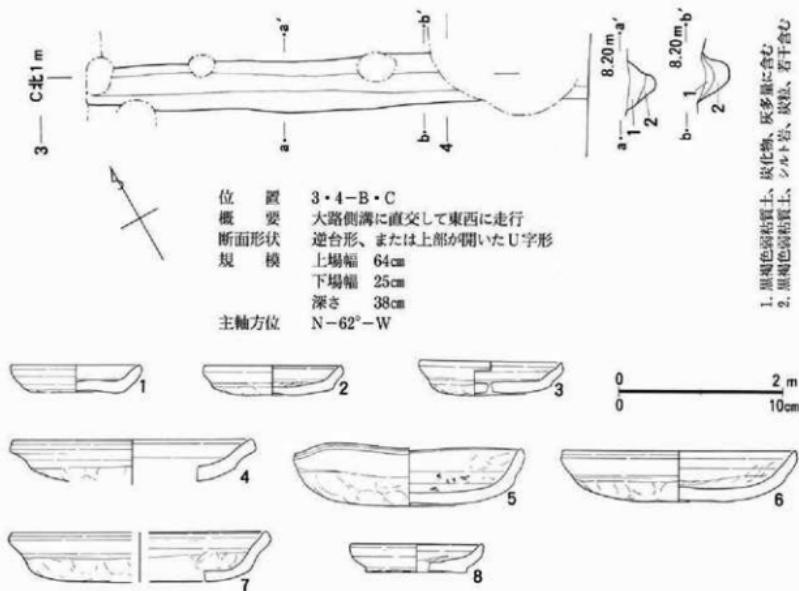


図63 溝3、同出土遺物

1	土師器	寸法 口径8.0cm 底径6.0cm 器高1.7cm 胎土 針状物質 黒色粒子 シルト岩粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径8.6cm 底径7.4cm 器高1.8cm 胎土 胎心黒色 砂粒含む 色調 赤橙色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
3	土師器 穿孔	寸法 口径8.8cm 底径4.2cm 器高2.1cm 胎土 針状物質有り 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 底部に穿孔あり 内面 に工具引掛け痕有り 色調 淡灰褐色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径9.0cm 器高2.5cm 胎土 針状物質 シルト岩粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
5	土師器 灯明皿	寸法 口径14.2cm 底径7.0cm 器高3.5cm 胎土 針状物質 白色粒 シルト岩粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 褐色 焼成 良好 備考 スス付着
6	土師器	寸法 口径14.4cm 底径5.8cm 器高3.1cm 胎土 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
7	土師器	寸法 口径(16.0)cm 底径(9.0)cm 器高3.0cm 胎土 針状物質含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好
8	土師器	寸法 口径8.2cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 胎土 針状物質 シルト岩粒 黒色粒子含む	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表51 溝3出土遺物観察表

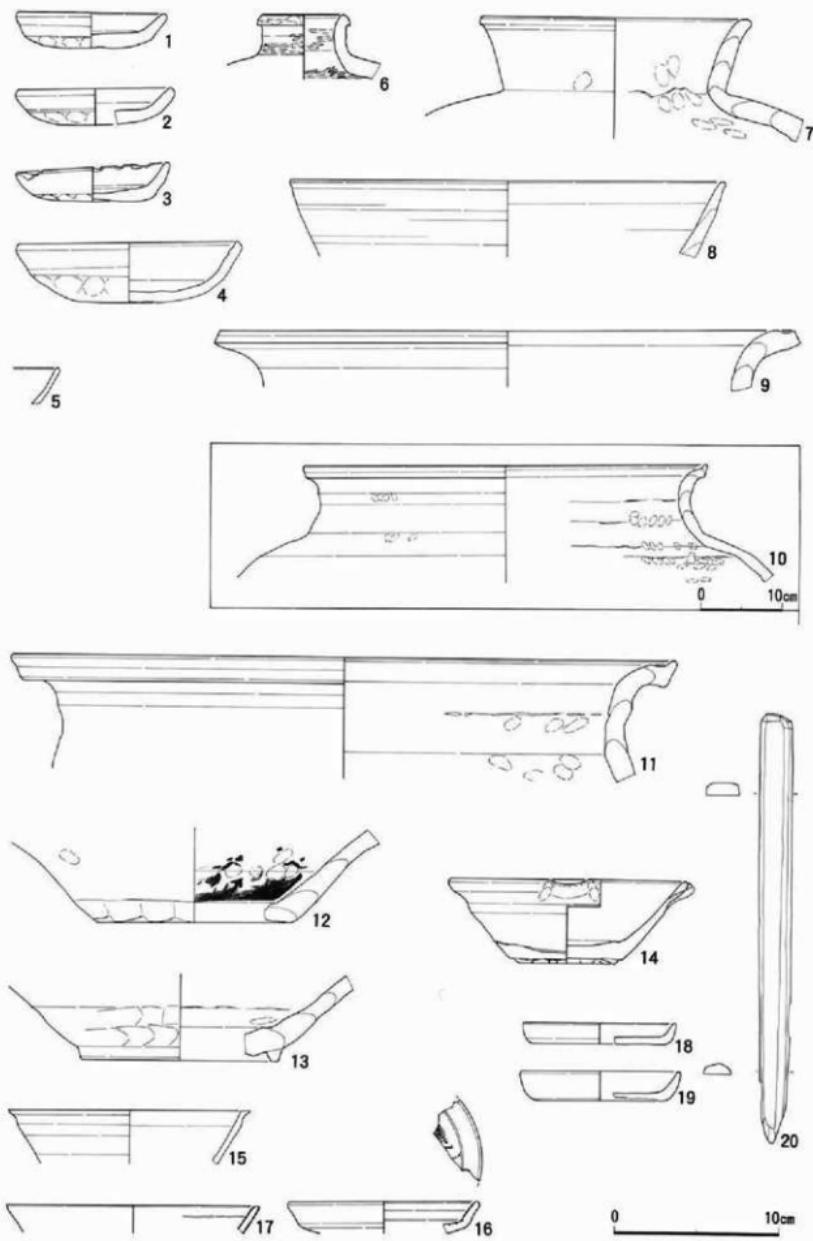
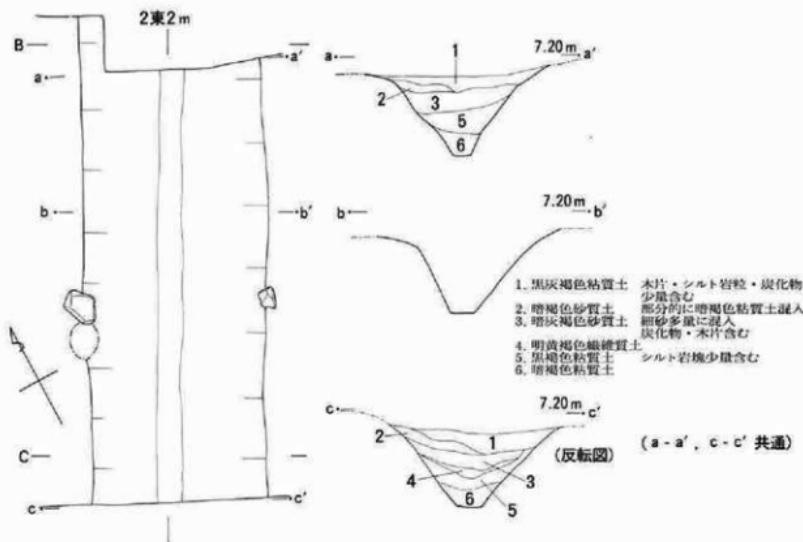


圖64 IV面上包含燒土遺物

1	土師器	寸法 口径9.2cm 底径3.9cm 器高2.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 赤色小粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
2	土師器	寸法 口径9.8cm 底径(4.4)cm 器高2.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒含む キメ細かい 色調 灰橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径9.4cm 底径4.8cm 器高2.05cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径9.8cm 底径4.2cm 器高3.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
5	瓦器	寸法 不明 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 暗灰色 微砂粒含む 色調 黑灰色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
6	涙美 小壺	寸法 口径5.7cm 成形 ロクロ 口縁部ナデ 胎土 暗灰色 微砂粒含む 軸葉 刷毛塗り 色調 黑灰色 焼成 良好
7	涙美 壺	寸法 口径16.8cm 成形 ロクロ 口縁部ナデ 胎土 微砂粒含む 軸葉 刷毛塗り 色調 淡緑灰色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
8	涙美 こね鉢	寸法 口径26.6cm 成形 輪積 胎土 砂粒 白色粒含む 軸葉 刷毛塗り 色調 暗灰色 焼成 良好
9	東播 壺	寸法 口径35.2cm 成形 輪積 胎土 微砂粒 白色粒含む キメ細かい 色調 灰色 焼成 良好
10	常滑 壺	寸法 口径49.6cm 成形 輪積 胎土 砂粒 白色粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
11	常滑 壺	寸法 口径40.8cm 成形 輪積 胎土 暗灰色 砂粒 黒色粒 白色粒 小石 長石 夾雜物多く粗い 色調 明茶色 焼成 良好
12	常滑 壺	寸法 底径(10.8)cm 成形 輪積 胎土 暗灰色 白色粒多量含む 色調 黑灰色 焼成 良好 備考 食物らしき物がこびりついている
13	常滑こね鉢 1類	寸法 底径(10.2)cm 成形 輪積後ロクロ 外面体部下位ヘラ削り 高台貼り付け 胎土 灰色 白色粒 砂粒 長石含む 色調 灰色 焼成 良好
14	山茶碗	寸法 口径14.6cm 底径5.8cm 器高5.1cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り痕 高台貼り付け 胎土 灰色 砂粒 白色粒 長石 石英 小石含む 色調 灰色 焼成 良好 備考 注口あり
15	白磁 端反り碗	寸法 口径14.8cm 成形 ロクロ 素地 灰白色 微砂粒含む 軸葉 灰白色 透明 内外面施釉 色調 灰白色 焼成 良好
16	青磁 同安窯系皿	寸法 口径(11.8)cm 素地 灰白色 微砂粒含む 軸葉 淡灰綠色 透明 気泡あり 文様 画花文 焼成 良好
17	青磁 竜泉窯 碗	寸法 口径(15.4)cm 素地 灰白色 微砂粒含む 軸葉 淡灰綠色 半透明 文様 画花文 焼成 良好
18	漆器皿	寸法 口径9.4cm 底径(8.0)cm 器高1.3cm 内外面黒漆塗り 純文
19	漆器皿	寸法 口径9.8cm 底径(7.2)cm 器高1.8cm 内外面黒漆塗り 純文
20	木製品	寸法 長さ26.3cm 幅2.0cm 厚さ0.8cm 備考 ヘラか?

表52 IV面上包含層出土遺物観察表



位 置 2-B・C  
概 要 断面形状 V字形の溝  
規 模 上場幅 2m20cm  
下場幅 32cm  
深さ 1m10cm  
主軸方位 N-28°6' - E

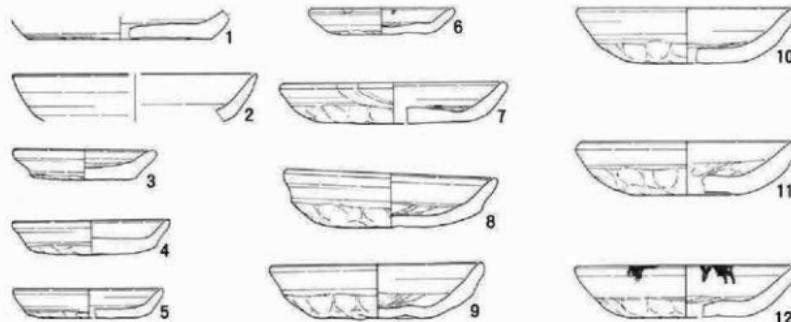


図65 溝7, 同出土遺物(1)

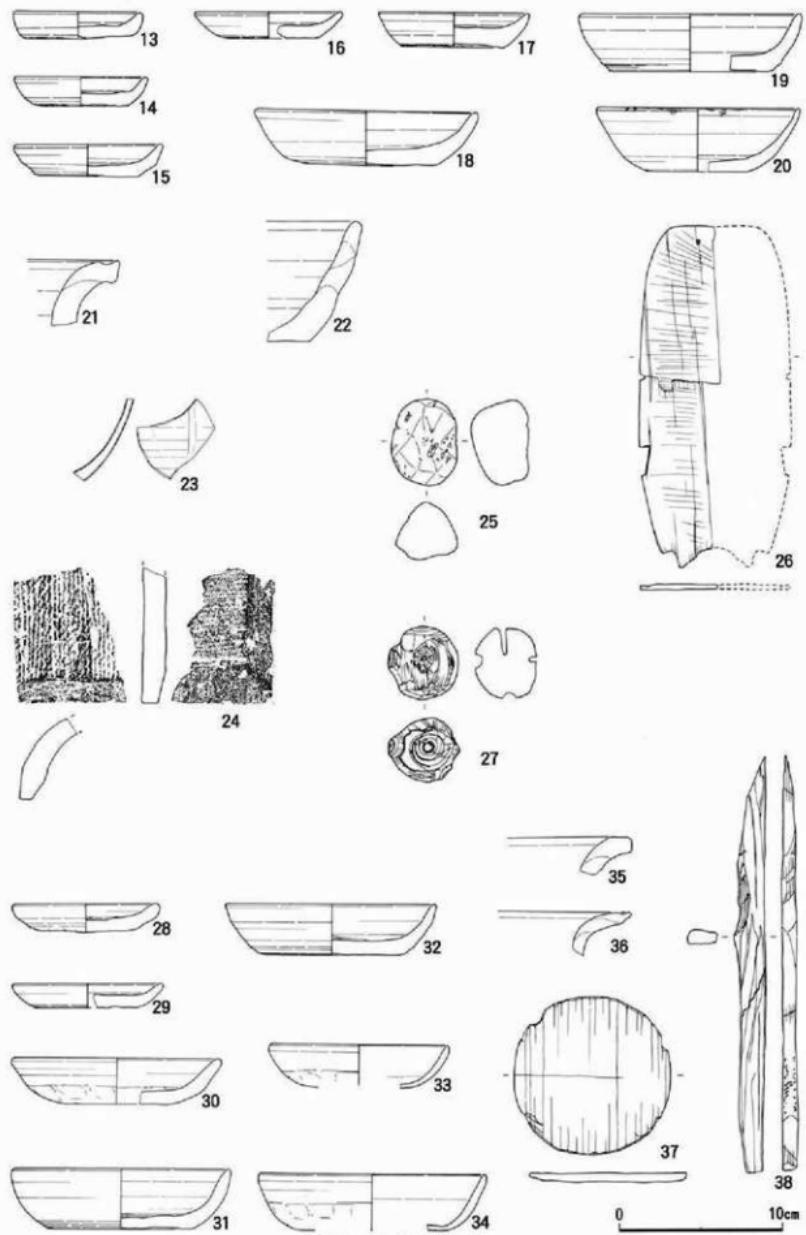


図66 溝7出土遺物(2)

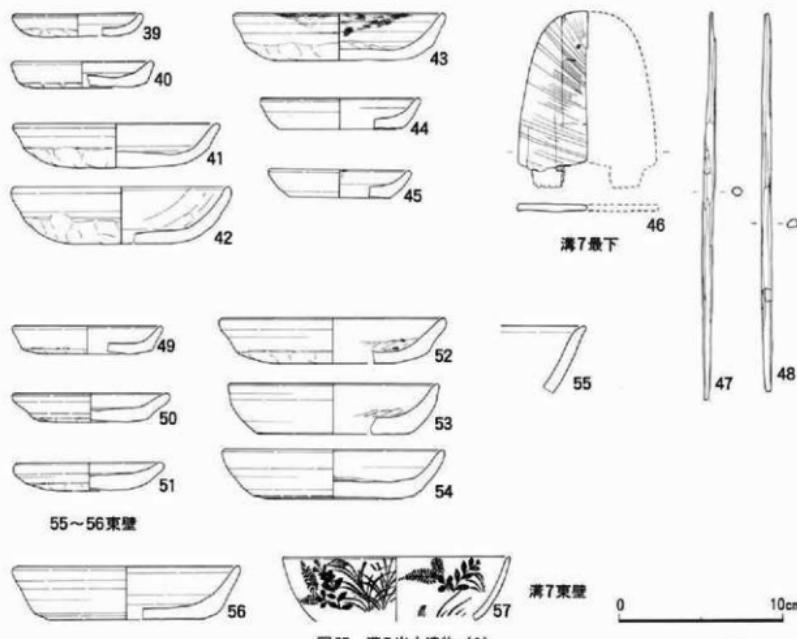


図67 溝7出土遺物(3)

1	土器	寸法 底径(11.2)cm 胎土 砂粒 針状物質含む	成形 ロクロ 外底部ナデ 色調 橙褐色	内底面に工具による条痕あり 焼成 良好
2	土器	寸法 口径(15.0)cm 胎土 砂粒 針状物質	成形 ロクロ 赤色小粒 小石含む	色調 橙褐色 焼成 良好
3	土器	寸法 口径8.75cm 底径5.0cm 胎土 砂粒 針状物質含む	器高1.9cm 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
4	土器	寸法 口径9.4cm 底径5.0cm 胎土 砂粒 針状物質含む	器高2.0cm 色調 灰褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好
5	土器	寸法 口径9.2cm 底径(6.0)cm 胎土 砂粒 針状物質	器高1.8cm 赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好
6	土器 灯明皿	寸法 口径9.0cm 底径5.8cm 胎土 砂粒 針状物質	器高1.7cm 赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙色 焼成 良好 備考 スス付着
7	土器	寸法 口径14.0cm 底径(9.0)cm 胎土 砂粒 針状物質	器高2.5cm 赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙褐色 焼成 良好 備考 板状压痕あり
8	土器	寸法 口径13.1cm 底径7.0cm 胎土 砂粒 針状物質	器高3.4cm 小石含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 橙褐色 焼成 良好 備考 半完形
9	土器	寸法 口径12.9cm 底径6.9cm 胎土 砂粒 針状物質	器高3.35cm 赤色小粒含む	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
10	土器	寸法 口径13.8cm 底径(7.4)cm 胎土 砂粒 針状物質含む	器高3.4cm 色調 橙褐色	成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける

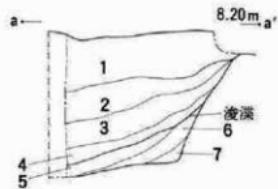
表63 溝7出土遺物観察表(1)

11	土師器	寸法 口径13.6cm 底径(7.0)cm 器高3.3cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
12	土師器 灯明皿	寸法 口径14.4cm 底径(8.0)cm 器高3.3cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 ス付着
13	土師器	寸法 口径9.7cm 底径6.4cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
14	土師器	寸法 口径8.2cm 底径5.8cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
15	土師器	寸法 口径9.2cm 底径6.3cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 完形
16	土師器	寸法 口径9.2cm 底径(6.0)cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
17	土師器	寸法 口径9.2cm 底径6.2cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
18	土師器	寸法 口径13.8cm 底径8.4cm 器高3.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
19	土師器	寸法 口径13.6cm 底径(10.0)cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
20	土師器 灯明皿	寸法 口径12.8cm 底径(6.0)cm 器高3.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 ス付着
21	常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積後ナデ 胎土 灰褐色 小石含む 色調 黒褐色 焼成 良好
22	常滑こね跡 II類	寸法 器高7.4cm 成形 輪積 胎土 灰褐色 小石含む 色調 外面茶褐色 内面緑褐色 焼成 良好
23	青磁 竈泉窯 前	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 外面複連弁文 素地 灰褐色 気孔有り 軸渠 緑褐色 半透明 焼成 良好
24	丸瓦	寸法 厚さ(1.5)cm 成形 四面布 凸面綱 胎土 暗灰色 瓦質 砂粒 小石含む 色調 暗灰色 焼成 良好
25	輕石	寸法 長径5.0cm 短径4.0cm 厚さ3.5cm 色調 灰褐色
26	板草履	寸法 幅(9.6)cm 厚さ0.4cm 備考 板目取り
27	不明木製品	寸法 長径4.4cm 短径4.3cm 厚さ3.8cm
28	土師器	寸法 口径9.0cm 底径4.9cm 器高1.75cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 完形
29	土師器	寸法 口径9.4cm 底径(6.0)cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
30	土師器	寸法 口径13.6cm 底径(6.6)cm 器高3.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
31	土師器	寸法 口径13.6cm 底径8.4cm 器高3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
32	土師器	寸法 口径13.6cm 底径8.6cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次施成を受ける
33	土師器 白色系	寸法 口径11.4cm 底径(6.0)cm 器高2.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む きめ細かい 色調 白褐色 焼成 良好
34	土師器 白色系	寸法 口径14.0cm 底径(9.0)cm 器高3.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒含む きめ細かい 色調 白褐色 焼成 良好
35	東播 甕	寸法 不明 成形 輪積 口縁部ナデ 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰黒色 焼成 良好

表54 第7出土遺物観察表(2)

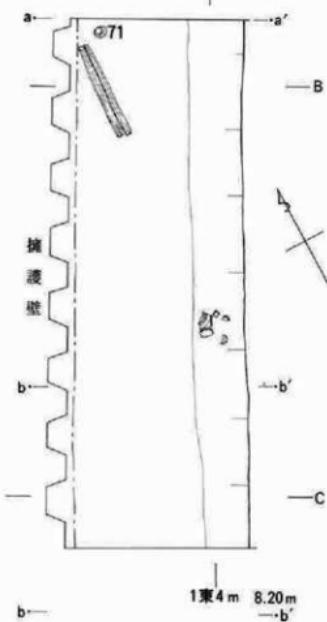
36	常滑 器	寸法 不明 成形 輪縁 口縁部ナデ 胎土 灰褐色 砂粒 小石 長石含む 色調 濃茶褐色 口縁部に薄灰 焼成 良好
37	曲物底板	寸法 径9.6cm 厚さ0.5cm 成形 平面円形 柱目取り
38	馬 形	寸法 長さ25.5cm 幅1.8cm 厚さ0.8cm
39	土師器	寸法 口径8.0cm 底径(5.0)cm 器高1.4cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
40	土師器	寸法 口径8.7cm 底径(6.0)cm 器高1.6cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
41	土師器	寸法 口径12.5cm 底径6.0cm 器高3.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好
42	土師器	寸法 口径13.4cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 内面に少量の金箔付着
43	土師器 灯明皿	寸法 口径13.0cm 底径8.0cm 器高2.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 スス付着
44	土師器	寸法 口径9.8cm 底径(7.6)cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 鈎状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
45	土師器 灯明皿	寸法 口径8.8cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 檀褐色 焼成 良好 備考 スス付着 板状圧痕あり
46	板 章 皿	寸法 幅(8.6)cm 厚さ0.4cm 備考 柱目取り
47	箸	寸法 長さ23.5cm 幅0.7cm 厚さ0.5cm 両口
48	箸	寸法 長さ20.9cm 幅0.5cm 厚さ0.5cm
49	土師器	寸法 口径9.2cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
50	土師器	寸法 口径9.8cm 底径4.0cm 器高1.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
51	土師器	寸法 口径9.1cm 底径4.0cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好
52	土師器 灯明皿	寸法 口径(14.0)cm 底径(6.4)cm 器高2.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 スス付着
53	土師器	寸法 口径13.0cm 底径(9.2)cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 鈎状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
54	土師器	寸法 口径13.8cm 底径9.2cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 鈎状物質 小石含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける 板状圧痕あり
55	麗美 こね鉢	寸法 不明 成形 輪縁 口縁部ナデ 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰黒色 焼成 良好
56	土師器	寸法 口径14.0cm 底径(11.0)cm 器高10.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 鈎状物質 小石含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
57	漆器 梶	寸法 口径(13.8)cm 成形 内外面黒漆塗り 文様 内外面に朱漆の秋草文

表55 溝7出土遺物観察表(3)



位 置  
概 要  
断面形状  
規 模  
主軸方位

1・2-B・C  
調査区西辺を若宮大路に平行して走る  
逆台形  
上場幅 2.3m以上  
下場幅 1.5m以上  
深さ 1.59m  
N-28°6' - E



1. 黄褐色砂層  
黑色土塊を多量に含む  
溝8埋め戻し事業層
2. 暗茶褐色粘質土  
少量の青灰色砂ブロック状  
に混入 常滑片・貝粒少々
3. 暗褐色粘質土  
木片・玉石・3cm大シルト岩
4. 黒灰褐色粘質土  
木片・貝粒・玉石・半人頭大シルト岩・  
黒色粗砂が部分的に帶状に混入—波瀬後堆積
5. 茶褐色粘質土  
木片・シルト岩粒・貝粒
6. 茶褐色粘質土  
木片・炭化物
7. 暗茶褐色粘質土  
シルト岩粒・貝粒

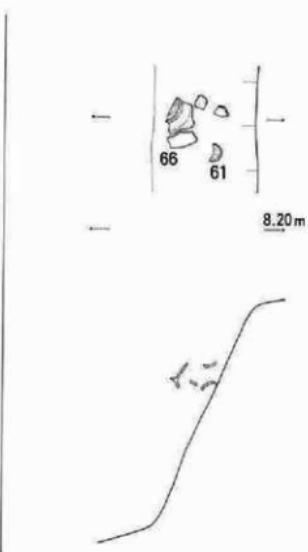


図68 溝8

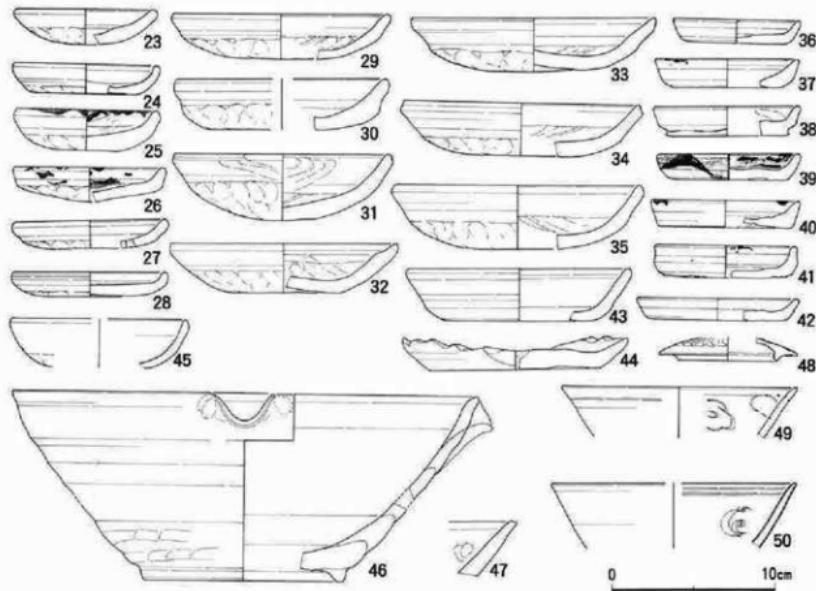
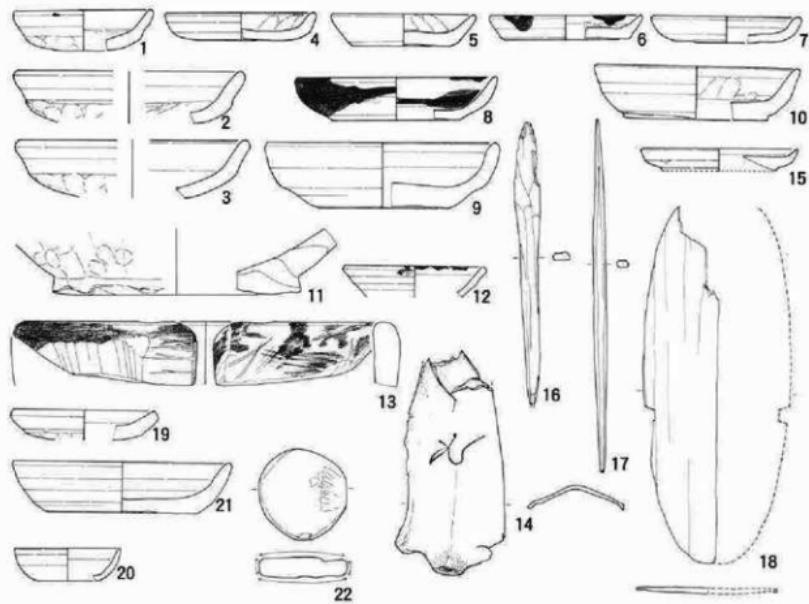


图69 满8出土遗物(1)

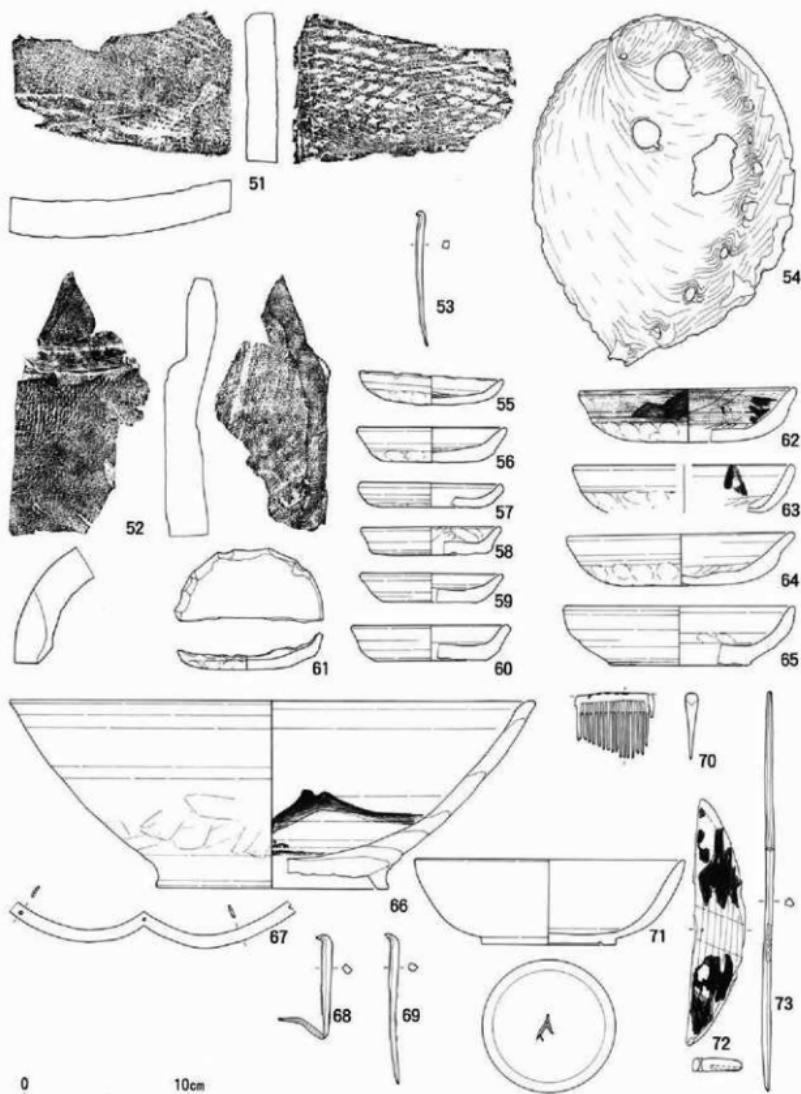


圖70 漢8出土遺物 (2)

1	土師器	寸法 口径(8.6)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
2	土師器	寸法 口径(14.2)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 霧母 砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径(14.4)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径9.2cm 底径7.3cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 霧母 赤色小粒含む やや粗い 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 半完形
5	土師器	寸法 口径8.9cm 底径6.0cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器 灯明皿	寸法 口径9.4cm 底径(7.5)cm 器高1.45cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 霧母 含む やや粗い 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状正彫あり 二次焼成を受ける
7	土師器	寸法 口径9.2cm 底径(6.1)cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 硬質 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
8	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(7.8)cm 器高2.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 霧母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
9	土師器	寸法 口径14.4cm 底径(7.8)cm 器高4.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 霧母 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
10	土師器	寸法 口径12.6cm 底径(8.8)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
11	麗美 皿	寸法 底径(15.2)cm 成形 輪型 胎土 灰色 砂粒 白色粒 長石含む 気孔あり 色調 暗灰色 焼成 普通
12	山皿 美濃北部系	寸法 径8.8cm 成形 ロクロ 胎土 微砂粒含む 軸楽 自然輪 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
13	転用滑石	寸法 長さ(3.1)cm 幅(11.6)cm 厚さ1.6cm 色調 灰色 備考 縞の破片 磁石として使用?
14	加工骨	寸法 長さ(13.0)cm 幅6.4cm 厚さ0.35cm 備考 織刻あり 骨骨?
15	漆器 皿	寸法 口径9.6cm 底径(7.0)cm 器高(1.4)cm 成形 ロクロ 外面下位面取り 内外面黒漆塗り 文様 無文
16	不明木製品	寸法 幅0.45cm 厚さ1.6cm
17	箸	寸法 長さ21.5cm 幅0.8cm 厚さ0.4cm 両口
18	板草履	寸法 幅(9.0)cm 厚さ0.4cm 備考 極目取り
19	土師器	寸法 口径9.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 暗橙色 焼成 良好
20	土師器	寸法 口径6.5cm 底径(3.9)cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 霧母含む 色調 淡灰色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
21	土師器	寸法 口径13.4cm 底径9.3cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 微砂粒 針状物質 小石 貝粒含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
22	石製品	寸法 長径5.5cm 厚さ1.2cm 石材 織けたシルト岩 色調 黄灰色 備考 表裏ともミ痕あり
23	土師器	寸法 口径8.8cm 底径(1.8)cm 器高2.1cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
24	土師器	寸法 口径9.0cm 底径(6.2)cm 器高1.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 霧母含む 色調 橙色 焼成 良好
25	土師器 灯明皿	寸法 口径9.0cm 底径4.2cm 器高2.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着 内外面に剥離あり
26	土師器 灯明皿	寸法 口径9.4cm 底径(8.6)cm 器高2.1cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着 全体に剥離あり

表56 满8出土遺物観察表(1)

27	土師器 穿孔	寸法 口径9.6cm 底径(5.0)cm 器高1.7cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
28	土師器	寸法 口径9.6cm 底径6.0cm 器高1.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
29	土師器	寸法 口径13.4cm 底径(6.4)cm 器高2.75cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗灰色 焼成 良好
30	土師器	寸法 口径(13.2)cm 底径(7.6)cm 器高(2.55)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好
31	土師器	寸法 口径13.5cm 底径1.1cm 器高4.1cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
32	土師器	寸法 口径14.0cm 底径(7.0)cm 器高3.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
33	土師器	寸法 口径14.0cm 底径5.8cm 器高3.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 磷母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
34	土師器	寸法 口径14.8cm 底径(6.6)cm 器高3.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好
35	土師器	寸法 口径15.4cm 底径(5.8)cm 器高3.9cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
36	土師器	寸法 口径7.8cm 底径6.4cm 器高1.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
37	土師器 灯明皿	寸法 口径8.8cm 底径(6.8)cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
38	土師器	寸法 口径9.0cm 底径(7.2)cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
39	土師器	寸法 口径8.8cm 底径7.4cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
40	土師器 灯明皿	寸法 口径9.2cm 底径(8.2)cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 口縁部スス付着
41	土師器 灯明皿	寸法 口径8.8cm 底径(7.6)cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
42	土師器	寸法 口径10.0cm 底径(8.3)cm 器高1.35cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
43	土師器	寸法 口径13.8cm 底径(9.4)cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 粗い 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
44	土師器	寸法 口径13.8cm 底径10.4cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 口縁部を打ち欠く 胎土 砂粒 針状物質 粗い 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
45	土師器 白色系	寸法 口径(10.9)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒少量含む 色調 乳白色 焼成 良好
46	涅美こね鉢	寸法 口径28.5cm 底径(12.4)cm 器高11.6cm 成形 輪積後ロクロ 高台貼付け 外面下位ヘラ削り 胎土 暗灰色 白色粒 砂粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好
47	常滑こね鉢 II類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 白色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
48	青白磁 小壺蓋	寸法 最大径8.4cm 成形 型押し 素地 灰白色 砂粒含む 軸裏 淡青白色 透明 内外面に施釉 受け部のみ露胎 焼成 良好
49	青磁 竈泉窯	寸法 口径14.4cm 成形 ロクロ 素地 灰色 キメ細かい 軸裏 淡綠褐色 半透明 文様 画花文 焼成 良好
50	青磁 竈泉窯	寸法 口径(15.0)cm 成形 ロクロ 素地 白灰色 砂粒含む 軸裏 淡綠褐色 半透明 文様 画花文 焼成 良好

表57 溝8出土遺物観察表(2)

51	平 瓦	寸法 長さ 8.9cm 幅 13.6cm 厚さ 2.0cm 成形 叩き文斜め格子 胎土 白色粒含む 密 色調 灰色 焼成 普通
52	丸 瓦	寸法 厚さ 2.0cm 成形 凸面 繩たたき 凹面 布目痕 側面 面取り 胎土 暗灰色 粘土が流文状 密 色調 灰色 焼成 普通
53	鉄製品 釘	寸法 長さ 8.0cm 幅 0.35cm 厚さ 0.5cm
54	貝	寸法 長さ 21.4cm 幅 15.9cm 備考 あわび 穿孔3ヶ所 お面?
55	土 器 器	寸法 口径 8.9cm 底径 (4.2)cm 器高 1.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 針状物質含む きめ細かい 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 完形
56	土 器 器	寸法 口径 9.2cm 底径 5.8cm 器高 2.1cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 霧母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
57	土 器 器	寸法 口径 8.9cm 底径 (6.3)cm 器高 1.45cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
58	土 器 器	寸法 口径 8.6cm 底径 (6.9)cm 器高 1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
59	土 器 器	寸法 口径 8.8cm 底径 (5.7)cm 器高 1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 色調 晴橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
60	土 器 器	寸法 口径 9.8cm 底径 (6.9)cm 器高 2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒含む 粗い 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
61	土 器 器	寸法 口径 9.0cm 底径 3.5cm 器高 2.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 口縁部を打ち欠く 胎土 微砂粒 針状物質 霧母含む 色調 灰橙色 焼成 良好
62	土 器 器	寸法 口径 13.4cm 底径 (5.3)cm 器高 3.2cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 貝粒 霧母含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
63	土 器 器 灯 明 灯	寸法 口径 (13.0)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 長石 小石含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 口縁部スス付着
64	土 器 器	寸法 口径 14.4cm 底径 6.9cm 器高 3.15cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 霧母 小石含む 色調 暗橙色 焼成 良好
65	土 器 器	寸法 口径 14.2cm 底径 (8.7)cm 器高 3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 霧母含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
66	涅 美 こね 脱	寸法 口径 32.2cm 底径 (14.2)cm 器高 11.5cm 成形 輪積後ロクロ 外面下位ヘラ削り 高台貼り付け 胎土 砂粒 小石 長石含む 色調 暗灰色 焼成 普通 備考 二次焼成を受ける
67	銅製飾り金具	寸法 長さ (17.5)cm 幅 0.8cm 厚さ 0.15cm
68	鉄製品 釘	寸法 長さ 9.3cm 幅 0.55cm 厚さ 0.35cm
69	鉄製品 釘	寸法 長さ 9.2cm 幅 0.55cm 厚さ 0.4cm
70	木製 椅	寸法 長さ 4.0cm 幅不明 厚さ 0.75cm 成形 全体に黒漆塗り
71	漆 器 椅	寸法 口径 16.6cm 底径 8.2cm 器高 5.2cm 成形 内外面黒漆塗り 無文 高台内は木地のままで中央に彫刻あり
72	鍋 蓋	寸法 直径 (23.6)cm 厚さ 0.8cm 備考 把手をとめた釘穴あり 一部焼け焦げている
73	箸	寸法 長さ 24.4cm 幅 0.5cm 厚さ 0.4cm 両口

表58 溝8出土遺物観察表(3)

## 7. 表土や擾乱層からの採集遺物

表土掘削中の採集品や擾乱層から出土したものなどのうち、主なものを紹介しておく。年代には相当な幅がある。

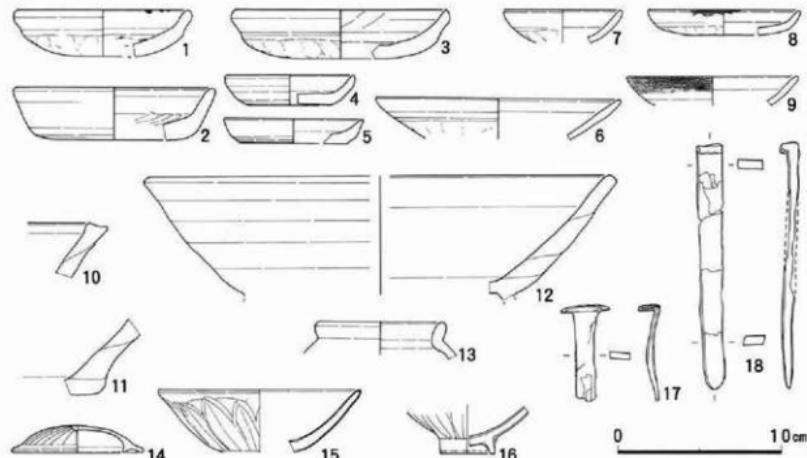


図71 表土や擾乱層からの採集遺物

1	土師器 灯明皿	寸法 口径11.0cm 底径(4.8)cm 器高2.8cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 スス付着
2	土師器	寸法 口径12.4cm 底径(8.0)cm 器高3.3cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土師器	寸法 口径13.4cm 底径(5.6)cm 器高3.0cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒 針状物質 雲母含む 色調 灰橙色 焼成 良好
4	土師器	寸法 口径8.0cm 底径(5.0)cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 磁砂粒 針状物質 雲母含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
5	土師器	寸法 口径8.6cm 底径(6.5)cm 器高1.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 磁砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
6	土師器 白色系	寸法 口径15.0cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 磁砂粒含む 色調 白褐色 焼成 良好
7	瓦器	寸法 口径7.2cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 磁砂粒含む 色調 白褐色 焼成 良好
8	瓦器 灯明皿	寸法 口径9.4cm 底径(5.0)cm 器高1.5cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 磁砂粒含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 スス付着
9	瓦器	寸法 口径8.8cm 成形 手づくね 口縁部ナデ 胎土 磁砂粒 小石含む 色調 灰白色 焼成 良好

表59 表土や擾乱層からの採集遺物観察表（1）

10	常滑こね跡 Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積後ナデ 胎土 灰黒色 砂粒 小石 長石含む 色調 赤茶色 焼成 良好
11	常滑	寸法 不明 成形 輪積後ナデ 胎土 灰色 砂粒 小石 長石含む 色調 橙褐色 焼成 良好
12	常滑こね跡 Ⅰ類	寸法 口径(14.4)cm 底径(8.0)cm 成形 手づくね 口縁部 内底部ナデ 胎土 砂粒 小石 長石含む 色調 灰色 内面に降灰 焼成 良好
13	褐釉 広口壺	寸法 口径8.0cm 成形 ロクロ 胎土 灰褐色 小石 長石含む 色調 黒褐色 焼成 良好
14	白磁 広口小壺蓋	寸法 口径8.1cm 器高1.7cm 成形 型押し 文様 菊花文 内底部ナデ 素地 白色 軸裏 淡青色 透明 外面に施釉 焼成 良好
15	青磁 竜泉窯 蘭	寸法 口径12.4cm 成形 ロクロ 文様 外面複蓮弁 素地 灰色 気孔あり 軸裏 暗灰緑色 半透明 焼成 良好
16	青磁 竜泉窯 蘭	寸法 底径(3.3)cm 成形 ロクロ 素地 灰白色 軸裏 灰緑色 半透明 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
17	鉄製品 釘	寸法 幅1.2cm 厚さ0.4cm
18	鉄製品 釘	寸法 長さ15cm 幅1.2cm 厚さ0.5cm

表60 表土や擾乱壙からの採集遺物観察表(2)

## 8. 古代遺物

中世層から出土した古代の遺物を集めた。いずれも律令期のもので、盤状壺(2)を含む。遺構そのものはなかった。



図72 古代遺物

1	土器 甕	寸法 不明 成形 輪積 口縁部外面外反 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
2	土器 甕	寸法 不明 成形 輪積 内面縦方向に刷毛目 胎土 砂粒含む 色調 橙色 焼成 良好
3	土器 甕	寸法 不明 成形 輪積 外面に赤く彩色されている 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
4	土器 甕	寸法 底径(10.4)cm 成形 輪積 胎土 砂粒 針状物質 小石 シルト岩含む 色調 灰褐色 焼成 良好

表61 古代遺物観察表

### 第3節 人名木簡について

今回の調査では、木組みを持つ鎌倉時代中期から後期にかけての溝6-II・溝6-IIIから三枚の木簡が出土した。これらは若宮大路側溝の普請に伴い、鎌倉番役や京都大番役といった御家人役の一環として個別の御家人に普請が割り当てられたことを示すと考えられる。これまで鎌倉市内では三例出土しているが、今回は新たに出土した木簡の出土状況や記載内容を中心に検討を加えたい。

#### 1. 出土木簡概要

##### 木簡1

長さ44cm、幅3.5cm、厚さ3mmの大きさで「二けん おぬきの二ろう」の記載がある。頭部は削られて圭頭状である。「おぬき」は小貫あるいは小抜・尾貫であり、名は二郎であろう。秀郷流藤原氏小野崎氏流・清和源氏武田氏流にも同氏があり、「おおぬき」氏の場合でも桓平氏千葉氏流や横山党中央には同氏がいる。しかし特定についてはその材料を欠く。

##### 木簡2

長さ43.8cm、幅3.5cm、厚さ7mmの大きさで「二けん まきのむくのすけ」の記載がある。木簡1と同様、頭部は削られて圭頭状である。人名については姓を「まき」と読むか「まきの」と読むかで変わってくるが、姓と名の間に「の」を入れる木簡1・3の記載例から考えれば、姓は「まき」であろう。「むくのすけ」とは木工助のことであろう。「まき」氏については槇・真木・萬木・牧等の字が当てはめられ、藤原南家工藤氏族や信濃、丹後、丹波等の各氏が知られている。木工寮の次官である「すけ」を名乗っていることから、ある程度の勢力を有する家の出身者と考えられる。この条件を満たすような「まき」氏としては、駿河国大岡牧を本貫地とする、藤原氏道隆流の出自を持つ牧氏の一族も想定できるが、「まきのむくのすけ」については不明である。

##### 木簡3

52.2cm、幅2.9cm、厚さ8.5mmの大きさであるが、木簡1・2とは異なり頭部は平らである。また、市内出土の木簡中では最大である。「二けん かわしりの五ろう」の記載があり、「かわしり」については河尻、あるいは川尻の字が当てはめられよう。同時代史料中の「かわしり」氏については、閑院殿造営雜掌目録<sup>(1)</sup>（閑院殿造営注文）に登場する「河尻太郎」がいる。彼は建治元年の六条八幡宮造営注文にはその姿がみえず、九州の御家人と推定されている。<sup>(2)</sup> また「河尻兵衛（尉）」という人物が建治二年三月中に発給された文書中に登場するが、<sup>(3)</sup> 彼も九州に関係を持っていたと考えられる。同氏については藤原南家工藤氏流清和源氏頼親流や秀郷流藤原氏波多野氏流等にも確認できるものの、「かわしり」氏と河尻太郎・河尻兵衛（尉）との関係と同様にはっきりしない。これらも「かわしりの五ろう」を比定する際の材料の一つとしてあげておく。

以上のように木簡に登場する人物の比定は極めて困難であるが、それは木簡の性格にも関わる問題である。木簡は側溝の基礎部分にあたる根太木の下部から出土したが、恐らく工事に先立って工区や工事の起点の表示用に地面に差されたものが、根太木を置く時点では不要となったものと考えられる。一度根太木の位置が決まれば、後は上に束材や板材を組み上げればよいため、その時点で不要になった木簡はそのまま構造材の下に放置されたのであろう。以上の点から工事に木簡が使用されたのは短期間であり、記載事項は工事の初期の段階で不必要となる内容であったと考えられる。このことから木簡は工事



1



2



3

出土木簡

現場では使い捨ての目印の役目を有していたといえる。そのため、記載の人名も当事者が分かれば良いという理由から、簡素な表記になったのではなかろうか。

## 2. 出土状況

木簡はいずれも若宮大路側溝の構造材の底部、根太木付近から出土した。木簡1・2はちょうど根太木の継ぎ目の下部付近から出土している。この出土のあり方は、北条泰時・時頼邸跡—雪ノ下一丁目371番1地点—（以下地点1と称す）出土の「一丈伊北太郎跡」・「一丈南くにの井の四郎入道跡」の木簡の出土状況と同様と言ってもよい。馬淵は地点1出土の木簡について、築地に伴う溝から出土したとしているが<sup>(4)</sup>、築地の存在については検討を要する。木簡1は溝6-IIから出土し、木簡2はその下の溝である溝6-IIから出土している。出土遺構が溝であるために、若干の層位的混乱が消えない可能性があるが、木簡1の方が若干新しい時代のものといえる。木簡3は溝6-IIの底部付近から出土した。木簡2と同じ溝からの出土であるが抜き取られたためであろうか、付近に構造材は存在しない。これも側溝に伴うものとみてよいだろう。

今回出土の木簡の特徴として、その大きさがあげられる。木簡3の長さ52.2cmを始めとして、木簡の長さは40cmを越し、これはいずれも20cm台である地点1出土の木簡、北条時房・顯時邸（雪ノ下一丁目265番3地点。以下地点2と称す）出土の「あかき入道」銘の木簡と比較しても大型である。

木簡の形状は頭部は二系統に分類できるが、その差が何によるものかについては不明である。一方、尾部は共通して先端部にいくほど細くなっている、これは石井進の指摘<sup>(5)</sup>のように地面に固定するためとみられる。このことを裏付けるように、木簡には紐や打ちつけて固定した痕の切り込みや穿孔はない。なお、固定の際に地面に直接打ち込んだり差したりするのは、木簡の長さや厚さから判断すると困難であろう。むしろ予め掘った穴に木簡を入れ、土がかぶせられたと考えられる。

木簡に書かれた文字はすべて木簡の上部に位置し、その下は空白である。これは地面に差した際に文字部分が地上に出るための配慮であろう。そのため、空白部分については地中に埋められた部分であろうと推測できる。当遺跡出土の木簡はこの部分が木簡1・2で25cm程度、木簡3では30cm程度と他の地点出土のものよりも長い。これは当遺跡の木簡がより深く地中に埋められることを前提としていたためであろう。その理由については不明である。形状や出土状況の点からいえば、これらの木簡も鎌倉市内で出土している、御家人役等による普請（割普請）の工区を示した木簡とほぼ同様のものといえる。

## 3. 木簡の性格

三本の木簡の筆跡は比較的読みやすい。書体はいずれも似ておりしっかりとされているが、ここで注目したいのはやはり同様の書体である地点1出土の木簡の字を、「幕府公文書の字」とした石井の見解<sup>(6)</sup>である。今回の木簡もその書体からは同様のことが想定できる。さらには側溝工事には幕府内部で工事の規模や工事担当者（御家人）を決定すると共に、工区の規模やその担当者名を記した木簡が同時に作成された可能性が指摘できる。

当遺跡出土の木簡にはいずれも「二けん」という記載があり、これには「二間」との意味が考えられる。市内出土の木簡の場合、その記載順序は該当地点の工事の規模（工区の長さ）・人名という順序であり、当遺跡出土の木簡もその順序を踏襲している。従来の人名木簡はいずれも若宮大路周辺から大路に沿うような形で出土し、若宮大路側溝構築工事との関係が指摘されている。当遺跡出土の木簡もその記載内容からは、同様のものとみて良いだろう。既に石井は閑院殿造営注文の河堰の記述から、鎌倉出

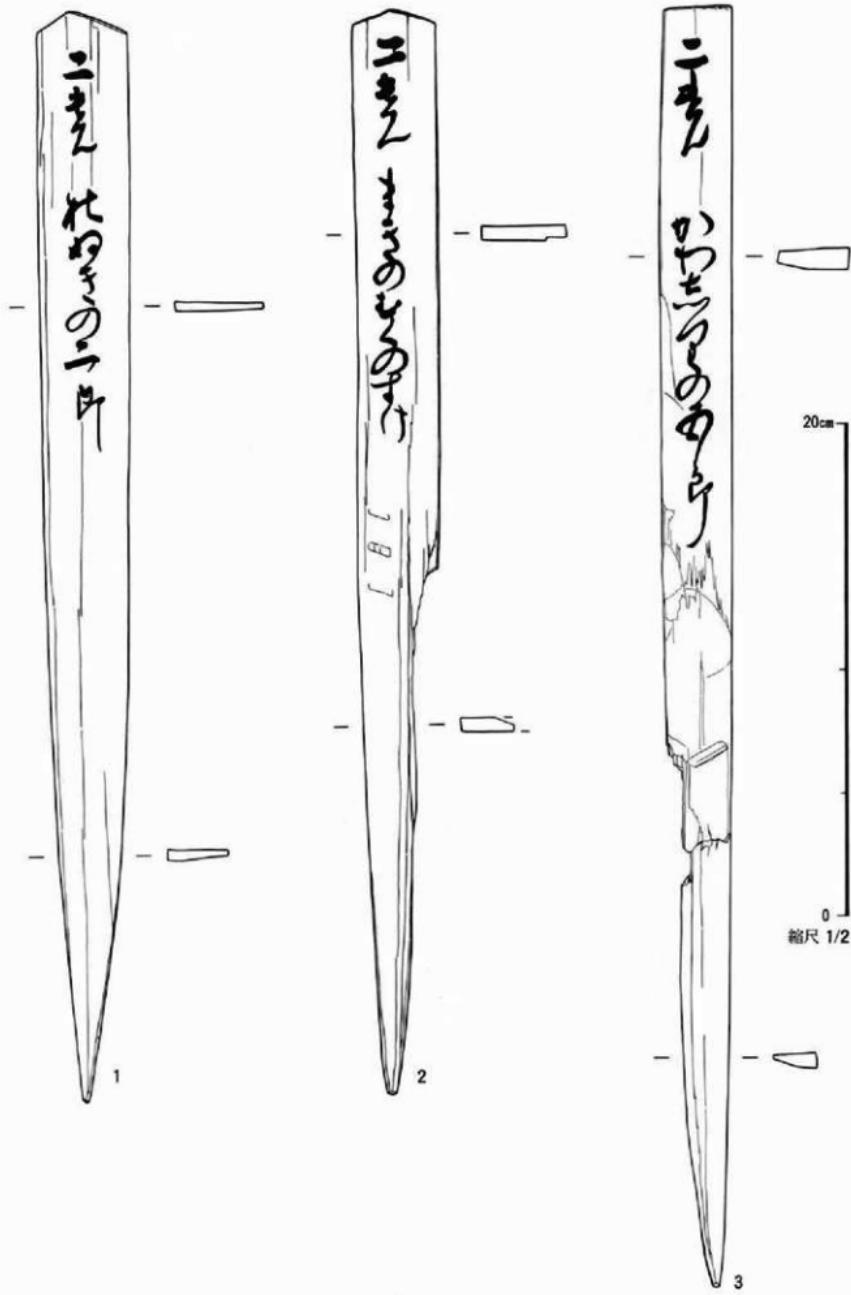


図73 人名木筒



1. 木簡1出土状況（西から）



2. 木簡2出土状況（西から）

3. 木簡3出土状況（南から）



木簡出土状況

土の「丈」記載の木簡が若宮大路側溝側面を保護する護岸工事に使用された可能性を指摘している。しかし、当遺跡では「間」記載の木簡が従来出土の「丈」記載木簡と同様の状態で出土しており、若宮大路側溝の構築という同じ性格の工事に、異なる単位が使用されていたことが明らかになった。

関院殿造営注文では様々な種類の工事が行われる中、宮御方東塀中門井拂を始めとした塀の工事や、建物の工事といった柱が存在する工事には「間」が使用されるのに対し、「丈」は河堰二百三十八丈を、恐らく「鋪板」であり堰の工事に必要な板材部分を指すであろう。東塀・西塀に分けた中にみられるといったように、同時に異なる単位が使用されている。一般的にも「間」が長さの単位としての他に、柱間の距離とは無関係に柱間の数を指して使用される場合もあるのに対し、「丈」の場合は長さの単位（一丈=約3m）として用いられるように、明らかに別の単位である。

若宮大路側溝の工事に使用された単位について、まずは「間」の使い方を検討してみたい。木簡は根太木の継目周辺から出土しているが、木簡が継ぎ目を起点に「二間」の距離毎に置かれていたとは考えられない。この根太木は長さにばらつきがあるが、その長さの平均はおよそ4m前後である。そのため、調査区内では出土地点から距離で二間の地点には根太木の継ぎ目は存在しないのである。今回の調査では調査区の関係上、木簡の出土した構造材の前後の根太木は完掘できず、それぞれの構造材の一部が発掘されたにすぎない。更に調査区外に伸びている根太木の継ぎ目の下部付近にも、木簡が存在する可能性が無いとはいえないが、出土した根太木の長さの点から判断しても、調査区外の二間の距離の地点に木簡が位置する可能性は低い。

むしろ、この場合の「二間」は距離を示すのではなく、柱間を指すと考えられる。根太木には等間隔に長方形のホゾ穴が開き、ここに束柱が立っていたと思われるが、この束柱の柱間を指して「間」という単位が使用されたとは考えられない。なぜならばホゾ穴は一つの根太木に5個から7個と多数開いているため、束柱「二間」毎に木簡を置くと、一本の構造材の下からは複数の木簡が出土するはずだからである。むしろこの場合の「間」とは、根太木の継ぎ目に立つ束柱同士の柱間を指すか、『蒙古襲来絵詞』の安達邸門前の描写などにみられる、側溝の板材が側溝内部に倒れ込むのを防ぐために、側溝上部に渡された梁の間数を指しているのではないかろうか。その際に梁二本・三本分の距離を指して「一間」・「二間」という表現が使用された可能性も指摘できる。

当遺跡出土木簡の出土状況と記載内容からは以上のような推測が成り立つが、「丈」の記載のある木簡との関係については不明である。詳細な考察は木簡の出土事例の増加を待ちたいが、現時点では若宮大路の側溝の構築工事が、異なる単位の使用から判明するようにいくつかの異なる性格の作業から成立しており、工程毎に担当者が異なっていた可能性を指摘しておく。

さらに興味深いのは根太木の長さと、木簡記載の長さの単位の関係である。地点1の根太木の長さが約3mであり、「一丈」という記載にきちんと対応しているのに対し、「口二丈 あかき [ ] 入道」銘の木簡が出土した地点2では、報告書所載の図面から判断すれば根太木の長さは約4mであり、木簡の出土した場所から二丈の地点には根太木の継ぎ目は存在しないことになり、「丈」記載には対応しない。やはり「北条時房・源時政跡」とされる雪ノ下一丁目274番2地点<sup>(3)</sup>でも、根太木の長さは4m以上であるように、「丈」記載と根太木の長さが対応しない。加えて当遺跡の根太木の長さも約4mであり、「丈」に対応しない点は先述した通りである。そうした中、むしろ木簡の記載内容と出土状況が一致している地点1は、例外的な事例といえる。現時点ではその理由は不明であるが、この問題の解決のためにも、今後の事例増加が待たれるところである。

（岡 陽一郎）

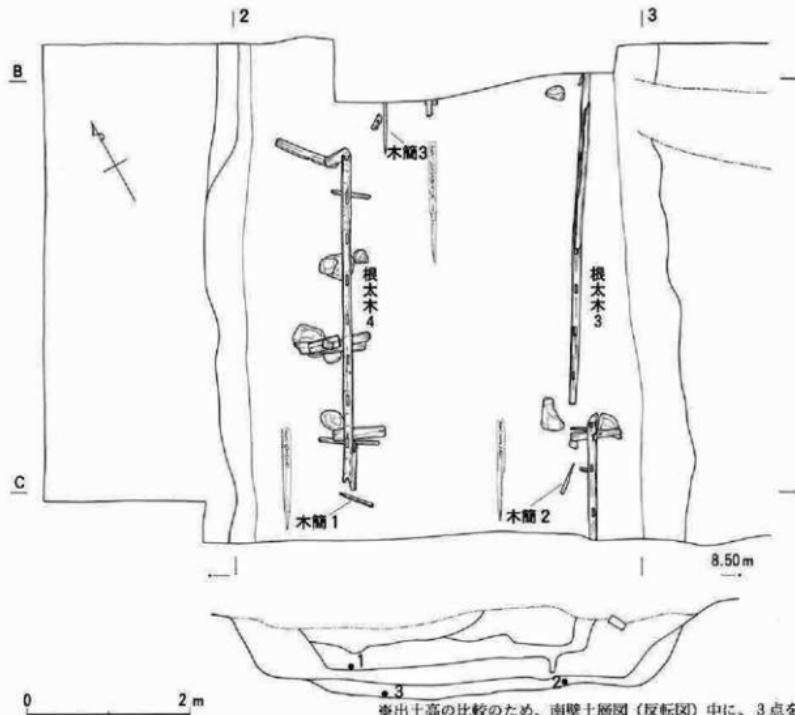


図74 木簡出土位置図・比高図

〈註〉

1. 「吾妻鏡」建長二年三月一日条
2. 海老名尚・福田豊彦「田中権氏旧藏典籍古文書「六条八幡宮造営注文」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集、1992
3. 肥後産田在僧定倫諱文「石清水文書」(『鎌倉造文』12271号文書)・寺原後家尼諱文「同文書」(同12277号文書)・僧某諱文「同文書」(同12289号文書)
4. 馬鹿和雄『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1地点発掘調査報告書』(北条泰時・時頼邸跡発掘調査団編鎌倉市教育委員会、1985)
5. 田代信夫「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目265番3」(『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6 平成元年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会、1990)
6. 石井 道「鎌倉から出土した最初の木簡」(『日本歴史』449、1985)
7. 前掲注6 参照
8. 原 廣志「北条時房・頼時邸跡 鎌倉市雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書」(北条時房・頼時邸跡発掘調査団、1988)

## 第四章 花粉分析

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

鎌倉市雪ノ下一丁目377番7に所在する北条泰時・時頼邸跡において行われた発掘調査で、12世紀末(鎌倉時代初期)から13世紀にかけての複数の溝が検出された。位置としては、当時のメインストリートである若宮大路に面しており、開発の進んだ市街地部分に当たる。こうした市街地部においては森林の存在は考えられず、溝周辺は雜草類など草本類が多く生育していたことが予想される。以下に、北条泰時・時頼邸跡において採取された試料について花粉分析を行い、市街地部の植生について検討した。また、多くは周辺山地・丘陵部にみられたであろう森林植生の変遷についても検討した。

### 1. 試 料

花粉分析用試料は、調査区北壁(溝8)および南壁より、柱状やスポットで採取した(図1、2)。このうち、柱状試料については実験室内であらためて土相観察を行って後、花粉分析用に7点採取した(試料6~12)。各土層の詳しい記載については本論の地質の章を参照して頂き、以下には簡単ではあるが試料を採取した層を中心とした記載を示した。なお、層位番号について、溝8(北壁)においては遺跡より頂いた断面図に示されていたものを使用したが、南壁については便宜的に番号を付し使用した。

北壁(図1) : h層は上部より、青緑灰色砂と黒灰色砂質粘土が交互に2回ずつ主体となる層である。i層は褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、砂は塊状に多く認められる。j層も褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、砂が塊状に多く入り、土丹片が散在しており、材片や玉砂利も認められる。k層は黒灰色砂質粘土で、土丹片、玉砂利、炭片などが認められる。l層も黒灰色砂質粘土で、材片や砂岩が認められ、下部では砂がより多く含まれている。m層は黒灰色の砂質粘土～粘土質砂で、材片や凝灰岩が認められる。n層は黒灰色砂質粘土で、地山層に当たる下位の青灰色砂が多く含まれている。これらのうち、k～n層が溝8の堆積土で、上部のh～j層が人為的な埋め土である。溝8(k～n層)の時代は12世紀末の鎌倉時代初期で、k層は後漢後のものであるが、下位層との時間間隔はそれほど無いと推測される。

南壁(図2) : A層(遺跡層位番号22)は暗黃灰色の砂質シルト～粘土で、土丹片やカワラケ片が多量に入り、炭片も点在している(溝4埋め土)。B層(遺跡層位番号31)は黄灰色の粘土質砂で、土丹片が多く、材片も認められる(溝4堆積土)。C層(試料5)は褐色を帯びた黒灰色の砂質粘土(溝5埋め土)、D層は黒褐色の砂質粘土で、土丹片やカワラケ片、貝殻片、レキが多く認められる(溝5埋め土)。E層(試料6、遺跡層位番号21)は黒灰色粘土で、砂が塊状に散在し、レキや材片が認められる(溝5B堆積土)。F層(試料13)は褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、材片や土丹片、炭片が認めら

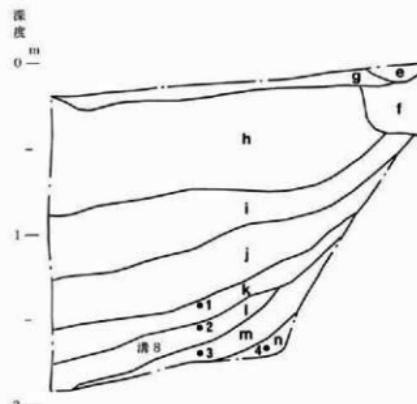


図1 M(溝)8部の土層断面図(北壁)と試料採取層準

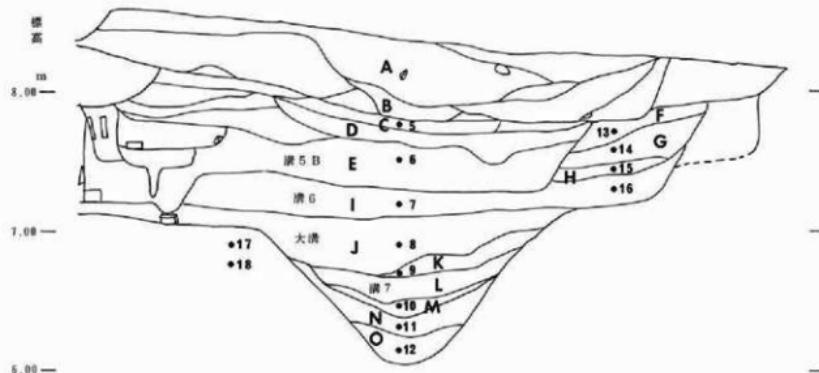


図2 試料採取付近の土層断面図(南壁)と試料採取層準

れる(溝6埋め土)。G層(試料14)も褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、材片や土丹片、炭片F層より多く、玉砂利も含まれる(溝6埋め土)。H層(試料15)も褐色を帯びた黒灰色砂質粘土で、上位層より黒色が強く、材片や炭片、レキが認められる(溝6埋め土)。I層(試料7、16)は黒灰色の砂質粘土で、レキや材片が点在している(溝6堆積土)。J層(試料8)は黒灰色の砂混じり粘土で、土丹片やカワラヶ片、材片、レキなどが点在している(大溝堆積土)。K層(試料9)は黒灰色砂質粘土で、貝殻小片が多量に含まれている。このK層より最下部のO層までが溝7の堆積土である。L層は黒灰色の粘土質砂で、貝殻小片が多量に認められる。M層(試料10)は黒灰色の砂質有機質粘土で、材片などの植物遺体が特に上部において多く認められる。N層(試料11)は黒灰色の粘土、O層(試料12)は青色を帯びた黒灰色の砂質粘土で、下部ほど砂が多く含まれている。本層の下位はやや粘土分が認められる青灰色砂(細粒砂主体)で、地山層にあたる。

また、崩落による流れ込み土とみられる部分について、試料17は黒褐色粘土を含む青灰色砂(層厚15cm)、試料18は縦方向に根様の細い植物遺体が入る黒褐色砂質粘土(層厚16cm)である。本地点においては、この黒褐色砂質粘土層の下位に地山層とみられる青灰色砂が認められる。

各溝の時期については、溝7および大溝(試料8~12)が13世紀初、溝6(試料7、試料13~16)が13世紀前半、溝5Bおよび溝5(試料5、6)が13世紀後葉と考えられている。

## 2. 分析方法

上記した18試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約2~5g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、統けてアセトトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成してを行い、その際サフラニンにて染色を施した。



### 3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉38、草本花粉39、形態分類を含むシダ植物胞子3、藻類1の計81である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図3（北壁の溝8）、図4（南壁）に示した。なお、これらの分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基數に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基數として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレバート）を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

#### 1) 北壁溝8（図3）

検鏡の結果、草本花粉が80%前後と多くを占め、多産している。樹木類についてみると、スギ属が樹木類の中では約25~60%を占め、最も多く得られている。その他の針葉樹類では、ツガ属やマツ属複雜管束亞属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が5%前後の出現率を示している。広葉樹類では、コナラ属アカガシ亞属が20%前後と高い出現率を示している。コナラ属コナラ亞属、シイノキ属マテバシイ属、ニレ属ケヤキ属は5%前後検出され、その他、クマシデ属アサダ属、ブナ属、エノキ属ムクノキ属などが得られている。草本類ではイネ科が50%前後と高い出現率を示し、ヨモギ属も10%前後と多く検出され、試料3では20%を越えている。その他、カヤツリグサ科、アカザ科ヒュウ科が5%前後産出しており、水生植物（抽水植物）のオモダカ属やミズアオイ属なども得られている。また、ソバ属が試料1および4より検出されている。

#### 2) 南壁（図4）

樹木花粉の検出数が非常に少なく、図4に示した樹木花粉の産出傾向については参考程度にみていただきたい。また、試料12および16については樹木花粉をはじめ花粉化石の検出数が非常に少ないとから、分布図としては示さなかった。

検鏡の結果、下部の試料11、12を除いて、草本花粉の占める割合はさらに高くなり、90%前後に達している。分類群ごとにみてみると、ニヨウマツ類は下部の大溝や溝7に比べ、上部の溝5Bや溝6で出現率を高め、ニレ属ケヤキ属にもうした傾向がみられる。反対に、スギ属は下部の大溝や溝7で高い出現率を示し、アカガシ亞属にも同様の傾向が認められる。その他、コナラ亞属は溝6試料において出現率が高くなっている。エノキ属ムクノキ属は試料8において突出した高い出現率を示し、試料5においてもやや多く検出されている。草本類ではイネ科が上部に向かって次第に増加しており、出現率は60%近くに達している。ヨモギ属は多少の増減はあるが、10~20%の出現率を示している。アカザ科ヒュウ科は下部を除いて10%前後得られている。その他では、やはり水生植物のオモダカ属やミズアオイ属が検出されており、ソバ属も得られている。また、ベニバナ属近似種が大溝から溝7の試料において連続して産出している。このベニバナ属近似種とした花粉の形態については、現生（栽培）のベニバナと同様と思われるが、ベニバナとベニバナ属の他の種や近縁の属との分類基準がはっきりつかめていないため、ここではベニバナ属近似種とした。

試料18についてみると、やはり草本花粉が約90%を占めている。少ない樹木ではニヨウマツ類（出現率約34%）が最も多く、スギ属（約14%）やアカガシ亞属（約15%）も比較的多く得られている。草

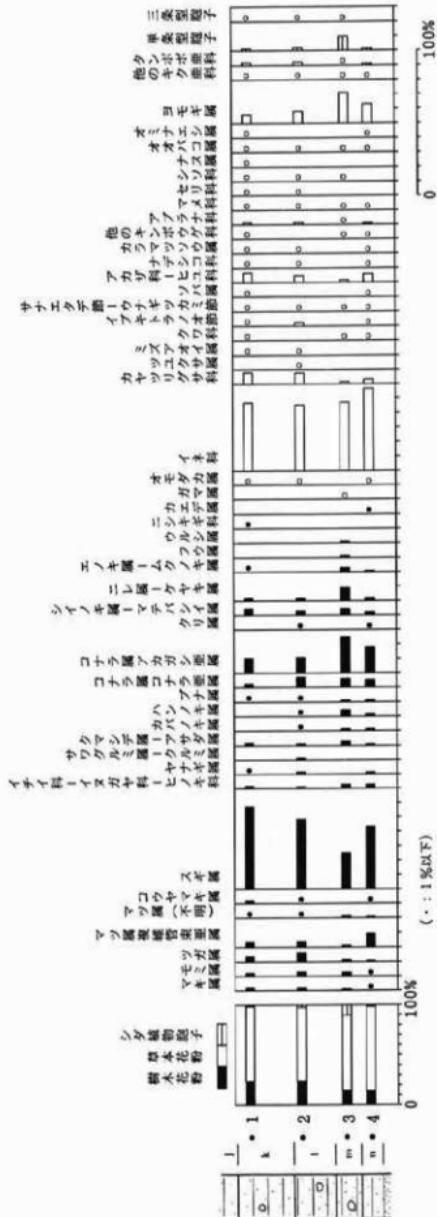


図3 M(柳) 8種の主要花粉粒分布図  
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は花粉・孢子総数を基準として百分率で算出した)

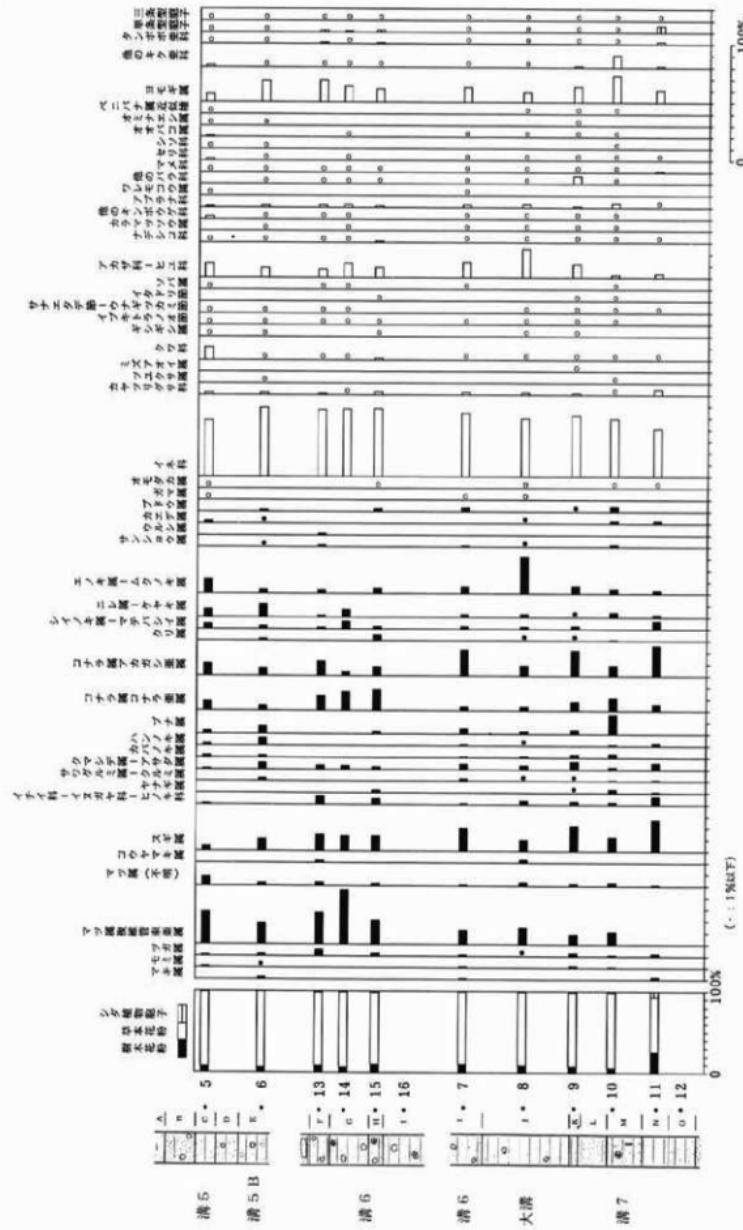


図4 北条系・時頃区南壁の主要花粉化石分布図  
(樹木花粉は樹木化粧粉類、草本花粉・孢子は花粉・孢子類を外数として百分率で算出した)

本類ではイネ科（約57%）が最も多く、ヨモギ属（約17%）、アカザ科-ヒュ科（約10%）が次いで多く検出されている。

#### 4. 北条泰時・時頬跡周辺の古植生

全試料を通して樹木花粉の占める割合は小さく、北条泰時・時頬跡周辺においては樹木の少ない景観であったと推測される。また、ここで検出された樹木花粉の多くは、鎌倉周辺の山地・丘陵部より風や流水（川や溝）によって運ばれ堆積したものと思われる。以下に、各溝の年代が出土遺物から示されており、この年代に沿って北条泰時・時頬跡周辺の古植生について示した。

##### 1) 12世紀末（溝8）

遺跡周辺ではスギ属を主体にイチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科、モミ属、ツガ属、ニヨウマツ類などを混じえた温帯性針葉樹林が優勢であった。また、アカガシ亞属やシイノキ属-マテバシイ属を中心とした照葉樹林も針葉樹林同様に普通にみられ、クマシデ属-アサダ属、コナラ亞属、ニレ属-ケヤキ属などの落葉広葉樹類も生育していたであろう。これらの樹木類のうち、今日花粉症で有名になったスギ属などの針葉樹類は風媒花であり、広範囲に花粉は散布される。一方、ここで検出された広葉樹類の多くは中媒花であり、散布範囲はそれほど広くなく、生育地より離れるにしたがい急激に密度も低くなる。こうしたことから、比較的多く得られているアカガシ亞属などについては、屋敷地内にも生育していたことが推測されよう。

溝周辺についてみると、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒュ科、ヨモギ属などの草本花粉が多く検出されており、溝周辺においてはこれらその他、ギシギシ属などのタデ科、ナデシコ科、キンポウゲ科、マメ科、セリ科、オオバコ属、キク亞科、タンボボ亞科などの雑草類が多く生育していたであろう。そのうち、大量に検出されたイネ科花粉について、その中にイネ属とみられる花粉も含まれており、オモダカやコナギといった水田雑草を含む分類群（オモダカ属、ミズアオイ属）も産出していることから、遺跡近辺における水田稻作地の存在も予想される。また、ソバ属花粉も検出されており、ソバも栽培されていたと思われる。

##### 2) 13世紀初（溝7および大溝）

遺跡周辺の植生については、12世紀末と同様であったと推測される。ここでの特徴としてはベニバナ属近似種が試料8~10にかけて連續して検出されていることである。これをベニバナとするならば、イネやソバ同様遺跡周辺において栽培されていたことが考えられるが、これについては今後の課題である。また、試料9においてバラ科（他のバラ科）がやや突出した出現を示している。この花粉について単体標本を作成して観察したところ、史跡永福寺跡における平成6年度の調査の際に得られたキンミズヒキ属近似種と同様のもの（鈴木 印刷中a）と判断される。この花粉についてはさらに検討が必要と考え、ここでは分けることはしなかったが、他に、試料7, 8, 13~15の5試料からも得られている。

##### 3) 13世紀前半（溝6）

この時期になると、遺跡周辺の山地・丘陵部ではスギ属林やアカガシ亞属を中心とした照葉樹林は縮小したとみられる。これは、鎌倉幕府開府以来の都市整備などの土地改変や木材利用によりスギ属林や照葉樹林が多大の影響をうけた結果と推測される。こうした跡地に、ニヨウマツ類やコナラ亞属が二次

林を形成し、多くみられるようになった。

一方、溝周辺の草本類については大きな変化はみられず、イネ科、アカザ科—ヒュ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草類が多く生育していたであろう。

#### 4) 13世紀後葉(溝5B)

遺跡周辺の山地・丘陵部では依然としてニヨウマツ類が多くみられたが、コナラ亜属はやや減少したようである。代わって、ニレ属—ケヤキ属やエノキ属—ムクノキ属の増加が推測される。平成6年度の調査において北条高時邸跡周辺では、13世紀後半～15世紀にかけてケヤキやエノキ、ムクノキが目立つ存在となっていた(鈴木 印刷中b)ことがうかがわれる。このことは史跡永福寺跡にも認められ(鈴木 1991など)、鎌倉においては13世紀後半以降、ニヨウマツ類とともにニレ属—ケヤキ属やエノキ属—ムクノキ属も目立つ存在になったであろう。

溝周辺の雑草類にはこの時期にも大きな変化はみられず、イネ科やアカザ科—ヒュ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属などが多く生育していたであろう。

落ち込み土層の可能性が考えられている試料18については、草本花粉の占める割合や、ニヨウマツ類、スギ属、イネ科、あるいはヨモギ属など花粉化石の産出傾向は13世紀前半頃のものと類似性が高いと思われる。ニヨウマツ類の出現率が約34%と高いことからみて、少なくとも鎌倉時代以前すなわち地山層とは考えにくく、同層準の溝堆積物とそれほど変わらない時期のものと推測されよう。

#### 5.まとめ

北条泰時・時頼邸跡溝周辺における12世紀末から13世紀にかけての植生は、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒュ科、ナデシコ科、アブラナ科、ヨモギ属などの雑草類が多く生育していた。一方、樹木類の多くは周辺山地・丘陵部に限られていたと思われ、この樹木類は以下のようない交代がみられた。

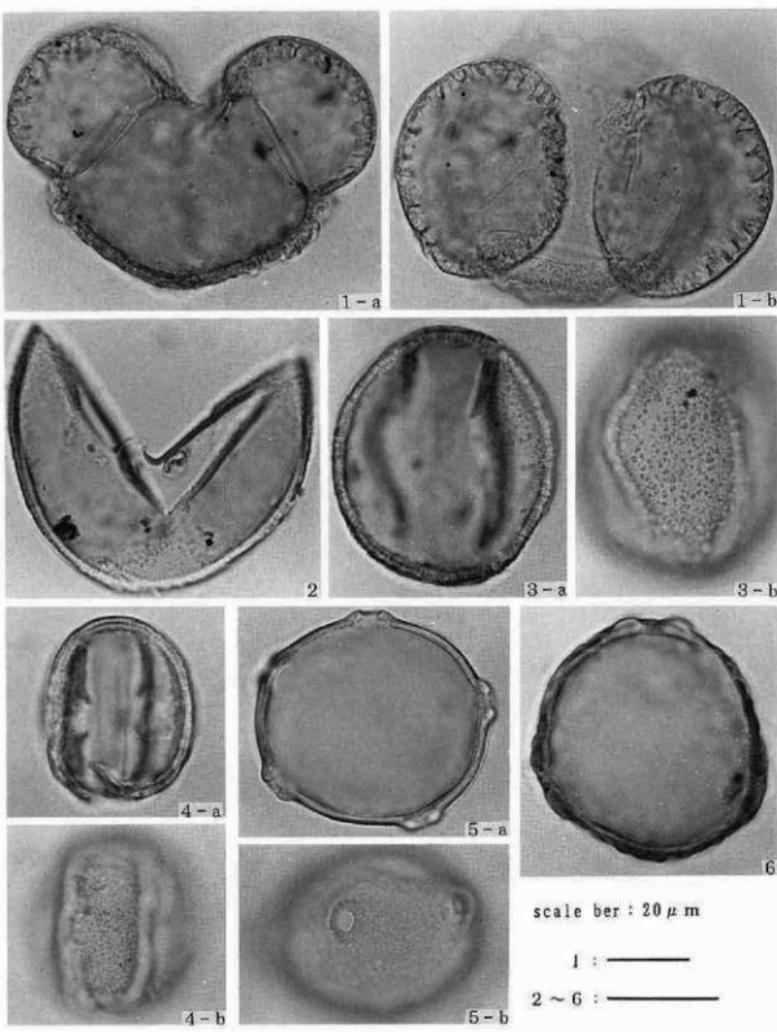
1) 12世紀末から13世紀初はスギ属を主体とした温帯性針葉樹林と、アカガシ亜属を中心とした照葉樹林が優勢であった。

2) 13世紀前半ではスギ属林や照葉樹林は縮小し、代わってニヨウマツ類やコナラ亜属が二次林を形成し、多くみられるようになった。

3) 13世紀後葉ではニヨウマツ類は依然として多くみられたが、コナラ亜属はやや減少し、代わってニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属が増加した。

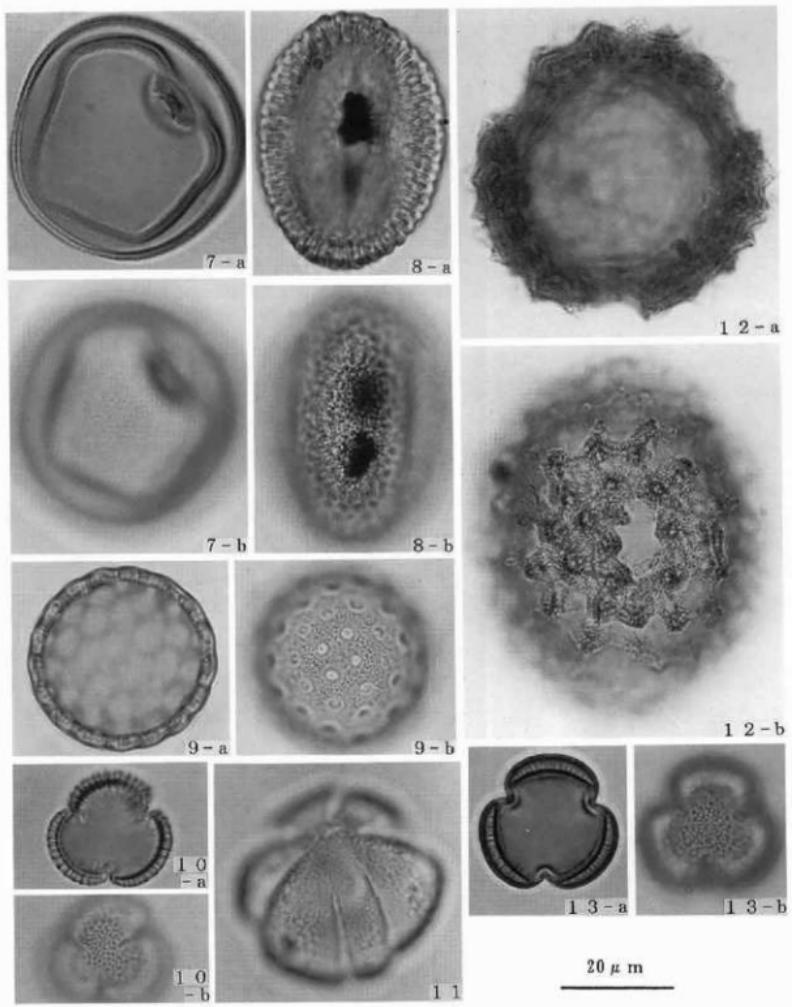
#### 引用文献

- 鈴木 康(1991) 平成元年度史跡永福寺跡の溝内堆積物の花粉化石。鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成2年度－。鎌倉市教育委員会, p.26-32.  
鈴木 康(印刷中a) 史跡永福寺跡の花粉化石(平成6年度)。鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書－平成6年度－。鎌倉市教育委員会。  
鈴木 康(印刷中b) 北条高時邸跡の花粉化石。鎌倉市教育委員会。



図版1 北条泰時・時頃跡の花粉化石

- 1: マツ属複維管束亞属 PLC. SS 1624 試料4
- 2: スギ属 PLC. SS 1623 試料4
- 3: コナラ属コナラ亜属 PLC. SS 1633 試料9
- 4: コナラ属アカガシ亜属 PLC. SS 1634 試料9
- 5: クマシデ属ーアサダ属 PLC. SS 1627 試料8
- 6: ニレ属ーケヤキ属 PLC. SS 1631 試料8



図版2 北条泰時・時類跡跡の花粉化石

- 7: イネ科 PLC.SS 1626 試料5
- 8: ノバコ PLC.SS 1635 試料1
- 9: アザ科-ヒユ科 PLC.SS 1629 試料8
- 10: アブラナ科 PLC.SS 1628 No.8
- 11: シソ科 PLC.SS 1625 No.5
- 12: ベニバナ属近似種 PLC.SS 1630 No.8
- 13: ヨモギ科 PLC.SS 1622 No.4

## 第五章　まとめと考察

### 第1節　遺構

#### 1. 遺構の変遷と画期について

本地点調査では鎌倉時代ごく初期の若宮大路側溝が、初めて大規模にその姿をあらわした。このことによって、中世大路側溝の変遷をより具体的に把握することが可能になった。ここでは側溝やそれにともなう生活面の変遷を整理し、その背後にあると想定される政治的動向を探ることにより、遺構の年代を推定する。そしてそこから逆に、遺物年代観を照射する試みもおこなう。あわせて問題点についても指摘し、今後の展望を模索してみたい。

#### 第1期（IV面）

まず、推定で幅3mを大きく超える逆台形の箱掘が、現在の大路歩道になかば潜り込む位置に掘られる（溝8）。これは現在知りうる側溝のなかで最も大路側に寄っているが、残念ながら西岸は調査区外にあり、大路西側でもこの溝は検出されていないので、このときの大路幅は分からぬ。

この溝8と同時にか次にか、先後関係は厳密には不明だが、4m前後外側（東側）にずれて薬研堀（溝7）が掘られる。推定で幅3m以上、深さ2m近くになるよく整ったV字形の溝である。そしてこの溝の位置は、形態の変化こそあれ、鎌倉時代を通じてあまり変わることがない。

問題は溝7と8の新旧関係だが、第三章でも述べたように、肝心の両者の接点の部分が上層の溝に削り取られているため、ひとまず不明とするしかない。併存していた可能性も残る。しかし、溝7の位置に後代の側溝との共通点があるところから、おそらく8→7の順に移行したと考えたい。そもそもそうであれば、溝8こそがあの『吾妻鏡』養和二年（1182）三月十五日条にみえる最初の若宮大路（「詣往道」）の側溝である可能性が高い。またおそらく将来の調査の進展により、8と7の間に画期を設定することも可能になろう。さらにつき加えれば、後論するように次代第2期が北条泰時による嘉禄元年（1225）以降の街区改造に伴うものならば、溝7は、位置からいって、そのごく初期のものである可能性も残る。

このふたつの溝の形態は、市内の遺跡では、向住柄遺跡（馬淵和雄他『向住柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会=以下市教委1985）や杉本寺周辺遺跡（清水菜穂『杉本寺周辺遺跡』『第1回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』鎌倉考古学研究所・市教委1991）で検出された大溝に共通する。いずれも鎌倉時代のごく初期に埋没しており、前者は逆台形、後者は薬研形で、ともに幅3mを超える大規模なものである。この形はおそらく、平安時代後期～鎌倉時代初期に特徴的であろう。とすれば今後、市内中心部におけるこの形態の溝に注目することにより、鎌倉時代初期の都市計画、すなわち「闕巷直路。村里授号」という、頼朝による新都の地割を知ることが可能になるのではないか。またそれは、出土遺物の年代観にも影響を与えるにはいられないであろう。

大路側溝が8あるいは7の時期、東側平坦面には掘立柱建物4棟が重複して建てられる。側溝のどちらかにともなうのは確かだが、溝肩部を上層造構に擁持されていて、個々の建物との厳密な共時性を明らかにはできなかった。これらの建物の柱間は大体210cmで、市内で検出される鎌倉時代初期のものに多く見られる。建物と溝との間には半間の柵列があるが、これも鎌倉時代初期に特徴的である。

この期の年代は、養和二年（1182）に始まり、次にみる第2期の開始年である嘉禄元年（1225）まで存続する。

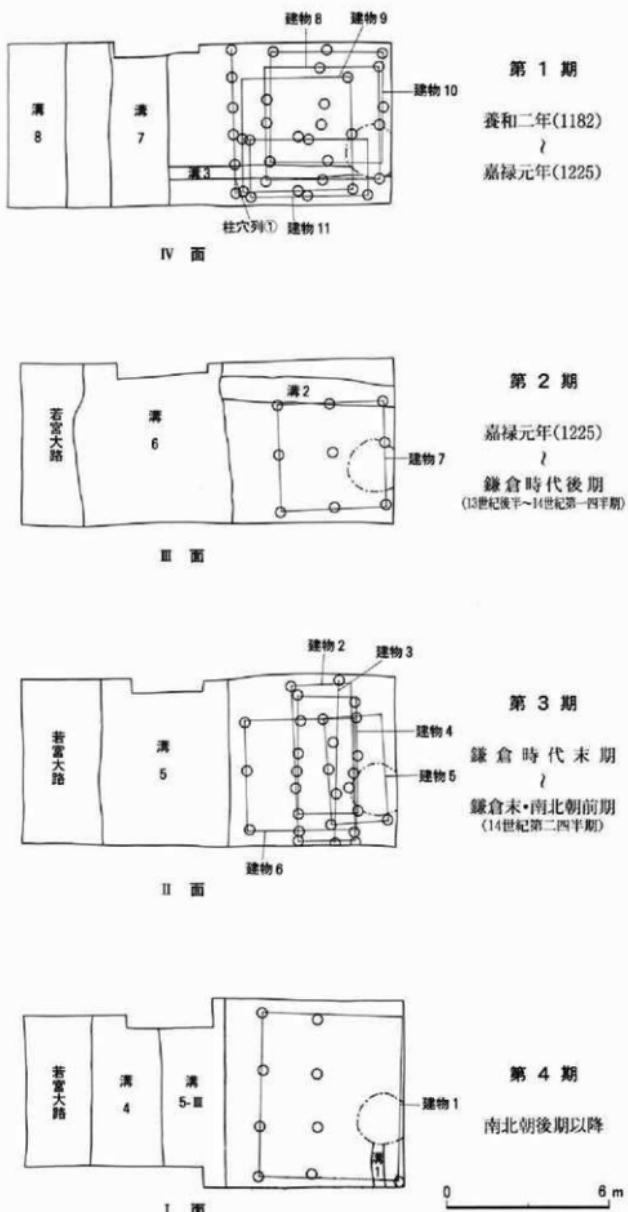


図75 中世遺構変遷模式図

### 第2期（Ⅲ面）

該期に大路とその側溝は大きく姿を変える。溝8の上を拡幅された若宮大路が覆い、溝7も埋められて、その上にかぶさるように側溝が掘られる。側溝は逆台形の素掘りのものから、木枠を持つものに変わる（溝6）。古代的様相を残す傾斜した壁を持つものから、中世鎌倉で一般的にみられる形態に変わるのである。木枠本体の幅は4mほど。そして、後論するように、このとき若宮大路の幅は33m（11丈）となり、以後たびたびの改修を経るにもかかわらず、長く変わることはない。また町割もこの倍数（66m）で設定されている可能性がある（馬淵「北条時房・頼時邸跡 雪ノ下一丁目233番9他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3 市教委1987—以下『市緊急調査報告書』号数のみ記す）。

注意を要するのは、このとき東側平坦部で検出された掘立柱建物の柱間が約2mに変化していることである。この柱間は、鎌倉中期以降の生活面で検出される掘立柱建物に一般的に認められるもので、第一章でも書いたように、おそらく旧来の尺度で6尺6寸（198cm）に相当するのであろう。つまり旧来の1割増という寸法が、街割や大路幅だけでなく、建物柱間ににおいても、同時に採用されていることになる。これが権力による都市の大改造であるのは明白であり、執権泰時による丈尺制導入とともに街区の再編があったとすれば、これこそそれに違いない。この点については過去にも書いたことがあり（馬淵「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社1994ほか）、本報第一章でも触れておいたので、ここでは省略する。

第2期の年代は、以上の点からみて、嘉祐元年（1225）に開始時期を置くことができる。下限は、次の第3期の年代比定が正しければ、鎌倉時代後期（13世紀後半）ということになろう。なお、この溝の存続期間中の嘉祐二年（1236）、幕府移転という大事業があり、それにともなって大路側溝も改修された可能性が高いが、どの溝が該当するのかは不明である。

なお、この面で水洗便所と推定される木組み遺構が検出されていることは、特筆に値する。ただしこれが公共施設か、個人住宅にともなうものかは、規模からいって後者の可能性が高いにせよ、今は判断を保留したい。

### 第3期（Ⅱ面）

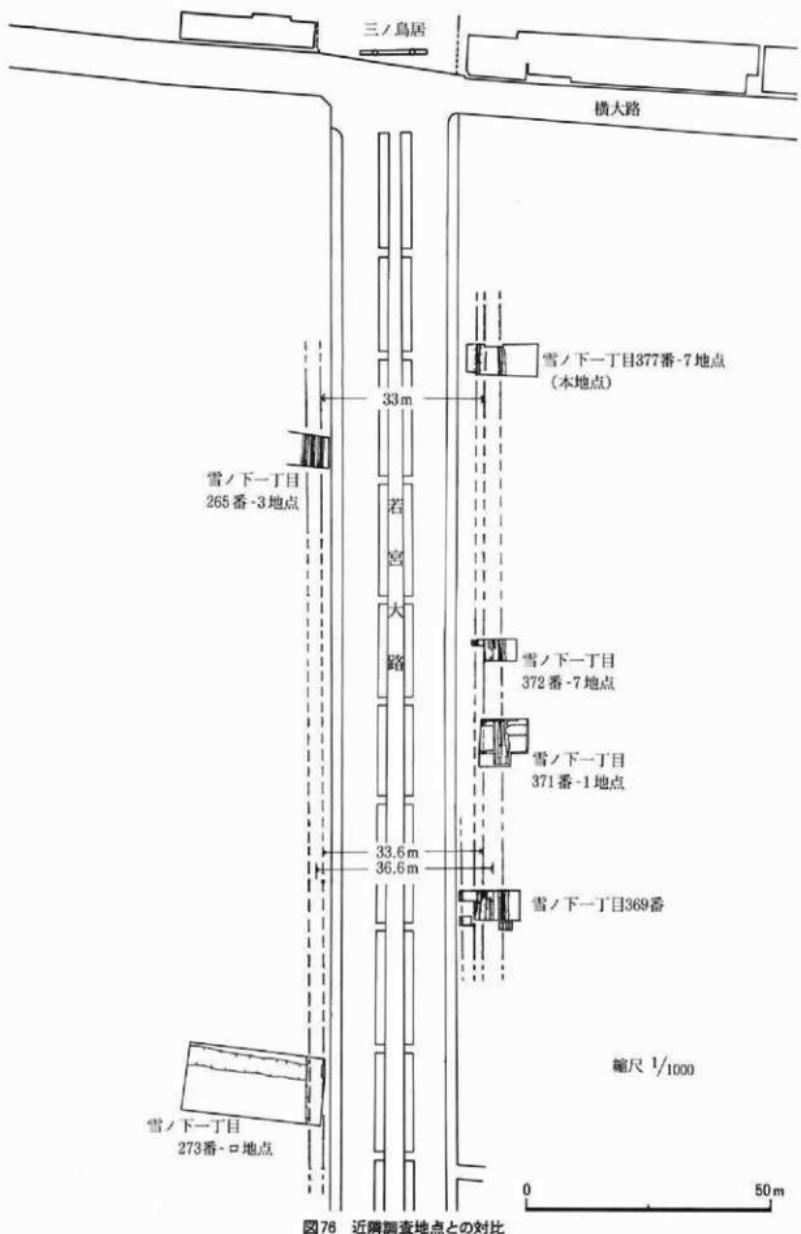
該期は基本的に第2期に成立した大路や溝の位置が、そのまま継承される。大路の幅は33mが維持される。側溝に木枠がある点も変わらない。その意味で第2期に成立した都市区画の規制力は、きわめて強いといわねばならない。しかし、溝幅自体は約3mに縮小されている。これはかなりの変化というべきであり、画期を設定した理由はそこにある。側溝の変化の詳細については、前章第2節5を参照されたい。

なお第2・3期の大路側溝中からは、人名木簡が3点出土した。これは側溝工事を「御家人役」として、御家人の勤労奉仕によって負担させたことを示す木簡で、各人の担当箇所を表示した札だと考えられる。御家人役の仕組み、側溝の工事方法など、この木簡の発見による研究の深化が期待されるところだが、過去に出た同種の人名木簡とは表記や大きさが異なり、いま少し資料の蓄積を俟ちたい。なお、筆者はかつての木簡について、嘉祐二年の再度の幕府移転時の築地作事にともなうものと書いたことがあったが（前出「武士の都鎌倉」49頁）、この見解はひとまず留保したい。

この期は東側平坦面においても、掘立柱建物が重なり合っており、最盛期の中世鎌倉に属することが窺われる。年代は鎌倉時代後期～同末期・南北朝時代前期ごろと考えたい。

### 第4期（Ⅰ面）

本地点の中世最後の面である。東側平坦面には建物があり、依然として柱穴も多く検出されるが、前代までのような、しっかりとした建物の密集する様相は、ここでは見て取れない。



該期の検出遺構には、前期からの連続性と断絶が認められる。例えば、前半には依然前期の側溝（溝5—III）が残るが、後半には幅2.5mと大きく縮小される。しかし、大路側溝西岸の位置はなお前期までと変わらず、したがって大路の幅員そのものには変化がなかったと考えられる。ここには当然、1面をさらに二時期に分ける必要が生じるが、東側平坦面の遺構と大路側溝との個別の関連を把握することは、残念ながらできなかった。そのため、ここでは該期の存続期間を長く想定するにとどめた。

年代については、遺構側に決定づけるような要素がなく、一方後述の遺物にも若干の混乱はみられるなど不安定ではあるが、いちおう南北朝時代後期以降としておきたい。

## 2. 若宮大路の幅について

今回の調査により、鎌倉時代中期以降の若宮大路幅が33mであることを再確認できた。そのことについて、あらためて言及しておきたい。

先述のとおり、本地点の「第2期」に、大路側溝に木枠が備わる。大路西側側溝（以下「西側溝」）のほぼ対面位置でも、この木枠と構造上ますます同一とみられるものが発見されている（田代郁夫他「北条時房・顯時跡 雪ノ下一丁目265番-3」『市緊急調査報告書』6）。西側溝の木枠も、長い間ほぼ同じ位置を保って推移し、本地点と同様の状況にある。年代からいっても、東西両木枠が対応していることは明らかである。両者を地形図上に配してみると、その間隔約33mという数値が得られた。

筆者（馬淵）は以前におこなった調査の際、大路幅を33.6mと算出し、街割もこれを基準単位としてなされていると推定したことがある（馬淵「北条時房・顯時跡 雪ノ下一丁目233番9地点」『市緊急調査報告書』3）。ただその際には、地図上での計測値のため多少の誤差の存在が予測され、その報告以後はおよそ33mという数値を採用した。今回の結果により、そのことがあらためて確認されたわけである。大きな成果だといえる。

問題は、最初期の溝8の時期の若宮大路幅であるが、残念ながら、今までのところ大路西側で対応する溝が見つかっておらず、不明とするしかない。今後の重要課題である。

## 第2節 遺 物

### 1. 構成と変遷

遺物構成については破片数計測による計量分析法を用いておこなう。幕府所在地という、鎌倉の中核中の中核ともいえる場所においては、初めての試みである。

破片数は接合後の絶破片点数である。様々な計量方法があるなかから破片数計測法を選んだ理由については、かつて長谷小路周辺遺跡由比ヶ浜三丁目1175番2外地点の報告（『市緊急調査報告書』10 第2分冊）に書いたがあるので参考されたい。

なお計量は原則として中世期の遺物に限り、それ以外の時代のものについては、「遺跡全体遺物構成」においてのみ含めた。近世磁器は「国産陶磁器」の項目には算入せず、「近世」に入れた。また、加工痕のあるもののみにとどめ、自然遺体は含めなかった。

#### 遺跡全体における遺物構成（表62-1）

まず、本地点における土師器・国産陶磁器・中国陶磁器の百分比を、年代の共通する市内の他遺跡と比べてみたい。しかし、市内における計量分析資料はいまだ例が少なく、比較するに十分とは言いがたい。そのため様々な空間要素により構成される都市内の「場」の差異について、ここでは立ち入った議論を控え、

数値の簡単な比較により展望のみ示しておきたい。現在筆者(馬淵)は、市内の発掘調査のうちいくつかについて計量化を進めており、いずれその分析結果を提示する予定である。

なお他遺跡については、数値の安定性を考慮して、総点数1000点以上のものに限った。

a. 本地点——都市中枢域

総数34041点 土師器89.42% 国産陶磁器2.21% 中国陶磁器0.41%

b. 長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目1175番2外地点(馬淵前出)——海岸砂丘地帯

総数5507点 土師器67.68% 国産陶磁器25.22% 中国陶磁器1.89%

c. 若宮大路周辺遺跡群 由比ヶ浜一丁目123番5外地点(馬淵、『市緊急調査報告書』11)——海岸砂丘地帯

総数2111点 土師器62.67% 国産陶磁器26.39% 中国陶磁器2.51%

d. 由比ヶ浜南遺跡 長谷二丁目188番2外地点(瀬田哲夫、『市緊急調査報告書』11)——海岸砂丘地帯  
総数4240点 土師器90.07% 国産陶磁器6.432% 中国陶磁器0.14%

(瀬田による計測値から筆者算出)

e. 米町遺跡 大町二丁目2315番外地点(馬淵、『市緊急調査報告書』11)——中心部と海岸砂丘地帯との境界域

総数8301点 土師器59.51% 国産陶磁器29.83% 中国陶磁器4.05%

ここからうかがえるのは、地点dを除く他地点と本地点との際立った差異である。すなわち、他地点は、土師器が60%前後~70%、国産陶磁器が25%~30%ではば安定しており、中国陶磁器も若干のばらつきはあるが2%弱~4%強という数値を示す。地点dのみ、本地点に近い数値を示すが、その理由はわからない。あるいは大量に出土している古代土師器の細片が、中世土師器に算入されている可能性もあるのではないか。

一方、本地点では土師器が90%近くを占め、国産陶磁器は2%強、中国陶磁器は0.41%しかない。この違いが何に由来するのか、類例が乏しく、ひとまず判断を保留するしかない。しかし、あえて指摘すれば、それは「場」の性格の差である可能性が高いのではなかろうか。地点b・c・eはいずれも中世鎌倉の縁辺部にあたり、一般的の(あるいは「下層」)の都市住民の活動の場であった。本地点はそうではなく、幕府所在地ともいわれる都市の中枢に位置する、いわば「高級」武士や官吏のかかわる場所だといえる。ところで、土師器が共食儀礼にともなう大量消費用の食器であることは、しばしば指摘されるとおりである。そして、その機能は都市縁辺に住む一般住民より、本地点のような場所の方が相応しい。ここにみえる統計値の差が、そのことを示している可能性はないだろうか。

遺物構成の変遷について(表62-2/63-3)

表62-2は遺構面別にみた出土傾向を示す(大路側溝を含まない)。これによれば、I・II面では土師器の占める比率が95%前後であったのが、III・IV面では90.60%・81.76%と、かなりの減少率を見せる。これはひとつには、下層の方が上層よりも粘性が強く、木製品の遺存度が高いことが理由と考えられる。しかしそれだけではなく、箸状木製品などの出土が多いことも原因している。これらの箸はすべて白木で、宴会用であった可能性が高い。ここにもあるいは、本地点の性格の一端が示されているのかもしれない。

表63-3は大路側溝別に出土傾向をみたものである。これは自ずと年代別の変化をも示している。溝7と8の新旧はまだ確定的ではないが、しばしば述べてきた通り、8よりも7に、より新しい要素が看取できるところから、ひとまずその順序を仮定しておいた。これによると、溝7の木製品比率が突出している。この溝は全体に出土遺物が少ないが、その理由は不明である。この点を除けば、古→新の順に、土師器の比率が高まっていくことが分かる。この傾向が本地点一個の個性に帰するのかどうか、類例が蓄積されるまで評価

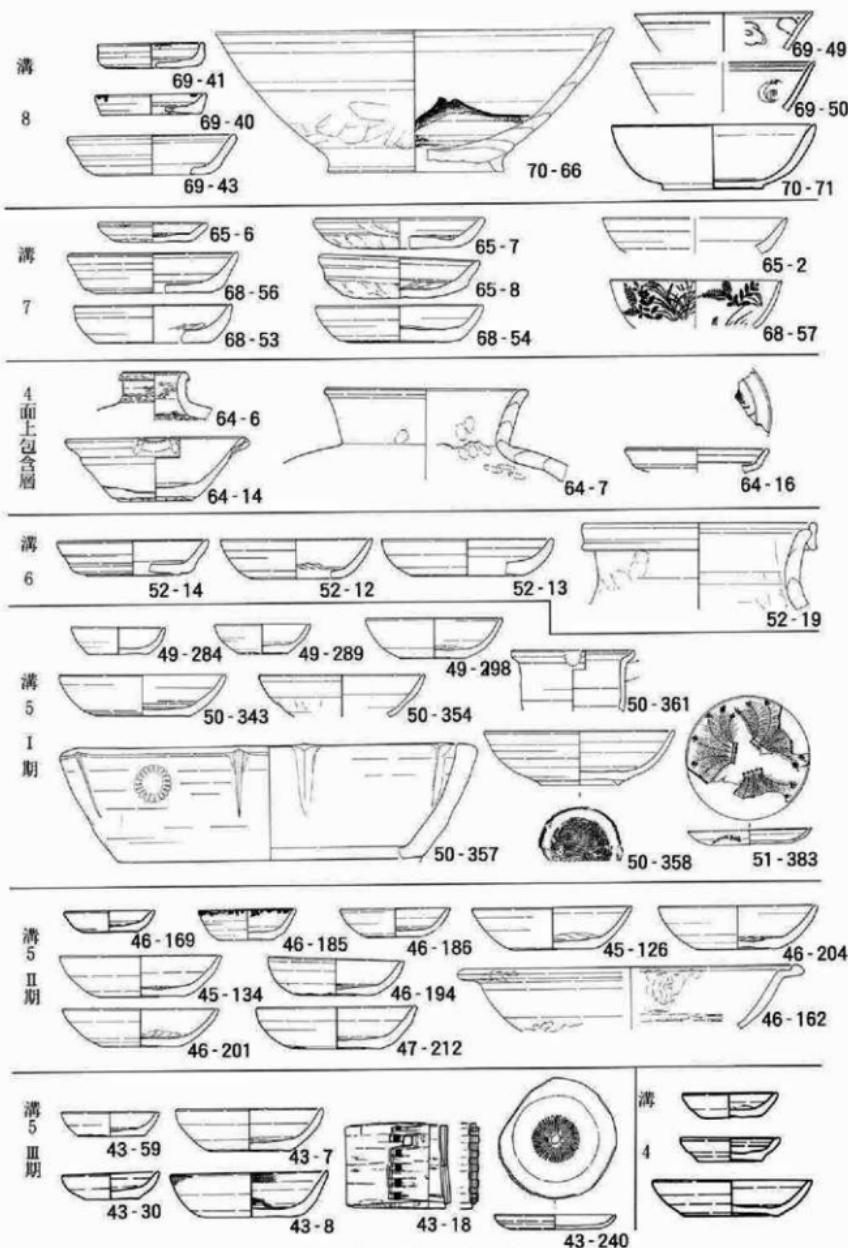


図77 遺物共伴関係変遷図

を控えたい。

なお溝5・6以降が、秦時による街区整備にともなう時期だと考えるが、土師器の比率の急激な高騰とそのこととのかかわりは不明である。

#### 土師器製作技法の変遷について（表63-4）

R種（ロクロ成形）とT種（手づくね成形）の比率をみてみたい。表63-4の数値には大路側溝出土分も含まれる。

全体ではR種85.66%・T種14.27%となっている。これは遺跡の主たる存続期間である、鎌倉時代初頭からおよそ14世紀いっぱいごろまでの数値である。これをどう評価するかは、T種の大量に出土した遺跡の計量例がほとんどないので困難だが、一つだけ、米町遺跡大町二丁目2315番外地点（前出地点e）の例を参考に挙げておこう。ここでは総数4940点のうち、R種88.83%・T種10.75%となっている。この数値と本地点との比較は、今後の課題としておこう。

面別では、やはり鎌倉時代初期に属するIV面でT種が圧倒的に多く、66%を占める。嘉定元年（1225）以後と考えられるIII面より上層では、激減する様相がうかがえる。ここには明らかに、T種の終末年代についての示唆がある。なお、I面におけるT種の存在は、溝特有の混入とみるほかない。

#### 國產陶磁器器種構成の変化について（表64-5）

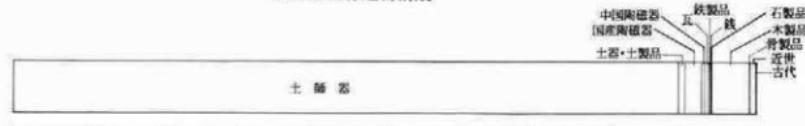
これも大路側溝の遺物を含むため、かなりの混乱がみられるようだが、それでもいくつかの傾向を指摘することはできる。

涅槃がIV期に最も多く、以後減少する様子が見て取れる。またIV面で皆無であった瀬戸が、III面期に搬入されはじめ、時代を下るにつれ増えていく。山茶碗は全体に非常に少ないが、この点についてはもう少し資料の蓄積が欲しいところである。常滑こね鉢1類（山茶碗窯系こね鉢）のI面期出土のものはすべて大路側溝中からで、混入であるとみる。

## 2. 遺構別共伴関係（図77）

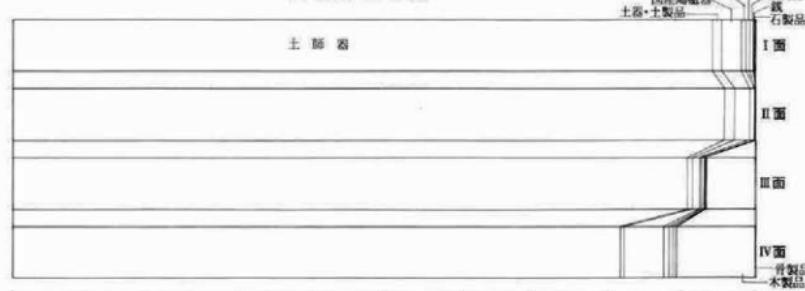
図77に主な遺構別の共伴遺物を提示しておく。前項とあわせて読まれたい。各々の年代観については本章第1節を参照されたい。今回の調査では、鎌倉初期～中期の遺構におよその年代推定が可能なものを発見することができた（溝8など）。今後、これら良好な資料を集めることにより、鎌倉地域の中世遺物編年を再構成していくつもりである。

### 1. 遺跡全体遺物構成



	土器	土製品	國產陶器	中國陶器	瓦	鐵製品	銳	石製品	木製品	骨製品	近世	古代	計
点数	40,439	294	754	140	160	83	12	29	1,799	14	294	23	34,041
百分率	89.42	0.86	2.21	0.41	0.47	0.24	0.04	0.09	5.28	0.04	0.86	0.07	100.00

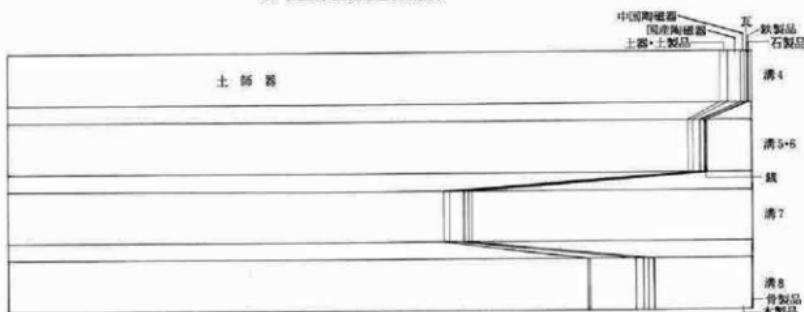
### 2. 面別遺物構成



	土器	土製品	國產陶器	中國陶器	瓦	鐵製品	銳	石製品	木製品	骨製品	計	
I面	点数	7,496	101	216	48	39	43	2	7	13	1	7,966
I面	百分率	94.10	1.37	2.71	0.60	0.49	0.54	0.03	0.09	0.16	0.01	100.00
II面	点数	1,238	18	27	8	1	1	0	0	0	0	1,293
II面	百分率	95.75	1.39	2.09	0.62	0.08	0.08	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
III面	点数	17,606	139	189	44	87	17	10	12	1,318	10	19,432
III面	百分率	90.60	0.72	0.97	0.23	0.45	0.09	0.05	0.06	6.78	0.05	100.00
IV面	点数	3,334	20	218	30	20	17	0	6	432	1	4,078
IV面	百分率	81.76	0.49	5.35	0.74	0.48	0.42	0.00	0.15	10.59	0.02	100.00

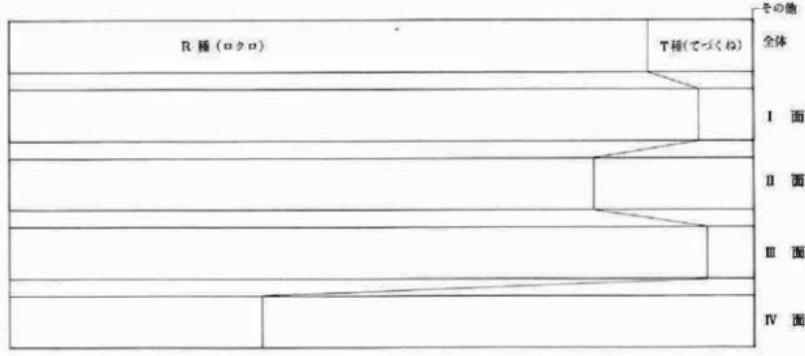
表62 遺物計数表(1)

### 3. 大路側溝別遺物構成



	土器	土製品	国産陶磁	中国陶磁	瓦	鉄製品	鐵	石製品	木製品	骨製品	計
溝4	2,352	27	43	11	10	3	0	3	9	0	2,458
百分率	95.69	1.10	1.75	0.45	0.41	0.12	0.00	0.12	0.37	0.00	100.00
溝5+6	15,885	122	150	32	85	16	10	12	1,086	10	17,408
百分率	91.25	0.70	0.86	0.18	0.49	0.09	0.06	0.07	6.24	0.06	100.00
溝7	428	6	14	1	4	0	0	3	277	0	733
百分率	58.39	0.82	1.91	0.14	0.85	0.00	0.00	0.41	37.79	0.00	100.00
溝8	842	3	67	11	7	8	0	1	142	1	1,082
百分率	77.82	0.38	6.19	1.02	0.65	0.74	0.00	0.09	13.12	0.09	100.00

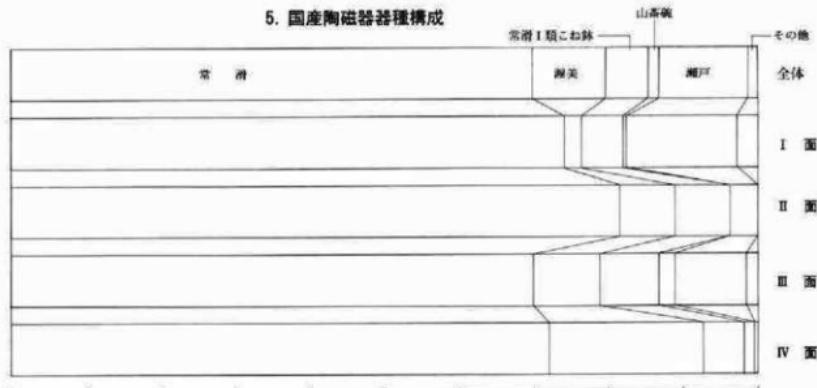
### 4. 土師器技法別構成



	R種	T種	その他	計
全 体	26,074	4,344	21	30,439
百分率	85.66	14.27	0.07	100.00
I 面	6,936	556	4	7,496
百分率	92.53	7.42	0.05	100.00
II 面	970	267	1	1,238
百分率	78.35	21.57	0.06	100.00
III 面	16,475	1,119	12	17,606
百分率	93.58	6.36	0.07	100.00
IV 面	1,127	2,203	4	3,334
百分率	33.80	66.08	0.12	100.00

表63 遺物計数表(2)

### 5. 国産陶磁器種構成



	常滑	瀬美	こね鉢	山茶碗	瀬戸	その他	計	
全 体	点 数 百分率	526 89.76	74 9.81	43 5.70	11 1.46	90 11.94	10 1.33	754 100.00
I 面	点 数 百分率	160 74.07	5 2.31	12 5.56	1 0.46	32 14.81	6 2.78	216 100.00
II 面	点 数 百分率	22 81.46	2 7.41	2 7.41	0 0.00	1 3.70	0 0.00	27 100.00
III 面	点 数 百分率	132 69.84	17 8.99	15 7.94	4 2.12	18 9.52	3 1.59	189 100.00
IV 面	点 数 百分率	157 72.02	45 20.64	12 5.50	3 1.38	6 0.00	1 0.46	218 100.00

表64 遺物計数表 (3)

# 御所と北条氏亭

秋山 哲雄

## はじめに

源頼朝は、鎌倉に入り（『吾妻鏡』治承四年九月九日条）、大倉に新亭を構える（同、治承四年十月十二日条）。これ故に初期鎌倉政権をして大倉幕府と称すのである。初代執権義時の死後嘉禄元年（1225）になると、將軍の居所である御所は宇津宮辻子付近に移転し、嘉禄二年（1236）には若宮大路東頃に移転する。本稿では、以上の三つの御所と北条氏亭、なかでも当遺跡の名称である「泰時・時頼亭」との関係について論じる。しかし、当該調査地点を含む地域が「泰時・時頼亭」であったという確証はない。この遺跡名についても、再考の必要がある。この「泰時・時頼亭」の位置を比定するためには、鎌倉時代初期からの北条氏亭の継承を無視できない。そこで、まずは鎌倉政権草創に参加した北条時政の邸宅から考察を始めたい。年代の前後をできるだけ避けるため、御所の変遷を基軸に、それぞれの御所と北条氏亭との関係を考察していく形式をとった。なお、年月日のみの記述は「新訂増補国史大系『吾妻鏡』」による。引用史料中の（ ）は筆者が記したことを示す。

## 1. 大倉御所期 治承四年（1180）～嘉禄元年（1225）

北条時政の邸宅は名越にあった（建仁三年十月八日条）。幕府からは離れているようだが、鎌倉を東西に走る南北二つの道を押さえる目的があったのであろう。

時政の子北条義時は、はじめ小町にいたが（建久二年三月四日条）、大倉にも邸宅を持つようになる（正治二年五月二十五日条）。大倉亭初出である建久五年二月十八日条<sup>(1)</sup>と前後して、義時の子泰時が元服しているので、その泰時に小町亭を譲ったと考えられる。しかし譲ったのは全てではなく一部であろう。なぜなら、この後も義時的小町亭に関する記述<sup>(2)</sup>が見られるからである。父時政は御所と多少離れた名越にいた。しかし、頼朝との関係は遠くないはずがない。義時は御所の近くに住む必要があったのである。そのため義時は大倉に邸宅を持ったと考えられる。義時にとっては、小町が私邸で大倉が官邸のような位置づけだったのかもしれない。和田合戦の際、攻撃を受けたのが御所と義時小町亭であったのも、そのような事情によるのではないだろうか。

貫連人氏は、義時小町亭について、「小町大路に面していた」という判断のもと、それは現在の宝戒寺あたりに比定できるという指摘をしている<sup>(3)</sup>がこの指摘は正確ではない。なぜなら和田合戦後の建保元年五月七日「相州（義時）自大倉渡御若宮大路御亭、其後紙候人等蒙勳功之賞」という記事に、貫氏は触れていないからである。この史料から、義時が「若宮大路亭」に入ったのは明かである。宝戒寺付近の邸宅を「若宮大路亭」とは呼ばないであろう。公の「勳功之賞」は既に行われているので（同日条）、「紙候人」は北条氏の私的な被官を指すと考えられる。この点では私的な色彩が濃いので、義時が他人の邸宅に移動したとは考えにくい。しかし「若宮大路亭」が登場するのはこの時だけである。したがって、これは義時が一時的に用いた私邸と考えられる。先述のように、義時は小町亭の一部を泰時に譲っているので、この泰時亭を借りたと考えるのが妥当であろう。つまり「若宮大路亭」は、義時が泰時に譲る前に住んでいた邸宅と考えられるのである。義時の私邸である小町亭が和田合戦の戦場となつたため、一時的に以前の邸宅を使用したのであろう。

以上をまとめると、最初の義時亭は小町大路の東西にあった。若宮大路から小町大路までと、小町大路から宝戒寺付近に広がっていたのである。その中でも小町大路以西が泰時に譲られたと考えられる。以東は義時亭として使われ続けていたのであろう。便宜上、初めの義時小町亭を「初期小町亭」(図1)、その小町大路以西を「泰時小町亭」(図2-A)、以東を「宝戒寺小町亭」(図2-B)と仮称する。

京から迎えられた九条頼経は、はじめ義時の大倉亭郭内南に住んでいた(承久元年七月十九日条)。政子は自分の居所が焼けると、その頼経亭に移っている(承久元年十二月二十四日条)。次期將軍である頼経が、政子とともに義時亭内にいたことは、当時の政治状況を良く表しているであろう。後に泰時の連署となる時房も大倉に住んでいた。<sup>(4)</sup>

義時の死により、泰時とその叔父の時房は京から鎌倉に帰っている。その際泰時は「小町西北」の亭に入った(元仁元年六月二十七日条)。京に向かう前に居所としていた泰時小町亭に戻ったのであろう。この邸宅は、周囲を被官宅が閉むという形態<sup>(5)</sup>を見せている。一方時房は、義時の旧跡であり政子生前の居所である邸宅に入っている(嘉禄元年七月二十三日条)。これは義時の大倉亭であろう。

ところで、義時は「当時館」と呼ばれる邸宅も持っていた。この邸宅は、頼経亭の西にあたる(貞応二年一月二十五日条)。この頃、義時は大倉幕府跡に頼経亭を新造するための準備<sup>(6)</sup>を進めていたので、ここでの頼経亭とは、大倉幕府跡に新造される予定の邸宅を指していると考えられる。また、「当時館」は三条局宅の西にあったとも記されている(承久三年十一月三日条)。三条局宅は雪下北谷<sup>(7)</sup>にあった(承久元年一月三十日、二月四日条)。頼経亭の西、三条局宅の西という二つの条件を満たす地は、現在の巨福呂坂周辺であろう。「当時館」を譲られた泰時は、巨福呂坂にある「別居」に一度赴いている(仁治二年十二月三十日条)ので、この「別居」が義時の「当時館」と考えられる。

## 2. 宇津宮辻子御所期 嘉禄元年(1225)～嘉禄二年(1236)

嘉禄元年に政子の百箇日の法要を待って御所の移転が始めらる。十二月二十日に「移徙之儀」が行われ、宇津宮辻子御所への移転が完成した。この移転の十ヶ月後に、評定所が史料上に始めて登場する(嘉禄二



図1



図2



図3



図4



図5

1. 大倉御所期
2. 泰時元服後
3. 宇津宮辻子御所期
4. 若宮大路御所移転直後
5. 時頼・重時体制期

小町周辺北条邸宅遷図

年十月九日）。この評定所は御所内に建てられたと考えるのが妥当であろう。しかし、評定は普段泰時亭で行われていた。<sup>(10)</sup> 建物は御所内にあっても、その機能は泰時亭にあったのである。幕政機関の中心に位置づけられる評定<sup>(11)</sup>が、御所ではなく泰時亭で行われていたことは、政治の中枢が泰時亭にあったことを端的に表しているであろう。またこの移転は、御所が小町泰時亭に近付いた結果であると言える。大倉期に御所が求心力を持っていたのと対照的である。大倉期にみられるような求心力を失ったこの時期の將軍が、飾りものでしかないという政治状況が、如実に現れていると言えるであろう。それでは、権力を握り始めた北条氏の邸宅はどこにあったのであろうか。

泰時の邸宅については前に述べた。ここでは連署であった時房の邸宅の位置を検証する。嘉祐二年十二月十三日には政所前から火事が発生し「尾藤左近將監」の家も焼けている。彼は泰時亭の郭内に住む被官の一人であった。<sup>(12)</sup> したがって、この火災で同じ郭内の泰時亭も、多少は被害を受けた可能性がある。實際、その八日後には、泰時と時房が「新造亭」に移っている（同年十二月二十一日条）。この「新造亭」は火災の被害を修理したものであろう。これらのことから、時房亭は政所に近かったことが分かる。翌安貞元年二月八日には幕府周辺で火災が発生し、その炎は御所や泰時亭、時房亭に迫る勢いであった。時房亭は御所にも近かったことが考えられる。また、延応元年四月二十五日条には「匠作（時房）御亭〔〔割注〕前武州（泰時）向顔〕」とある。「向顔」は「向頬」と考えられるので、道を挟んだ向かいの意であろう。時房亭は泰時亭の向かいにあったのである。

以上をまとめると、時房亭は、政所と御所に近く、泰時亭の向かいであったことが分かる。これは先述の宝成寺小町亭に比定できる。義時の旧跡を譲り受けたのである。初期小町亭は、小町大路以西を泰時（図3-A）、以東（図3-B）を時房が繼承したのである。

### 3. 若宮大路御所期 嘉祐二年（1236）～

將軍頼経の大病が原因で、若宮大路御所への移転が行われた（嘉祐二年八月四日条）。北方の別郭へ移動したと考えられる。<sup>(13)</sup> この移転の翌日「評定所」が新造された。これは御所とともにその郭内に新造されたものであろう。しかし、その機能が依然として泰時亭にあったことは想像に難くない。同年十二月十九日には、泰時が御所北方に邸宅を新造している。御所の移転の二ヵ月後という時期から考えて、この移転に関連する新造であろう。

その泰時亭については後に述べる。まずは、泰時の後、執権となった北条經時の邸宅について考えたい。經時亭は、經時の死後、北条重時が繼承し、それは「前武州御室（泰時）跡也」と説明されている（宝治元年七月十七日条）。經時は泰時亭を譲り受けているのである。また、同日条には「武州經時被相伝之處、去寛元二年十二月焼亡、然而如元新造」と記されている。經時亭は、寛元二年に北条時頼亭や政所とともに焼けていた（十二月二十六日条）。時頼亭や政所と近接していたのである。この時炎上した邸宅を建て直したと考えられるのが、その半年後に登場する經時の新造亭である（寛元三年六月二十七日条）。しかし、これは泰時亭の「北隣」にあたると記されている。經時亭は泰時の「跡」であり、かつそれが泰時亭の北隣にあたるのである。經時は、泰時亭内の北側だけを譲られたと考えるしかない。この地が政所に近いことも火災の記事に合致している。

次に泰時亭を検証する。泰時は御所北方に邸宅を新造した。泰時亭の北側は經時に譲られるので、泰時は小町亭の内、南側に邸宅を新造したと考えられる。經時への譲渡は、この新造を期としたものであろう。初期小町亭内西側である泰時小町亭の内、北側が經時に譲られたのである。亭内的一部を譲る北条氏の邸宅繼承の在り方を窺うことができよう本稿では、泰時の御所北方新造亭を「小町南亭」（図4-a）、經時

が泰時から譲られた泰時小町亭内北側を「小町北亭」(図4-b)と仮称する。

経時が早世した後の小町北亭には、時頼の連署となる重時が入ったことは前に述べた。ここではその重時亭に触れる。重時亭は「相州（重時）新造花亭有移徒之儀、評定所併訴訟人等着座屋東小侍等、今度始所造加也」(宝治元年十一月十四日条)と記されている。重時亭は新造され、そこに評定所が初めて造られたのである。この評定所は、従来時頼亭内に造られたと考えられてきた。しかし、当時の「相州」は重時である。時頼はまだ相模守になっていない。したがって、従来の認識は誤りである。<sup>(10)</sup> いずれにせよ、評定の機能だけでなく、その建物自体も北条氏亭内に吸収されたのである。重時は小町北亭にいたが、泰時は既に亡くなっているので、この新造で小町南亭を吸収した可能性がある。評定所は幕府の機関であり御所に近い必要があったので、御所に近い小町南亭を吸収し、そこに評定所を持つ邸宅を新造したと考えられるからである。泰時死後的小町南亭には、しばらく泰時の後家が住んでいたのであろう。<sup>(11)</sup> 以上をまとめると、重時の新造亭は、南北両方の小町亭を再統合したものであったと考えられる(図5-A)。

一方の時頼亭は小町にあり(建長三年十月八日条)、重時亭の東方に位置していた(建長四年五月十七日条)。重時の東方といえば宝戒寺小町亭にあたる。時頼は宝戒寺小町亭にいたのである(図5-B)。時房の跡を譲り受けたのであろう。

重時が泰時亭と重なる小町亭に住み、時頼が時房のいた宝戒寺小町亭を継承しているので、ちょうど執権と連署の邸宅が入れ替わっている。これは、時頼・重時の頃になると、泰時・時房の時期よりも御所の重要性が減じ、北条氏が幕府権力の後楯を必要としなくなったことの現れと考えられる。この頃には以前のような御所への執着は感じられない。

時頼は執権職とともに、その邸宅を北条長時に譲っている(康元元年十一月二十二日)。これは宝戒寺小町亭が執権職を体現するものであったことを示している。長時の後、執権となる北条政村は、常盤に別業を持っていた(康元元年八月二十日条)。しかし、執権就任後には「小町亭」(文永二年二月二日条)にいることが多くなる。その後、政村亭は「執権第」(文永三年七月三日条)と表現されるようになる。執権用の邸宅が小町にあり、それが「執権亭」と呼ばれるようになったのであろう。この「執権亭」は、時頼が執権職とともに譲った宝戒寺小町亭と考えられる。ここには、評定の機能が吸収されていた可能性が高い。康元元年には新年の評定始が時頼亭で行われ、また、時頼の死後初めての評定が、次期執権政村の邸宅でなされている(弘長三年十二月二十四日条)からである。幕府の機関であるはずの評定の機能が、御所とは離れた「執権亭」に吸収されていることは、御所の政治性が失われたことを表しているであろう。

鎌倉幕府が終焉を迎えたとき、宝戒寺小町亭には北条高時が住んでいた。<sup>(12)</sup> 高時は執権を退いた<sup>(13)</sup> 後もここにいたようである。つまり、宝戒寺小町亭は執権亭ではなく、得宗家の嫡流が住む邸宅になっていたと言えよう。これは、幕政が執権政治から得宗專制政治へ移行していくことを表していると考えられる。

### おわりに

時政亭は御所から離れていたが、義時は御所に近づき、頼経幼少の頃暫定的ではあるが御所を亭内に取り込んだ。泰時亭と御所は、評定所を媒介にして、互いに引きつけ合うかのように接近した。しかし、時頼の邸宅は逆に御所から離れてその機能を奪っている。そして執権亭には、執権ではなく得宗が住むようになる。これは、將軍権力を後盾に勢力を伸ばし、ついにはそれを吸収して将軍との結びつきを変化させた北条氏の動向と重なるであろう。御所と北条氏亭の関係は政治史を顕著に反映していると言える。その中で泰時亭は御所と接近する最後の段階であり、時頼亭はそこから離脱し始めた時期に当たるのである。

ところで当遺跡名は「泰時・時頼亭」である。しかし、泰時は若宮大路小町亭に住んでいた。時頼は宝

戒寺小町亭にいたことがわかった。つまり、二つの邸宅が同じ場所であったとは考えられない。遺跡名は伝承をもとにしていると考えられるが、『吾妻鏡』にしたがえば伝承は間違いということになる。伝承は形に残らないので、時間を経るほど情報の信憑性は損なわれる。文献史料と伝承とが食い違う場合には、やはり文献史料を信じるのが妥当であろう。当遺跡の「泰時・時頼亭」という名称は適切ではない。

また、当遺跡から若宮大路を挟んだ西側は、「時房・顯時亭」という遺跡名が付されている。しかし時房は、先述のように宝戒寺小町亭に住んでいた。顯時は、『金沢文庫文書』に「相州鎌倉赤橋辺」<sup>[10]</sup>とあるが、これだけでは特定できない。この場合も同様に、「時房・顯時亭」という遺跡名は適切ではないであろう。

以上のように、遺跡名には曖昧なものも多い。今後の調査のためにも、文献による調査地点の特定という作業は必要なものとなるであろう。本稿がその一助となることができれば幸いである。

#### 《注》

- 建久五年二月十八日条に「御參大倉御音堂御靈路御江間殿亭」とある。大倉御音は二階堂大路の東にあり、その場所に寄ったのならこれは小町亭ではなく大倉亭であろう。
- 承久元年一月二十七日条に「右京兆（義時）有心御通例事（中略）令帰小町御亭給」とある。
- 貫通人『北条氏亭址考』（金沢文庫研究紀要8 1971）6ページ
- 建保元年十二月一条「御所近辺武州（時房）宿處災」より時房亭は御所周辺と分かれて大倉にあったのである。
- 嘉慶二年十二月十九日条「武州（泰時）御亭御移徙也、日來御所北方所被新造也（中略）御家人等同構家屋、南門尾藤太郎、同西平左衛門尉、同西並田次郎、南角藏方兵衛入道、北土門東臨万年右馬、同西安東左衛門尉、同並南藤左衛門尉等也」とあるように、泰時亭の周囲を北条氏の被官が囲んでいる。
- 貫論文（前掲注3）7ページに「義時は大倉幕府跡に顕經の新亭を造るつもりで、敷地の広さを心配」したとある。
- 承久元年一月二十七日条には「阿闍梨（公曉）者、義村使還引之間、登錦岳後面之峰、擬至義村宅」とある。同日条によると、公曉はこの時「雪下北谷」にいた。義村は西御門に住んでいた。「鶴丘後面之峰」を登って西御門に向かったのだから、雪下北谷は鶴岡八幡宮後面の山の西にあたると考えられる。
- 寛喜二年六月二十八日条「於後藤判官大倉亭被評定、日來於武州（泰時）御亭被行之、依禁忌今及此儀」とある。
- 佐々木文昭『鎌倉幕府評定制の成立過程』（史学雑誌92.9 1983）48ページ参照。
- 元仁元年六月二十三日条「関左近將監忠実、尾藤左近將監景綱二人宅在此御内也」とある。
- 宇律宮辻子御所と同郷内といつてもあるが、北方別郭と考えるべきであろう。御所移転に関しては松尾則次『中世都市鎌倉の風景』（吉川弘文館 1993）などが詳しい。
- 貫論文（前掲注3）などでもこの「相州」を時頼と考え、時頼亭に評定所が造られたと誤解している。『吾妻鏡』のなかで時頼が「相州」と書かれるのは建長2年からである。
- 建仁三年三月十五日には賴朝の死後その跡に政子があり、元仁元年七月五日には「奥州（義時）御旧跡」に義時の「後室」が住んでいるなど、亭主の死後その邸宅に後家が入ることが多かった。
- 「建武二年（1335）三月二十八日、足利尊氏密遣状」（大日本史料六編之二、358ページ）からは、高時の靈を弔うために、後醍醐天皇が高時亭跡に宝戒寺を建てたことが分かる。
- 『北条九代記』69.70ページからは、正中三年に高時が出家して執権を辞め、三日後に直頭が執権になったことが分かる。
- 『金沢文庫文書』識語編2064の裏書きに記されている。なお、私見では、顯時亭は当遺跡内にあったと考える。

北条氏系図（『吾妻鏡』をもとに作成。本稿に登場する人物のみを記した。）



#### 〈補注〉

本文中の「小町周辺北条邸変遷図」における御所の位置の詳細は、注11松尾氏の著作の37ページを参照。

# 写 真 図 版

1  
若宮大路（鈴岡八幡宮社頭上空から。白い逆三角形印の下が調査地点）



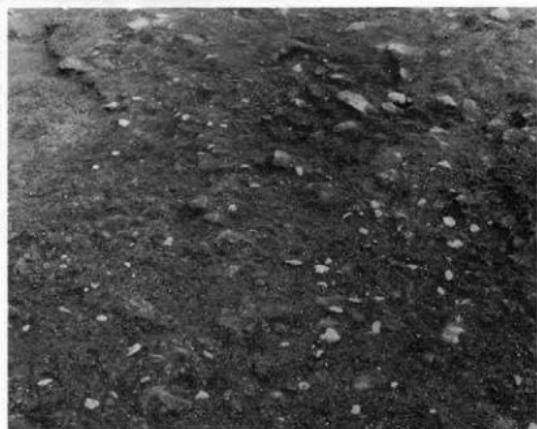
2  
調査地点概観







1 1面東側平垣部全景（西から）

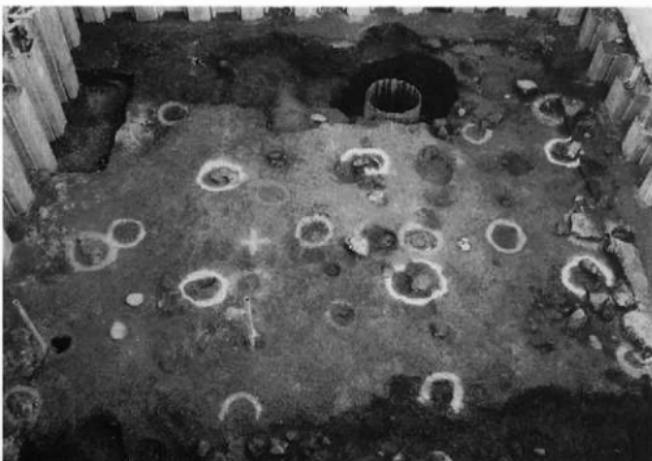


2 同上 砂散在状況（北から）



3 同上 若宮大路御溝（第4北から）

図版4



1 II面東側平坦部全景（西から）



2 同上 大路側溝裏込め上層石組（南から）



3 同上 同下層石組（南から）



1 三面東側平坦部全景（西から）

2 同上 若宮大路側溝東壁（南から）



3 同上 溝2（西から）

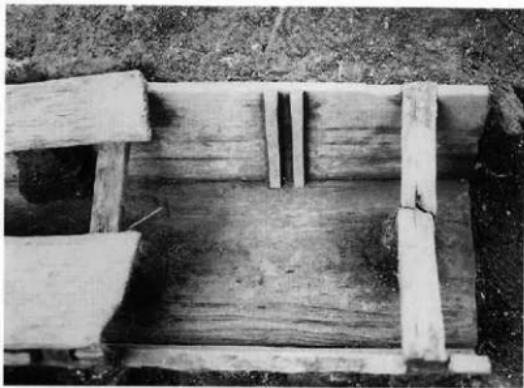




1 両面溝2木組み出水施設土築器出土状況（西から）

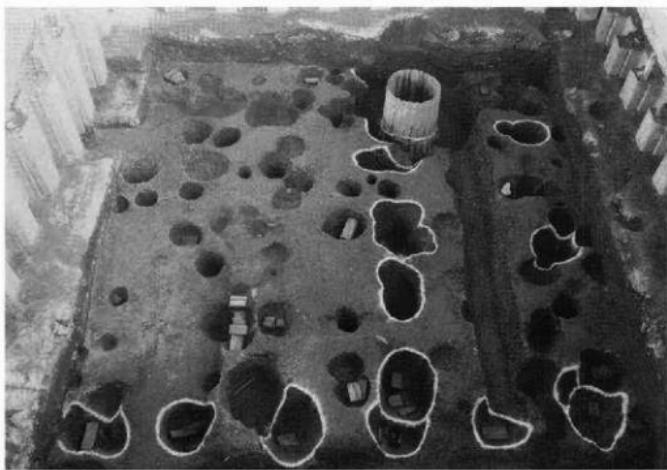


2 同上 木組み元據後



3 同上 上流側の板材差込み施設（南から）

1 IV面賣劍平坦部全景（西から）



2 同上 若宮大路側溝（溝5）西壁肩柱穴列（南から）



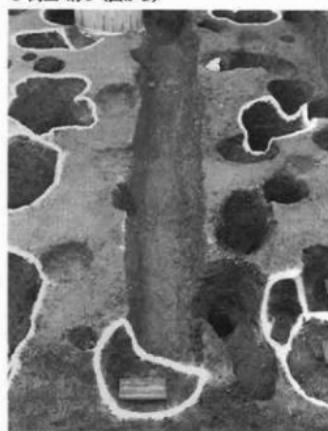
3 同前 東壁肩柱穴列（南から）



図版8



3 同上 溝3(西から)



4 同 土層断面(東から)





若宮大路側溝（溝5・6）





1 溝5・6南壁土層断面(東半部)



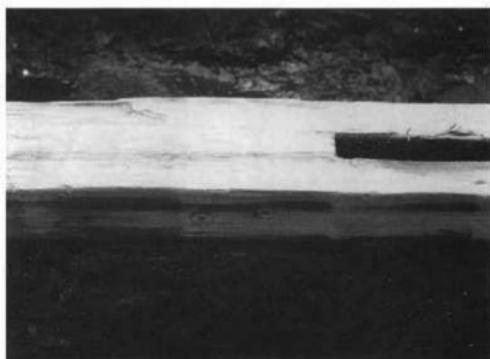
2 同上(中央部)



3 同上(西半部)



1 溝5 根太木4のホゾ穴



2 溝5 根太木4の刻印



3 溝5 根太木5の刻印



1 木簡4(図53-15)出土状況



2 溝5 土師器出土状況



3 溝5 土師器・鳥帽子出土状況(鳥帽子は部分のみ)

4 溝7 土師器・漆器模(図67-57)出土状況

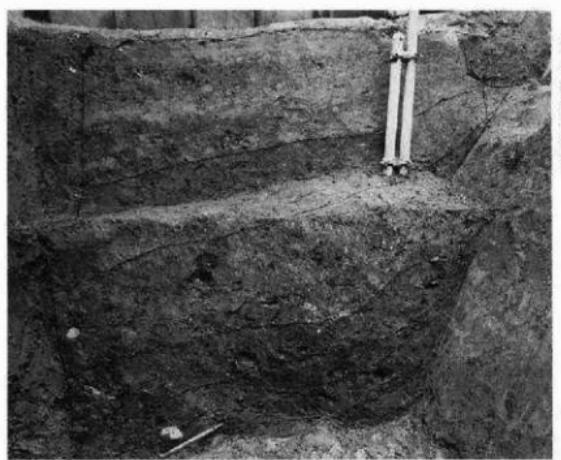


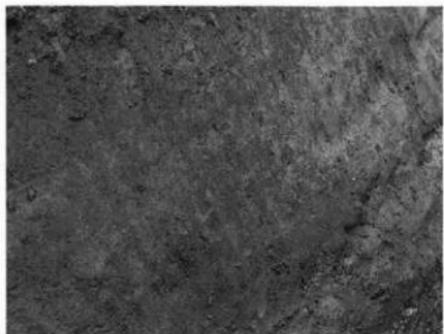


1 若宮大路側溝（溝7）（中央の土のう袋の入った溝）



2 同上  
南壁土層断面





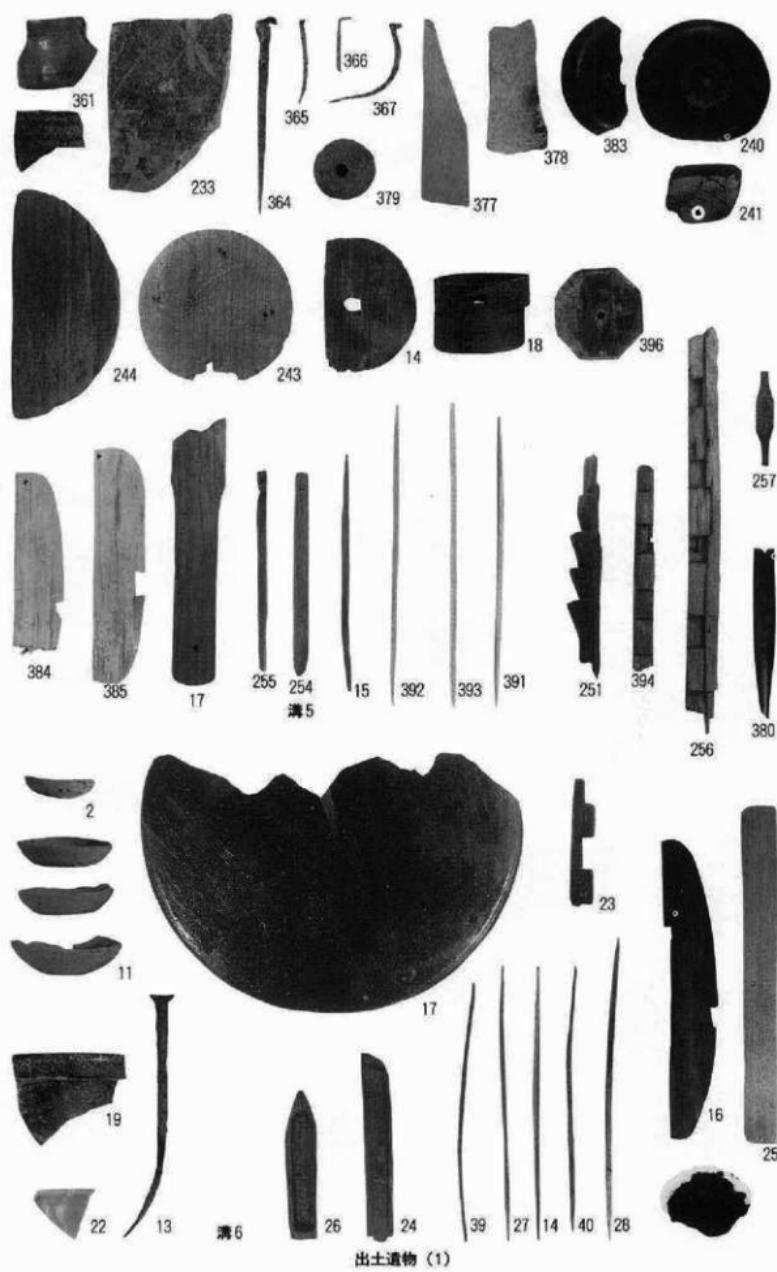
1  
溝8 東壁の工具痕



3 同前 漆器挽 (図70-71)・板材出土状況



2 同上 湿美こね鉢 (図70-66)・土師器 (図70-61) 出土状況



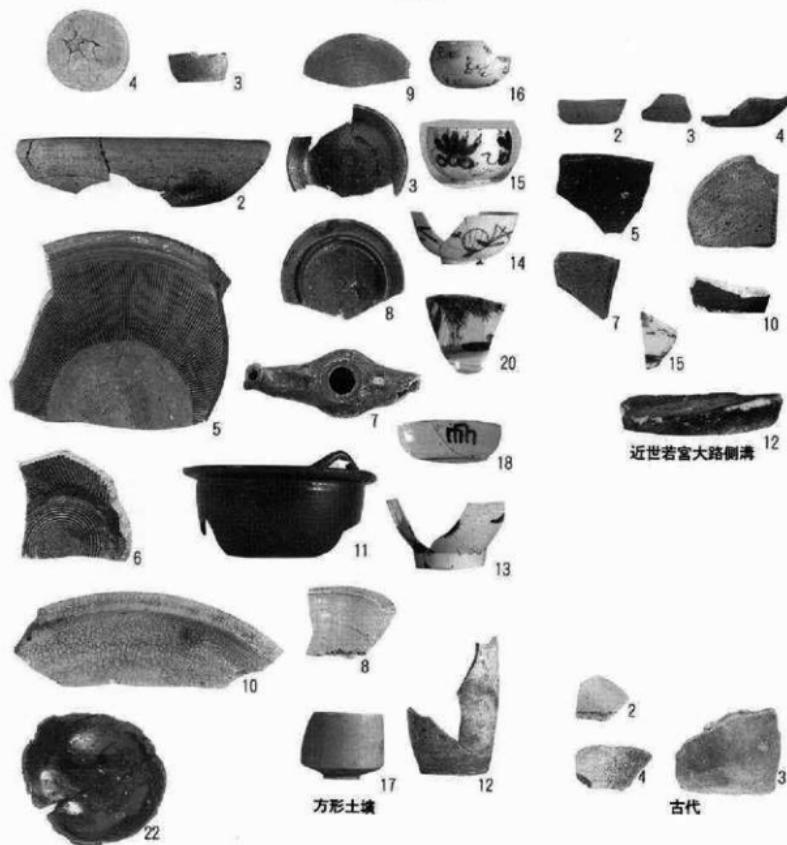
出土遺物 (1)

図版18



表採

近世面

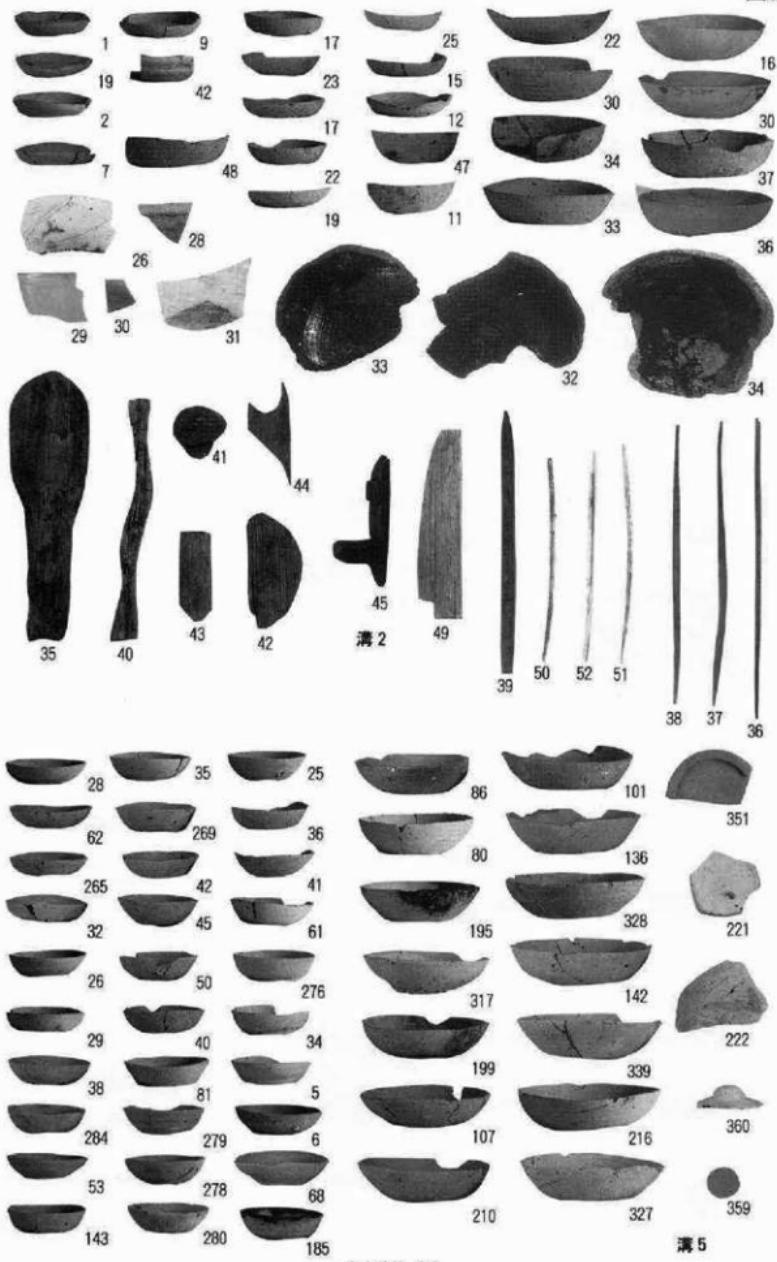


近世若宮大路側溝

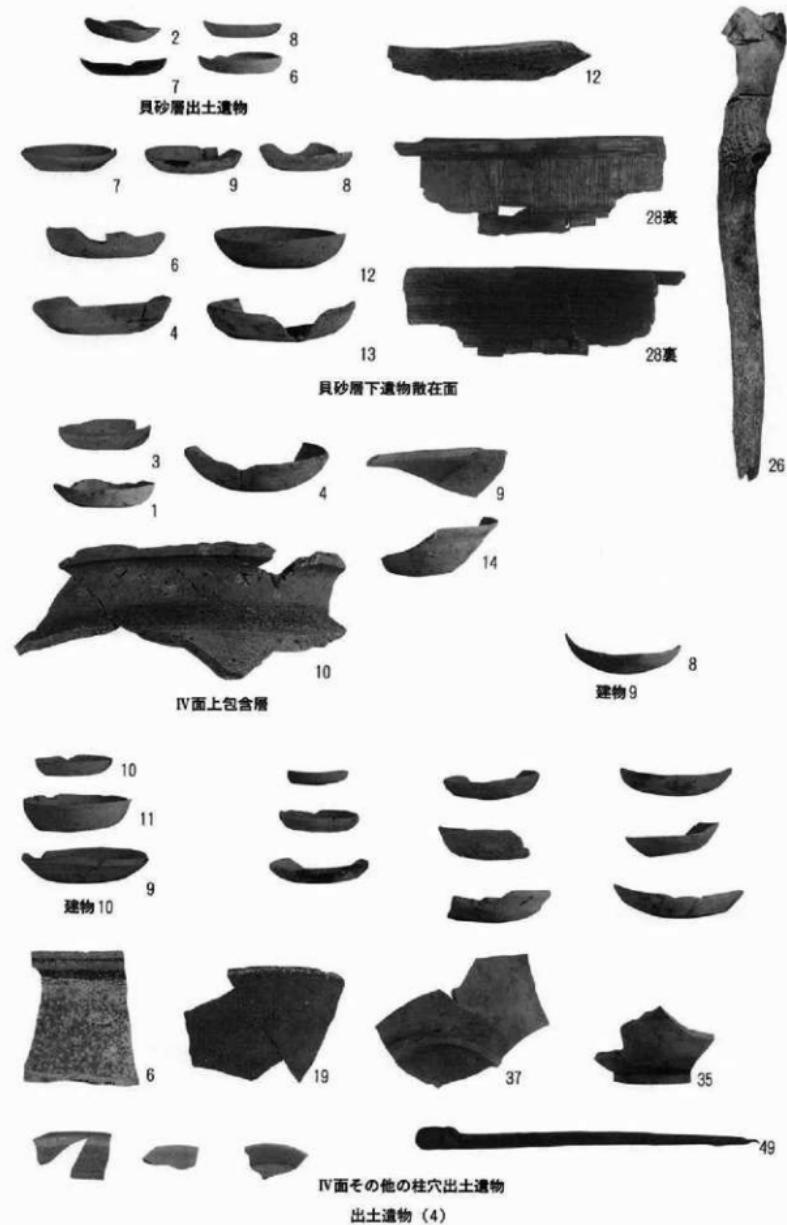
方形土壙

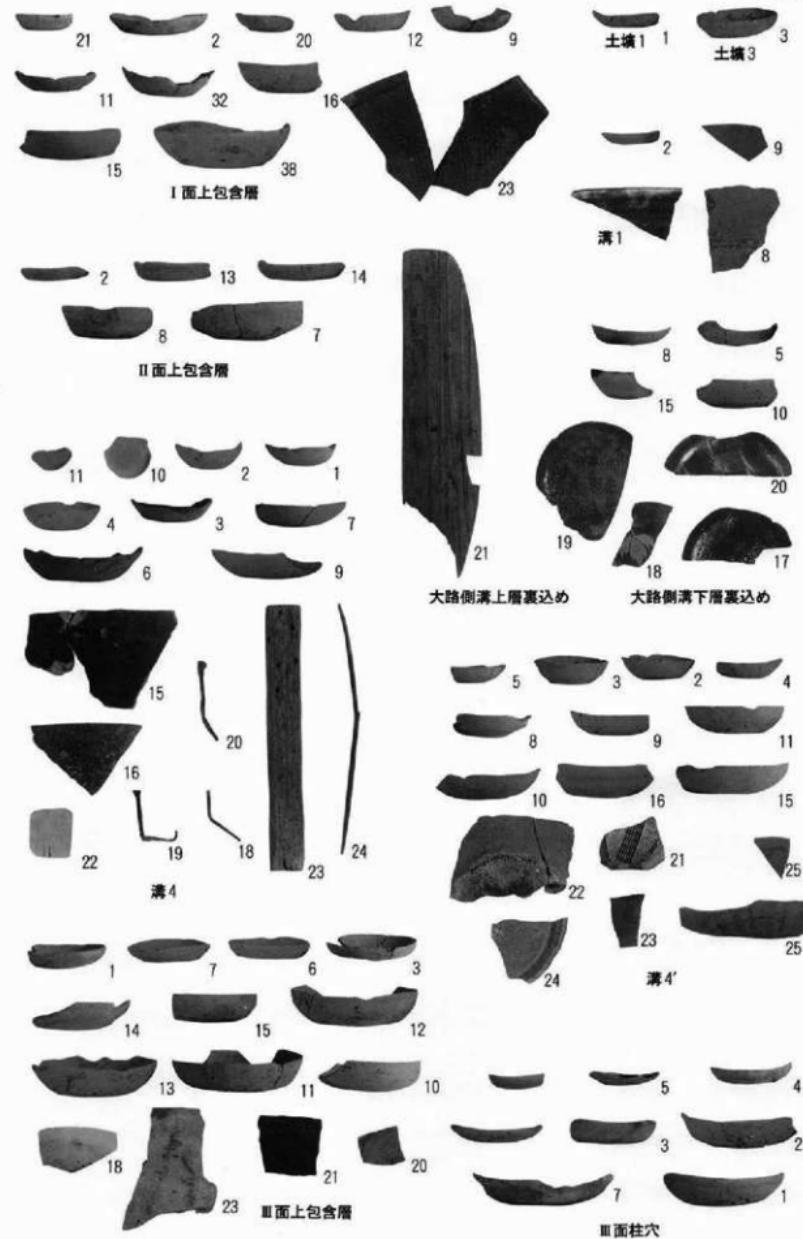
古代

出土遺物 (2)



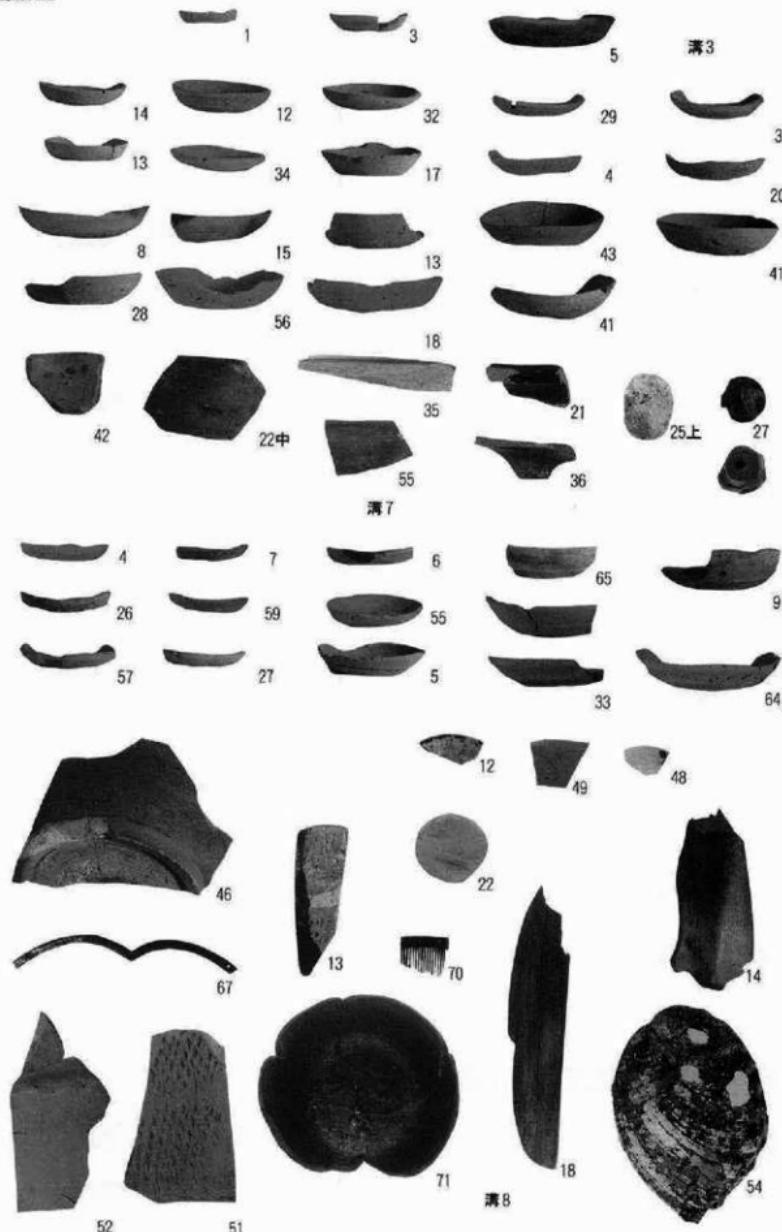
出土遺物 (3)





出土遺物 (5)

図版22



出土遺物 (6)

# 報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成7年度発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	12							
編集者名	馬瀬和雄							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1996年3月							
ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所 在 地	コード		北緯 °°'	東緯 °°'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ほうじょうこまちてい あと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市雪ノ下1丁目377番7	市町村	遺跡番号	35° 19' 11"	139° 33' 28"	19950120～ 19950228	52	自己用住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
北条小町邸跡	居館	鎌倉時代～南北朝時代	中世生活面 4基 若宮大路側溝 6条 以上 地割溝 3条 掘立柱建物 11棟 柱穴列 4列 柱穴 約450口 木組出水施設 1基 井戸 1基 土壤 4基	土師器・瀬美・常滑・ 瀬戸・中国産青磁・ 同白磁・土製品・金 属製品・石製品・木 製品・自然遺体 その他カン箱 135箱				・鎌倉時代初期の若 宮大路側溝を検出 ・中世前期の若宮大 路側溝の概要を把 握 ・御家人役を示す人 名木簡3点が出土 ・水洗便所とみられ る木組出水施設を 検出、中世で最初 の例

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12

平成 7 年度 発掘調査報告（第 2 分冊）

発行日 平成 8 年 3 月

編集発行 鎌倉市教育委員会

印刷 中川印刷株式会社